

神奈川大学大学院

言語と文化論集

特別号 2013年8月

中国言語文化専攻 博士後期課程修了 (2013年3月)

博士学位論文

中国語における比較構文の意味と論理

于 飛

神奈川大学大学院 外国語学研究科

中国語における比較構文の意味と論理

Meaning and Logic of Comparative Constructions in Mandarin

Chinese Semantics

于 飛

于飞氏の博士論文刊行によせて

松村文芳（神奈川大学大学院教授）

于飞氏の博士論文「中国語における比較構文の意味と論理」が神奈川大学大学院・外国語学研究科が発行している『言語と文化論集 特別号』に掲載されることになった。中国語学特殊研究Ⅲ（講義・演習）における6人目の博士（文学）の取得者としての同氏の労作が多くの研究者に供されることを本研究室における先輩・後輩の研究者とともに祝福したい。

于飞氏は現代中国語統語論、意味論の分野で取り上げられることの比較的多い文型の一つである「比較構文」を形式意味論の手法によって研究することにした。同氏が統語論、意味論の多様な研究テーマの中で、この文型を選択したのは日常生活の中で「比較構文」が様々な場面で用いられにも関わらず、その文型の表す意味内容を正確に記述することが不十分であると感じたからである。

同氏はまず比較構文に対する北京生まれ、北京育ちの自分の言語直観を明示的に解明してみたいと思った。そのためにまず旧来の研究の枠組みを利用し、比較の概念を「平等比較」、「差異比較」、「最上級比較」に区分した。そのそれぞれに対して先行研究を渉猟し、その内容を詳しく紹介説明した。その上でそれぞれの比較構文の成立を文頭から文末に至るまでの入力順を重視する「有限オートマトン」、「順序論理回路」、「状態遷移」といった形式言語におけるアイデアを導入して比較構文の論理構造の解明に迫ろうとした。

ここでは指導教授としての立場から同氏の論文の意図するところを補いつつ、各章の内容を簡単に紹介する。第一章では比較構文の全体像についての先行研究を紹介した後、4.1で比較構文の論理構造を表示するために命題論理と述語論理を導入することを述べている。そしてその式の成立を説明するためにまず4.2でタイプ理論による文の成立過程を解明している。さらに4.3では成立した中国語の文を解析するために文頭から読み込む「有限オートマトン」によるモデルをたて、その読み込む過程が状態遷移図に表せることを示している。その状態遷移図の節点ラベルが順に入力記憶になり、それが「順序論理回路」の過去の入力への依存につながることを説得的に説明している。また過去の入力への依存、つまり入力記憶がそのまま論理式の生成になることを図でわかりやすく解説している。

于飞氏は上述の方法論が比較構文の意味を解明する上で有力な手段になりうることを確信したのである。従って第二章以下の各種の「比較構文の論理構造と文型意味」の部分ではこの方法論をベースに理論が展開されている。第二章では中国語における平等比較構文を古代中国語と現代中国語の双方について同様の論理式、タイプ理論による樹形図表示、有限オートマトン・順序論理回路・入力記憶による論理式の生成の順に詳細に考察、説明している。ここでは“你跟上学时完全一样。”のような平等比較構文が「跟' (α, β, γ) 」という三項関数の論理式で表示されている。

第三章では中国語における差異比較構文について第二章と同様の手順で考察が行われている。ここで注目に値するのは“这个大学的留学生比那个大学的多得多。”のような差異比較構文の論理式が「比' (α, β, γ) 」という三項関数で表示できることを示したことである。これが重要であるのは第二章の平等比較構文が「跟' (α, β, γ) 」という三項関

数の論理式で表示されることと三項函数表示という点で共通しているからである。

第四章では最上級比較構文について前二章と同様の方法で考察の結果を記述している。ここでは“这儿比哪儿都安静。”等の最上級比較構文の論理式が「比」(α, β, γ)」等の三項函数で表示できることを示している。その結果、第二章から第四章までの考察を通して、平等比較構文、差異比較構文、最上級比較構文のいずれもが古代中国語、現代中国語を問わず、いずれも三項函数で論理式を表示できることが明らかになった。

このことは于飞氏が膨大な量の先行研究を渉猟し、各章の考察を通して帰納的に究明した結果ではあるが、比較構文の総合的な研究に於いて特筆すべき創造的な結論であると言える。同氏は中国語の比較構文にとどまらず、日本語の比較構文についても第五章で検討、考察している。ここでは中国語の比較構文の分析に用いたのと同じ方法でタイプ理論、有限オートマトン、順序論理回路のモデルに基づいて論理式を作成している。

次に于飞氏のこの論文に対する博士論文口頭試問委員会における審査委員各位の意見を述べ、論文審査委員会の審査状況を紹介しておく。第一に各章はそれ自身が平等比較構文、差異比較構文、最上級比較構文、日本語の比較構文について独立した研究になっているが、各章の間の関連は採用した方法論が同一であるので明確である。また各章ごとに記述のまとめがあって、膨大な内容のとりまとめに便利であるが、それに依拠しなくとも、分析方法が統一されているので各章の関連は理解しやすい。

第二に先行研究をよく調査し、丁寧に説明している点が評価できることである。代表的なものの成果の考察を行ってすませる研究が多い中でまじめに先行研究をあつかう研究姿勢は貴重とすべきである。ただ先行論文の説明に集中した結果、自説と関わる点の深い考察にまで至っていないところがあるが、先行研究についてはよく検討されていると評価してよい。

第三にタイプ理論がボトムアップで文の成立を保障していることは各所に記述されている樹形図で明確である。また文中のすべての成分をタイプ表記できるところがこの理論が他の理論に卓越するところであることもよくわかる。ただ入力記憶が蓄積されると同時に樹形図の下位にある成分のタイプ情報が上に伝わってゆくことが指摘されていない。この点については今後の研究の発展に期待したい。第四に各章のまとめにおいて、先行研究等を表にし、また図形によってわかりやすく表示した点は読者の理解の負担を軽減する上で効果的であった。

第五に中国語の比較構文と日本語の比較構文の対照研究として、共通点と相違点をあげて検討しているが(第六章)、内容的にも量的にも不十分であり、今後の研鑽に待ちたい。ただ、前章までの考察により、今後の研究の方向を明らかにした点を評価したい。第六に中国語の比較構文の研究に命題論理と述語論理を用いるだけでなく、形式言語の研究のモデルである、有限オートマトン、順序論理回路、入力記憶等の方法を導入し、中国語という自然言語の研究に新しい方向付けをしたことは高く評価してよい。ただ有限オートマトンだけをとりとめて、プッシュダウン・オートマトン、チューリングマシンといったより高度な理論モデルも存在しており、今後の研究あり方を検討するときの参考にさせていただきたい。

最後に一言指摘しておきたい。近年の現代中国語の形式意味論を枠組みとする意味研究は相変わらず少数である。ただ方立著『逻辑语义学』(2000年北京语言文化大学出版社)を代表とする丁寧な記述を有する学術書があり、それらをよりどころに今後、形式意味論

を枠組みとする研究が于飞氏のこの労作に続いて現れることを期待したい。

審査委員各位の指摘を参考に于飞氏は博士論文公聴会において簡潔明瞭な研究発表を行った。とりわけ、一見大変異なる平等比較構文、差異比較構文、最上級比較構文が同じ三項函数で表示できることを明らかにした点は参加者の共感をよんだ。

先日、于飞氏から同氏が北京師範大学・文学院の中国語言・文化専攻のポスト・ドクターに採用され有給（無料宿舎提供）で2年間研究に専念できることになったとの連絡を受けた。同氏の博士論文が審査の結果、高く評価され、2005年9月まで「中国語疑問文の意味と論理」についての研究計画により研究を継続することが可能になった。同時に採用されたもう一人のポスト・ドクター（計画内）と四人のポスト・ドクター（計画外）の併せて6人のポスト・ドクターがともに充実した研究生活をおくられることを期待したい。

目次

はじめに	5
1. 本研究の目的	5
2. 研究方法	5
3. 本研究の構成	6
第一章 中国語における比較構文の全体像	7
1. 「比較」とは何か	7
2. 「比較構文」とは何か	8
3. 中国語における比較構文についての先行研究	11
3.1 比較構文に関する共時的な研究	11
3.1.1 「比較の範疇と類型」についての研究	11
3.1.1.1 馬建忠(1898)による研究	11
3.1.1.2 高名凱(1957)による研究	11
3.1.1.3 丁声树(1961)による研究	12
3.1.1.4 赵元任(1968)による研究	12
3.1.1.5 吕叔湘(1982)による研究	12
3.1.1.6 刘月华・潘文娉・故驊(1983)による研究	13
3.1.1.7 太田辰夫(1987)による研究	14
3.1.1.8 黎锦熙(1992)による研究	14
3.1.1.9 冯春田(2000)による研究	15
3.1.1.10 赵金铭(2001)による研究	16
3.1.1.11 刘焱(2004)による研究	16
3.1.1.12 车竞(2005)による研究	17
3.1.1.13 许国萍(2007)による研究	17
3.1.2 「比較構文の構成要素」についての研究	18
3.1.2.1 比較主体(X)と比較客体(Y)との関係についての研究	18
3.1.2.1.1 朱德熙(1982)による研究	18
3.1.2.1.2 李临定(1986)による研究	18
3.1.2.1.3 马真(1986)による研究	19
3.1.2.1.4 邵敬敏(1990)による研究	20
3.1.2.1.5 陆俭明(1999)による研究	20
3.1.2.2 比較値(W)についての研究	22
3.1.2.2.1 任海波(1987)による研究	22
3.1.2.2.2 邵敬敏(1992)による研究	23

3.1.2.2.3 邵敬敏・刘焱(2002)による研究	25
3.2 比較構文に関する通時的な研究	25
3.2.1 黄晓惠(1992)による研究	25
3.2.2 史佩信(1993)による研究	26
3.2.3 李讷・石毓智(1998)による研究	26
3.2.4 谢仁友(2004)による研究	26
3.2.5 蒋绍愚・曹广顺(2005)による研究	26
4. 比較構文に関する考察	27
4.1 比較構文の論理構造	27
4.2 比較構文に関するタイプ理論分析	29
4.3 有限オートマトンによる比較構文の入力記憶の分析	38
4.3.1 有限オートマトンとは何か	38
4.3.2 状態遷移について	39
4.3.3 「順序論理回路」とは何か	39
4.3.4 比較構文の順序論理回路	40
4.4 「比較構文」と「比喩構文」の比較	42
4.4.1 先行研究	42
4.4.2 比較構文と比喩構文の共通点と相違点	54
5. まとめ(一)	62
第二章 中国語における平等比較構文の研究	68
1. 「平等比較構文」とは何か	68
2. 先行研究	68
2.1 平等比較構文の比較する範疇と文型構造についての研究	68
2.1.1 馬建忠(1898)による研究	68
2.1.1.1 形容詞が比較の対象(前項)と「如」、「若」、「犹」などの品詞(述語)の間に 現れる場合	68
2.1.1.2 形容詞が二つの比較対象の後ろに現れる場合	69
2.1.1.3 形容詞が文の中に現れず、比較の二つの対象の背後に隠れる場合	69
2.1.2 赵元任(1968)による研究	69
2.1.3 刘月华・潘文娛・故韡(1983)による研究	71
2.1.4 太田辰夫(1987)による研究	72
2.1.5 黎锦熙(1992)による研究	73
2.1.6 刘颖(2000)による研究	75
2.1.6.1 A式:「a 跟 b 一样(VP)/a 跟 b 都 VP」	75
2.1.6.1.1 「a 跟 b 一样(VP)」の文型	75

2.1.6.1.2 「a 跟 b 都 VP」の文型	75
2.1.6.2 B式:「a 等于 b/a(就)是 b」	76
2.1.6.2.1 「a 等于 b」の文型	76
2.1.6.2.1.2 「相對的平等比較構文」	76
2.1.6.2.2 「a(就)是 b」の文型	76
2.1.6.3 C式:「a 有 bVP」	77
2.1.6.4 D式:「a 不比 bVP」	77
2.1.6.4.1 「a 不比 bVP」は「積極的平等」を表す	77
2.1.6.4.2 「a 不比 bVP」は「消極的平等」を表す	78
2.1.6.4.3 「a 不比 bVP」は「正常的平等」を表す	78
2.1.6.5 E式:「aVP, b 也 VP」	78
2.1.6.5.1 「aVP, b 也 VP」	78
2.1.6.5.2 「aVP ₁ , b 也 VP ₂ 」	79
2.1.6.5.3 「aVP ₁ , b 也不 VP ₂ 」	79
2.1.7 刘焱(2004)による研究	79
2.1.7.1 相同比較	79
2.1.7.1.1 「X 跟/和/同/像 Y 一样(R)」	79
2.1.7.1.2 「X 等于 Y」	79
2.1.7.2 類似比較	80
2.1.7.2.1 「X R, Y 也 R」	80
2.1.7.2.2 「X 不比 Y R」	80
2.1.7.2.3 「X 有 Y 那么/这么 R」	80
2.1.7.2.4 「X 跟 Y 差不多」	80
2.1.8 蒋绍愚・曹广顺(2005)による研究	80
2.1.8.1 春秋時代から漢代に至る時代	80
2.1.8.2 魏晋南北朝時代から唐代に至る時代	81
2.1.8.3 宋元時代	81
2.1.8.4 元代以後	82
2.1.9 车竞(2005)による研究	82
2.2 平等比較を表す「“跟…一样”構文」についての研究	82
2.2.1 朱德熙(1982)による研究	82
2.2.2 李成才(1991)による研究	83
2.2.2.1 「跟…一样」が述語になる場合	83
2.2.2.1.1 A、Bが名詞(あるいは名詞連語)である場合	83
2.2.2.1.2 A、Bが代名詞である場合	83
2.2.2.1.3 Aが代名詞であり、Bが名詞である。あるいはAが名詞であり、Bが代	

名詞である場合	83
2.2.2.1.4 A、Bが動詞連語である場合	83
2.2.2.1.5 A、Bが主述連語である場合	83
2.2.2.1.6 A、Bが前置詞(介詞)連語である場合	83
2.2.2.1.7 A、Bが動詞、形容詞あるいは数量詞である場合	83
2.2.2.2 「跟…一样」が状況語になる場合	84
2.2.2.2.1 「A〈跟B一样〉+形容詞(あるいは形容詞連語)」	84
2.2.2.2.2 「A〈跟B一样〉+動詞連語(あるいは動詞)」	84
2.2.2.2.3 「主語〈A〉〈跟B一样〉+動詞連語(あるいは形容詞)」	85
2.2.2.2.4 「A動詞+得〈跟B一样〉形容詞」	85
2.2.2.3 「跟…一样」が補語になる場合	85
2.2.2.4 「跟…一样」が連体修飾語(“定語”)になる場合	85
2.2.2.4.1 「A動詞[跟B一样]的+中心語」	85
2.2.2.4.2 「主語+動詞A ₁ [跟B一样]的A ₂ 」	85
2.2.3 李向农(1999)による研究	85
2.3 平等比較を表す「“有”構文」についての研究	86
2.3.1 朱德熙(1982)による研究	86
2.3.2 吕叔湘(1980)による研究	87
2.3.3 张豫峰(1998)による研究	87
2.3.4 刘焱(2004)による研究	88
2.3.5 来燕飞(2008)による研究	88
3. 平等比較構文の論理構造と文型意味	90
3.1 古代中国語における平等比較構文の論理構造と文型意味	90
3.1.1 「X+形容詞+如/若/似/同+Y」の文型意味と論理構造	90
3.1.2 「X+形容詞+如/若/似/同+Y」の否定式の論理構造と文型意味	94
3.2 現代中国語における平等比較構文の論理構造と文型意味	100
3.2.1 平等比較を表す“跟”構文の論理構造と文型意味	100
3.2.2 “跟”構文の否定式の論理構造と文型意味	108
3.2.2.1 「跟…不一样」	108
3.2.2.2 「不跟…一样」	113
3.2.2.3 「跟…不一样」と「不跟…一样」との異同	118
3.2.3 平等比較を表す“有”構文の論理構造と文型意味	119
3.2.4 平等比較を表す“有”構文の否定式の論理構造と文型意味	124
4. まとめ(二)	129
第三章 中国語における差異比較構文の研究	131

1. 「差異比較構文」とは何か	131
2. 先行研究	131
2.1 差異比較構文の比較する範疇と文型構造についての研究	131
2.1.1 馬建忠(1898)による研究	131
2.1.2 赵元任(1968)による研究	132
2.1.3 刘月华・潘文娉・故韩(1983)による研究	133
2.1.3.1 “比”構文	133
2.1.3.1.1 「A(主語)+比B(状況語)+述語」の構造	133
2.1.3.1.1.1 述語が形容詞である場合	133
2.1.3.1.1.2 述語が“有+抽象名詞”である場合	133
2.1.3.1.1.3 述語が“心理活動”を表す動詞である場合	133
2.1.3.1.1.4 述語が一般の動詞である場合	133
2.1.3.1.1.5 述語が“一般動詞+形容詞”である場合	135
2.1.3.1.1.6 述語が“可能動詞+動詞”である場合	135
2.1.3.1.1.7 述語が“増加あるいは減少”を表す動詞である場合	135
2.1.3.1.2 「主語+A比B(状況語)+述語」の構造	135
2.1.3.2 “不比”構文	135
2.1.3.3 “没有”構文	136
2.1.4 太田辰夫(1987)による研究	136
2.1.4.1 絶対的差異比較	136
2.1.4.2 相対的差異比較	136
2.1.4.2.1 A式(古代中国語式)	136
2.1.4.2.1.1 “于(於)”を用いるもの	136
2.1.4.2.1.2 “过”を用いるもの	136
2.1.4.2.1.3 “如”を用いるもの	138
2.1.4.2.1.4 “似”を用いるもの	137
2.1.4.2.2 B式(現代中国語式)	137
2.1.5 黎锦熙(1992)による研究	138
2.1.6 刘焱(2004)による研究	139
2.1.6.1 低比較	139
2.1.6.1.1 「X没有Y R」	140
2.1.6.1.2 X不如Y(R)	140
2.1.6.1.3 「X比较R」	140
2.1.6.1.4 「X不像Y这样/那样R」	140
2.1.6.2 高比較	140
2.1.6.2.1 「X比Y I R(I)」	140

2.1.6.2.2 「XR, Y更R」	140
2.1.6.2.3 「越…越…」	140
2.1.6.2.4 「越来越…」	140
2.1.6.2.5 「相比之下/和…相比, X很…」	140
2.1.7 蒋绍愚・曹广顺(2005)による研究	140
2.1.8 车竞(2005)による研究	140
2.1.8.1 XとYの差異だけを示す、優劣を示さない場合	141
2.1.8.2 XがYを基準とし、ある面においてこの基準にそれる場合	141
2.1.8.3 XがYの程度に及ばないことを明らかに示している場合	142
2.2 “比”構文についての研究	142
2.2.1 吕叔湘(1980)による研究	142
2.2.1.1 二つの異なる事物の比較を表す場合	142
2.2.1.2 同一のものの異なる時期の比較を表す場合	142
2.2.1.3 述語が形容詞である場合	142
2.2.1.4 述語が動詞である場合	142
2.2.1.5 一般の動作を表す動詞を用いる場合	142
2.2.1.6 「一+数量詞+比+一+数量詞」	143
2.2.2 朱德熙(1983)による研究	143
2.2.3 ビレネー(Peyraube, Alain)(1989)による研究	144
2.2.4 王业兵・吕靖・邓海波(2007)による研究	145
2.2.4.1 「優性的“比”構文」における“比”の属性	145
2.2.4.1.1 疑問文の「A—不—A」の文型からの考察	145
2.2.4.1.2 “比”が単独で疑問文の回答になれる	145
2.2.4.2 「潜在的“比”構文」における“比”の属性	146
2.2.5 胡斌彬(2009)による研究	147
2.2.5.1 “比”構文と“于”構文との共通点	147
2.2.5.2 “比”構文と“于”構文との相違点	147
2.2.5.2.1 統語上の分析	147
2.2.5.2.2 意味上の分析	148
2.2.5.2.3 語用上の分析	148
3. 差異比較構文の論理構造と文型意味	149
3.1 古代中国語における差異比較構文の論理構造と文型意味	149
3.1.1 「X+形容詞+于(於)+Y」の文型意味と論理構造	149
3.1.2 「X+形容詞+于(於)+Y」の否定式の論理構造と文型意味	152
3.2 現代中国語における差異比較構文の論理構造と文型意味	155
3.2.1 「性状」を表す差異比較構文の論理構造と文型意味	155

3.2.1.1 「X+比+Y+形容詞」	156
3.2.1.2 「一+数量詞+比+一+数量詞+形容詞」	160
3.2.2 「動作方式/情態」を表す差異比較構文の論理構造と文型意味	164
3.2.2.1 「X+比+Y+動詞+得+形容詞」	164
3.2.2.2 「X+動詞+得+比+Y+形容詞」	168
3.2.2.3 共通点と相違点	173
3.2.3 「数量」を表す差異比較構文の論理構造と文型意味	174
3.2.3.1 「X+比+Y+形容詞(+動詞)+副詞(あるいは数量詞)」	174
3.2.3.2 「X+比+Y+形容詞あるいは動詞+倍数あるいはパーセント(%)」	186
3.2.4 “比”構文の否定式の論理式と文型意味	191
4. まとめ(三)	197
第四章 中国語における最上級比較構文の研究	200
1. 「最上級比較構文」とは何か	200
2. 先行研究	200
2.1 差異比較構文の比較する範疇と文型構造についての研究	200
2.1.1 馬建忠(1898)による研究	200
2.1.1.1 比較される対象が文の中に現れる場合	200
2.1.1.2 比較される対象が文の中に現れない場合	201
2.1.2 吕叔湘(1942)による研究	201
2.1.2.1 正面的最上級比較	202
2.1.2.2 反面的最上級比較	202
2.1.3 高名凱(1957)による研究	202
2.1.4 太田辰夫(1987)による研究	203
2.1.4.1 絶対的最上級比較	203
2.1.4.1.1 “最”の用法	204
2.1.4.1.2 “頂”の用法	204
2.1.4.1.3 “尤”の用法	204
2.1.4.1.4 “尤其”の用法	204
2.1.4.2 相対的最上級比較	204
2.1.4.2.1 限定式	204
2.1.4.2.2 非限定式	205
2.1.5 刘焱(2004)による研究	205
2.1.5.1 「X最/頂R」	205
2.1.5.2 「连X都/也R」	205
2.1.5.3 「X比Y2还R」	205

2.2	“最”構文についての研究	206
2.2.1	呂叔湘(1980)による研究	206
2.2.1.1	「最+形容詞」	206
2.2.1.2	「最+動詞」	206
2.2.1.3	「最+方位詞(あるいは場所名詞)」	207
2.2.1.4	“最”と“頂”の違い	207
2.2.2	刑福义(2000)による研究	207
2.2.2.1	多数の個体の数量表示形式	207
2.2.2.1.1	“L”は“確定数量詞”である場合	207
2.2.2.1.2	“L”は“非確定数量詞”である場合	207
2.2.2.1.3	“L”が“類別を示す数量詞”である場合	207
2.2.2.2	多数の個体の並列表示形式	208
2.2.2.2.1	全部列挙性並列	208
2.2.2.2.2	突出列挙性並列	208
2.2.2.2.3	非名詞性並列	208
2.2.2.2.4	選択性並列	208
2.2.2.3	多数の個体の暗示性総括形式	209
2.2.2.3.1	モデル1: 最X的M・V P	209
2.2.2.3.2	モデル2: ~V P・最X的M	209
2.2.2.3.3	モデル3: 他是最X的M	209
2.2.2.3.4	モデル4: 他们是最X的M	209
2.2.3	赵军(2004)による研究	210
2.2.3.1	統語上の比較	210
2.2.3.1.1	統語構成において	210
2.2.3.1.1.1	「V/V P」を修飾する場合	210
2.2.3.1.1.2	「A/A P」を修飾する場合	211
2.2.3.1.1.3	「N」を修飾する場合	211
2.2.3.1.2	文型構造においての比較	212
2.2.3.1.2.1	「最/頂+A(単音節)+的+N P(二音節)」	212
2.2.3.1.2.2	重ねる形式と重複形式	212
2.2.3.1.2.3	「最/頂+A+不/莫过」	212
2.2.3.1.2.4	「最/頂…之一」	212
2.2.3.2	意味上においての比較	213
3.	最上級比較構文の論理構造と文型意味	214
3.1	“最”構文	214
3.2	最上級比較を表す“比”構文	218

3.2.1 「X+比+Y+都+形容詞」	218
3.2.2 「(再也+)没有+比+Y+更/还/再(+的+NP)+了」	222
4. まとめ(四)	228
第五章 現代日本語における比較構文の研究	230
1. 先行研究	230
1.1 「比較構文」の定義	230
1.2 「比較構文」の種類と文型	230
1.2.1 友清睦子・鈴木雅実(1992)による研究	230
1.2.2 庵功雄など(2000・2001)による研究	231
1.2.2.1 二つの事物を比較する表現	231
1.2.2.1.1 「AはBよりPだ」	231
1.2.2.1.2 「AはBと同じぐらいPだ」	232
1.2.2.2 三つ以上の事物を比較する表現	232
1.2.2.3 基準・標準と比較する表現	233
1.2.2.3.1 「PにしてはQ」	233
1.2.2.3.2 「Pわりに(は)Q」	233
1.2.3 安達太郎(2001)による研究	234
1.2.3.1 典型的な比較構文	234
1.2.3.2 比較述語を持たない比較構文	235
1.2.3.2.1 「VよりV」型比較構文	235
1.2.3.2.2 「NよりV」型比較構文	235
1.2.3.3 名詞の役割による比較構文	236
1.2.3.3.1 名詞の意味関係による比較	236
1.2.3.3.2 名詞の値の比較	236
1.2.3.4 非典型的な比較構文	237
1.2.3.4.1 「YはX以上にP」型比較構文	237
1.2.3.4.2 「XするくらいならYする方がP」型比較構文	237
1.2.3.4.3 「XというよりY」型比較構文	238
1.2.3.5 副詞「より」による比較構文	238
1.2.4 野田時寛(2001)による研究	238
1.2.4.1 単文における比較表現	238
1.2.4.1.1 二つのものの比較	238
1.2.4.1.1.1 一つを主題として	239
1.2.4.1.1.2 一つを焦点として	239
1.2.4.1.1.3 否定表現	239

1.2.4.1.1.4 同程度比較	239
1.2.4.1.2 三者以上のものの比較	240
1.2.4.2 複文における比較表現	240
1.2.4.2.1 「～ほうが」	240
1.2.4.2.2 主題として	240
1.2.4.2.3 「どちら」	240
1.2.4.2.4 否定表現	240
1.2.4.2.5 同程度比較	240
1.2.5 森山卓郎(2004)による研究	241
1.2.5.1 二者間差比較	241
1.2.5.2 同程度比較	242
1.2.5.3 最上級比較	243
2. 現代日本語における比較構文の論理構造と文型意味	244
2.1 現代日本語における平等比較構文の論理構造と文型意味	244
2.1.1 平等比較構文の肯定表現の論理構造と文型意味	244
2.1.2 平等比較構文の否定表現の論理構造と文型意味	250
2.2 現代日本語における差異比較構文の論理構造と文型意味	255
2.2.1 「XはYより～」	255
2.2.2 「Yに比べXは～」	259
2.2.3 「Yに比べXは～ない」	264
2.3 現代日本語における最上級比較構文の論理構造と文型意味	269
2.3.1 「XはY(の中)で一番/最も～だ」	269
2.3.2 「XはY(疑問詞)よりも～」	274
2.3.3 「X(の中)でYほど～は(い)ない」	279
3. まとめ(五)	286
第六章 総まとめ	293
1. 現代中国語と現代日本語における比較構文の比較対照	293
1.1 共通点	293
1.1.1 構成成分について	293
1.1.2 比較範疇について	293
1.1.3 論理構造と意味について	293
1.1.4 比較詞の役割について	297
1.2 相違点	298
2. 本研究の意義	300
3. これからの展望	301

あとがき	302
参考文献	303
(一) 中国語関係の参考文献	303
(二) 日本語関係の参考文献	306
(三) 中国語と日本語の対照研究に関する参考文献	307
(四) その他の参考文献	307
付録	308
(一) 平等比較構文(33文)	308
(二) 差異比較構文(17文)	310
(三) 最上級比較構文(17文)	311

ABSTRACTS

1 The purpose of this study

All objective existence of things in the natural world and the human world, as well as emerging abstraction in the minds of mankind, in respect of a number of state and nature will exist more or less the difference. People in order to understand and to distinguish the various differences between things, will carry on "comparison". Thus, "comparison" is not only the most important and most basic method, but also the common way of thinking in the process of human understanding of the objective world. This way of thinking "comparison" reflected in the research field of language, is called "comparative category" in linguistic research, and in the syntactic research, called "comparative sentences".

All languages of the world have a concept of "comparison". L.Stassen (1985) believes that the comparative structure gives hierarchical positions to two objects in the order of magnitude of a predicate. "Comparison" is not only an important word in semantic category, but also highlights special things as an expression of "comparison". The expression of semantic category of specific syntactic structure is called "a comparative sentence".

"Comparison" in the language, as a ubiquitous and syntactic structure, has its own specific "semantic meaning" and "logical structure". From the 1980s to the present, People have carried out research on "comparative sentences", especially during the late 20th century, researches on "comparative sentences" culminated, emerged a large number of related papers. Researches on the negative comparative sentences are not uncommon. In this study, based on previous studies, comparative sentences in Chinese and Japanese are divided into three types which are "equal degree sentences" "superior degree sentences" and "superlative degree sentences". These three types are discussed by the method of logical analysis in order to clarify three types of comparative sentences. Type theory and finite automata device (automaton) analysis clarifies comparative sentences from the standpoint of (input) memory and its related human thinking mode.

2 Research methods

There are many research methods on "Comparative Sentences" in Chinese and Japanese language. However, in order to more clearly explain the

semantics of “Comparative Sentences”, we need a more scientific research method, such as formal semantics.

This study uses a “logical structure” analysis, introducing some basic knowledge and concepts. And the predicate logic analysis for various instances of “comparative sentence”. We hope by its logical semantic analysis process, the three comparative sentences (“equal degree sentences” “superior degree sentences” and “superlative degree sentences”) can be more clearer and more systematic. “Predicate logic” expression at first glance may be considered to be relatively simple, but in fact it is more complex. Located in the function position, verbs (predicate) can be interpreted as “collections of individual action • behavior”. In the subsequent position is “date expressed by individual”. They can be said as “operational” foundation. Of course, the “action • behavior” and “individual” is of different nature. “A collection of individuals” and “individual” is of the same nature. In addition, this study also used the method of “theory of types” and of “finite automatic device (automation)”

3 The structure of this thesis

The structure and content of each chapter of this thesis are such as the following:

The first chapter is the overall study of the comparative sentence in Chinese language. In this chapter, first it introduced the diachronic and synchronic study on Chinese comparative sentences. Next, the Chinese comparative sentences were investigated, through the examples of its logical structure analysis. “Theory of types” and “the analysis of finite automatic device (automation)” are discussed in this chapter.

The second chapter is the study of the Chinese “equal degree sentences”. In this chapter, it introduced the previous study on “equal degree sentences”. Next, it gives analysis on “the sentence pattern of semantics” and “logical structure” of various patterns of “equal degree sentences”.

The third chapter is the study of Chinese “superior degree sentences”. In this chapter, it introduced the previous study on the Chinese “superior degree sentences”. Next, it gives analysis to “semantic meaning” and “logical structure” of various “superior degree sentences”.

The fourth chapter is the study of Chinese “superlative degree sentences”. In this chapter, it introduced the previous study of the Chinese “superlative degree sentences”. Next, it gives analysis to “the sentence pattern” and “logical

structure” of “superlative degree sentences”.

The fifth chapter is the comparative sentences “in modern Japanese studies”. In this chapter, it first introduced the previous study on modern Japanese Comparative Sentences. Next analysis of the modern Japanese comparative sentence divided into “equal degree sentences” “superior degree sentences” and “superlative degree sentences”. Various patterns of sentence patterns of “logical structure” are provided.

The sixth chapter is a “summary”. In this chapter, “Clause representations”, “sentence structures” and “logic structures” of the Chinese and Japanese comparative sentences are compared.

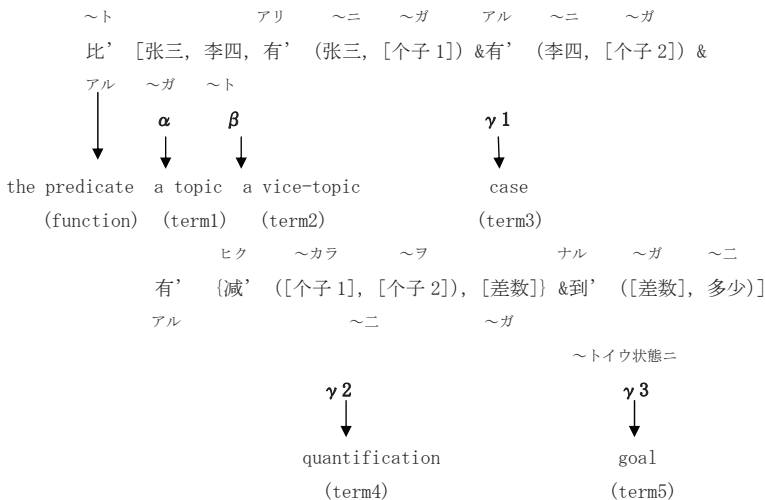
In this paper finally enumerated all references.

4. Significance of this study

In this study, based on previous studies, the “semantic meaning” and “logical structure” of the Chinese and Japanese Comparative Sentences are investigated. We obtained the same logical structure through the analysis of specific examples, “equal degree sentences” “superior degree sentences” and “superlative degree sentences”, although each of the sentence is semantically different. So far I think there are no similar studies. Previous studies basically started from the semantic comparison of syntactic structures and literal meanings . In this research, the methods of “predicate logic” are imported. Through the “function of three constants or propositions” the internal structures of comparative sentence are explained. Here, take the Chinese sentence “张三比李四个子高 (Zhang san is taller than Li si)” as an example to illustrate this.

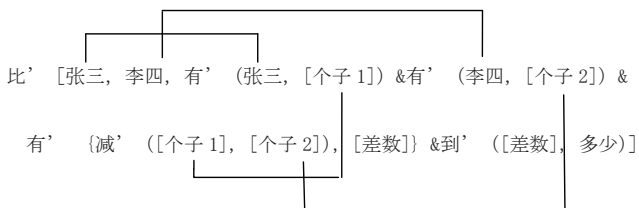


The logical structure of the above sentence is such as the following :



The advantage of the analytical methods used in this paper is not limited to linguistics, but also shows some hints which explore the human brain in the process of semantic understanding.

Relations of each term is such as the following:



Logical expression is not only unique in Chinese or Japanese structure, but also can be seen as “the common intermediate language” of all natural languages in the world. Because the logical expressions clearly demonstrated, internal structure and the portion of the connection rule of languages in the world are same, so it seems to be very useful to foreign language teaching.

はじめに

1. 本研究の目的

自然世界や人類社会において、存在している客観的事物および人間の頭で思い浮かべた抽象的な概念はその数量、状態や性質などは必ず異なるものである。人々はこの違いを認識し、区別するために、それらの事物を比較する必要がある。従って、「比較」は人間にとって極めて重要かつ基本的な方法であるだけでなく、客観世界を認識する過程においても共有すべき考え方であると言える。この「比較」という考え方が言語領域に反映すると、言語研究における「比較範疇」といわれるものになり、そして、それは文法研究におけるいわゆる「比較構文」である。

世界中のいずれの言語においても、必ず「比較」という概念が存在している。言語学者 L. Stassen (1985) は「比較構造は述語の量級において二つの事物の等級位置を確定する機能を賦与する構造である」と述べている。さらに、「比較(comparison)」は言語において、最も重要な意味範疇のひとつであり、事物の特殊性を浮かびあがらせる表現式であることをも指摘した。この「比較」という意味範疇を具体的な統語構造で表わしたものが「比較構文」である。

比較構造は言語において、普遍的に存在する文型構造として、その構造自体は特定の文型意味と論理構造を持っている。二十世紀八十年代から今日に至るまで比較構文についての研究は盛んに行われている。特に、二十世紀末期に比較構文の研究は頂点に達し、多くの論文が現れた。その中には、比較構文の形式構成について論じる論文や、比較結果の入れ替え規則についての論文、更には比較文の語用条件についての論文などがある。また、否定比較構文に関する専門的な研究も行われている。本研究は先人の研究を踏まえ、中国語と日本語の比較構文を「平等比較構文」、「差異比較構文」と「最上級比較構文」の三種類に分け論じることとする。そして、論理的な分析方法を用いて、この三種のそれぞれの文型意味と論理構造を明らかにしたい。さらに、有限オートマトンとタイプ理論に基づき、比較構文の「入力記憶」の流れおよび人間の思惟モデルを明らかにしたい。

2. 研究方法

中日両言語における比較構文に対する研究の方法は多様である。方法は統語構造と語用論的意味からの研究をメインとしている。しかし、明示的に文の意味を解明するためには、より科学的な研究方法、たとえば、形式意味論という研究方法が必要だと考えられる。

本研究は明示的な表示手段として採用する「論理構造」についての基本的な表記上の知識や概念を導入する。その上で比較構文について、それぞれの具体例を述語論理を援用し、意味分析の過程を明示的に記述するとともに「平等比較構文」、「差異比較構文」と「最上級比較構文」の三種類の比較構文の論理構造と文型意味を解明するための記述の一般化を図る。述語論理表記は一見、単純におもえるが、実際は複雑な約束がある。関数の位置に

生起する動詞は「その動詞により表される動作・行為をしている個体の集合」と解釈され、その結果直後にくる「項で表された個体」と同質のものとして、いわば「計算」の基礎を作っているのである。自明のことであるが「動作・行為」そのものでは「個体」と質が異なるが、「個体の集合」は「個体」という点で個体と同質だからである。

それ以外、本研究はタイプ理論を用いた分析方法と論理式の成立のプロセスを有限オートマトンと順序論理回路を用いた分析方法で明らかにする。

3. 本研究の構成

ここで、各章の内容を簡単に紹介しておこう。

第一章は中国語における比較構文の全体像についての研究である。この章では、まず現在までの比較構文についての共時的と通時的な先行研究を紹介する。次に、中国語における比較構文に関する考察を行う。ここでは、比較構文の論理構造を解析する。さらに、タイプ理論と有限オートマトンにより、比較構文を分析する。

第二章は中国語における平等比較構文についての研究である。この章では、まず現在までの平等比較構文についての先行研究を紹介する。次に、各文型に分け、その文型意味、論理構造を解析する。

第三章は中国語における差異比較構文についての研究である。この章では、まず現在までの差異比較構文についての先行研究を紹介する。次に、各文型に分け、その文型意味、論理構造を解析する。

第四章は中国語における最上級比較構文についての研究である。この章では、まず現在までの最上級比較構文についての先行研究を紹介する。次に、各文型に分け、その文型意味、論理構造を解析する。

第五章は、現代日本語における比較構文の研究である。この章では、まず現代日本語における比較構文についての先行研究を紹介する。次に、「平等比較構文」、「差異比較構文」と「最上級比較構文」の三種類に分け論じることとする。

第六章は総まとめである。この章では、前の各章の研究に基づき文型表現、統語構造や論理構造の面から、中国語における比較構文と日本語における比較構文を比較対照する。

最後に、参考文献をあげておく。

第一章 中国語における比較構文の全体像

1. 「比較」とは何か

まず、「比較」とは何かについて考えることにする。『現代漢語辞海』によると、「事物の異同関係を確定するための過程と方法である。まず、ある基準により、互いにかかわる事物を対照し、その共通点と相違点を確定し、その事物について分類をする。各々の事物の内部の特性におけるそれぞれの面から比較し、また、物の内在的な連関を把握し、物の本質を認識することである。(3543 頁参照)」という。

『現代漢語大辞典』は「一定の基準により二種あるいは二種以上の関連ある事物との間で、その優劣・異同を見分けることである。(57 頁)」と定義した。

『広辞苑(第六版)』は「くらべること。くらべ合わせること。(2337 頁)」と述べている。

『国語大辞典言泉』は「二つ以上のものを互いにくらべ合わせて、それらの異同、優劣、共通点などを検討すること(1925 頁)」としている。

呂叔湘(1982)は以下のように説明した。「異同」、「優劣」はどちらも比較から生じる。二つの出来事には、それがもし完全に異なるのであれば、両者はかかわりがないといってよい。たとえば、

- (1) 今天热。(今日は暑い)
- (2) 你姓张。(君は張という)

例(1)と例(2)の文は関係性を有さない。また次の(3)、(4)の文における関係にも関わらない。

- (3) 今天热, 不去了。(今日は暑いから、行かない) — (因果関係)
- (4) 你姓张, 又是济南人(君は張という名前で、また済南出身です) — (添加関係)

(3)のような因果関係と(4)のような添加関係は比較関係を構成しない。比較関係を構成するためには、共通する部分と相違する部分があり、相違点を見つけられる場合である。たとえば、

- (5) 昨天热, 今天更热。(昨日は暑かった、今日をもっと暑くなる)

あるいは相違の中から共通点を見つけられる場合である。たとえば、

- (6) 你姓张, 我也姓张。(君は張君で、私も張です)

これらは比較関係を構成できる。(呂叔湘 1982 : 352 頁参照)

2. 「比較構文」とは何か

「比較構文」について、馬建忠 (1898:190) は「同じ形容詞について、その似ている程度が一緒なのではなく、ちがいのことが比較である」と定義している。呂叔湘 (1982) は「比較構文は、事物の異同あるいは優劣の比較関係を表す文である(190頁)」と定義している。太田辰夫 (1987: 171—181頁参照) は「比較には、絶対と相対の区別がある。「絶対比較」は比較する対象が文の中に現われない、「相対比較」は比較する対象が文の中に現れる。」と指摘している。このような解釈は意味上から「比較構文」を説明する。车竞 (2005) は統語構造から、「現代中国語の比較構文は、述語の中に比較語彙あるいは比較形式を含んでいる文である。」と定義している。

本稿は车竞 (2005) の見解に加えて、さらに「比較構文」は構造上からみると、「比較主体(Subject)」、「比較客体(Standard)」、「比較詞(Mark)」、「比較点(Points of Comparison)」、「比較値(Result)」などで構成される(唐厚広 1997)という考えをとり入れる。比較というのは、二種あるいは二種以上の同じあるいは異なる事物、現象などについて比べて、その事物の特徴を説明する方法である。次の用例を見てみよう。

(7) 张三 比 李四 个子 高。(張三は李四より背が高い。)

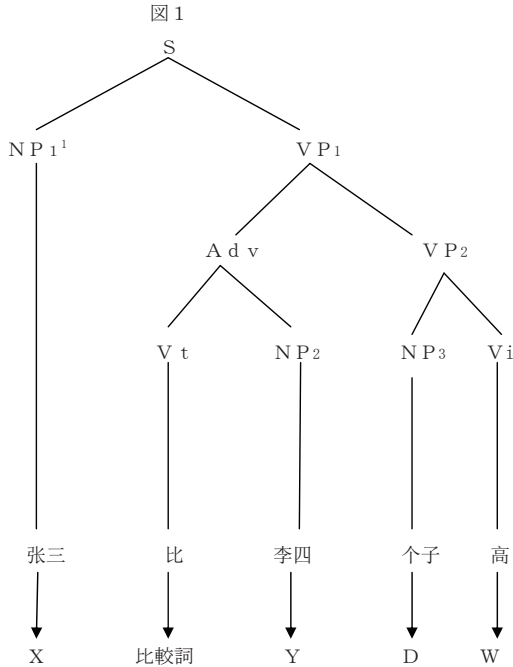
X 比較詞 Y D W

(8) 妹妹 像 姐姐 一样 漂亮。(妹は姉のように綺麗だ。)

X 比較詞 Y 程度副詞 W

例(7)の“比”は比較を表す語彙であり、例(8)の“像……一样”は比較形式である。しかし、単に“像”を“比較詞”と見なすこともできる。比較される対象(例(7)の“张三”と例(8)の“妹妹”)は“比較主体”と呼ぶ。この“比較主体”は“X”と記す。比較の参照対象(例(7)の“李四”と例(8)の“姐姐”)は“比較客体”と呼び、“Y”と記す。比較主体と比較客体の間に用いられ、比較する関係を表すあるいは比較の客体を導く語彙(“比”と“像”)を“比較詞”と呼ぶ。比較の結果を表す部分(“高”と“漂亮”)は“比較値”と呼び、これを“W”と記す。具体的な比較を表す部分(例(7)の“个子”)を“比較点”と呼び、“D”と記す(车 2005)。例(8)の“一样”は“比較値”の“漂亮”を修飾する程度副詞と考える。従って、中国語の比較文の構造は「X+比較詞+Y+(D)+(程度副詞)+W」と記述することができる(Dと程度副詞の位置は不確定で、省略される場合もある)。この構造のレベルの違いを判然とするために、ここで例(7)と(8)の構造を樹形図で表示する。

例(7)は樹形図で表示すると、下の図1になる。



図表1からみると、用例(7)の統語規則²は次の通りである。

- a. $S \rightarrow NP \quad VP$
- b. $VP \rightarrow Adv \quad VP$
- c. $Adv \rightarrow Vt \quad NP$
- d. $VP \rightarrow NP \quad Vi$

用例(7)の語彙規則³は次の通りである。

$NP \rightarrow \{张三, 李四, 个子\}$

$Vt \rightarrow \{比\}$

$Vi \rightarrow \{高\}$

ここで、語彙規則と統語規則の記号について説明する。

Sは「文」である。NPは「名詞連語」、あるいは「名詞フレーズ」という。

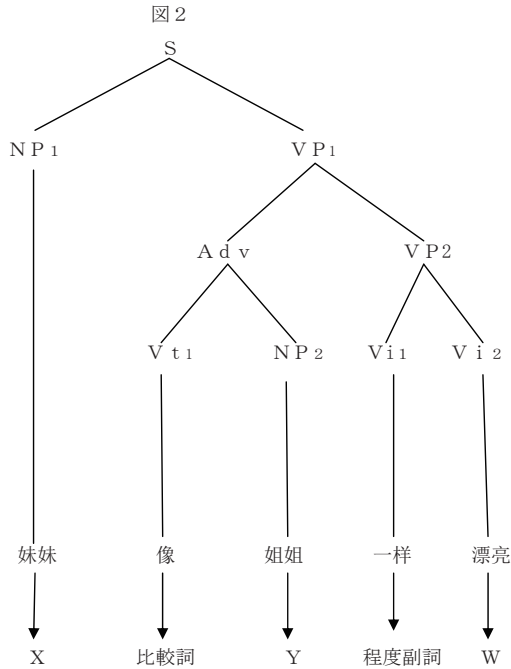
¹ 樹形図の中のNP1、NP2とNP3の中の1、2、3は特に意味はなく、名詞連語を区別するためである。

² 「統語規則」と3「語彙規則」については『逻辑语文学』(方立2000)第二章による。

『逻辑语文学』により、論理言語Ltは自然言語と同様に統語部分を持つ。統語部分は語彙と統語規則を含んでいる。

V t は他動詞である。また V i は自動詞である。(ここの“比”は前置詞であり、“高”は形容詞であるが、ともに動詞と見なすことができる)。

例(8)は樹形図で表示すると、下の図2になる。



用例(8)の統語規則は次の通りになる。

- a. S → NP VP
- b. VP → Adv VP
- c. Adv → Vt NP
- d. VP → Vi Vi

用例(8)の語彙規則は次の通りになる。

NP → {妹妹, 姐姐}

Vt → {像}

Vi → {一样, 漂亮}

ここの“一样”と“漂亮”は本来は形容詞であるが、動詞と見なすことができる。

3. 中国語における比較構文についての先行研究

3.1 比較構文に関する共時的な研究

3.1.1 「比較の範疇と類型」についての研究

3.1.1.1 馬建忠 (1898) による研究

馬建忠は中国語文法の創始者であり、彼の著『馬氏文通』は中国語についての最初の体系的な文法著作である。『馬氏文通』は中国語の比較構文を「平等比較構文（平比文）」、「差異比較構文（差比文）」、「最上級比較構文（極比文）」に分けている。

平等比較構文（平比文）について、『馬氏文通』は「平等比較構文とは、形容詞を用いて、比較する二つの対象に高低、優劣に違いがない比較構文である。（馬 2007 : 135）」と定義する。普通は「如」、「若」、「犹」などの語彙を用いて、比較対象を接続する。

(9) 君子之交淡若水, 小人之交甘若醴。(君子は淡して以って親しみ、小人は甘くして以って絶つ。)(『庄子·山木』)

(10) 肌膚若冰雪, 淖約若處子。(肌膚は氷雪のごとく、淖約たること処子の若し。)(『庄子·逍遥游』)

なお平等比較構文（平比文）の詳しい分析と他の比較構文については、詳しくは本論で論じる。

3.1.1.2 高名凱 (1957) による研究

高名凱は『漢語語法論』の第十章の“量詞(quantitative)”において、“比詞”という概念を提出し、「比較の量を表す文法範疇を“比詞”という」と説明した。さらに、比較の程度により、「差異級（差級）(comparative)」と「最上級（極級）(superlative)」の二種に分け、初めて「比較」と「範疇」の概念を結びつけた。なお、古典中国語と口頭語を区別して論じた。「差異級（差級）」を論述する際には比較結果は比較主体と客体の相対関係を表すことを指摘した。

(11) 小马先生比他父亲强多了。(馬さんは彼のお父さんより能力が強い。)(『二馬』)

「最上級（極級）」について、相対的最上級(relative superlative)と絶対的最上級(absolute superlative)に分けている。前者は比較により得る最上級である。たとえば、“最”、“最为”を用いる。

(12) 伊太太最爱喝中国茶。(伊さんの奥さんは中国のお茶が一番好きだ。)(『二馬』)

後者は量級の絶対的極点を表す。比較により得るものではない。たとえば、古代中国語は“至”、“极”、“绝”、“殊”を用い、口頭語は“太”、“挺”、“非常”、“特别”、“极顶”などを用いる。

(13) 遇见女子, 他的话是特别的多。(女性に会って、彼はけっこうしゃべれる。)(『二馬』)

3.1.1.3 丁声树(1961)による研究

丁声树氏は『現代漢語語法講話』において、“比”構文が表示するのは「程度の差」であり、異同あるいは類似ではないことを明示した。なお、“比”の用法を二種に分けている。一つめは「同類の事物の比較」である。

(14) 三元比谁都明白, 可爱。(三元はだれより頭がよく、可愛い。)(老舍)

(15) 色味都比桑葚要好得远。(色と味はどちらもクワの実よりはるかにいい。)(鲁迅)

二つめは「程度の差が時間とともに変化すること」である。

(16) 从此金旺旺比以前更厉(利)害了。(これから金旺の事業が以前よりもっと盛んに成っている。)(赵树理)

(17) 过了冬至, 白天一天比一天长了。(冬至を経て、昼間はだんだん長くなっている。)

この内容の分析については、本論で詳しく説明する。

3.1.1.4 赵元任(1968)による研究

赵元任氏は『中国語的文法』において、形容詞の比較範疇を「平等比較(相等)」、「高比較(高于)」、「低比較(低于)」、「最上級(最高)」、「反最上級(反最高)」の五つの種類に分けている。

たとえば、反最上級(反最高)の文型は「最(～頂)不A」である。この文型は直接構成成分により、二種の分け方がある。次の例を通して、説明しよう。

(18) 最不聪明的方法。(最も聡明でないやり方)

例(18)の構成について二つの理解ができる。一つは「最+不聪明的方法」の構造であり、もう一つは「最+不聪明的方法」の構造である。しかし、この二つの分け方は真理値条件において表す意味がほぼ同じである。「不」はうしろの形容詞と複合するかどうかにかかわらず、その構造は「最(～頂)+不」の文型であると考えてもよい。

3.1.1.5 吕叔湘(1982)による研究

吕叔湘は『中国文法要略』において、文の表現を“範疇”と“関係”に分け、“二つの事物の間に色々な関係がある”という考えによって、文の関係を六つに分けた。その中の“異同—優劣”の関係が比較関係である。氏はさらに、“類似(类同)、比喻(比拟)、近似(近似)、優劣(高下)、低比較(不及)、高比較(胜过)、最上級(尤最)、損得(得失)、非及(不如)、比例(倚变)”の十種を下位分類とした。この吕の研究は比較範疇についての最も全面的な研究である。それは比較および比較にかかわる概念と統語構造を含んでいる。

吕は動作(動詞)についての比較を「損得(得失)」、「非及(不如)」と「比例(倚变)」の三種類に分けている。厳密にいうと、動作の優劣を比較することはできない。ここで述べる動作の比較はただ動作における程度の強さの比較である。従って、一般的には「甚」を用いて程度を表す。たとえば、

(19) (后会五铢钱白金起)民為奸, 京師尤甚。(民衆は利己的であり、この中では首都の方が

最も深刻である。) (『史记・酷吏传』)

(20) 老臣有四男一女，愛女甚于男。(臣は四人の息子と一人の娘がいるが、娘の気に入り様は息子より甚だしい。) (『汉书・張禹传』)

「損得(得失)」の比較は認識の問題だけではなく、実際は行動にかかわる。その文型は優劣の比較と異なる。具体的には「宁」と「不如」の二種類に分ける。この二種はどちらも「与其」と共起することができる。

(21) 此龜者，寧其死為留骨而貴乎？寧其生而曳尾于塗中乎？(この龜は、寧ろ其れ死して骨

とどめてとうとばれんか、むしろ生きておとちゆうひかんにを留めて貴ばれんか、寧ろそれ生きて尾を塗中に曳かんか) (『庄子・秋水』)

「及ばない(不如)」の比較は「損得(得失)」の比較の一種である。疑問文は「孰」を用いて選択を表す。

(22) 大天而思之，孰与物畜而裁之？从天而頌之，孰与制天命而用之？(天を大として之を思

うは、物畜えて之を裁するに孰与ぞ。天に従いて之を頌するは、天命を制して之を用う

るに孰与ぞ。) (『荀子・天論』)

「比例(倚变)」の比較は、互いに関係している。すなわち、一緒に前進あるいは後退する時に生じる両者の変化の比較である。これは「関数の関係」を持つといてもよい。あるいは「比例」の比較と言ってもよい。中国語の古文は「愈」を用いて比較関係を表す。一方、現代中国語は「愈」あるいは「越」を用いてこの比較関係を表す。

(23) 越大越没規矩。(年上になればなるほど不始末になった。)(『红楼梦』)

3.1.1.6 刘月华・潘文娛・故鞞(1983)による研究

刘月华・潘文娛・故鞞氏は『实用現代漢語語法』において、中国語の比較構文を二種に分けている。一つは「事物、性状の異同の比較」である。「A跟B一样」と「A有B那么(这么)……」の二つの文型をとりあげた。

(24) 这间屋子和那间屋子一样大。(この部屋はあの部屋と同じ大きさだ。)

(25) 他弟弟快有我这么高了。(彼の弟はすぐ私と同じ身長になる。)

二つめは「性質、程度の差と優劣の比較」である。ここで、「A(主語)+比B(状態語)+述語」と「主語+A比B(状態語)+述語」の二つの文型をとりあげた。

(26) 这座山比那座山高一些。(この山はあの山より少し高い。)

(27) 他现在比以前进步多了。(彼は現在が以前よりうんと進歩した。)

これらの内容については、本論で詳しく説明する。

3.1.1.7 太田辰夫(1987)による研究

太田辰夫は『中国語歴史文法』において、中国語の比較構文を「平等比較(平比)」、「差異比較(差比)」、「最上級比較(極比)」の三種類に分けている。また、「比較には絶対的のもの」と相対的のものがある。絶対的なものは比較される対象が句にあらわれていないものであって、相対的なものはこれであらわれているものである。ただし平比には絶対的なものがなく、差比も絶対的なものは明確さを缺くきらいがあり、決定に困難なことがある。要するに絶対的な比較で明確なものは極比のみである。(太田 1987:171-172)ことを指摘した。さらに、各種比較の標識をとりあげた(次の図3参照)。

図 3

	絶対的	相対的
平 比		“A 象 B 一样…”
差 比	“A 更…”	“A 比 B…”
極 比	“A 最…”	(限定式) “A 在…中最…” (非限定式) “A 比什么都…”

3.1.1.8 黎锦熙(1992)による研究

黎锦熙氏は『新著国语法』において、文法の分析から語彙の分析まで、しばしば「比較」について言及した。第十章の「副詞細目」の100番「数量副詞」の項目において、「数量副詞」を「度数に関するもの」、「程度に関するもの」と「範囲に関するもの」の三種類に分けている。その中の「程度に関する数量副詞」を更に四つの項目に分けている。その中の第2項は「比較」を表し、「平等比較(平比)」(“一样”、“一般”、“似的/似地”)(例(28)参照)と「差異比較(差比)」(述語の前につける“更”/“更加”/“更见”、“尤其”/“尤”、“加倍”/“倍”、“比较地”、“较为”/“较”、“越发”/“越”/“愈”/“益发”/“一发”がある。また述語のうしろに“些”、“一点儿”、“几倍”/“几等”、“多”。)(例(29)を参照)をつけている。第3項は極点を表し、「最上級比較(極比)」(“最”、“极”/“极其”/“至”、“顶”、“挺”、“第一”、“尽”)(例(19)参照)と「広くさすもの(泛说)」(“绝对地”、“非常”、“格外”、“怪”、“特别”/“特”、“十分”、“满”/“漫”、“狠”/“甚”、“了不得”、“厉害”/“利害”)(例(30)参照)を含んでいる。さらに、「平等比較(平比)」、「差異比較(差比)」と「最上級比較(極比)」は形容詞の三種の比較方法であるとしている。英語においては形容詞の語尾変化で表示し、中国語はすべて副詞で表示する。」と指摘した。

(28) 那边来的人马, 犹如海潮“一般”。(あちらから来た軍隊は潮のようだ。)

我心里的干净好像清水“似的”。(私の心の美しさは清水のようだ。)

我的心和清水“一样的”干净。(私の心は清水のように綺麗だ。)

(29) 阴谋家的祸国“更”厉害。(陰謀者の災いはもっとひどい。)

这枝笔“比较地”好写。(このペンは比較的書きやすい。)

捣乱派少“些”。(騒乱派はやや少ない。)

当时米价贵了“五倍”。(当時の米の価格はいつもより五倍高くなった。)

- (30) 她在这一班里, 年纪“最”轻, 功课“最”好。(彼女はこのクラスにおいて、年が一番若くて、成績が一番いい。)

中山公园的树木, 柏树“顶”多。(中山公園の木において、柏木が一番多い。)

今年夏天“第一”炎热。(今年の夏が一番暑い。)

- (31) 这个办法“绝对地”不行。(この方法は絶対駄目だ。)

我“满”不怕你。(私は君を全然怖がらない。)

今年夏天“很”热。(今年の夏はとても暑い。)

第十一章の「前置詞細目」の「方法を表す前置詞」の第5種「比較の前置詞(介所比)」の中の前置詞は「平等比較構文(平比文)」(類似の関係を表す、“和”/“合”、“同”/“如同”/“犹如”/“像”、“与”/“跟”を用いる)と「差異比較構文(差比文)」(程度の優劣を表す、“比”/“较”/“较比”、“过”/“过于”/“于”を用いる)を作る。

省略表現を分析する第五章において、「主語を省略する平等比較構文」、「述語を省略する平等比較構文—形容詞の平等比較方法」と「否定の平等比較構文—形容詞の消極的な差異比較方法」の三節で、属性が現れない比較構文の省略できる位置(句位)と成分を詳しく論じた。

第十六章では、『馬氏文通』の考えを踏襲し、さらに複合文まで考察し、比較構文を「平等比較構文(平比文)」、「差異比較構文(差比文)」、「選択複合文(审决句)」の三種に分けた。「审决」というのは「選択」である。差異比較をする二つのものをとりだし、さらに主観的考えによって審査し、判断している。“与其…宁可/还是”・“与其…不如/何如”のような構文を用いる。たとえば、

- (32) “与其”太奢侈了, “宁可”过于俭朴。(非常に奢侈にするよりも、質素なほうがいい。)

- (33) “与其”写死文, “不如”说活话。(つまらぬ文章を書くよりは、いきいきとしたことばを言うほうがいい。)

しかし、現在の学者は黎锦熙氏の方法は非常に煩瑣であり、ある見解は現在の日常的な用法と一致なくなっていると考えている。

3.1.1.9 冯春田(2000)による研究

冯春田氏は『馬氏文通』の研究に基づいて、さらに“疑問比較構文(疑比句)”の概念を提出した。

疑問比較構文(疑比句)というのは疑問代名詞を用いる比較構文である。その疑問についての答えは平等比較、差異比較あるいはその他である。たとえば：

- (34) 你如今领兵来的, 却又是怎么样个人? 比昨日那中军也还好些么?(あなたが今軍を率いて来ましたが、どのような人ですか。昨日のあの中軍よりも少しはましですか。)(『醒世姻缘传』)

3.1.1.10 赵金铭 (2001) による研究

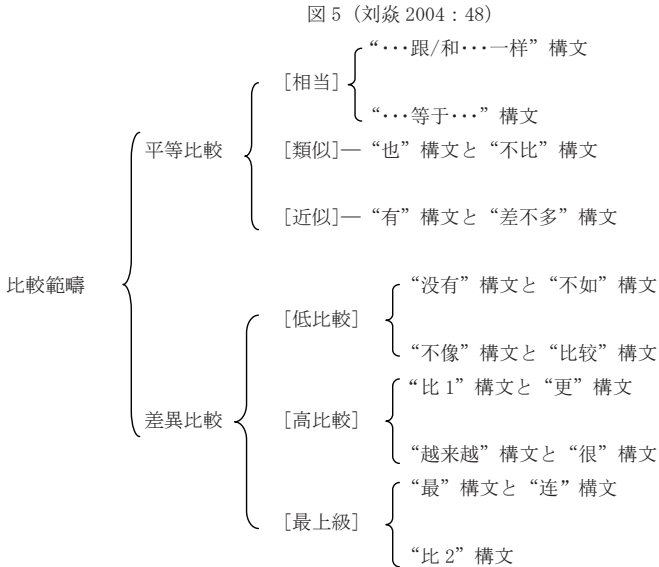
赵金铭は『論漢語的比較範疇』において、認知言語学の理論と方法を用いて、比較は一つの「範疇」であることを明示した。さらに、認知言語学の類似性原理を運用し、比較の範疇を「類似（近似）」、「相当（等同）」、「高比較（胜于）」と「低比較（不及）」の四種に分けている。その中の「相当（等同）」は静態の比較範疇であり、他の三種類は動態の比較範疇であることを指摘した。また、この四種の比較範疇についてのそれぞれの文型をとりあげた(次の図4参照)。

図4

	類似（近似）	相当（等同）	高比較（胜于）	低比較（不及）
典型 文型	“…像…” “…好像…” “…像…这么…” “…像…似的…” “…似的…”	“…跟…一样…” “…跟…那么…” “…跟…一般…” “…跟…相同”	“…比…” “…比…还/更…” “…比…一点儿/一些”	“…不如…”
常用 文型	“…跟…相近似” “…跟…差不多” “…跟…不相上下”	“…有…那么…” “…等于…” “…相当于…”	“…比…形+动+数量补语” “…比…动+得+程度补语” “…比…助动+动”	“…没有…那么…” “…不及…”
準常 用文 型	“…好似…” “…如同…”	“…不比…” “…比得上…” “…赶得上…”	“…比…还(名)”	“…比不上…” “…赶不上…”
古典 文型	“…近似于…” “…犹如…”	“…无异于…” “…不下于…” “…不亚于…”	“…高/重/大/强于…” “…高/胜/长/强于…”	“…次于…”

3.1.1.11 刘焱 (2004) による研究

刘焱氏は特定の文脈の影響を除いて、比較範疇は意味統合範疇であることを明示した。さらに、比較範疇を「平等比較（相当、類似、近似を含む）」と「差異比較（低比較、高比較、最上級を含む）」の二種に分けている。比較範疇と対応する文型は図表で表示すると、次の図5になる。



なお、これらの文型の分析については、本論で詳細に論じる。

3.1.1.12 车竞(2005)による研究

车竞氏は比較構文を「平等比較構文(平比文)」、「差異比較構文(差比文)」、「限定比較構文(限比文)」の三種に分けている。

限定比較構文(限比文)というのは比較客体を最大限度あるいは最低限度として、「比較主体が大きい \geq 」あるいは「比較客体が小さい \leq 」の比較構文である。たとえば：

(35) 我下功夫不比他小。(私の努力は彼より少なくない。)

(36) 张三有李四个子高。(張三の背は李四のような高さである。)

3.1.1.13 许国萍(2007)による研究

许国萍はタイプ範疇理論に基づいて、中国語の比較範疇を作り上げた。比較範疇の中心を「平等比較(相当、類似を含む)」と「差異比較(最上級、優性比較、劣性比較を含む)」の二種に分けている。许国萍は同時に八種の比較モデルの構造および属性を並べて論じた。

- 少なくとも二つ関連するものがある。一つは比較主体(subject)であり、もう一つは比較基準(standard)である。
- 関連するものは同一の範疇に属する。なお、一般には基本範疇の事物である。
- 関連するものは明確な呼称がある。

- d. 関連するものの指示は異なる。
- e. 関連するものは共通の属性を持つ。さらに、この属性は明示的に現れる。
- f. 関連するもの間の比較関係は明確であり、隠れた比較関係あるいは推論的な比較関係ではない。
- g. 比較の関係がはっきりしている。
- h. 比較の結果は比較基準と比較して出てくる。独立して出るのではない。

さらに、彼女はタイプ理論を用い、中国語の比較構造について研究した。许国萍は比較の形式が明確な標識語（“如/比/跟”など）を用いる以外、明確でない語彙（“越…越…/越来越…”、“连…都/也”、“比较”）を用いる文型もあることを指摘した。

(37) 她越想着过去就越恨那些兵们。(彼女は昔のことを思い出せば思い出すほどあの兵士たちが恨めしくなる。)

(38) 这个道理连小孩都懂。(この道理は子供さえ分かっている。)

(39) 你这苦闷比较单纯的贫困或是失恋更有深切的意义。(君の心の苦悶は単純な貧しさあるいは失恋と比較すると、より深い意義がある。)(茅盾『青年苦悶的分析』)

3.1.2 「比較構文の構成要素」についての研究

3.1.2.1 比較主体(X)と比較客体(Y)との関係についての研究

3.1.2.1.1 朱德熙(1982)による研究

朱德熙氏は『语法讲义』において、「N1(的)+N2+比+N3+VP0」と「N1の+N2+比+N3的+(N2)+VP0」の二種の形式のちがいを論じた。まず、前者はN1とN3をN2において比較させ、後者はN1のN2とN3のN2を比較している。しかし、もし前者のN2とN3が比較されるのであれば、文には曖昧性が生じる。朱德熙はその理由は、中国語が話題を優先する言語であることによると考えた。これを説明するため、次のような用例をとりあげている。

(40) 我的年纪比他大。(私は彼より年上だ)

(41) 我的书比他多。(私の本は彼より多い)

(42) 我的孩子比他的大。(私の子供は彼のより年上だ)

なお、この分析については本論で詳しく解析する。

3.1.2.1.2 李临定(1986)による研究

李临定氏は形容詞を述語とする比較構文を以下のように分類した。

a. 「名詞1+比+名詞2+形容詞」

(43) 他写的字比你好。(彼の書道は君より上手である。)

b. 「主述構造/動詞+比+動詞+形容詞」

(44) 砸你的茶馆比砸个砂锅还容易。(君の喫茶店を壊すことは土鍋を壊すことよりもっと簡単だ。)

c. 「主述構造+比+名詞+形容詞」

(45) 他办事比我认真。(彼の仕事ぶりは私より真面目です。)

d. 「名詞1+比+名詞2+名詞3+形容詞」

(46) 你比我书多。(君の本は私より多い。)

e. 「名詞1+比+名詞2+形容詞+数量詞」

(47) 钱比人更厉害一些。(お金は人間よりすごい。)

f. 「名詞+数量詞+比+数量詞+形容詞」

(48) 我们讨论了四次，一次比一次深入。(私たちは四回討論した、だんだん深く掘り下げている。)

これに基づいて、比較構文の完全式と省略式を述べた。完全式は“比”の前項と後項の成分がほぼ同じである。省略式は完全式のある部分を省略して形成したものである。

3.1.2.1.3 马真(1986)による研究

马真氏は文の意味関係から着手し、現代中国語の“比”構文の「N1 的 N+比+N2 的 N+VP(Nは名詞性成分であり、VPは述語成分である。)」の構造の比較項目X(N1 的 N)とY(N2 的 N)の四つの省略方法を論じた。

a. 「N2 的 N」が「N2 的」のみを入れ替える。

(49) 他的马比你的马跑得快。(彼の馬は君の馬より走るのが速い)→他的马比你的跑得快。→*他的马比你跑得快⁴。

b. 「N2 的 N」が「N2」のみを入れ替える。

(50) 他的脾气比你的脾气好。(彼の気質は君の気質よりいい)→*他的脾气比你的好。(＊文が成立しない)→他的脾气比你好。

c. 「N2 的 N」が「N2 的」と「N2」の両方を入れ替える。

(51) 他的马比你的马多。(彼の馬は君の馬より数が多い)→他的马比你的多。→他的马比你多。

d. 「N2 的 N」が「N2 的」と「N2」のどちらも入れ替えられない。

(52) 他的父亲比你的父亲健谈。(彼のお父さんは君のお父さんより話上手である)→*他的父亲比你的健谈。→*他的父亲比你健谈。

さらに、この「N1/N2 的 N」の入れ替えの五つの要素を以下のようにまとめた。まず第一に「N1、N2 と N の意味関係」であり、次に「N1、N2 および N の性質」であり、三つ目としては「VP の状況」であり、四つ目は「社会心理」であり、そして五つ目は「文の A

4 「*」を付けているのはこの言い方はできるが、意味が変わるあるいは文が成立しない。

クセント」である。

3.1.2.1.4 邵敬敏(1990)による研究

邵敬敏氏は馬真の研究に基づいて、比較の意味と文法を結びつけ、比較客体の入れ替えについてさらに深く考察した。「N1/N2的N」の中のN1/N2とNの関係は意味関係だけではなく、同時に統語関係であることを指摘した。すなわち、「説明する」と「説明される」関係である。この場合には比較主体の“N1的N”と比較客体の“N2的N”の中の“N”が省略できる。具体的な省略の状況は次の用例の通りになる。

(53) 河蟹的味道比海蟹的味道鲜。(シナモクズガニの味はカニの味より美味しい。)



→河蟹的味道比海蟹鲜。

→河蟹比海蟹鲜。

(54) 他的年纪比我的年纪大。(彼は私より年上だ。)



→他的年纪比我大。

→他比我大。

(55) 书的数量比杂志的数量多。(本の数は雑誌の数より多い。)



→书的数量比杂志多。

→书比杂志多。

3.1.2.1.5 陆俭明(1999)による研究

陆俭明氏は比較構文の「N1 的N+比+N2 的N+VP」(VPは述語性の成分であり、形容詞性の成分、動詞性の成分、主述連語などを含む。)構造のN1/N2とNとの意味関係を八種に分けている。

a. 所属関係である。この場合には“N2的N”が“N2的”と入れ替えられ、“N2”と入れ替えられない。

(56) 张华的猫比李军的猫跑得快。(張華の猫は李軍の猫より走りが速い。)

→张华的猫比李军的跑得快。

→*张华的猫比李军跑得快。

b. 親族関係である。この場合には“N2的N”を“N2的”にすることができない。

(57) 他的朋友比你的朋友不讲信用。(彼の友達は君の友達より信用できない。)

→*他的朋友比你的不讲信用。

もし“N”が“N2”の目上の人である場合には、“N2的N”を“N2的”に入れ替え

られない。

(58) 我的爸爸比你的爸爸矮。(私の父は君のお父さんより背が低い。)

→*我的爸爸比你的矮。

もし“N”が“N2”の目下の人である場合には、“N2的N”が“N2的”と入れ替えられる。

(59) 我的孩子比你的孩子笨。(私の子供は君の子供より頭がわるい。)

→我的孩子比你的笨。

c. 隸属関係である。この場合“N2的N”は“N2的”と“N2”の両方に入れ替えられる。

(60) 他的眼睛比你的眼睛大。(彼の目は君の目より大きい。)

→他的眼睛比你的大。

→他的眼睛比你大。

d. 属性関係である。この場合には“N2的N”は“N2”に入れ替えられる。しかし、“N2的”に入れ替えられない。

(61) 飞机的速度比汽车的速度快。(飛行機のスピードは車のスピードより速い。)

→飞机的速度比汽车快。

→*飞机的速度比汽车的快。(現在では成立する)

e. 原材料関係である。この場合“N2的N”は“N2的”に入れ替えられ、“N2”に入れ替えられない。

(62) 木头的桌子比铁的桌子轻。(木のテーブルは鉄のテーブルより軽い。)

→木头的桌子比铁的轻。

→*木头的桌子比铁轻。

f. 時空関係(時間あるいは場所関係)である。この場合は“N2的N”は“N2的”と“N2”の両方に入れ替えが可能である。

(63) 今天的报纸比昨天的报纸有意思。(今日の新聞は昨日の新聞より面白い。)

→今天的报纸比昨天的有意思。

→今天的报纸比昨天有意思。

g. 類族関係である。この場合には“N2的N”は“N2的”に入れ替えることができるが、“N2”に入れ替えることができない。

h. 準所属関係である。この場合は“N2的N”は“N2”に入れ替えられ、“N2的”は入れ替えることはできない。

以上はN1/N2とNの八種類の所属関係の入れ替え状況の分析であるが、その中には例外もある。なお、これについては本論において詳しく論じる。

3.1.2.2 比較値(W)についての研究

3.1.2.2.1 任海波(1987)による研究

任海波は比較構文の比較値(W)を「AP」、「VP」、「AV」、「NP」の四つの類型に分けている。比較値APは形容詞性の述語だけを含む。比較値VPは動詞性の述語だけを含む。また、比較値AVは形容詞性と動詞性の両方の述語を含む。比較値NPは名詞連語を被修飾語とする。さらに、この四種の比較値で構成される比較構文の統語構造と意味特徴を論じた。それぞれの構造は次の図6になる。

図6

	構造	用例
AP 比較値	AP→(d)AP(了)	这东西 <u>比</u> 以前贵了。(このものは以前より高くなった。)
	AP→(d)AP $\left\{ \begin{array}{l} \text{了} \\ \text{比} \\ \text{出} \end{array} \right\} \text{nm(NP)}(了)$	他 <u>比</u> 过去胖了一些。(彼は過去より少し太くなった。)
	AP→(d)AP $\left\{ \begin{array}{l} \text{多了} \\ \text{得多(了)} \end{array} \right\}$	雨 <u>比</u> 刚才小多了。(雨は先程より弱くなった。)
VP 比較値	VP→V $\left\{ \begin{array}{l} \text{了(nm)} \\ \text{nm} \end{array} \right\} \text{(NP)}$	后面的概念都 <u>比</u> 前面的概念增加了限制词。(後ろの概念はすべて前の概念より制限詞が増えている。)
	VP→(d)V $\left\{ \begin{array}{l} 0 \\ \text{(nm)} \end{array} \right\} (了)$	小静 <u>比</u> 别人喜欢读书。(静ちゃんは他の人より本を読むことが好きだ。)
	VP→(d)Aux VP(nm)(了)	他 <u>比</u> 以前会说一些了。(彼は昔よりちょっと喋れる。)
AV 比較値	AV→(d)A $\left\{ \begin{array}{l} \text{(nm)VP} \\ \text{(了nm)VP} \\ \text{V(nm)} \\ \text{V(了nm)} \end{array} \right\}$	张老师 <u>比</u> 我早去了三分钟。(張先生は私より三分ほど早く行った。)
	AV→d A 地 VP(了)	丽花爱他, 真心地爱他, 这 <u>比</u> 青年人做出风流事情更深地伤了瞎子的心。(麗花は彼のことが好きで、本心から好きだ。これは若い者が色事をするよりもっと目が不自由な人の心を傷つけた。)
	AV→(VP)V 得(d)A(了)(nm)	他 <u>比</u> 你挣钱挣得多。(彼は君よりよく金を稼ぐ。)

	AV→d V 得 A (了)	安達显然 <u>比</u> 她放得开。(安達は明らかに彼女よりあきらめがよい。)
	AV→d 让 NP $\left. \begin{array}{l} (V)A \\ ID \end{array} \right\}$ (了)	这 <u>比</u> 你招待我一只烤全羊还让人高兴呢。(これは羊の丸焼きで招待するより喜ばしい。)
NP 比較値	NP→d NP	你 <u>比</u> 国民党还国民党。(君は国民党より国民党らしい。)

(d:程度副詞、A:形容詞、V:動詞、Aux:助動詞、ID:固定連語、nm:数量連語あるいは数量を表す形容詞連語、O:目的語、→:左側の項は右側の項に書き換える、{}:必ず一つの項を選ぶことを表す、():省略できる)

3.1.2.2.2 邵敬敏(1992)による研究

邵敬敏氏は意味論により、“比”構文の助動詞の制限から着手し、“比”構文の構造(“X₁比X₂Y”)における助動詞の位置の変化および文型構造に与える影響を考察した。邵敬敏氏は比較構文の中の助動詞の位置は“比”の前(a位置)と“Y”の前(b位置)の二種に分けた。すなわち、a位置は「X₁Z比X₂Y」であり、b位置は「X₁比X₂ZY」である(Zは助動詞)。さらに、助動詞Zを“主観意識を表す助動詞(Z1)”と“客観意識を表す助動詞(Z2)”に分け、比較値Yを“動詞性(V)”と“形容詞性(A)”に分けた。Zの類別、Yの性質およびZの位置の組み合わせを基準とし、比較構文が成立できるかどうかについて論じた。

(a) 状況一: Zはa位置において、Y=Vの場合

- | | |
|--------------------------|--------------------------|
| *他能 <u>比</u> 我说/说话/说大话。 | *他 <u>要</u> 比我说/说话/说大话。 |
| *他敢 <u>比</u> 我说/说话/说大话。 | *他该 <u>比</u> 我说/说话/说大话。 |
| *他肯 <u>比</u> 我说/说话/说大话。 | *他可 <u>比</u> 我说/说话/说大话。 |
| *他会 <u>比</u> 我说/说话/说大话。 | *他应当 <u>比</u> 我说/说话/说大话。 |
| *他愿意 <u>比</u> 我说/说话/说大话。 | *他可以 <u>比</u> 我说/说话/说大话。 |

(b) 状況二: Zはa位置において、Y=Aの場合

- | | |
|-------------------------|-------------------------|
| 他能 <u>比</u> 我早/早来/来得早。 | 他该 <u>比</u> 我早/早来/来得早。 |
| 他敢 <u>比</u> 我早/早来/来得早。 | 他应该 <u>比</u> 我早/早来/来得早。 |
| 他肯 <u>比</u> 我早/早来/来得早。 | 他可 <u>比</u> 我早/早来/来得早。 |
| 他会 <u>比</u> 我早/早来/来得早。 | 他可以 <u>比</u> 我早/早来/来得早。 |
| 他愿意 <u>比</u> 我早/早来/来得早。 | 他应当 <u>比</u> 我早/早来/来得早。 |
| 他 <u>要</u> 比我早/早来/来得早。 | |

(c) 状況三: Z1はb位置において、Y=Vの場合

- | | |
|------------------------|-------------------------|
| 他 <u>比</u> 我能说/说话/说大话。 | 他 <u>比</u> 我会说/说话/说大话。 |
| 他 <u>比</u> 我敢说/说话/说大话。 | 他 <u>比</u> 我愿意说/说话/说大话。 |

他比我肯说/说话/说大话。

他比我要说/说话/说大话。

(d) 状況四: Z₂ は b 位置において、Y = V の場合

*他比我要说/说话/说大话。

*他比我可说/说话/说大话。

*他比我该说/说话/说大话。

*他比我可以说/说话/说大话。

*他比我应该说/说话/说大话。

*他比我应该说/说话/说大话。

(e) 状況五: Z は b 位置において、Y = A の場合

? 他比我能早/早来/来得早。

? 他比我该早/早来/来得早。

? 他比我敢早/早来/来得早。

? 他比我应该早/早来/来得早。

? 他比我肯早/早来/来得早。

? 他比我可早/早来/来得早。

? 他比我会早/早来/来得早。

? 他比我可以早/早来/来得早。

? 他比我愿意早/早来/来得早。

? 他比我应该早/早来/来得早。

他比我要早/早来/来得早。

以上の用例の考察を通して、邵敬敏は以下の結果を出した。

図 7

位 置	a	b	文 型
Z ₁	-	+	V
Z ₂	-	+	
類 別	A		性 質

(Z:助動詞、Z₁:主観意識を表す助動詞、Z₂:客観状態を表す助動詞、A:形容詞、V:動詞あるいは動詞連語、位置 a:Zが“比”の前に位置する(“X₁Z比X₂Y”)、位置 b:Zが“比”の後ろに位置する(“X₁比X₂Z Y”)、X₁:比較主体、X₂:比較客体、Y:比較値、+:文型が成立できる、-:文型が成立できない、?:疑問がある)

図 7 について、邵敬敏は三つの角度から説明した。

その一はZの位置を出発点とする角度である。Zがaに位置するとき、YがVになるものとYがAになるものと対立する。Zがbに位置するとき、YがVであれば、Z₁とZ₂は対立する。YがAであれば、Z₁とZ₂は対立しない。

その二はYの性質を出発点とする角度である。YがVであれば、Z₁はaに位置することとbに位置することと対立する。YがAであれば、Zはaに位置することとbに位置することと対立する。

その三はZの性質を出発点とする角度である。Z₁とZ₂はaに位置するとき、差異がない。Z₁とZ₂はbに位置するとき、YはAであれば、対立しない。YはVであれば、対立する。

さらに、“比”較文の成立のキーポイントは比較値の中に比較ができ、かつ程度の差異を表す成分があるということを指摘した。この成分には性質形容詞、心理を表す動詞以外に、意識助動詞と程度副詞の“更”がある。

3.1.2.2.3 邵敬敏・刘焱(2002)による研究

邵敬敏・刘焱氏は比較構文の意味上の表現条件と比較値を認知上から解釈した。同時に、比較値と「比較の結果」、「比較の属性」、「比較の差の値」、「比較点」、「比較項目」との関係について分析した。

(64) 书你比他多。(本について、君は彼より多い。)

“书”は「比較点」であり、ここで比較するのは“书”の数量である。

なお、この部分について詳しくは本論で論じる。

3.2 比較構文に関する通時的な研究

中国語の比較構文に関する通時的な研究は二十世紀八十年代から行われている。学者たちの関心は比較構文の出所、変遷および外部的と内部的な変化の要因についてである。研究方法は主に文法化の理論を運用し、中国語の比較標識の出現時期について論じている。

3.2.1 黄晓惠(1992)による研究

黄晓惠は現代中国語の差異比較構文の形式が漢魏六朝の広範比較構文(“泛比句”)から生じ、この文型は平等比較、差異比較と最上級比較などの意味範疇を表すことができることを指摘した。古代中国語の差異比較文の「(X)W于/如Y」文型は絶えずそれと意味的にかかわる古代中国語の連動式述語文をもとにして、自身の意味範囲の縮小と意味の中心位置の後ろへの転移と、最後に範囲比較構文の文型が差異比較の意味だけを表示することになる過程を完成させたことを述べた。同時に、“比”も完全に差異を表す文法化標識に虚詞化したと述べている。広範比較構文(“泛比句”)の構造は「(X)比YW」である。

(65) 周顛^{しゅうがい}比^ひ臣^{しん}，有^ひ國^{こく}士^{くし}門^{もん}風^{ふう}。(周顛は臣に比すれば、国士の門風有り。)

X Y W

(『世说新语』9・14)

また、黄晓惠は古代中国語と現代中国語の差異比較構文の構造の違いを比較した。

季氏	富	于	周	公		我	比	他	高
X	W	Y				X	Y	W	
┌	└	└				┌	└	└	
	┌	└				┌	└		
		┌	└			┌	└		

古代中国語と現代中国語の差異比較構文の構成成分は同じである。両者の違いは次のようである。

(一) 語順が異なる。

古代差異比較構文の語順は「(X)W于/如Y」の「順行構造」であり、現代差異比較構文

の語順は「(X)比YW」の「逆行構造」である。

(二)接続詞が異なる。

古代差異比較構文の接続詞は「于」あるいは「如」であり、現代差異比較構文の接続詞は「比」である。

(三)比較説明項Wの構成成分が異なる。

古代差異比較構文の比較説明項Wの構成成分はほぼ形容詞性の成分であり、[+A-V]⁵を表現している。現代差異比較構文の比較説明項Wの構成成分は「A」と「V」を含み、[+A+V]を表現している。

3.2.2 史佩信(1993)による研究

史佩信氏は古代中国語の比較構文は比較動詞文の構造の拡大、意味機能の転移および文型意味の拡大を進展させて形成したものであると考えている。さらに、古代中国語の比較構文が誕生した年代は先秦の時代であることを確定した。

3.2.3 李讷・石毓智(1998)による研究

李讷氏と石毓智氏は比較構文の変遷過程の考察を通して、比較構文の形成過程について解釈をした。彼らは文法発展の体系性を重視し、比較構文の発展はその体系性の発展の一部と考えている。従って、中国語の述語動詞が遊離の状態から連続に変わり、述語のうしろの前置詞構造が述語の前に移動する影響で、比較標識の“于”が消えてしまうと述べた。このため、新しい構造を探索し、比較構造を表示する必要がある。ここから、変化が起った。先秦の時代に一般動詞“比”は連動式の第一の動詞の位置を占め、時間の経過により、だんだん新しい比較の標識になった。

3.2.4 谢仁友(2004)による研究

谢仁友氏は宋元時代の差異比較構文について論じた。この時期の“比”構文、“如”構文と“似”構文について、詳しく説明し、差異比較構文の文型をまとめた。谢氏は差異比較を表す“如”構文は戦国時代にも存在していたことを明示した。たとえば、“人之穷困，甚于饥寒（『吕氏春秋』）”である。さらに差異比較を表す“似”構文は唐の時代に産まれたと考えている。その理由の一つを“如”構文の類推の影響を受けたことであると考えている。“如”構文はVPの比較によく用いられ、“似”構文はNPの比較によく用いられる。

3.2.5 蒋绍愚・曹广顺(2005)による研究

蒋绍愚氏と曹广顺氏は『馬氏文通』の研究に基づいて、平等比較構文と差異比較構文の構造の歴史的変遷について研究した。(この研究の詳しい内容については本稿の第二章と第三章の先行研究を参照されたい)

⁵ 「A」は形容詞性の成分を指し、「V」は動詞性の成分を指す。

4. 比較構文に関する考察

4.1 比較構文の論理構造

以上の先行研究から分かったのは、比較構文の構成要素は「比較主体(X)」、「比較客体(Y)」、「比較詞」、「比較点(D)」、「比較値(W)」の五つということである。従って、自然言語においては、一般の比較構文の構造は「X+比較詞+Y(+D)+W」とであると定義しうる。本稿では「述語論理」を用いて、比較構文の各項の関係を明示する。述語論理においては、文の意味(命題)は「関数(functions)」と「引数(arguments)」⁶からなる「式(form)」によって表される。理論上は、関数の種類はそれが伴う引数の数だけ存在してよいが、自然言語の文の意味表示においては、「一項関数」、「二項関数」、「三項関数」の三種類にとどめるのが一般的である。論理構造からみると、比較構文は「三項関数」⁷に属する。具体的表示は「比較詞' (α , β , $\gamma 1$ & $\gamma 2$ & $\gamma 3$)」になる。この α は「比較主体(話題)」であり、 β は「比較客体(副話題)」であり、 $\gamma 1$ は「格役割」を表し、 $\gamma 2$ は「数量化」を表し、 $\gamma 3$ は「着点」を表す。 $\gamma 1$ 、 $\gamma 2$ と $\gamma 3$ は γ からの拡張と考える。従って、比較構文の論理式は「拡張三項関数」と言ってもよい。

ここで、前述の例を形式意味論の技法である命題論理と述語論理を使用して、論理式で表記する⁸と、本章の用例(7)の構造は次のように分析すればよい。

(7) 张三比李四个子高。(張三は李四より背が高い。)

この文の論理式は次のようになる。

～ト		アリ	～ニ	～ガ	アル	～ニ	～ガ	
(7')	比'	[张三, 李四, 有'	(张三, [个子1])	&有'	(李四, [个子2])	&		
	アル	～ガ	～ト					
	α	β			$\gamma 1$			
		ヒク	～カラ	～ヲ	ナル	～ガ	～ニ	
	有'	{減'	([个子1], [个子2], [差数])	&到'	([差数], 多少)			
	アル		～ニ	～ガ				
						～トイウ状態ニ		
		$\gamma 2$				$\gamma 3$		

(本稿では関数と引数の表示には中国語の漢字をそのまま用いるが、関数には右上にプラ

⁶ 一般的にはそれぞれ「述語(predicates)」、「項(arguments)」と呼ばれるが、本稿では「関数」、「引数」とする。

⁷ 邹崇理は『自然言語的逻辑分析』の中で、「三項関数」について以下のように論じている。“Mary shakes John awake”は Dowty の体系の中では “[shake*(m,j) CAUSE BECOME awake(j)]” のように翻訳される。「m が指示する個体」が「j が指示する個体」を「ゆすぶること」が「j が指示する個体が目ざめる」という状態を発生させると理解される。これは三項関数では“使’ {shake’ (m,j), awake’ (j)} のようになる。(邹崇理 2000:377)

⁸ 『論理哲学論考』では、論理的分析方法について、「こうした誤謬を避けるため、異なるシンボルに同じ記号が使用されていたり、表現の仕方の異なる記号が同じ仕方で使用されているかのような見かけをもっていたりすることのない誤謬を排した記号言語、すなわち、論理的文法—論理的構文論—を忠実に反映した記号言語を用いなければならない。」と論じている。(野矢訳 2003 三・三二五)

イム「'」を付して引数と区別する表示法を採用する。“[]”の中身は第一項の個体の有する論理形式の集合、すなわち属性を表し、従って「属格(対象格)」と言ってよい。論理式の下に付された日本語はメタ言語による意味注釈である。以下の論理式も全て同様である。)

この(7')は例(7)の論理式である⁹。この式の中の“比’、有’、減’”は函数を表す。この文は「张三が李四より背が高い」という命題内容は論理式では「比’ [张三, 李四, 有’ (张三, [个子1]) &有’ (李四, [个子2]) &有’ {減’ ([个子1], [个子2]), [差数]} &到’ ([差数], 多少)]」のように表示できる。次に、この論理式について詳しく説明する。「有’ (张三, [个子1])」は「张三には[个子1]がある」の意を、「有’ (李四, [个子2])」は「李四には[个子2]がある」の意を、「有’ {減’ ([个子1], [个子2]), [差数]} &到’ ([差数], 多少)」は「[个子1]から[个子2]を引くと差がある」の意を表す。用例(7)の意味は前述のすべての命題内容を含んでいることになる。さらに、 $\gamma 1$ は「张三」と「李四」が「経験者格」を、「个子1」と「个子2」が「属格(対象格)」を表すので、「格役割」を表示する。 $\gamma 2$ は減法で差があること、つまり「数量化」を表している。 $\gamma 3$ は差がいくらかあること、言い換えれば「差がいくらかの量に達している」こと、つまり一種の「着点」を表している。

総体的に考えると、論理式(7')は「 α ガ β ト γ トイウ状態ニアル」の命題内容を表している。なお、式で“減’”を使うのは、邱鴻康(2002)による、“ $\dots A$ 比 B …”という形は、「AとBには差がある」という意味を表す」という記述に依拠している。

同様に、例(8)の論理式は次のように書ける。

(8) 妹妹像姐姐一样漂亮。(妹は姉のように綺麗だ。)

この文の論理式は次のようになる。

~ト	アリ	~ニ	~ガ	アル	~ニ	~ガ
(8') 像’	[妹妹, 姐姐, 有’ (妹妹, [漂亮1]) &有’ (姐姐, [漂亮2]) &					
アル	~ガ	~ト				
	α	β		$\gamma 1$		
ヒク	~カラ	~ヲ		ナル	~ガ	~ニ
有’	{減’ ([漂亮1], [漂亮2]), [差数]} &到’ ([差数], 零)]					
アル	~ニ	~ガ				
				~トイウ状態ニ		
	$\gamma 2$			$\gamma 3$		

この文の「妹は姉のように綺麗だ」という命題内容は論理式では「像’ [妹妹, 姐姐, 有’ (妹妹, [漂亮1]) &有’ (姐姐, [漂亮2]) &到’ {減’ ([漂亮1], [漂亮2]), [差数]} &到’ ([差数], 零)]」のように表示できる。この論理式について詳しく説明してみよう。

⁹ ウィトゲンシュタインの論理的構文論においては、記号の意味が役割を果たすようなことがあってはならない。論理的構文論は記号の意味を論じることなく立てられねばならず、そこではただ諸表現を記述することだけが前提にされうる(野矢訳 2003 三・三三)。

「有’（妹妹，[漂亮 1]）」は「妹妹には[漂亮 1]がある」の意を、「有’（姐姐，[漂亮 2]）」は「姐姐には[漂亮 2]がある」の意を、「到’ {減’（[漂亮 1]，[漂亮 2]），[差距]} & 到’（[差距]，零）」は「[漂亮 1]から[漂亮 2]を引いて差がゼロになる」の意を表す。この「到’」は「成る」の意を表す。用例(8)の意味は前述のすべての命題内容を含んでいる。さらに、 $\gamma 1$ は「妹妹」と「姐姐」が「経験者格」を、「漂亮 1」と「漂亮 2」が「属格(対象格)」を表すので、「格役割」を表示する。 $\gamma 2$ は減法で差があること、つまり「数量化」を表している。 $\gamma 3$ は差がないこと、言い換えれば「差がいくらかの量に達している」こと、つまり一種の「着点」を表している。

4.2 比較構文に関するタイプ理論分析

ここでは、方立(2000)の中で紹介されているタイプ理論に基づいて、比較構文を分析する。方立は『逻辑语义学』の第四章の中でタイプ論理言語 Lt の生成式について詳しく論じた。タイプ言語 Lt はラッセル (Russell) のタイプ理論に基づいており、「タイプ論理言語」とも呼ぶ。Lt にはたくさんの特徴があり、その一つは無限の論理タイプを持つことである。それ以外、Lt においては個体語と述語に定項と変項の区別があるだけでなく、ほかの品詞も定項と変項に区別される。注目すべき点はすべての変項は定項に適用することができるということである。このような論理言語は「高階の述語論理」という。個体にだけ変項と定項の区別があり、変項が定項にのみ適用することができる述語論理は「一階の述語論理」という。個体語と述語のどちらにも変項と定項の区別があり、変項が定項に適用することができるのは「二階の述語論理」という。(方立 2000:88-89)

一階の述語論理 L2 の統語部分において、おもに以下のような四種の論理タイプがある。個体定項(entity)は「e」で表示し、式(truth)は「t」で表示し、n 項述語は「predn(e1,e2,⋯en)」で表示し、一項述語、二項述語と三項述語を含む。結合詞は一項結合詞「¬」と二項結合詞「∧」、「∨」、「→」、「⇨」を含む。(方立 2000:89)

〈e, t〉のような括弧が付いているのは「派生タイプ」、あるいは「複合タイプ」という。〈e, t〉において、「e」は「インプットタイプ」、「t」は「アウトプットタイプ」という。すべての派生タイプは以下のように分析ができる。

派生タイプ = 〈インプットタイプ, アウトプットタイプ〉

派生タイプの内部構造は複雑さにかかわらず、必ず一種の二項関係を表す。当然、インプットタイプは派生タイプである可能性もある。(方立 2000:90)

次に、一項述語、二項述語と三項述語について説明する。

〈e, t〉は個体定項 (e) と結合し、式 (t) を生じることができる。ここからみると、〈e, t〉は一項述語である。

〈e, 〈e, t〉〉は個体定項 (e) と結合し、一項述語 (〈e, t〉) が生じ、〈e, t〉はまた個体定項 (e) と結合し、式 (t) が生じる。つまり、〈e, 〈e, t〉〉は二項述語である。

〈e, 〈e, 〈e, t〉〉〉は個体定項 (e) と結合し、二項述語 (〈e, 〈e, t〉〉) が生じ、〈e, 〈e,

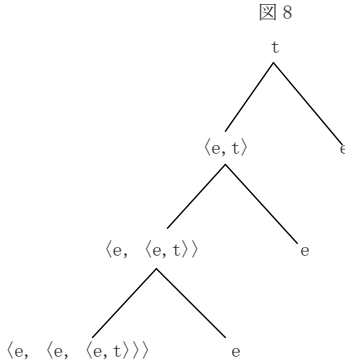
t) は個体定項 (e) と結合し、一項述語 ($\langle e, t \rangle$) が生じ、 $\langle e, t \rangle$ はさらに個体定項 (e) と結合し、式 (t) が生じる。 $\langle e, \langle e, \langle e, t \rangle \rangle$ は三項述語である。(方立 2000:90)

$\langle e, \langle e, \langle e, t \rangle \rangle$ を例とすると、これは三項述語を表示する以外に、以下の方式で式を生成する。(方立 2000:91)

- (66) a. $\langle e, \langle e, \langle e, t \rangle \rangle$ $e = \langle e, \langle e, t \rangle \rangle$
- b. $\langle e, \langle e, t \rangle \rangle$ $e = \langle e, t \rangle$
- c. $\langle e, t \rangle$ $e = t$

a、b、c のタイプの表現式の右側にスペースがあれば、そのうしろの「e」を引数として演算をする。引数「e」をスペースの前の関数に適用すると、イコールの右側の結果となる。

この過程は以下のような樹形図で表示することもでき、次の図 8 になる。(方立 2000:91)



関数は抽象的な概念である。従って、入力記憶により、式の生成の過程を項が絶えず消される過程をもつとみなすことができる。すなわち、三項述語を含む式の生成過程を表示すると、次のようになる。

- (67) a. ~~$\langle e, \langle e, \langle e, t \rangle \rangle$~~ ~~$\langle e, \langle e, t \rangle \rangle$~~
- b. ~~$\langle e, \langle e, t \rangle \rangle$~~ ~~$\langle e, t \rangle$~~
- c. ~~$\langle e, t \rangle$~~ ~~t~~

この生成の過程は樹形図で表示すると、図9のようになる。

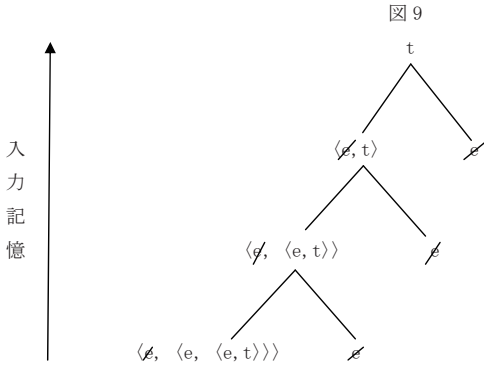


図9の入力記憶の過程は下から上へのボトムアップ型の過程と考える。(pp. 87-94 参照)
 さて、そこでタイプ理論を用いて、次の三つの比較構文の論理タイプの表現式を入力記憶に基づいて分析する。

(68) a. 我比他年纪大。(私は彼より年上だ。)

この文のタイプ分析は樹形図で表示すると、図 10 となる。

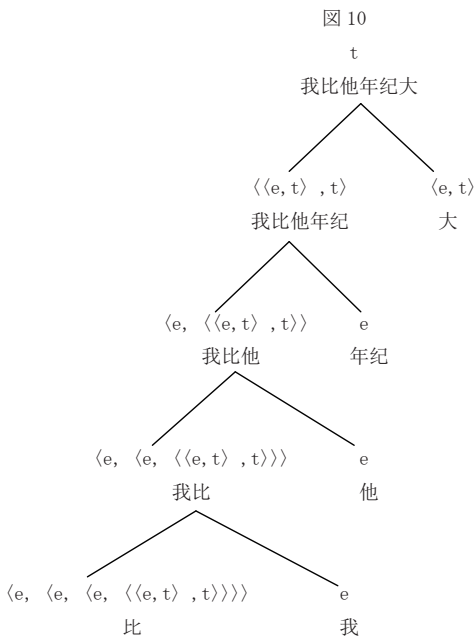


図 10 からみると、“比”の論理タイプの表現式は「 $\langle e, \langle e, \langle e, \langle \langle e, t \rangle, t \rangle \rangle \rangle \rangle$ 」の四項述語であり、“我”、“他”と“年纪”は個体定項“e”であり、“大”は一項述語“ $\langle e, t \rangle$ ”である。

この文の入力記憶はボトムアップ型であり、樹形図で表示すると図 11 になる。

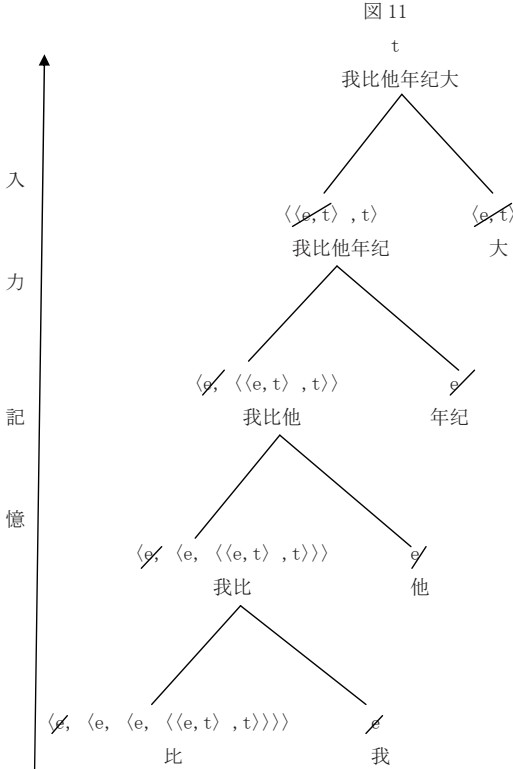


図 11 のように、(68-a)の文の入力記憶は最初“比”の“ $\langle e, \langle e, \langle e, \langle \langle e, t \rangle, t \rangle \rangle \rangle \rangle$ ”のタイプ式と個体定項の“我”(“e”)が結合し、“我比”の“ $\langle e, \langle e, \langle \langle e, t \rangle, t \rangle \rangle \rangle$ ”式になる。また、“我比”の“ $\langle e, \langle e, \langle \langle e, t \rangle, t \rangle \rangle \rangle$ ”のタイプ式と個体定項“他”(“e”)が結合し、“我比他”の“ $\langle e, \langle \langle e, t \rangle, t \rangle \rangle$ ”の式になる。その後、“我比他”の“ $\langle e, \langle \langle e, t \rangle, t \rangle \rangle$ ”のタイプ式と個体定項“年纪”(“e”)が結合し、“我比他年纪”の“ $\langle \langle e, t \rangle, t \rangle$ ”の式になる。最後に、“我比他年纪”の“ $\langle \langle e, t \rangle, t \rangle$ ”のタイプ式と一項述語の“大”(“ $\langle e, t \rangle$ ”)が結合し、“我比他年纪大”(“t”)の式が生じる。次に、(80-b)を考える。

(68)b. 我年纪比他大。(私の年は彼より上です。)

この文のタイプ分析は樹形図で表示すると、図 12 となる。

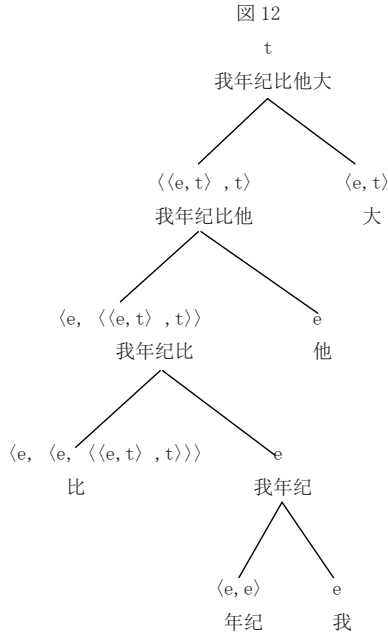


図 12 からみると、“比”のタイプ式は「 $\langle e, \langle e, \langle (e, t), t \rangle \rangle$ 」の三項述語であり、“我”と“他”は個体定項“e”であり、“年纪”は複合定項“ $\langle e, e \rangle$ ”であり、“大”は一項述語“ $\langle e, t \rangle$ ”である。

この文の入力記憶は以下の図 13 になる。

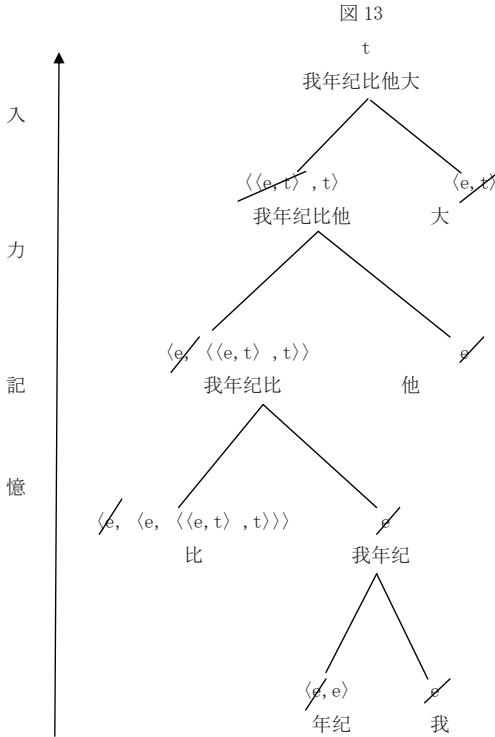


図 13 のように、(68-b)の文の入力記憶は最初複合定項“ $\langle e, e \rangle$ ”の“我”と個体定項の“年纪”（“e”）が結合し、個体定項“e”の“我年纪”になる。また、“比”の“ $\langle e, \langle e, \langle\langle e, t \rangle, t \rangle\rangle\rangle$ ”のタイプ式と個体定項“我年纪”（“e”）が結合し、“我年纪比”の“ $\langle e, \langle\langle e, t \rangle, t \rangle\rangle$ ”の式になる。その後、“我年纪比”の“ $\langle e, \langle\langle e, t \rangle, t \rangle\rangle$ ”のタイプ式と個体定項“他”（“e”）が結合し、“我年纪比他”の“ $\langle\langle e, t \rangle, t \rangle$ ”の式になる。最後に、“我年纪比他”の“ $\langle\langle e, t \rangle, t \rangle$ ”のタイプ式と一項述語の“大”（“ $\langle e, t \rangle$ ”）が結合し、“我年纪比他大”（“t”）の式が生じる。次に、(68-c)を見てみよう。

(68) c. 年紀上我比他大。(年齢において私は彼より年上だ。)
 この文のタイプ分析は樹形図で表示すると、図 14 となる。

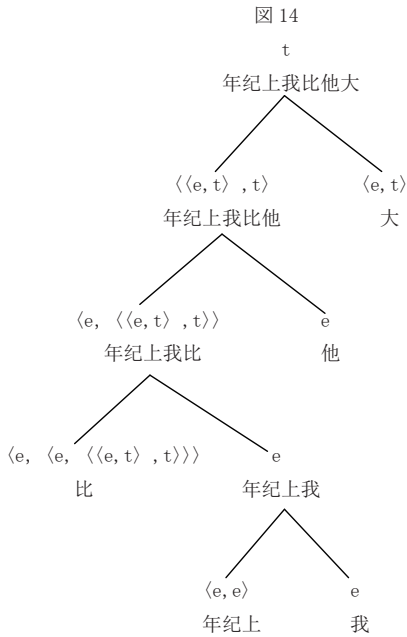


図 14 からみると、“比”のタイプ式は「 $\langle e, \langle e, \langle \langle e, t \rangle, t \rangle \rangle$ 」の三項述語であり、“我”と“他”は個体定項“e”であり、“年紀上”は複合定項“ $\langle e, e \rangle$ ”であり、“大”は一項述語“ $\langle e, t \rangle$ ”である。

この文の入力記憶は下の図 15 になる。

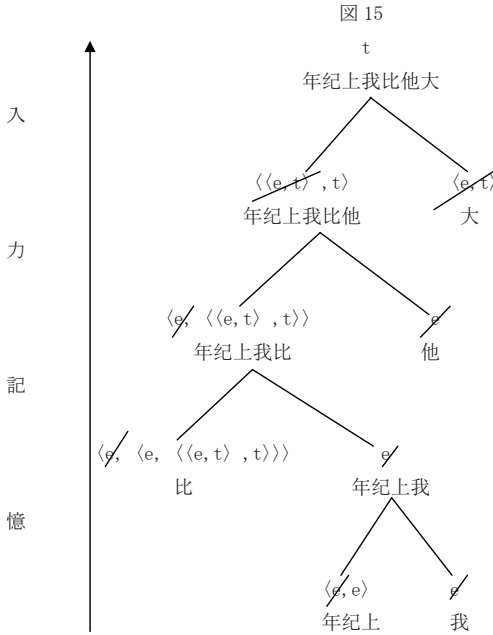


図 15 のように、(68-c)の文の入力記憶は最初複合定項 “<e, e>” の “年纪上” と個体定項の “我” (“e”) が結合し、個体定項 “e” の “年纪上我” になる。また、“比” の “<e, <e, <<e, t>, t>>>” のタイプ式と個体定項 “年纪上我” (“e”) が結合し、“年纪上我比” の “<e, <<e, t>, t>>” の式になる。その後、“年纪上我比” の “<e, <<e, t>, t>>” のタイプ式と個体定項 “他” (“e”) が結合し、“年纪上我比他” の “<<e, t>, t>” の式になる。最後に、“年纪上我比他” の “<<e, t>, t>” のタイプ式と一項述語の “大” (“<e, t>”) が結合し、“年纪上我比他大” (“t”) の式が生じる。

4.3 有限オートマトンによる比較構文の入力記憶の分析

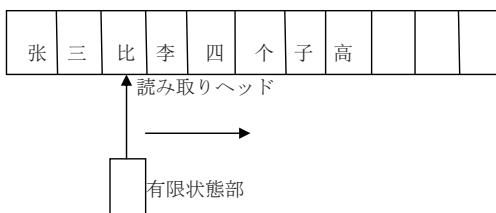
4.3.1 有限オートマトンとは何か

オートマトン(automaton, 複数形は automata)は、情報科学では抽象的な有限状態の順序機械であるが、もともとの意味は、オルゴールとともにヨーロッパで発達してきた華麗な自動人形である(小倉 1996:88)。ここでは文法から生成される文をコンピュータで認識するためには、どのようなメカニズムが必要であるかを考える。

この目的のための抽象的な機械は有限オートマトン(finite automaton、以下FAと書く)と呼ばれる。なおオートマトンは計算機科学に近い話題であり、従来の言語学にはそれほどなじみがないが、今後は基礎知識として必須の分野であると考えられる。有限オートマトンは次の図16のようにモデル化することができる。

図 16

入力テープ



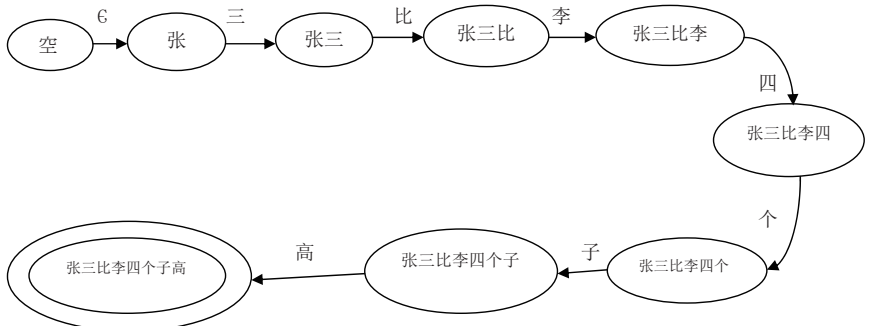
有限オートマトンは「有限状態部」、「入力用の入力テープ」と「読み取りヘッド」を持つ有限状態機械で出力はない。

基本動作はつぎのようである。まずヘッドが一文字ずつ読み取って有限状態部に送り、右隣のマスに移動する。有限状態部は入力を受け取ると、そのときの状態と入力記号からつぎの状態を決定し、その状態へ遷移する。これを繰り返し、入力文字列が終わる(入力文字列の後の空白記号を受け取る)と停止する。停止したときの状態が受理状態ならば、入力を受理する(accept)といい、そうでなければ受理しないという。(小倉 1996:89)

4.3.2 状態遷移について

ここでは、「张三比李四个子高」の文の成立の状態遷移を説明する。状態遷移図は小倉 1996 に従って作成した。

図 17



小倉 1996 では状態遷移について「順序機械と同じく、状態を節点に対応させ、状態遷移を有向辺に対応させたグラフで表す。初期状態は始点が空で初期状態を終点とする有向辺を付けて示す。この有向辺の辺ラベルには空記号“G”をつける(つけないこともある)。節点ラベルとして状態名を書く(書かない場合もある)。状態遷移を表す有向辺は入力記号をラベル“三”、“比”、“李”、…“高”とする。受理状態は節点を表す○印を◎とする。」と述べ、さらに「状態遷移図はF Aの状態、入力記号、可能な状態遷移、初期状態、受理状態がすべて図示されるから、状態遷移図を示すことによってF Aを定義してしまうことができる。(小倉 1996:90)」と説明している。

4.3.3 「順序論理回路」とは何か

小倉 1996 によると「その時の入力だけでは出力が決まらず、過去の入力にも依存するような回路を「順序論理回路(sequential circuit)」と呼ぶ。順序論理回路の大きな特徴は「内部記憶(internal memory, メモリ)」を持っており、過去の入力系列の結果を保持している点にある。回路への入力とその時の記憶に応じて出力・応答を行うのである。記憶は入力によって変化する。(小倉 1996:84)」と述べられている。

また小倉 1996 では「順序機械(sequential machine)はこのような記憶のある回路や機械を抽象化したもので、入力記号によって変化し、過去の入力の状況を記憶する内部状態を持ち、入力と内部状態に依存して、出力記号が決まるような記号処理機械である。(小倉 1996:84)」のように説明されている。

4.3.4 比較構文の順序論理回路

「张三比李四个子高」の文を順序論理回路に基づいて作成した論理式は次のようになる。

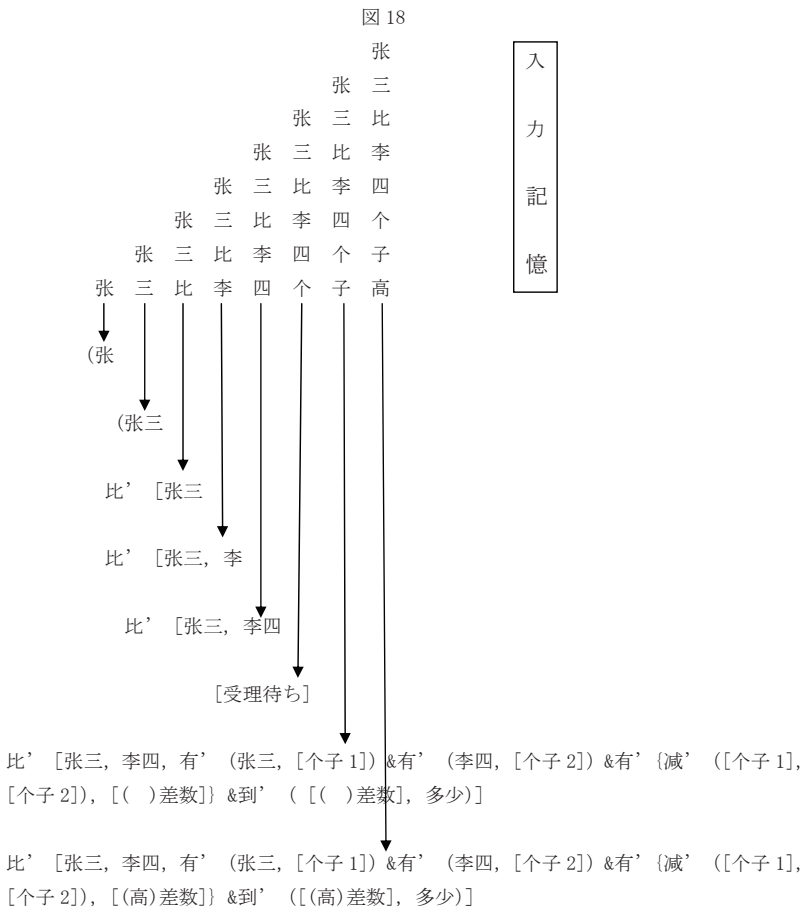
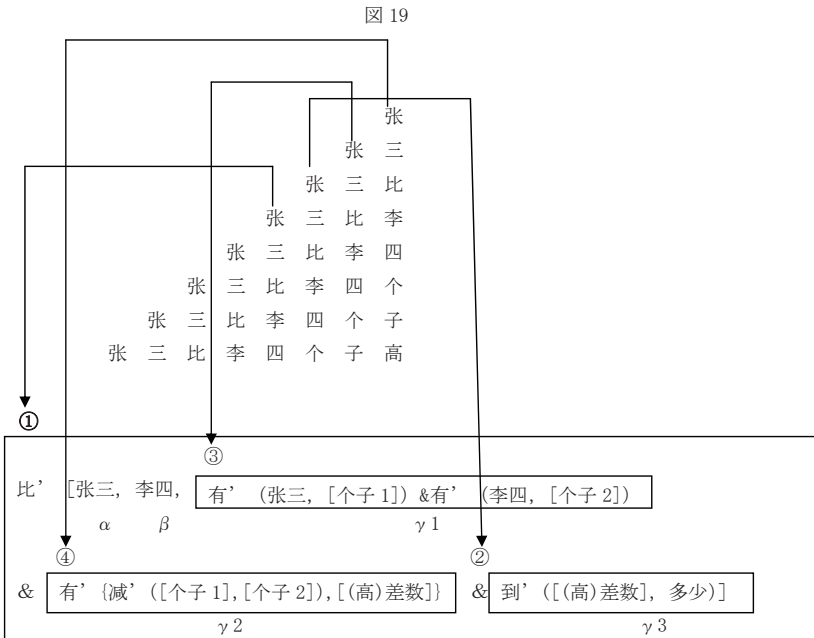


図 18 について説明しよう。図 18 の矢印の上の部分は自然言語を表し、下の部分は論理言語を表し、矢印は「対応する関係」を表す。まず“张”を入力し、論理式は“(张)”になる。第二に“张三”を入力し、論理式は“(张三)”になる。第三に“张三比”を入力し、論理式は“比' [张三]”になる。第四に“张三比李”を入力し、論理式は“比' [张三, 李]”になる。第五に“张三比李四”を入力し、論理式は“比' [张三, 李四]”になる。第六に

“张三比李四个”を入力し、ここで何も決まらないから、“受理待ち”になる。第七に“张三比李四个子”を入力し、論理式は“比’ [张三, 李四, 有’ (张三, [个子 1]) &有’ (李四, [个子 2])] &有’ {減’ ([个子 1], [个子 2]), [() 差数]} &到’ ([() 差数], 多少)]”になる(ここの括弧の中は空白である)。最後に“张三比李四个子高”を入力し、文のすべての入力完了する。その論理式は“比’ [张三, 李四, 有’ (张三, [个子 1]) &有’ (李四, [个子 2]) &有’ {減’ ([个子 1], [个子 2]), [(高) 差数]} &到’ ([(高) 差数], 多少)]”になる。

入力記憶によって文を構成するすべての成分を作りあげることができる。その生成過程は次の図 19 になる。



論理式は入力記憶によって作成される。まず①で比’ [α, β, γ1&γ2&γ3]の三項関数が、第二に②でγ3の「着点」が、第三に③でγ1の「格役割」が、第四に④でγ2の「量化」が決定される。

4.4 「比較構文」と「比喩構文」の比較

4.4.1 先行研究

“比喩”は「たとえる」ことである。すなわち、物事を説明するとき、相手のよく知っている物事を借用し、それになぞらえて表現することである。比較構文は修辞上の比喩と異なり、事物の間の程度、数量と性状などの異同あるいは優劣について客観的に論述することであり、陳述文を作る。比喩構文は一般的に二つの事物の比較を行い、説明を中心とする。それは主観性がきわめて強く、説明文に属する。しかし、この両者は文型が似ており、さらに同じ形式標識を用いるため、自然言語においては区別しにくい。

中国語における比較構文の文型は比較を表すことができ、また比喩を表すこともできる。この両者のちがいについて、研究者たちは以下のように論じた。

呂叔湘氏(1942)は比喩構文は比較構文の下位類であると考えている。

朱德熙氏(1982)は「跟…一样」の文型は比較と比喩の両方の意味を表すということを目指した。この両者のちがいはアクセントにより表現される。比較を表す文型のアクセントは“一样”につける。比喩を表す文型のアクセントは“跟”の後ろの名詞につける。直接構成要素は比較を表す文型は「(跟+N)+一样」であり、この述語部分は連述構造である。比喩を表す文型の構造は「跟+(N+一样)」であり、この述語部分の構造は述語目的語構造である。

(69) 这里的耗子和猫一样(大)。(ここの鼠は猫のように大きい。)

朱德熙の分析によると、例(69)は比喩構文であり、その構造は“(这里的耗子) [[和(猫一样)] + 大]”である。ここの“和”は“像”に書き換えでき、“一样”は“似的”に書き換えることができる。ここで、この文の論理式を書こう。

~ト	アリ	~ニ	~ガ	アル	~ニ	~ガ
(69') 和' [这里的耗子 ¹⁰ , 猫, 有' (这里的耗子, [大1]) & 有' (猫, [大2]) &						
アル	~ガ	~ト				
α	β	γ1				
	ヒク	~カラ	~ヲ	ナル	~ガ	~ニ
	有'	{減' ([大1], [大2]), [差数]} & 到' ([差数], 同级)]				
アル	~ニ	~ガ				
			~トイウ状態ニ			
	γ2	γ3				

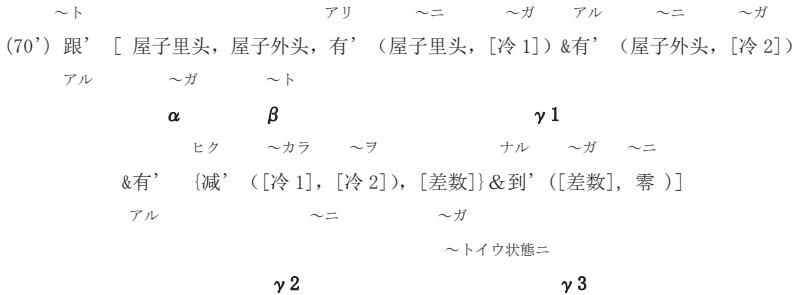
(69') の「ここの鼠は猫のように大きい」という命題内容の論理式では「和' [这里的耗子, 猫, 有' (这里的耗子, [大1]) & 有' (猫, [大2]) & 有' {減' ([大1], [大2]), [差数]} & 到' ([差数], 同级)]」のように表示できる。次に、この論理式について詳しく説明する。

¹⁰ 実は、“这里的耗子”の論理式は“有' (这里, 耗子)”である。しかし、ここの論述の中心は比較構文であるから、簡略的にそのまま“这里的耗子”と記する。ほかの論理式も同様である。

「有’（这里的耗子，[大 1]）」は「“这里的耗子”には[大 1]がある」の意を、「有’（猫，[大 2]）」は「“猫”には[大 2]がある」の意を、「有’ {減’（[大 1]，[大 2]），[差数]}&到’（[差数]，同級）」は「[大 1]から[大 2]を引いて差が“同級”になる」の意を表す。ここの“到”は「成る」の意を表す。用例(69)の意味は前述のすべての命題内容を含んでいる。さらに、 $\gamma 1$ は「这里的耗子」と「猫」が「経験者格」を、「大 1」と「大 2」が「対象格」を表すので、「格役割」を表示する。 $\gamma 2$ は減法で差があること、つまり「数量化」を表している。 $\gamma 3$ は実物の差ではなく、類似点の差がないこと、すなわち“同級”になる。言い換えれば「類似点の差がいくらかの量に達している」こと、つまり一種の「着点」を表している。

(70) 屋子里头跟屋子外头一样（冷）。（部屋の中は部屋の外と同じ寒さだ。）

朱德熙の分析では、例(70)は比較構文であり、その構造は“（屋子里头）[跟屋子外头+（一样）冷]”である。ここの“跟”は“…と比較する”の意を表し、“…に似ている”の意を表す“像”に書き換えることができず、また“一样”も“似的”に書き換えられない。ここで、この文の論理式を書こう。



(70’)は「部屋の中は部屋の外と同じ寒さだ」という命題内容は論理式では「跟’ [屋子里头，屋子外头，有’（屋子里头，[冷 1]）&有’（屋子外头，[冷 2]）&有’ {減’（[冷 1]，[冷 2]），[差数]}&到’（[差数]，零）]」のように表示できる。次に、この論理式について詳しく説明する。「有’（屋子里头，[冷 1]）」は「“屋子里头”には[冷 1]がある」の意を、「有’（屋子外头，[冷 2]）」は「“屋子外头”には[冷 2]がある」の意を、「有’ {減’（[冷 1]，[冷 2]），[差数]}&到’（[差数]，零）」は「[冷 1]から[冷 2]を引いて差がゼロになる」の意を表す。ここの“到”は「成る」の意を表す。用例(70)の意味は前述のすべての命題内容を含んでいる。さらに、 $\gamma 1$ は「屋子里头」と「屋子外头」が「経験者格」を、「冷 1」と「冷 2」が「対象格」を表すので、「格役割」を表示する。 $\gamma 2$ は減法で差があること、つまり「数量化」を表している。 $\gamma 3$ は差がないこと、言い換えれば「実物の差がいくらかの量に達している」こと、つまり一種の「着点」を表している。

殷志平氏(1995)は「X比Y还W」の文型は比較構文と比喻構文の両方がある。その両者の特徴を有していると指摘した。さらに、その原因を以下の二つの面から解釈できるとした。

第一は、比較構文においては、この構造のYはWが表示する性状と程度をもつ。なお、YはWが表示する[性状]・[程度]のある位置を占める。比喩構文においては、特定の言語環境の中で、Yは最上級の[性状]・[程度]をもち、Wが表示する[性状]・[程度]の両極端に位置する。よってつねに、YはXを超えるということである。

第二は、“X”と“Y”の関係からみると、比較構文の“X”と“Y”の比較は現物であり、比喩構文の“X”と“Y”の比較は現物ではなく、たとえた事物との比較である。まず、以下の比較構文の用例を見られたい。

(71) 山东队比河南队还快。(山東のチームは河南のチームより速い。)

この文の論理式は次のようになる。

~ト	アル	~ニ	~ガ	アル	~ニ	~ガ
(71') 比' [山东队, 河南队, 有' (山东队, [跑得] 快慢 ¹¹)] &有' (河南队, [跑得] 快慢 ²)] &有' {減' ([快慢 ¹], [快慢 ²]), [差数]} &到' ([差数], 多少)						
アル	~ガ	~ト				
α	β	γ 1				
			ヒク	~カラ	~ヲ	ナル
			アル	~ニ	~ガ	~ニ
			~トイウ状態ニ			
			γ 2	γ 3		

(72) 小张的孩子比小李的孩子还会哭。(張さんの子供は李さんの子供よりよく泣く。)

この文の論理式は次のようになる。

~ト	アル	~ニ	~ガ	アル	~ニ	
(72') 比' [小张的孩子, 小李的孩子, 有' (小张的孩子, [会哭 ¹])] &有' (小李的孩子, [会哭 ²]) &有' {減' ([会哭 ¹], [会哭 ²]), [差数]} &到' ([差数], 多少)						
アル	~ガ	~ト				
α	β	γ 1				
~ガ	ヒク	~カラ	~ヲ	ナル	~ガ	~ニ
			アル	~ニ	~ガ	~ニ
			~トイウ状態ニ			
			γ 2	γ 3		

例(71)と(72)は比較構文である。例(71)の前提は“山东队跑得快(山東のチームは走り速い)”であるが、最も“速い”ではない。なお、“山东队跑得快”と“河南队跑得快”の両者の比較は客観的に比較性があるものである。例(72)の前提は“小李的孩子会哭(李

¹¹ 実は、“跑得快”の論理式は“得' (跑, 快)”である。しかし、この論述の中心は比較構文であるから、分かりやすくするためそのまま“跑得快”と記す。他の論理式も同様である。

んの子供は泣ける)”であるが、最も“泣ける”ではない。なお、“小张的孩子会哭”と“小李的孩子会哭”の両者の比較は客観的に比較性があるものである。

次に、比喩構文の用例を見られたい。

(73) 我们的大“蜻蜓”仿佛比飞机还飞得高。(我々の“トンボ”はまるで飛行機より高く飛んだみたい。)

この文の論理式は次のようになる。

~ト	アル	~ニ	~ガ	アル	~ニ
(73') 比' [我们的大“蜻蜓”，飞机，有' (我们的大“蜻蜓”，[飞得高 1]) &有' (飞					
アル	~ガ	~ト			
α		β	γ 1		
~ガ	ヒク	~カラ	~ヲ	ナル	~ガ ~ニ
机，[飞得高 2]) &有' {減' ([飞得高 1]，[飞得高 2])，[差数]} &到' ([差数]，超级)					
アル			~ニ	~ガ	
~トイウ状態ニ					

γ 2

γ 3

(74) 他比眼镜蛇还毒。(彼はコブラよりもっと有毒だ。)

この文の論理式は次のようになる。

~ト	アル	~ニ	~ガ	アル	~ニ	~ガ
(74') 比' [他，眼镜蛇，有' (他，[毒 1]) &有' (眼镜蛇，[毒 2]) &						
アル	~ガ	~ト				
α		β	γ 1			
ヒク	~カラ	~ヲ	ナル	~ガ	~ニ	
有' {減' ([毒 1]，[毒 2])，[差数]} &到' ([差数]，超级)						
アル			~ニ	~ガ		
~トイウ状態ニ						

γ 2

γ 3

例(73)と(74)は比喩構文である。(73)の前提は「飞机飞得最高(飛行機が一番高く飛んだ)」である。一般的な状況において、飛行機と鳳と比較すれば、必ず飛行機の方が高く飛んだはずである。話者は「我们的大“蜻蜓”仿佛比飞机还飞得高。(我々の“トンボ”はまるで飛行機より高く飛んだみたいだ。)」と言う文は事実とはかけ離れ、非客観的に鳳と飛行機を比較し、誇張法を用いて鳳が飛んだ高さを説明する。(74)の前提は「眼镜蛇最毒(コブラが一番有毒だ)」である。この文について、YはWで性質を持つが、XはWの性質を持たない。さらに、XとYも比較できるものではない。話者は「X比Y还W」の文型を用い、Yの性質を利用してXの性質を説明し、かつXはYを超えているということが分かる。この用法は話者の感情を表すためである。

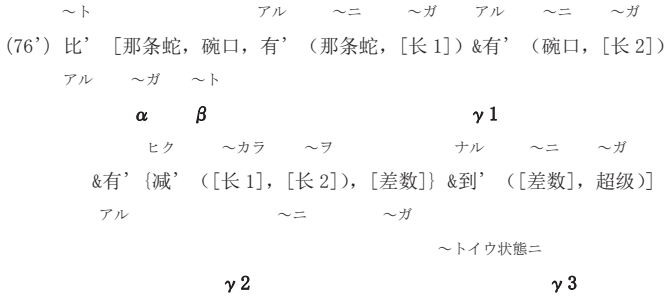
陆俭明氏(1980)は比較の結果を表す“还”と“更”が比較と比喻を表示する機能をもつことについて論じた。“更”は比較を表す以外、「漸進」と「三者の比較」を表すこともできるとし、一方、“还”はこのような機能を持たないが、比喻を表すことができると述べた。(75) 长江比黄河长, (长江)比淮河就更长了。(长江は黄河より長く、淮河よりもっと長い。)

“更”を用いる例(75)は比較構文である。ここの“更”は“还”に書き換えることができず。この文の比較対象は“长江”、“黄河”と“淮河”の三つある。この三者は“长江>黄河>淮河”の「漸進」の関係である。この文の論理式は次のようになる。



(76) 那条蛇比碗口还粗。(あの蛇は茶碗の口より太い。)

“还”を用いる例(76)は比喻構文である。ここの“还”は“更”に書き換えることができず。この文の論理式は次のようになる。



刘大为(2004)は「比較は論理的な操作である。比喻は言語行為を表す表現であり、厳密にいうと文全体が一種の言語行為を表す。この両者は同等に考えられない。」と考えている。また、「比喻」に対して、「比較の關係」を含んでいるとした。もし「比較の關係」が存在していなければ、「比喻」の本体と客体の間の類似点が確定できないからである。「比較」と「比喻」はどちらも類似点を持つ対象に対して行われている。従って、「比較」と「比喻」には一貫性があり、時に区別できない場合もある。特に、「平等比較」の場合において「比較」と「比喻」はしばしば同じ表現になるから、区別しにくい。

王丽(2005)は「まず「比較」と「比喻」の定義から、両者のちがいをよく理解する方がいい」と述べている。つまり、「比較」は思惟の方式であり、「比喻」は修辞の方式であると説明している。

张厚军(2010)は結果項の意味性から、比較構文と比喻構文を区別する基準の二点をまとめた。

一つの基準は「結果項の具体性」である。結果項が具体性を持たないか、あるいは具体的ではない文は比較構文である。結果項がはっきりしている、あるいは曖昧性を与える文は比喻構文であると見なした。そして、比喻構文と比較構文は具体的な用例を取り上げ説明した。

まず、比喻構文の用例は以下のようになる。

(77) 手如柔荑, 膚如凝脂, 領如蝥蛴, 齒如瓠犀。(手は柔荑¹²の如く、膚は凝脂¹³の如く、頰は蝥蛴¹⁴の如く、齒は瓠犀¹⁵の如く。)¹⁶⁾ (『诗经·卫风·硕人』)

¹² 荑は、茅(チガヤ)の葉より先に穂花を生じたもの。つばな。柔らかくて白いものの比喩となる。

¹³ 獸の固まった脂肪。白く、柔らかく、しかもつやがある。

¹⁴ 天牛(カミキリムシ)の幼虫。テッポウムシ。形態は白くてほっそりしている。

¹⁵ 瓠は *Lagenaria siceraria* var. *clavata*。(ユウガオ)。ウリ科の一年草。一名、扁蒲・瓠瓜。瓠犀はユウガオの果実。細長い楕円形で、長さは六〇〜九〇センチに達する。種子が潔白で整齊なので歯並びの美しさ

この文の論理式は次のようになる。

	アリ	～ニ	～ガ	アル	～ニ	～ガ
(77') 如'	[手, 柔荑, 有' (手, [白嫩 1]) & 有' (柔荑, [白嫩 2]) &					
アル	～ガ	～ト				
	α	β				γ 1
	ヒク	～カラ	～ヲ	ナル	～ガ	～ニ
	有' {減' ([白嫩 1], [白嫩 2]), [差数]} & 到' ([差数], 同級)]					
アル			～ニ	～ガ		～トイウ状態ニ
	γ 2			γ 3		
～ト	アリ	～ニ	～ガ	アル	～ニ	～ガ
如'	[膚, 凝脂, 有' (膚, [細膩 1]) & 有' (凝脂, [細膩 2]) &					
アル	～ガ	～ト				
	α	β				γ 1
	ヒク	～カラ	～ヲ	ナル	～ガ	～ニ
	有' {減' ([細膩 1], [細膩 2]), [差数]} & 到' ([差数], 同級)]					
アル			～ニ	～ガ		～トイウ状態ニ
	γ 2			γ 3		
～ト	アリ	～ニ	～ガ	アル	～ニ	～ガ
如'	[頰, 蟾蜍, 有' (頰, [粉白 1]) & 有' (蟾蜍, [粉白 2]) &					
アル	～ガ	～ト				
	α	β				γ 1
	ヒク	～カラ	～ヲ	ナル	～ガ	～ニ
	有' {減' ([粉白 1], [粉白 2]), [差数]} & 到' ([差数], 同級)]					
アル			～ニ	～ガ		～トイウ状態ニ
	γ 2			γ 3		
～ト	アリ	～ニ	～ガ	アル	～ニ	～ガ
如'	[齒, 瓠犀, 有' (齒, [洁白整齐 1]) & 有' (瓠犀, [洁白整齐 2]) &					
アル	～ガ	～ト				
	α	β				γ 1

に例える。(『辞海』)

¹⁶ 『中国の古典 18・詩經(上)』加奈喜光訳(昭和五十七年)の日本語訳による。

～ト アリ ～ニ ～ガ アル ～ニ ～ガ
 (79') 如' [布价, 往年的价钱, 有' (布价, [贵 1]) &有' (往年的价钱, [贵 2]) &
 アル ～ガ ～ト
α β γ 1
 ヒク ～カラ ～ヲ ナル ～ガ ～ニ
 有' {減' ([贵 1], [贵 2]), [差数]} &到' ([差数], 零)
 アル ～ニ ～ガ
 ～トイウ状態ニ
γ 2 γ 3

(80) 得志犬猫強似虎, 失時鸞鳳不如雞。(志を持つ犬と猫は虎のようになり、権勢や勢力を失う鳳凰は鶏に及ばない。) (『醒世姻缘传』)

この文の論理式は次のようになる。

～ト アリ ～ニ ～ガ アル ～ニ ～ガ
 (80') 似' [得志犬猫, 虎, 有' (得志犬猫, [强 1]) &有' (虎, [强 2]) &
 アル ～ガ ～ト
α β γ 1
 ヒク ～カラ ～ヲ ナル ～ガ ～ニ
 有' {減' ([强 1], [强 2]), [差数]} &到' ([差数], 零)
 アル ～ニ ～ガ
 ～トイウ状態ニ
γ 2 γ 3
 ～ト アリ ～ニ ～ガ アル ～ニ ～ガ
 如' [失時鸞鳳, 雞, 有' (失時鸞鳳, [身价 1]) &有' (雞, [身价 2]) &
 アル ～ガ ～ト
α β γ 1
 ヒク ～カラ ～ヲ ナル ～ガ ～ニ
 有' {減' ([身价 1], [身价 2]), [差数]} &→到' ¹⁷([差数], 零)
 アル ～ニ ～ガ
 ～トイウ状態ニ
γ 2 γ 3

例(79)、(80)は比較構文に属する。

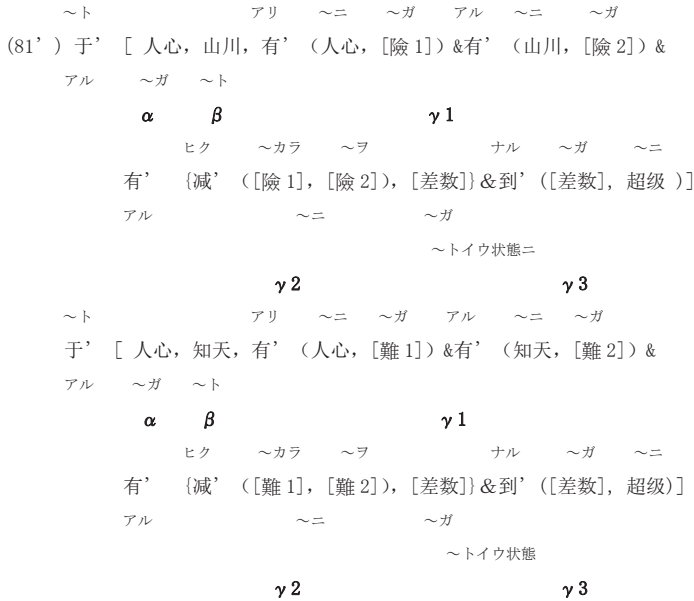
もう一つの基準は「結果項の客観的比較性」である。文中で二つの事物に言及し、その二者が「客観的な比較性」を持つものは比較構文であり、「客観的な比較性」を持たないもの

¹⁷ “→到' ”は「“到' ”の否定形」の意を表す。

は比喩構文である。さらに、比喩構文の用例を取り上げ説明した。

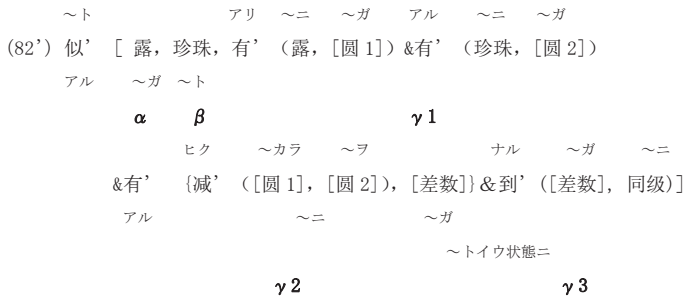
(81) 凡人心險于山川，難于知天。(凡そ人心は山川よりも険しく、天を知るよりも難し。18)
 (『庄子・列御寇』)

この文の論理式は次のようになる。



(82) 露似珍珠月似弓。(露は真珠に似ているし、月は弓に似ている。)(白居易『暮江吟』)

この文の論理式は次のようになる。



18 『中国の古典 5・莊子(上)』池田知久訳(昭和五十八年)の日本語訳による。

～ト	アリ	～ニ	～ガ	アル	～ニ	～ガ
(84') 如' [開孔, 井, 有' (開孔, [大1]) & 有' (井, [大2]) &						
アル	～ガ	～ト				
α	β			γ1		
	ヒク	～カラ	～ヲ	ナル	～ガ	～ニ
	有' (減' ([大1], [大2]), [差数]) & 到' ([差数], 零)					
アル			～ニ			～ガ
～トイウ状態ニ						

γ2**γ3**

例(83)、(84)は比較構文である。その中の“相人(之貴)”と“季相(之貴)”、“開孔”と“井”は客観的な比較性を持つ。

実際、「比較」と「比喩」についての論述は古代漢語においてすでに存在する。秦の時代の思想家墨子はその著作『墨子』の中で「比較」と「比喩」について論じた。『墨子・経下』の中で「比較」について「損而不害，説在余，異類不口(比)，説在量。(能はずして害あらず、説は宜に在り。異類は比せず、説は量にあり。19)」と述べた。つまり、「種類が異なる事物は比較することができない」の意を指摘した。すなわち、比較は同じ種類の事物の間で行われる。

また、『墨子・小取』の中で「比喩」について、「辟也者，舉業(他)物而以明之也。(辟とは、也物を挙げて以て之を明らかにするなり。20)」と述べた。この意味は「比較は異なる種類の事物の間で行うことに重きを置く」ことである。唐代の皇甫湜はまた「凡喩必以非類(凡そ比喩は必ず異なる種類を用いる)」といった見解を有している。さらに、钱钟书は『管锥編』の中に「譬喩以不同類為類(比喩は違う種類を比較する)」と論述した。これからみると、「比喩」の最大の特徴は比喩の主体と客体は類別が異なるものであることが分かる。

八十年代から、比較構文と比喩構文の関係についての研究が多く展開されるようになった。この二者の区別について、たくさんの学者が「比較」と「比喩」は異なる言語運用であると認めた。この両者の関連性について、ある学者は「比較」と「比喩」は共通する部分を持つ、あるいは互いに重なる部分が存在すると考えた。従って、この両者は区別しにくいと判断したのである。

19 『新釈漢文大系・第51巻・墨子(下)』(山田琢 明治書院 1987: 492-493)の日本語訳による。

20 『新釈漢文大系・第51巻・墨子(下)』(山田琢 明治書院 1987: 574)の日本語訳による。

4.4.2 比較構文と比喩構文の共通点と相違点

ここで、筆者は「比較構文」と「比喩構文」の論理構造から両者の関連性を述べることにする。

「比較構文」と「比喩構文」の用例の論理式の分析からみると、両者は同じ三項関数“P’ (α, β, γ)”である。どちらも“αガβトγツイウ状態ニアル”の意を表す。これは「比較構文」と「比喩構文」の共通点と考えられる。

両者の相違点は「着点」を表すγ3項の違いである。比較構文は同じ種類の二者の間にその共有する特徴を比較するから、主体と客体は実物の差(“零”あるいは“多少”)を持っている。比喩構文は違う種類の二者の間でその類似点を比較するから、主体と客体は非実物の差(“同級”あるいは“超級”)を持っている。

次に、具体的な用例から比較構文と比喩構文の相違点を説明しよう。

(85) 这种苹果跟那种(苹果)一样甜。(このリンゴはあのリンゴと同じ甘さを持っている。)
(朱德熙 1982)

～ト		アリ		～ニ		～ガ		アル		～ニ
(85’) 跟’	[这种苹果,	那种(苹果),	有’	(这种苹果,	[甜1])	&有’	(那种(苹果),			
アル	～ガ	～ト								
	α	β		γ1						
	～ガ	ヒク	～カラ	～ヲ		ナル	～ガ	～ニ		
	[甜2])	&有’ {減’	([甜1],	[甜2]),	[差数])	&到’	([差数],	零)]		
	アル		～ニ			～ガ				
						～ツイウ状態ニ				
		γ2		γ3						

例(85)は比較構文であり、その論理式は(85’)である。(85’)は「このリンゴはあのリンゴと同じ甘さを持っている」という命題内容は論理式では「跟’ [这种苹果, 那种(苹果), 有’ (这种苹果, [甜1])&有’ (那种(苹果), [甜2])&有’ {減’ ([甜1], [甜2]), [差数]}&到’ ([差数], 零)]」のように表示できる。次に、この論理式について詳しく説明する。「有’ (这种苹果, [甜1])」は「“这种苹果”には[甜1]がある」の意を、「有’ (那种(苹果), [甜2])」は「“那种(苹果)”には[甜2]がある」の意を、「有’ {減’ ([甜1], [甜2]), [差数]}&到’ ([差数], 零)]」は「[甜1]から[甜2]を引いて差がゼロになる」の意を表す。ここの“到”は「成る」の意を表す。用例(85)の意味は前述のすべての命題内容を含んでいる。さらに、γ1は「这种苹果」と「那种(苹果)」が「経験者格」を、「甜1」と「甜2」が「属格(対象格)」を表すので、「格役割」を表示する。γ2は減法で差があること、つまり「数量化」を表している。γ3は差がないこと、言い換えれば「差がいくらかの量に達している」こと、つまり一種の「着点」を表している。

次に、論理式の作成の過程を有限オートマトンと順序論理回路のモデルを使用して説明しよう。(85)の文の有限オートマトン、順序論理回路、入力記憶に基づいて作成した論理式は次のようになる。

図 23

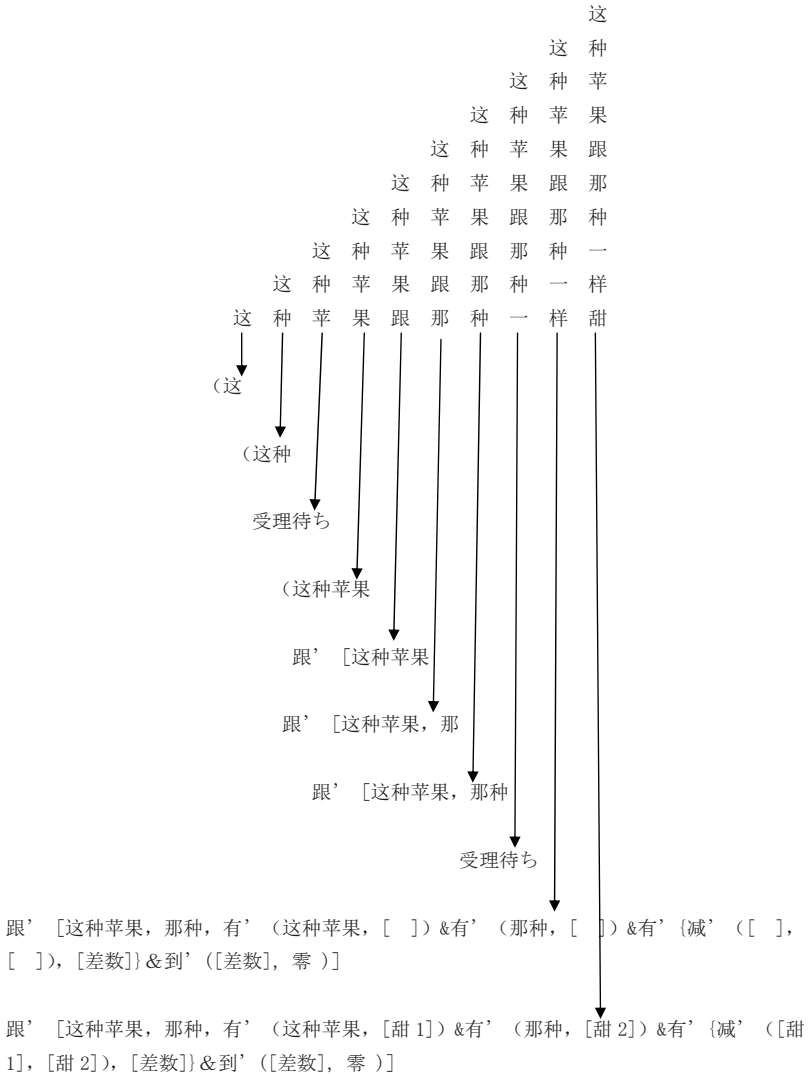
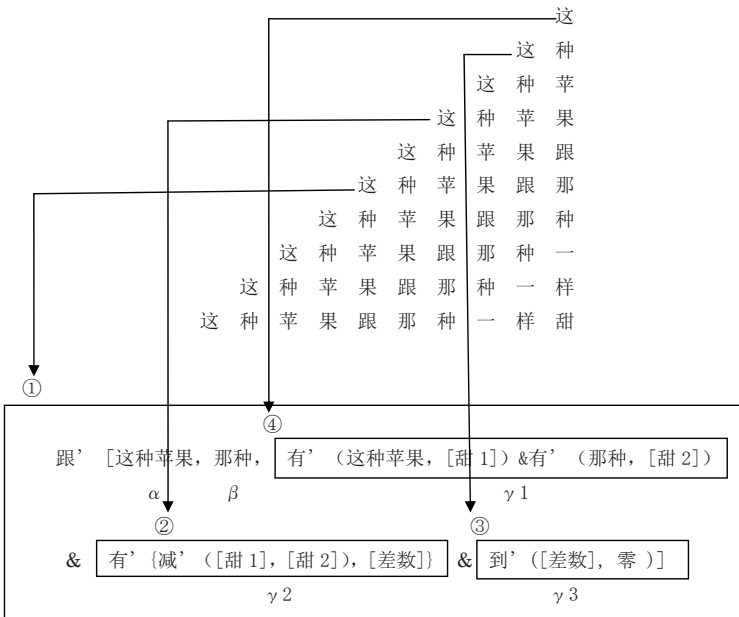


図 23 について説明しよう。まず“这”を入力し、論理式は“(这)”になる。第二に“这种”を入力し、論理式は“(这种)”になる。第三に“这种苹果”を入力し、ここで[受理待ち]になる。第四に“这种苹果”を入力し、論理式は“(这种苹果)”になる。第五に“这种苹果跟”を入力し、論理式は“跟’ [这种苹果)”になる。第六に“这种苹果跟那”を入力し、論理式は“跟’ [这种苹果, 那)”になる。第七に“这种苹果跟那种”を入力し、論理式は“跟’ [这种苹果, 那种)”になる。第八に“这种苹果跟那种一”を入力し、ここで[受理待ち]になる。第九に“这种苹果跟那种(苹果)一样”を入力し、論理式は“跟’ [这种苹果, 那种, 有’ (这种苹果, []) & 有’ (那种, []) & 有’ {減’ ([], []), [差数]} & 到’ ([差数], 零))”になる。最後に“这种苹果跟那种一样甜”を入力し、文のすべての入力完了する。その論理式は“跟’ [这种苹果, 那种, 有’ (这种苹果, [甜 1]) & 有’ (那种, [甜 2]) & 有’ {減’ ([甜 1], [甜 2]), [差数]} & 到’ ([差数], 零))”になる。

入力記憶によって文を構成するすべての成分を作りあげることができる。その生成過程は次の図 24 になる。

図 24



論理式は入力記憶によって作成される。まず①で跟’ [α, β, γ1&γ2&γ3]の三項関数が、第二に②でγ2の「量化」が、第三に③でγ3の「着点」が、第四に④でγ1の「格役割」が決定される。

(86) 脸跟纸一样白。(顔色は紙のように白い。)(朱徳熙 1982)

～ト アリ ～ニ ～ガ アル ～ニ ～ガ

(86') 跟' [脸, 纸, 有' (脸, [白1]) &有' (纸, [白2])

アル ～ガ ～ト

α β

$\gamma 1$

ヒク ～カラ ～ヲ ナル ～ガ ～ニ

&有' {減' ([白1], [白2]), [差数]} &到' ([差数], 同級)]

アル

～ニ

～ガ

～トイウ状態ニ

$\gamma 2$

$\gamma 3$

例(86)は比喻構文であり、その論理式は(86')である。(86')は「顔色は紙のように白い」という命題内容は論理式では「跟' [脸, 纸, 有' (脸, [白1]) &有' (纸, [白2]) &有' {減' ([白1], [白2]), [差数]} &到' ([差数], 同級)]」のように表示できる。次に、この論理式について詳しく説明する。「有' (脸, [白1])」は「“脸”には[白1]がある」の意を、「有' (纸, [白2])」は「“纸”には[白2]がある」の意を、「有' {減' ([白1], [白2]), [差数]} &到' ([差数], 同級)」は「[白1]から[白2]を引いて差が“同級”になる」の意を表す。ここの“到”は「成る」の意を表す。用例(86)の意味は前述のすべての命題内容を含んでいる。さらに、 $\gamma 1$ は「脸」と「纸」が「経験者格」を、「白1」と「白2」が「対象格」を表すので、「格役割」を表示する。 $\gamma 2$ は減法で差があること、つまり「数量化」を表している。 $\gamma 3$ は実物の差ではなく、類似点の差がないこと、すなわち“同級”になる。言い換えれば「類似点の差がいくらかの量に達している」こと、つまり一種の「着点」を表している。

この文についてタイプ理論を用いたモデルによって説明してみよう。例(86)のタイプ分析は樹形図で表示すると、図25となる。

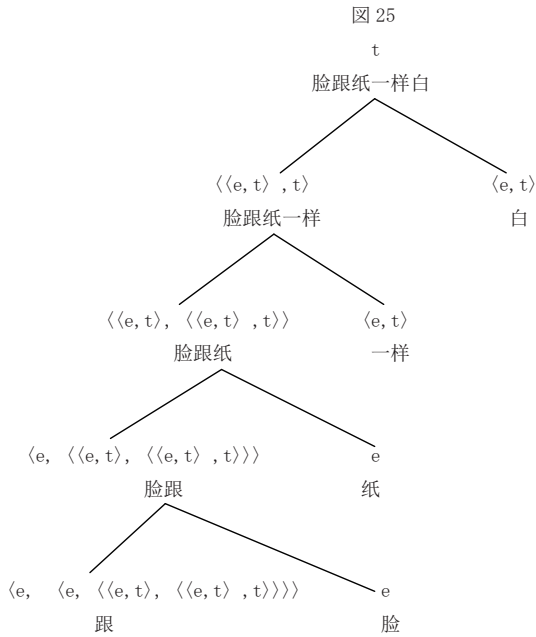
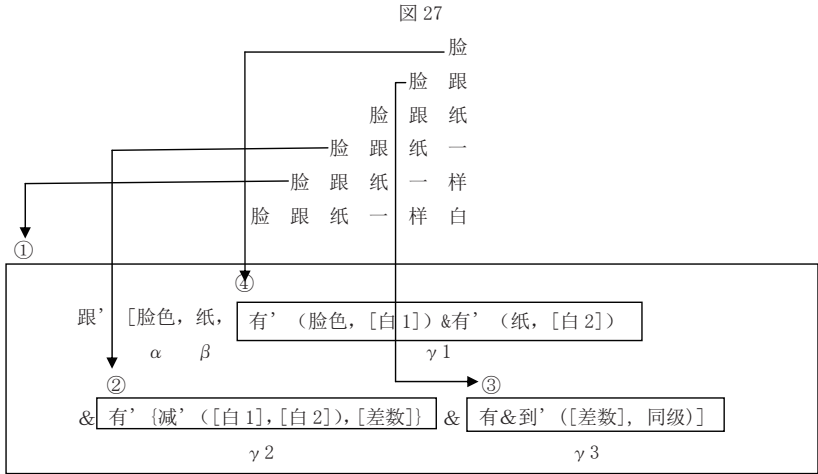


図 25 からみると、“跟”のタイプ式は“<(e, <(e, <(e, t), <(e, t), t)>>>”の四項述語であり、“脸”と“纸”は个体定項“e”であり、“白”と“一样”は“<(e, t)”の一項述語である。

入力記憶によって文を構成するすべての成分を作りあげることができる。その生成過程は次の図 27 になる。



論理式は入力記憶によって作成される。まず①で跟' [α, β, γ1&γ2&γ3]の三項関数が、第二に②でγ2の「量化」が、第三に③でγ3の「着点」が、第四に④でγ1の「格役割」が決定される。

ここで、筆者は張厚军(2010)が提出した比較と比喻との一つ目の判断基準(本稿の40頁参照)について、異論がある。以上の比較構文と比喻構文の用例の分析からみると、結果項が具体性を持たない、あるいは具体的でない文は比喻構文である。結果項がはっきりしている、あるいは具体性を与える文が比較構文であると考えられる。

5.まとめ(一)

比較構文についての先行研究をまとめると、次の図 20 になる。

図 20

代表学者	比較の範疇あるいは類型	比較の標識
馬建忠 (1898)	平等比較構文 (平比文)	“如”、“若”、“犹”、“由”等
	差異比較構文 (差比文)	“於”、“于”、“乎”、“焉”等
	最上級比較構文 (极比文)	“最”、“至”、“极”、“甚”、“尤”、“益”等
吕叔湘 (1942)	類似(类同)	“也”
	比喻(比拟)	“象”
		“一样”、“似的”
		“如”、“若”、“是”、“为”等
		“並列構造”
	“隱語”	
	近似(近似)	“象”、“似的”
	優劣(高下)	“一般”、“一样”、“有…那么…”、“如”等
		“否定差異式”
	低比較(不及)	“不如”、“比不得”、“赶不上”、“没有”
	高比較(胜过)	“更”、“比…还/更…”
	最上級(尤最)	“最”、“尤”、“尤其”、“较(比较)”
損得(得失)	“宁”	
非及(不如)	“孰与”、“与其…孰若/岂若/不若”、“不如”	
比例(倚变)	“愈…愈…”、“越…越…”	
高名凯 (1957)	差異級(差級) (comparative)	“更”、“益”、“愈”、“尤”
		“比…于…”
		“较(比、比较)…为…”
	最上級(极級) (superlative)	“最”或“最为”、“至”、“极”、“绝”、“殊”
		“…于…”
		“较(比、比较)…为…”

趙元任 (1968)	平等比較 (相等)		“X 跟 Y 一样 A”
			“X 有 Y (那么) A”
	高比較 (高于)		“比…更”、“…比…的多”
	低比較 (低于)		“X 没 (有) Y (那么) A”
			“不如”
			“不及”
最上級 (最高)		“顶”、“最”	
反最上級 (反最高)		“最不 A”	
刘月华・潘文 娛・故韡 (1983)	事物、性状の異同の比較		“跟…一样…”、“有…那么…”等
	性質、程度の差別と優劣の比較		“比”、“没有…那么…”、“…不如…”等
太田辰夫 (1987)	平等比較構文 (平比文)	相對的	“A 像 B 一样”
	差異比較構文 (差比文)	絕對的	“A 更…”
		相對的	“A 比 B…”
	最上級比較構文 (极比文)	絕對的	“A 最…”
		相對的	(限定式) “A 在…中最…” (非限定式) “A 比什么都…”
黎锦熙 (1992)	平等比較構文 (平比文)		“像 (好像、像…似的)”
			“似 (似乎、好似)”
			“好比 (比如、譬如)”
			“犹如 (如同、如…一样)”
			“和…一般”
		“无异于”	
		“不下于 (不减于、不让于)”	
		“等于”、“相当于”	
差異比較構文 (差比文)	高比較 (过于)	“赛过 (赛似、胜过、过于)” “强于 (强如)”	
	低比較 (不及)	“不如”、“不及”、“没有” “差似 (次于)”	
選擇複合文 (审决句)		“与其…宁可 (还是)” “与其…不如 (何如)”	

赵金铭 (2001)	類似 (近似)		“…像…”、“…好像…”、“…像…那么…”、“…像…似的”、“…似的”
	相当 (等同)		“…跟…一样…”、“…跟…那么…”、“…跟…一般…”、“…跟…相同”
	高比較 (胜于)		“…比…”、“…比…还/更…”、“…比…一点儿/一些…”
	低比較 (不及)		“…不如…”
刘焱 (2004)	平等比較	相当	“X 跟/和/同/像 Y 一样 (R)”
			“X 等于 Y”
		類似	“XR, Y 也 R”
			“X 不比 YR”
	近似	“X 有 Y 那么/这么 R”	
		“X 跟 Y 差不多”	
	差異比較	低比較	“X 没有 YR”
			“X 不如 Y (R)”
			“X 比较 R” “X 不像 Y 这样/那样 R”
		高比較	“X 比 Y1R” (比 1 構文)
“XR, Y 更 R”			
“越来越…” “相比之下/和…相比, X 很…”			
最上級	“X 最/顶 R”		
	“连 X 都/也 R” “X 比 Y2 还 R” (比 2 構文)		
车竞 (2005)	平等比較構文 (平比文)		“像”、“等于”、“抵上”、“抵得上”、“赶得上”、“有”、“像…一样”、“跟/和/同/与…一样/相同/相等/差不多”
	差異比較構文 (差比文)	XはYと異なる	“跟/和/同/与…不一样/不相同/不相等”
		X ≥ あるいは ≤ Y	“比”、“形容词 + 于”
		XはYの程度に及ばない	“赶不上”、“不如”、“比不上”、“不及”、“没有”
限定比較構文 (限比文)		“…不比…”、“…有…”	

许国萍 (2007)	平等比較	相当	“X 跟/像 Y 那么/一样 R”
		類似	“X 有 Y (那么) R”
	差異比較	最上級	“X 最 R”
		優性比較	“X 比 YR”
		劣性比較	“X 不像 Y 那么 R”
			“X 不比 YR”
	“X 没有 Y (那么) R”		
	“X 不如 Y (那么) R”		

ここで、例(7)「张三比李四个子高」の文を例に、比較構文の統語構造と論理構造の関連を説明する。

[統語構造]: 张三 比 李四 个子 高。
 X P Y D W
 ↓ ↓ ↓ ↓ ↓
 「比較主体」「比較詞」「比較客体」「比較点」「比較値」

[論理構造]: 比' [张三, 李四, 有' (张三, [个子 1]) &有' (李四, [个子 2]) &有' {減' ([个子 1], [个子 2]), [差数]} &到' ([差数], 多少)]

統語構造の各成分のアルファベット表示を論理構造に入れ替えると、次のようになる。

P' [X, Y, 有' (X, [D1]) &有' (Y, [D2]) &有' {減' ([D1], [D2]), [(W)差数]} &到' [(W)差数], 多少)]

ここから、比較構文の論理的意味は「比較主体」と「比較客体」と「比較点」についての「比較値」の「差数」が「いくらか(多少)」になるという状態にある」という意味である(論理表記においては、「比較値」はよく省略される。)となる。

次に、比較構文を文つまり命題表現から直接論理表記をする翻訳過程について説明する。

[翻訳の対象]: 张三比李四个子高。

[翻訳の順序]: 比、张三、李四、个子、高。

まず、最初に“比”の関数式を明らかにしておこう。次のようになる。この関数式を(a)とする。

(a) $\lambda P [P' [X, Y, 有' (X, [D1]) \&有' (Y, [D2]) \&有' \{減' ([D1], [D2]), [(W)差数]\} \&到' ([W)差数], 多少)]]$

これから翻訳してみよう。第一のプロセスとして、語彙の“比”が式(a)を呼び出す。これを次のように表記する。(b)の式は“比”が(a)の式を呼び出していることを示している。
 (b) $\lambda P [P' [X, Y, 有' (X, [D1]) \&有' (Y, [D2]) \&有' \{減' ([D1], [D2]), [(W)差数] \} \&到' ([(W)差数], 多少)]] (比')$

第二プロセスとして、式(b)にラムダ演算を施すと、P' に“比”が代入され、 λP が消去されて次のような式が得られる。これを式(c)とする。

(c) 比' [X, Y, 有' (X, [D1]) &有' (Y, [D2]) &有' {減' ([D1], [D2]), [(W)差数]} &到' ([(W)差数], 多少)]

今度はX、Yという変項を計算しなければならないので、式(c)をもとに、新しいラムダ関数を作り出す。それが次の(d)になる。

(d) $\lambda X \lambda Y [比' [X, Y, 有' (X, [D1]) \&有' (Y, [D2]) \&有' \{減' ([D1], [D2]), [(W)差数] \} \&到' ([(W)差数], 多少)]]]$

ここで、“张三”が式(d)を呼び出す。その結果、次の式(e)が得られる。

(e) $\lambda X \lambda Y [比' [X, Y, 有' (X, [D1]) \&有' (Y, [D2]) \&有' \{減' ([D1], [D2]), [(W)差数] \} \&到' ([(W)差数], 多少)]] (张三)]$

(e)の式に λ 演算を施すと、実引数の“张三”がXに代入され、 λX が消去されて次の(f)になる。

(f) $\lambda Y [比' [张三, Y, 有' (张三, [D1]) \&有' (Y, [D2]) \&有' \{減' ([D1], [D2]), [(W)差数] \} \&到' ([(W)差数], 多少)]]]$

次に、“李四”が式(f)を呼び出す。すると、関数適用の結果、次の(g)のような演算式が得られる。

(g) $\lambda Y [比' [张三, Y, 有' (张三, [D1]) \&有' (Y, [D2]) \&有' \{減' ([D1], [D2]), [(W)差数] \} \&到' ([(W)差数], 多少)]] (李四)]$

(g)の式にラムダ演算を施すと、次の(h)となる。

(h) 比' [张三, 李四, 有' (张三, [D1]) &有' (李四, [D2]) &有' {減' ([D1], [D2]), [(W)差数]} &到' ([(W)差数], 多少)]

さらに、D、Wという変項を計算しなければならないので、式(h)をもとに、新しいラムダ関数を作り出す。それが次の(i)になる。

(i) $\lambda D \lambda W [比' [张三, 李四, 有' (张三, [D1]) \&有' (李四, [D2]) \&有' \{減' ([D1], [D2]), [(W)差数] \} \&到' ([(W)差数], 多少)]]]$

1], [D2]), [(W)差数] &到' ([(W)差数], 多少)]

ここで、“个子”が式(i)を呼び出す。その結果次の式(j)が得られる。

(j) $\lambda D \lambda W$ [比' [张三, 李四, 有' (张三, [D1]) &有' (李四, [D2]) &有' {減' ([D1], [D2]), [(W)差数] &到' ([(W)差数], 多少)}] (个子)

(j)の式に λ 演算を施すと、実引数の“个子”がDに代入され、 λD が消去されて次の(k)になる。

(k) λW [比' [张三, 李四, 有' (张三, [个子1]) &有' (李四, [个子2]) &有' {減' ([个子1], [个子2]), [(W)差数] &到' ([(W)差数], 多少)}]

最後に、“高”が式(k)を呼び出す。すると、関数適用の結果、次の(1)のような演算式が得られる。

(1) λW [比' [张三, 李四, 有' (张三, [个子1]) &有' (李四, [个子2]) &有' {減' ([个子1], [个子2]), [(W)差数] &到' ([(W)差数], 多少)}] (高)

(1)の式にラムダ演算を施すと、次の(m)となって、“张三比李四个子高”の論理式が得られる。

(m) 比' [张三, 李四, 有' (张三, [个子1]) &有' (李四, [个子2]) &有' {減' ([个子1], [个子2]), [(高)差数] &到' ([(高)差数], 多少)}]²¹

本章では中国語における比較構文の全体像について論じた。次の章では「平等比較構文」の文型意味と論理構造について解析する。

²¹ この論理式についての解釈は本章の4.1参照。

第二章 中国語における平等比較構文の研究

1. 「平等比較構文」とは何か

平等比較構文(平比文)について、『馬氏文通』は「平等比較構文とは、形容詞を用いて、比較する二つの対象の間で高低、優劣に違いのない比較構文である」と定義している(馬建忠 1898: 135)。

刘焱は「比較する前項と後項がある面において、同一あるいは近接の量的状態を持つ比較構文が平等比較構文である」と定義している(刘焱 2004:39 参照)。

つまり、比較主体(X)と比較客体(Y)が同じレベルの(“X=Y”)比較構文は平等比較構文である。たとえば、

(1) 张三有李四那么高。(張三は李四のような高さだ。)

↓ ↓
X (=) Y

(2) 妹妹像姐姐一样漂亮。(妹は姉のように綺麗だ。)

↓ ↓
X (=) Y

2. 先行研究

2.1 平等比較構文の比較する範疇と文型構造についての研究

2.1.1 馬建忠(1898)による研究

『馬氏文通』はすべて1でも述べたように、「平等比較構文とは、形容詞を用いて、比較する二つの対象の間で高低、優劣に違いのない比較構文である。(馬建忠 1898: 135)」と定義している。普通は「如」、「若」、「犹」などの語彙を用いて、比較する項目を接続する。その具体的用法は以下のように三つに分かれている。

2.1.1.1 形容詞が比較の対象(前項)と「如」、「若」、「犹」などの品詞(述語)の間に現れる場合

(3) 君子之交淡若水, 小人之交甘若醴。(君子は淡して以って親しみ、小人は甘くして以って絶つ。)(庄子·山木)

用例(3)について、馬氏は「淡」と「甘」は形容詞であり、名詞の後ろに位置する場合は比較の意味を表す。二つの比較対象はそれぞれ「君子之交」と「水」、「小人之交」と「醴」である。ここで「淡若」が「君子之交」と「水」の間に入ることは「君子之交」の淡さと「水」の淡さが高低、優劣に違いがないという意を表す。また、「甘若」が「小人之交」と「醴」の間に入ることは「小人之交」の甘さと「醴」の甘さには高低、優劣に違いがないという意を表す。これがいわゆる平等比較であり、比較する二つの対象の間には高低、優劣に違いがない比較構文である。(馬建忠 1898: 135)」と解釈する。

2.1.1.2 形容詞が二つの比較対象の後ろに現れる場合

(4) 上察宗室實，毋如寶嬰賢。(史記・魏其列傳)

用例(4)について、馬氏は「賢」が形容詞であり、この文は比較構文である。比較の二つの対象は「毋」と「寶嬰」である。ここで、「賢」が「寶嬰」の後ろに位置するのは「二つの比較対象の後ろに現れる」ということである。この「如」は「毋」と「寶嬰」の間に位置する。「賢」が「寶嬰」の後ろに位置するということは、「寶嬰」に近い、すなわち平等比較の二つ目の対象であることを表す。(馬建忠 1898 : 136)」と解釈している。

2.1.1.3 形容詞が文の中に現れず、比較の二つの対象の背後に隠れる場合

(5) 肌膚若冰雪，淖約若處子。(肌膚は冰雪の若く、淖約たること処子の若し。)(庄子・逍遙游)

用例(5)について、馬氏は「肌膚」、「冰雪」、「淖約」、「處子」はそれぞれ比較の対象である。「若」を用いて、同等の意を表す。すなわち、「肌の白さは冰雪と同じ、しなやかな身のこなしは処女と一緒にだ」の意味である。「白さ」と「身のこなし」を言わない理由は冰雪が肌の白さを指し、処女がしなやかな身のこなしを指す。従って、白さと身のこなしをいわずとも、意味が明白で、多くを述べる必要がない。(馬建忠 1898 : 136)」と解釈する。

しかし、呂叔湘・王海榮(1986)は用例(5)について異論を提出した。つまり、「肌肤若冰雪」は馬氏の見解と同様に、形容詞を比較の二つの対象に隠したが、「淖約若处子」はこのような表現ではない。それは「淖約」は形容詞であるためである。即ち、前述の「淡若水」「甘若醴」などの表現と同じである。

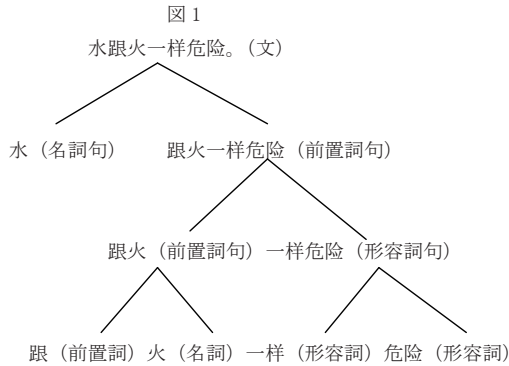
2.1.2 趙元任(1968)による研究

趙元任(1968)は「形容詞の平等級(相等級)は明らかな比較構文の形式である。その文型は「X 跟 Y 一样 A (Aは形容詞)」であることを指摘した。この中の「跟」の意味と類似する前置詞は「同」と「和」がある(「同」と「和」はあまり使わないかあるいは方言の中に用いられる)。この文型は直接構成要素分析において、以下の二種の構造に分けられる。

(a) もし「跟」を英語の「with」と見なせば、この文型は連動式と考えられる。英語の「X is equally A with Y」の構造に翻訳することができる。

(6) 水跟火一样危险。(水は火と同じように危険だ。)

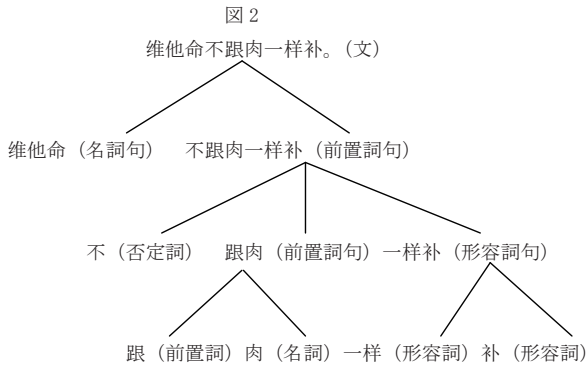
趙元任の論述により、例(6)の直接構成成分は次の図1のように分析できる。



(a)の構造の否定形は「X 不跟 Y 一样 A」である。

(7) 维他命不跟肉一样补。(ビタミンは肉のように摂取していけない。)

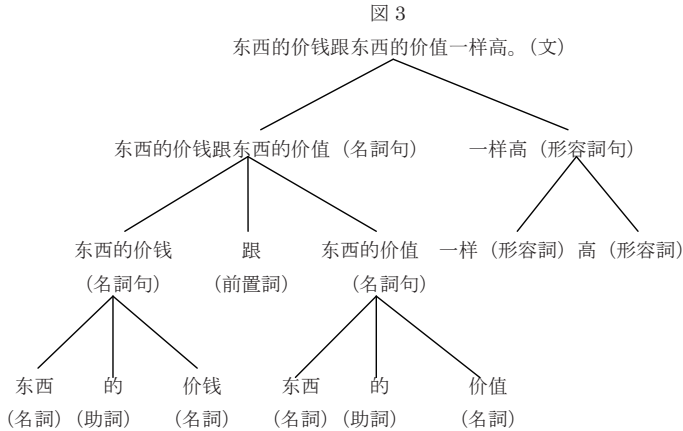
例(7)の直接構成成分の分析は図2のようになる。



(b)もし「跟」を並列接続語と見なせば、XとYは複合主語である。英語の「X and Y are equally A」の構造に翻訳することができる。

(8) 东西的价钱跟东西的价值一样高。(物の価格と物の価値は同じである。)

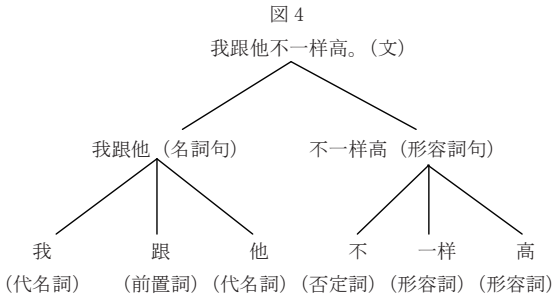
例(8)の直接構成成分の分析は図3のようになる。



(b)の構造の否定形は「X 跟 Y 不一样 A」である。

(9) 我跟他不一样高。(私と彼は同じ身長ではない。)

赵元任の論述により、例(9)の直接構成成分は図4のように分析できる。



2.1.3 刘月华・潘文娛・故麟 (1983) による研究

刘月华・潘文娛・故麟氏は『实用现代汉语语法』において、事物・性質の異同を比較する文型を二つに分けている。

一つは「A 跟 B 一样」の文型である。この文型において、A と B は二つの比較対象(事物あるいは性質)である。“一样”は比較結果を表し、さらに述語の主要成分である。“跟 B”は“一样”を修飾する状態成分である。「A 跟 B 一样 + 形容詞/動詞」の文型は“ある方面について A は B と同じである”の意を表す。

(10) 这个字的声调跟那个字的声调一样。(この字の声調はあの字の声調と同じである。)

(11) 这间屋子跟那间屋子一样大。(この部屋はあの部屋と同じ大きさだ。)

(12) 她跟我一样喜欢孩子。(彼女は私と同様に子供が好きだ。)

文成分として、「跟…一样」の後ろに“地”をつけ状況語になることができる。

(13) 他会跟我们一样地想念祖国。(彼は我々と同様に祖国を懐かしがっている。)

また、「跟…一样」の後ろに“的”をつけ定語になることができる。

(14) 还有跟这本一样的字典吗?(これと同じ辞書はまだあるか。)

「A跟B一样」の否定型は「A跟B不一样」である。

(15) 他的意见跟我的不一样。(彼の意見は私のと同じではない。)

時に、「跟…一样」の否定型は「不跟…一样」を用いてよい。しかし、「不跟…一样」は「跟…」を否定し、「一样」を否定しているのではない。

(16) 她不跟我一样高。(彼女は私と同じ身長ではない。)

二つの事物あるいは性質が類似することを表す文型は「跟…一样」以外、さらに「跟/与/和/同…相同/相似(近似、类似)/差不多」を用いる。

(17) 这个零件跟那个零件的形状相同。(この部品とあの部品は形が同じだ。)

(18) 这个故事的情节和那个故事相似。(この物語の内容はあの物語と似ている。)

(19) 小张的个子跟他差不多。(張さんの身長は彼と大体同じだ。)

しかし、「跟…相同」の文型は状況語になることができない。

(20) *我跟他相同高。

もう一つは「A有B那么(这么)…」の文型である。この文型は「AとBを比較する場合、Bを基準としAがBの程度に至る」の意味を表す。ここの“有”は“至る”の意を表し、“那么”と“这么”は性状あるいは程度を表す副詞である。近い場を指示する場合は“这么”を用い、遠い場を指示する場合は“那么”を用いる。

(21) 那棵小树有那座房子那么高了。(あの木はあの家屋の高さに至った。)

(22) 他弟弟快有我这么高了。(彼の弟はもうすぐ私の身長に至る。)

「A有B那么(这么)…」の文型の否定型は「A没有B那么(这么)…」の文型である。それは「AがBの程度に及ばない」の意を表す。

2.1.4 太田辰夫(1987)による研究

太田辰夫(1987)は「平等比較構文はヨーロッパ語で原級を用いるものである。絶対的なものがなく、同動詞²²による類似の表現の応用であることが多い(pp. 165-166)」ことを指摘した。さらに、古代語と現代語を分けて論じた。

まず、古代語においては

(23) 猛如虎，很如羊，貪如狼，疆不可使者，皆斬之。(猛きこと虎の如く、もとること羊の如く、貪ること狼の如く、つよくして使うべからざる者はみなこれを斬らん。)(『史记・項羽本紀』)

²² 同動詞は一致・類似・認定・同一を表すものにわかれる(自立語でないものもあるが区別するのがわずらわしいので同動詞とする)。現代語における例、一致を表すもの：“是”。類似を表すもの：“像、好像、似乎、如同、仿佛”。認定を表すもの：“算、算是”。同一を表すもの：“等于”。(太田辰夫 1987:180)

のごとく、類似の表現に形容詞を用いたものであるが、この形容詞は名詞的役割をもっている。

また、現代語における平等比較構文は同動詞を用いるものと用いないもののが、あるがともに古代語とは語序が相違していることは注意しなければならない。

(a) 同動詞を用いるもの。

(24) 他的话像蜜那么甜。(彼の言葉は蜜のように甘い。)

(b) 同動詞を用いないもの。

(25) 我的心思和水一般平。(私の心は水のように平かである。)

2.1.5 黎锦熙 (1992) による研究

黎锦熙 (1992) は「平等比較構文の修飾成分はいつも後置する。しかし、修辞において主文と付属文の位置、および接続詞があるかどうかを確定することができない。」と論じた。また、平等比較構文の接続詞²³を二種類とりあげた。一つは“像(好像、像…似的)”、“似(似乎、好似)”、“好比(比如、譬如)”、“犹如(如同、如…一样)”、“和…一般”である。二つ目は“无异于”、“不下于(不减于、不让于)”、“等于”、“相当于”である。

(26) 那一丛芦苇, 映着斜阳, 把堤岸密密遮住, 很像粉红绒毯做成了偌大垫子: 实在奇绝! (あのアシは斜陽に映され、岸をひっそりと覆った。それはまるでピンク色の絨毯で作った大きな下敷きの如く見える。全くもって不思議である。)

(27) 从前县官的职务是肮脏事业中之一种, 恰如工程队清暗沟一样。(昔の県の長官は汚い職業の一種であり、工事チームが暗渠を片付けるようである。)

(28) 这个女教师爱护伊的学生, 无异于做母亲的爱护自己的儿子。(この女の先生が自分の学生を愛護することは母が自分の子供を愛護することと違いない。)

黎锦熙の用例(26)~(28)は比喻構文に属すると見なした方が妥当である。

更に、黎锦熙は平等比較構文の主語と述語が省略される状況について論じた。

(29) 臣心如水。→我的心像水似的。(臣の心は水の如く。)

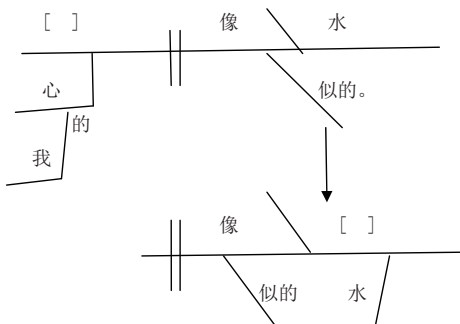
黎锦熙は例(29)の省略された成分について、二つの面から説明した。

(a) 主語省略。この場合はまた二つの構造に分ける。

一つは現代語の“我的心像水似的”に現代訳する場合は、主体名詞である“干净”が省略されたものである。“干净”を文に入れると、“我心里的干净, 像水似的”になる。文の意味から考えると、比較の主体が省略されていることが分かる。その理由は“心”と“水”は字面上では比較できる共通点が存在せず、発話しなくても両者の比較できる属性から比較の意を考えられるからである。ここの同動詞“像”は述語になり、“似的”は程度を表す副詞である。図で表示すると、次の図5になる。

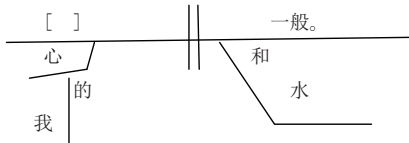
²³ 『新著国語语法』により、「平等比較構文の接続詞の大部分は比較関係を表す前置詞あるいは同動詞の派生用法である」と解釈した。(黎锦熙 1992:225)

図 5(黎錦熙 1992 : 75-76)



もう一つは現代語の“我的心和水一般”に訳する場合、“和”が前置詞であり、ここで述語になるのは形容詞の“一般”である。図で表示すると、次の図 6 になる。

図 6(黎錦熙 1992 : 76)



(b) 述語省略。この場合もまた二つの構造に分かれる。

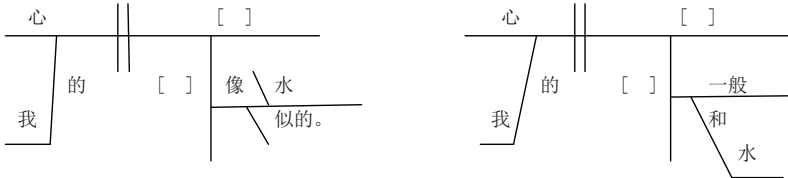
一つは現代語の“我的心干干净净，像水似的”と“我的心干干净净，和水一般”に訳す場合には、形容詞の“干干净净”の省略は述語の省略と見なせる。ここの“像”と“和”は前置詞であり、“似的”と“一般”は程度を表す副詞である。図で表示すると、次の図 7 になる。

図 7(黎錦熙 1992 : 77)



もう一つは比較詞が“得”の後ろに位置し、現代語の“我的心，干净得像水似的”と“我的心，干净得和水一样”に訳す場合、その構造は次の図 8 のようになる。

図8(黎锦熙 1992 : 78)



2.1.6 刘颖(2000)による研究

刘颖(2000)は現代中国語における平等比較を表す五つの文型について考察した。

2.1.6.1 A式：「a跟b一样(VP)/a跟b都VP」

2.1.6.1.1 「a跟b一样(VP)」の文型

刘颖は「a跟b一样(VP)」の文型は現代中国語における最も典型的な文型であることを指摘している。

- (30) 儿子跟爸爸一样高。(息子は父と同じ身長だ。)
 (31) 一班的学生跟二班的一样多。(一クラスの生徒は二クラスのと同じ数だ。)
 (32) 这部影片跟上部影片一样感人。(今回の映画は前回の映画と同じ感動的である。)

「a跟b一样(VP)」の文型は意味上からみると、二種に分けることができる。

一つは比較する対象が具体的な数量と同等であることを表す。例(30)と(31)はこの範囲に属する。この種の形容詞が表す数量はほぼ計算できる。たとえば、(30)の“身長の高さ”は具体的な数値(1.75メートル)があり、(31)の“人数の多少”も具体的な数値(50名)がある。

二つ目は比較する対象が抽象的な性質と同等であることを表す。例(32)はこの種に属する。この種の形容詞が表す性質は計算できない。たとえば、(32)の“感人”は抽象的な性質を表すので、具体的な数値で表示できないということが分かる。

2.1.6.1.2 「a跟b都VP」の文型

刘颖は「a跟b都VP」の文型の意味は「a跟b一样(VP)」とほぼ同じであるが、多少違いもあることを指摘した。また、その違いを二点にまとめた。

一つは、もし“VP”が計算できる形容詞である場合には、「a跟b都VP」の文型における“a”と“b”の両方は“VP”が表す性質あるいは状態を持つ。「a跟b一样(VP)」の文型における“a”と“b”の一方は“VP”が表す性質あるいは状態を持たない可能性がある。“VP”が表す具体的な数値のみを持つ。

- (33) a. 儿子跟爸爸一样高, (都是 1.85 米)。(息子は父と同じ身長であり、どちらも 1.85 メートルである。)
 b. 儿子跟爸爸都高, (都是 1.85 米)。(息子は父とどちらも身長が高く、1.85 メートルである。)

ここでの刘颖の説明は不十分に感じられる。つまり、(33-a)の数値は“1.65メートル”

に入れ替えると、a と b 両者の差が判然とする。

二点目は「a 跟 b 一样 (VP)」の文型における“a”と“b”の両方が“VP”が表す性質、あるいは状態を持つ場合には、同じ程度(数値)である。「a 跟 b 都 VP」の文型については確定できない。

(34) a. 儿子跟爸爸一样高, (都是 1.85 米)。(息子は父と同じ身長であり、どちらも 1.85 メートルである。)

b. 儿子跟爸爸都高, (爸爸 1.85 米, 儿子 1.90 米)。(息子は父とどちらも身長が高く、父は 1.85 メートルであり、息子は 1.90 メートルである。)

2.1.6.2 B 式: 「a 等于 b/a (就) 是 b」

2.1.6.2.1 「a 等于 b」の文型

“a 等于 b”の文型は比較する対象が性状、数量、結果などの面においての共通点あるいは同等性を表し、平等比較に属するはずである。意味上から考えて、「絶対平等比較構文」と「相対平等比較構文」の二種に分けている。

2.1.6.2.1.1 「絶対的平等比較構文」

「絶対的平等比較構文」は主に数字の演算・演繹およびその結果の表示について用いられ、「数学上からいうと、a と b は客観的同等性を持つ」の意味を表す。たとえば、

(35) 一公斤等于二市斤。(一キログラムイコール二斤。)

(36) 长方形的面积等于长和宽之积。(長方形の面積はタテとヨコの積に等しい。)

「絶対的平等比較構文」の中の a と b の位置は変えることができ、その意味もほぼ変わらない。

2.1.6.2.1.2 「相対的平等比較構文」

「相対的平等比較構文」は主に生活上の行為の結果(効果、最後の結果を含む)を比較するため用いられ、「意味上からいうと、a と b の結果は区別がない」の意味を表す。たとえば、

(37) 我跟大哥谁跟谁?我吃了就等于他吃了。(私と兄貴の仲のよいことといたら、それこそ一心同体だ。私が食ったら、彼が食ったことと同じだ。)

(38) 孙青根本不会听你的,你说了等于没说。(孫青は君の話を全然聴かないから、何か言っても言ってないのと一緒だ。)

この類の平等比較構文にはうわべからみると、やや強い一面性と主観性を感じられるが、実際は話者は一定の根拠により、相対的な同等性を判断している。たとえば、例(37)の判断する根拠は「仲良く、それこそ一心同体である」ことである。例(38)の判断する根拠は「他人の話を聴かない人には、何も言うべきでない」ことである。「相対的平等比較構文」の中の a と b の位置は変えることができない。

2.1.6.2.2 「a (就) 是 b」の文型

ここでの「a (就) 是 b」は平等比較を表す“是”構文である。たとえば、

「絶対的平等比較」を表す「a(就)是b」の用例は次のようである。

- (39) 一公斤是一千克。(一キログラムは千グラムである。)
 (40) 一小时是六十分。(一時間は六十分である。)

「相対的平等比較」を表す「a(就)是b」の用例は次のようである。

- (41) 就他来说, 硝烟和火药味儿是一种特殊的激素。(彼にとって、砲煙と火薬の匂いは特別なホルモンである。)
 (42) 作为学生, 好好学习就是孝敬父母。(学生として、よく勉強することは親孝行と一緒にある。)

「平等比較」において、「a(就)是b」の文型は「a 等于 b」の文型より肯定する語気が強くなる。この原因は「“是”構文の基本的な機能は肯定を判断すること」にあるからである。

2.1.6.3 C式:「a有bVP」

「a有bVP」の文型は「aはbを基準とし、aが性状や数量においてbの程度に至る」の意を表す。また、「a有bVP」の比較の方式と語気により、「静態的平等」と「動態的平等」を表す平等比較構文に分けている。たとえば、

- (43) 她的嗓子有彭丽媛那么好。(彼女の声は彭麗媛のようにいい。)
 (44) 那儿的蛇有水桶那么粗。(あそこの蛇はバケツのように太い。)
 (45) 小树有碗口那么粗了。(小さい木は茶碗の口のように太くなった。)
 (46) 嫩芽有蚕豆那么大了。(木の若芽はソラマメのように大きくなった。)

刘颖の説明によると、例(43)と(44)は「静態的平等」である。この種の平等比較構文はまず一つの比較対象を比較の基準として、確定する。そのあと、比較主体はこの基準と比較し、両者の共通点を確定する。最後に、比較主体と比較対象との同等関係の結果が得られる。「静態的平等構文」の中の“VP”は普通単独に用いられる。例(45)と(46)は「動態的平等」である。この種の平等比較構文もまず一つの比較対象を比較の基準として、確定する。そのあとは比較主体を次第にこの基準に近づけ、移動しつつける。この両者が重ねられる際に、同等関係が確定しえる。「動態的平等構文」の“VP”の後ろには普通「完了」を表す“了”をつける。

筆者はこの部分の論述が妥当でないと考えている。ここで、刘颖は「比較構文」と「比喻構文」を分けずに、混淆している。前述²⁴の通り、例(44)～(46)は同種の事物の比較ではなく、「比喻構文」に属するからである。

2.1.6.4 D式:「a不比bVP」

「a不比bVP」の文型を意味上から、「積極的平等」、「消極的平等」と「正常的平等」の三種類に分けている。

2.1.6.4.1 「a不比bVP」は「積極的平等」を表す

²⁴ 第一章の4.4(38頁)を参照されたい。

いわゆる「積極的平等」というのは、「a と b は積極的な面において、同等関係を持つ。すなわち、両者の同等関係は意味指示(“指向義”)から確定しえる」ことである。この場合の“VP”はいつも貶義語である。

(47) 这种酒不比茅台酒差。(この酒は茅台と比べて、質が悪くない。)

(48) 家驹的手艺并不比厨子老杨逊色。(家驹の腕前はコックの楊さんに負けない。)

「a 不比 bVP」の文型において、“b”は「比較の参照点」であり、つまり「比較の基準」である。もし“a”と“b”が「積極的平等関係」であれば、この文型の中の“b”の部分は必ず一つの前提を持つ、つまり「b 不VP」である。たとえば、例(47)の“b部分”は“茅台酒品质不差(茅台の質が悪くない)”の前提を持ち、例(48)の“b部分”は“厨子老杨的手艺不低(コックの楊さんの腕前は下手でない)”の前提を持つ。

2.1.6.4.2 「a 不比 bVP」は「消極的平等」を表す

いわゆる「消極的平等」というのは、「a と b は消極的な面において、同等関係を持つ。すなわち、両者の同等関係は意味指示(“指向義”)から確定しえる」ことである。この場合の“VP”はいつも褒義語である。

(49) 母亲的遭遇并不比女儿好多少。(母は娘と同じ境遇にある。)

(50) 扬扬是小学毕业，梅梅的文化水平也不比他高。(揚揚は小学校卒業であり、梅梅の教養は彼と同じレベルである。)

「消極的平等」を表す「a 不比 bVP」の文型において、“b”の部分も同様に「b 不VP」の前提を持つ。

2.1.6.4.3 「a 不比 bVP」は「正常的平等」を表す

いわゆる「正常的平等」というのは、「a と b は一般的な面において、同等関係を持つ。あるいは、正常の状態において同等関係を持つ」ことである。たとえば、

(51) 中国人并不比外国人笨。(中国人は外国人より頭が悪くはない。)

(52) 我又不比他少一条腿，难道他会挣钱我就不会？(私は彼より足が一本足りないわけではなく、まさか彼がお金を稼げ、私が稼げないことはありえない。)

「正常的平等」を表す「a 不比 bVP」の文型において、“b”の部分の前提は“b”は正常的なことである。ここでの“正常的なこと”は具体的な文脈あるいは状況により決められる。同時に人間の知識にも関わる。

2.1.6.5 E式：「aVP, b也VP」

ここで、刘颖は「aVP, b也VP」の文型について以下の三種に分けて論じた。

2.1.6.5.1 「aVP, b也VP」

この文型の中の副詞“也”は二つの事物が相同あるいは同等の関係を表す。“a”と“b”は比較の二つの対象であり、“VP”は比較の両者が持つ相同の部分である。

(53) 小王老实，小李也老实。(王さんは誠実であり、李さんも誠実である。)

(54) 你考试通过了，我考试也通过了。(君は試験に通ったが、私も試験に通った。)

しかし、この文型は以下のように変化させることもできる。

2.1.6.5.2 「aVP₁, b也VP₂」

この文型の中の“VP₁”と“VP₂”の意味は同一であるかあるいは類似している。

(55) 小明的成绩很好, 小刚的成绩也名列前茅。(明君の成績はとても優秀であり、剛君の成績も優れている。)

(56) 他家客厅的设计很独特, 卧室的设计也别具一格。(彼の客間のデザインはとても独特であり、寝室のデザインも独特の風格がある。)

2.1.6.5.3 「aVP₁, b也不VP₂」

この文型の“VP₁”と“VP₂”の意味は対立している。従って、“不VP₂”と“VP₁”は平等な関係になれる。

(57) 小王很聪明, 小李也不笨。(王さんは頭がいいけど、李さんも頭が悪くない。)

(58) 孔家豪脾气古怪, 他媳妇也不是省油的灯。(孔家豪は変わり者だが、彼の奥さんもおとなしい人物ではない。)

2.1.7 刘焱(2004)による研究

刘焱(2004)は平等比較構文を「相同比較」と「類似比較」の二種類に分けている。

2.1.7.1 相同比較

刘焱は「相同比較」について、「比較前項と比較後項はある面において、量的状態が完全に同じ比較である」と論じた。「相同比較」の文型は二つある。

2.1.7.1.1 「X跟/和/同/像Y一样(R)」

この文型は二種の比較を含んでいる。

第一種は「実体比較」である。つまり、比較主体と比較客体が客観的な同等性を持つ。この文型は「X跟/像Y似的」に書き換えることができない。たとえば、

(59) 这本书和那本书一样贵。(この本はあの本と同じ値段だ。)

*这本书和那本书似的贵。

(60) 青岛寄青岛, 四分, 本省别的地方寄青岛, 和国内一样也是八分。(青島から青島に郵送すれば、四分がかかる。本省のほかのところから青島に郵送すれば、国内便と同じく八分がかかる。)(张辛欣、桑晔『北京人』)

*青岛寄青岛, 四分, 本省别的地方寄青岛, 和国内似的也是八分。

第二種は「比喩(虚体比較)」である。つまり、比較主体と比較客体がある面において近似性を持つ。この場合は「比喩」の用法が多い。この文型は「X跟/像Y似的」に書き換えることができる。たとえば、

(61) 这儿的电话呀, 跟这儿的耗子一样, 老打不着。(ここの電話はここの鼠みたいで、いつもつかまらない。)(『老舍剧本1』)

=这儿的电话呀, 跟这儿的耗子似的, 老打不着。

2.1.7.1.2 「X等于Y」

この文型も二種の比較を含んでいる。

第一種は「実体比較」である。

(62) 我干一个月的活只等于你干一天的。(私の一ヶ月の給料は君の一日の分と同じだ。)

第二種は「比喩(虚体比較)」である。この場合は「比喩」の用法が多い。たとえば、

(63) 说了这么多话, 等于下了一场毛毛雨。(こんなたくさん喋ることはこぬか雨が降ることと同じだ。)

2.1.7.2 類似比較

刘焱は「類似比較」について、「比較前項と比較後項はある面において、量的状態が基本的に同じ比較である」と論じた。「類似比較」の文型は四つある。

2.1.7.2.1 「X R, Y 也 R」

(64) 钱是你们的, 肉也是你们的。(お金はお前らのものであり、肉もお前らのものである。)(老舍『老张的哲学』)

(65) 秦友亮的脸色冷冷的, 声音也是冷冷的。(秦友亮の顔色は無愛想であり、声も冷たい。)(『93』)

2.1.7.2.2 「X 不比 Y R」

(66) 吃的, 穿的, 哪一点也不比你差。(食べ物も、着物も、どちらも君より悪くない。)

(67) 曹宅的工钱并不比别处多。(曹邸の給料はほかのところより高くない。)(老舍『骆驼祥子』)

2.1.7.2.3 「X 有 Y 那么/这么 R」

(68) 弟弟有他那么高。(弟は彼と同じ身長だ。)

(69) 他的脑袋特别大, 有篮球那么大。(彼の頭は特に大きく、バスケットボールと同じ大きさだ。)

2.1.7.2.4 「X 跟 Y 差不多」

(70) 恰好有辆刚打好的车, 跟他所期待的车差不多。(ちょうど出来上がった人力車があり、彼の期待するものと大体同じである。)(老舍『骆驼祥子』)

2.1.8 蒋绍愚・曹广顺(2005)による研究

蒋绍愚・曹广顺は『近代汉语语法史研究综述』において、平等比較構文の構造の歴史の変遷について論じた。

2.1.8.1 春秋時代から漢代に至る時代

春秋時代から漢代に至り、平等比較構文の主な文型は「X + 形容詞 + 如/若/似 + Y」である。

(71) 君子之交淡若水, 小人之交甘若醴。(君子は淡して以って親しみ、小人は甘くして以って絶つ。²⁵)(『庄子·山木』)

(72) 猛如虎, 很如羊, 贪如狼, 强不可使者, 皆斩之。(猛きこと虎の如く、もとること羊の如

²⁵ 『中国の古典 6・庄子(下)』(池田知久訳 昭和 61 年)の日本語訳による。

く、貪ること狼の如く、つよくして使うべからざる者はみなこれを斬らん。)(『史记・項羽本紀』)

この文型を否定する場合、形容詞は二つ目の比較項Yの後ろにおく。これは肯定型の形容詞を一つ目の比較項Xの後ろにおくとは異なる。否定型は「X+否定詞+如/若/似+Y+形容詞」である。

(73) 仁言不如仁聲之入人深也。(仁言は仁声の人に入るの深きに如かざるなり。²⁶) (『孟子・尽心上』)

この文型の中の形容詞は省略して、「X+如/若/似+Y」となりえる。

(74) 孟施捨似曾子。(孟施捨は曾子に似たり。²⁷) (『孟子・公孙丑上』)

(75) 其仁如天其知如神。(その仁は天の如く、その知は神の如し。)(『史记・五帝本紀』)

これの否定型は「X+不+如/若/似+Y」である。

(76) 盡信書則不如無書。(尽く書を信ぜば、即ち書なきにしかず。²⁸) (『孟子・尽心下』)

この時期の平等比較構文はもう一つの文型を持ち、「X+与+Y+…」である。しかし、これの用例はそんなに多くない。

(77) 王子宮室車馬衣服多與人同。(王子の宮室・車馬・衣服は、多く人と同じ。²⁹) (『孟子・尽心上』)

2.1.8.2 魏晉南北朝時代から唐代に至る時代

魏晉南北朝時代から唐代に至り、平等比較構文の基本文型は前の時代とほぼ同じである。また、この時代から「X+不+同+Y」と「X+不+同+於+Y」の二つの否定型が出ている。

(78) 汝等不同余人。(君たちは一般の人間と違う。)(『六組坛経』)

(79) 太子德更進茂不同於故。(『世説新語・方正』)

2.1.8.3 宋元時代

宋元時代から、平等比較構文の語順は変化した。つまり、「X+比較詞+Y…」の文型を用い、比較の結果は二つ目の比較項の後ろにおいた。比較詞は“比”以外、“如”や“似”なども用いられた。否定する場合には、否定副詞“不”は比較詞の前におく。

(80) 臉如紅杏杏鮮艷。(顔は赤い杏のようにあでやかで美しい。)(『小孫屠』)

(81) 肥羊法酒不如俺庄農家の茶飯倒好。(肥えた羊とうまい酒はおれの村の日常茶飯に及ばない。)(『劉千病打独角牛』)

また、比較項Yの後ろに“一般”をつけることもできる。

(82) 父母的恩便似官里的恩一般重。(両親の恩恵は官庁の恩恵と同様に重要だ。)(『孝經直

²⁶ 『中国の古典4・孟子』(大島晃訳 昭和58年)の日本語訳による。

²⁷ 『中国の古典4・孟子』(大島晃訳 昭和58年)の日本語訳による。

²⁸ 『中国の古典4・孟子』(大島晃訳 昭和58年)の日本語訳による。

²⁹ 『中国の古典4・孟子』(大島晃訳 昭和58年)の日本語訳による。

解』)

2.1.8.4 元代以後

元代以後、比較を表す“比”と“和”は平等比較構文の中に用いられる。

(83) 他們高麗地面守口子渡江处的官司比咱門這裡的一般嚴。(彼らの高麗における川を守る
ところの訴訟は我々のと同様に厳しい。)(『老乞大』)

(84) 卻和這裡井繩灑子一般取水。(ここの井戸のひもとバケツと同じように水を汲むだ。)
(老乞大)

この時期には「是…的」の文型も平等比較の意味を表す。

(85) 偏有這東西是燈草一樣脆的。(一途に、このものはトウシンソウと同様に硬くてもろ
い。)(『金瓶梅』)

2.1.9 車竟(2005)による研究

車竟(2005)は平等比較構文について、「比較項XとYはある面において同一、あるいは類似する点を比較する文である」と述べた。平等比較構文の比較詞は“像”、“等于”、“抵上”、“抵得上”、“赶得上”、“有”、“像…一样”、“跟/和/同/与…一样/相同/相等/差不多”などがある。

(86) 这孩子的眼睛像他妈。(あの子の目は彼の母さんに似ている。)

(87) 这间屋子租那间屋子一样大。(この部屋はあの部屋と同じ大きさだ。)

(88) 我的收入和你差不多。(私の給料は君と大体一緒だ。)

2.2 平等比較を表す「跟…一样」構文」についての研究

2.2.1 朱德熙(1982)による研究

朱德熙氏は『说“跟…一样”』(1982)の論文において、「比較」と「比喩」を表す「跟…一样」構文の文型構造の区別について考察した。

「比較」を表す「跟…一样」構文の構造はA式の「(跟+N) + 一样」および“一样”の後ろに述語成分を加えるA'式の「(跟+N) + (一样+P³⁰)」である。たとえば、

(89) A式：里头跟外头一样。(中は外と同じだ。)

这种苹果跟那种一样。(この種類のリンゴはあの種類と同じだ。)

A'式：里头跟外头一样冷。(中は外と同じ寒さだ。)

这种苹果跟那种一样甜。(この種類のリンゴはあの種類のと同じ甘さだ。)

「比較」を表すA式とA'式の中の“跟”は“像”に書き換えできるが、“一样”は“似的”に書き換えできない。

「比喩」を表す「跟…一样」構文の構造はB式の「跟+(N+一样)」および“一样”の後ろに述語成分を加えるB'式の「[跟+(N+一样)]+P」である。たとえば、

³⁰ “P”は述語成分を表す。

(90) B式：这儿的耗子跟猫一样。(この猫は鼠のようだ。)

脸色跟纸一样。(顔色は紙のようだ。)

B'式：这儿的耗子跟猫一样大。(この猫は鼠のような大きさだ。)

脸色跟纸一样白。(顔色は紙のような白さだ。)

「比喩」を表す B式と B'式の中の“跟”は“像”に書き換えてでき、“一样”は“似的”に書き換えてできる。

(91) 跟牛马一样的生活 = 像牛马似的生活(牛馬のような生活だ。)

跟傻子一样的人 = 像傻子似的人(阿呆のような人だ。)

2.2.2 李成才(1991)による研究

李成才(1991)は「跟…一样」の基本用法について考察した。「跟…一样」は述語、状況語、補語と連体修飾語(“定語”)の成分になることができる。

2.2.2.1 「跟…一样」が述語になる場合

李氏は「“A跟B一样”の文型の“A”は主語であり、“跟B一样”は述語である」と指摘している。さらに、“A”と“B”の品詞の種類と構造について、以下のように分析している。

2.2.2.1.1 A、Bが名詞(あるいは名詞連語)である場合

(92) 那张脸成年跟壶底一样。(あの顔色はいつもつぼの底のようだ。)

2.2.2.1.2 A、Bが代名詞である場合

(93) 我不是跟你一样吗, 我有名字。(私は君と同じでない。私は名前がある。)

2.2.2.1.3 Aが代名詞であり、Bが名詞である。あるいはAが名詞であり、Bが代名詞である場合

(94) 可是他跟那些头头们不一样。(しかし、彼はあれらの指導者たちと一緒にない。)

(95) 在这点上, 赵乃华跟我一样。(このことにおいて、趙乃華は私と同じ考えである。)

2.2.2.1.4 A、Bが動詞連語である場合

(96) 有文化跟没文化可不一样。(教養があるものは教養がないのと同じでない。)

2.2.2.1.5 A、Bが主述連語である場合

(97) 我买跟你买一样, 何必分你我呢。(私が買うことは君が買うことと一緒にだ、私と君を分ける必要はないではないか。)

2.2.2.1.6 A、Bが前置詞(介詞)連語である場合

(98) 别走了, 在这儿跟在那儿一样。(行くなよ、ここにいってもあそこにいっても同じだ。)

2.2.2.1.7 A、Bが動詞、形容詞あるいは数量詞である場合

(99) 请你解释一下, 谈跟说一样吗?(説明してください。語ることは話すことと同じであるか。)

(100) 请注意, 长跟宽不一样。(注意してください。ヨコはタテと同じでない。)

(101) 用肉眼估测小距离时, 1毫米跟1.02毫米是一样的。(肉眼で細かい距離を測定する場

合は、1ミリメートルは1.02ミリメートルと同じである。)

2.2.2.2 「跟…一样」が状況語になる場合

李氏は「跟…一样」が状況語になる文型表現について、以下のように分析している。

2.2.2.2.1 「A〈跟B一样〉+形容詞(あるいは形容詞連語)」

この種の文型は形容詞述語文に属する。「跟B一样」は意味上からいうと、主語“A”と比較する意を表す。統語機能からいうと、述語となる形容詞を修飾することである。この文型の比較点は述語の形容詞におけ、比較する対象の“A”と“B”における性質・形・状態などの面の異同を説明する。たとえば、

(102) 这种萝卜跟梨一样甜。(この種の大根は梨と同じ甘さだ。)

例(102)において、比較する対象は“萝卜(大根)”と“梨(ナシ)”であり、比較点は“甜(甘い)”であり、“萝卜(大根)”と“梨(ナシ)”における性質の“甜(甘い)”が同じことを説明している。

また、李氏はこの文型に適合しない形容詞について、以下のようにまとめた。

(一) 述語になれない形容詞は使用されない。

(二) 同一あるいは類似の意を表す形容詞は使用されない。たとえば、

同、相同、雷同、共同、相等、同等、对等、同样、相似、相仿、类似、一致

(三) 色を表す単音節形容詞の前に同類の色を区別する成分を加える形容詞は使用されない。たとえば、

枣红、紫红、橘红、铁红、橙黄、土黄、草绿、葱绿、墨绿、黑灰、浅蓝

(四) 単独に用いにくい形容詞は使用されない。たとえば、

卑、缓、善、微、柔、急忙、蓬勃、蒙昧、滔天、堂皇、飒爽

2.2.2.2.2 「A〈跟B一样〉+動詞連語(あるいは動詞)」

この種の文型は動詞述語文に属する。「跟…一样」は“B”を導き、主語“A”の比較項になる。統語機能において、「跟B一样」は状況語であり、述語の動詞連語(あるいは動詞)を修飾する。比較点は動詞(あるいは動詞連語)の中におけ、“A”と“B”の行為・動作および心理・心理状態などの面における異同を説明する。たとえば、

(103) 让这些孩子跟正常孩子一样幸福成长。(これらの子供達が一般的な子供のように幸せに成長させる。)

また、李氏はこの文型に適用する動詞連語について、以下のようにまとめた。

(一) 動作を表す動詞連語を用いる。

(二) 心理および生理状態を表す動詞連語を用いる。

心理状態を表す動詞は：

喜欢、爱、恨、怕、想、希望、热爱、讨厌、想念などがある。

生理状態を表す動詞は：

聋、哑、瞎、癌、渴、饿、困、疼、痛、病、醉、醒、咳嗽、瘫痪、清醒などがある。

(三)一部の結合動詞(同動詞)を用いる。たとえば、

是、有、叫、像、成为、当做など

(四)動詞連語の前に希望動詞(助動詞)を加える。たとえば、

(104)社会跟人一样不能返老还童。(社会は人間と同じく、若返ることができない。)

2.2.2.2.3 「主語〈A〉〈跟B一样〉+動詞連語(あるいは形容詞)」

この文型は前の2.2.3.2.1と2.2.3.2.2の文型と似ている。「跟…一样」は状況語であるが、比較する部分“A”は主語ではなく状況語である。たとえば、

(105)他退休以后跟退休以前一样地关心车间的工作。(彼は退職してから退職する前と同じく、仕事場のことに気にかけている。)

2.2.2.2.4 「A動詞+得〈跟B一样〉³¹形容詞」

この文型において、“跟B一样”は述語の動詞の程度を表す補語を前置し、状況語になる。程度補語の形容詞を修飾する。ここの比較される対象は主語である。たとえば、

(106)他跑得跟我一样快。(彼は走りが私と同様に速い。)

2.2.2.3 「跟…一样」が補語になる場合

“跟B一样”はまた動詞あるいは形容詞の補語になることができる。一般的には、その構造は「A動詞あるいは形容詞+得[跟B一样]」である。たとえば、

(107)女儿长得跟妈妈一个样。(娘の顔はお母さんの顔と同じだ。)

2.2.2.4 「跟…一样」が連体修飾語(“定語”)になる場合

「跟…一样」が連体修飾語(“定語”)になる場合、その文型を二種類に分けている。

2.2.2.4.1 「A動詞[跟B一样]的+中心語」

この文型の“A”は主語であり、“跟B一样”の前にはよく数量詞を添え、中心語を限定している。たとえば、

(108)他们是一些跟我一样的穷学生。(彼らは私のような貧乏の学生である。)

2.2.2.4.2 「主語+動詞A1[跟B一样]的A2」

この文型の“A”は目的語の中におり、その中で、 $A = A_1 + A_2$ の関係を作っている。 A_1 は数量詞であり、 A_2 が目的語である。たとえば、

(109)我要买一辆跟他一样的自行车。(私は彼の自転車と同じのを買いたい。)

2.2.3 李向农(1999)による研究

李向农氏は『再说“跟…一样”及其相关句式』の論文において、朱德熙(1982)の研究に

³¹ 李成才の論文では、〈 〉が状況語を表し、()が定語を表し、[]が補語を表す。

に基づき、「比較」および「比喩」を表す「跟…一样」構文の構成要素について考察した。

李氏はA式とB式の文型を「X跟Y一样」を、A'式とB'式の文型を「X跟Y一样Z」に統一し、「A式とA'式は「比較」を表す文型であり、B式とB'式は「比喩」を表す文型である」と指摘した。

「比較」を表すA式とA'式の構成要素は異なる。前者は「XとYは類同性を持つ」ことである。後者は「XとYはある面において、比較することができる点がある。この比較点の特性はXとYの共有する特性である」ことである。たとえば、

図9

A	A'
这种苹果跟那种 <u>一样</u> =这两种苹果一样	这种苹果跟那种 <u>一样甜/脆</u> 这种苹果跟那种 <u>一样贵/贱/稀罕</u> 这种苹果跟那种 <u>一样多</u>
里头跟外头 <u>一样</u> =这两个地方一样	里头跟外头 <u>一样冷/热/宽敞/狭窄</u> 里头跟外头 <u>一样黑/亮/脏</u>

図9の左側の比較対象XとYは類同性を持つ。右側は比較点を表す述語成分Zを加えた。このようなXとYが類同性を持つ比較構文はZの成分を省略しても成立できる。逆に類同性がないと、成立できない。たとえば、

(110)*这里的蔬菜跟水果一样。

例(110)の“蔬菜(野菜)”と“水果(果物)”は同じ種類ではないから、述語成分Zを省略すれば文が成立できない。

「比喩」を表すB式とB'式の構成要素も異なる。B式は「XとYは種類が異なる」ことである。B'式は「XとYはある面において、類似する点がある。この類似点は比喩の本質である」ことである。たとえば、

図10

B	B'
这儿的耗子跟猫 <u>一样</u> =这儿的耗子 <u>像猫似的</u>	这儿的耗子跟猫 <u>一样大/凶猛/灵活</u> 这儿的耗子 <u>像猫那么大/凶猛/灵活</u>
脸色跟纸 <u>一样</u> =脸色 <u>像纸似的</u>	脸色跟纸 <u>一样白</u> 脸色 <u>像纸那么白</u>

図10のB'の用例はBに比喩の類似点Zを添えた。その意味は「Yを基準として比喩し、Xを際立たせる。(陆俭明 1980)」である。

2.3 平等比較を表す「“有”構文」についての研究

2.3.1 朱德熙(1982)による研究

朱德熙(1982)は「“有”構文は“量的状態”を表す」ことを指摘している。この場合には、“有”の目的語は数量詞あるいは数量名詞の構造である。たとえば、

(111) 有一座楼房（那么）高。（ビルと同じ高さだ。）

(112) 他的北京话没有你（那么）好。（彼の北京語は君ほど上手ではない。）

2.3.2 吕叔湘(1980)による研究

吕叔湘(1980)は「“有…[+那么]+形容词”の文型は性質・数量がある程度に至るの意を表す」と指摘している。たとえば、

(113) 这孩子已经有我那么高了。（この子はすでに私の身長に至った。）

2.3.3 张豫峰(1998)による研究

张豫峰(1998)は“比較”を表す“有”構文の統語構造について考察している。

まず、「有”構文”は「動詞“有”（“没有”、“没”を含む）を中心語とする文である」と定義している。比較を表す“有”構文の構造は「A+有+B+C+D」である。この中の“A”は“比較主体”を表し、“B”は“比較客体”を表し、“C”は“比較値”を表し、“D”は“比較点”を表す。たとえば、

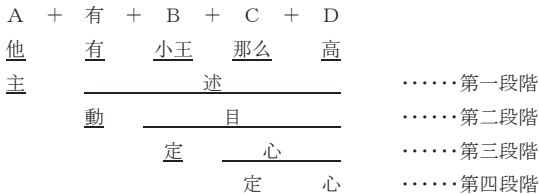
(114) 他有小王那么高。（彼は王さんのような高さだ。）

(115) 那条蛇有碗口这么粗。（あのヘビは茶碗の口のように太い。）

(116) 黄河没有长江这样长。（黄河は長江のような長さではない。）

また、この構造の統語成分について、四つの段階に分けている。その分析は以下の図 11 になる。

図 11



ここで、図 11 について説明しよう。統語構造の段階の関係の分析から考えると、第一段階(外側の段階)は「主述関係」である。“A”は主語であり、“有+B+C+D”は述語である。

第二段階は「動目関係」である。“有”は述語の動詞であり、“B+C+D”は目的語である。

第三段階は「連体修飾関係」である。“B”は修飾語(“定語”)であり、“C+D”は中心語である。

第四段階も「連体修飾関係」である。“C”は修飾語(“定語”)であり、“D”は中心語である。

张豫峰は結論の部分で“有”構文は意味上からみると、“比較”あるいは“比喻”を表

す」と論じているが、実際の本論にはこの両者を分けずに、混同している。

2.3.4 刘焱(2004)による研究

刘焱(2004)は「有」の基本意味は“領有する(持つ)”意であり、“有”構文の中の“有”はこの基本意味を保有している”ことを論じている。“我有他高”の意味は“私は彼のような身長を持つ”である。従って、“有”構文は“比較構文”の範疇に属し、“平等比較構文”の下位類である。その意味は“比較主体は比較客体と同一あるいは近似の属性の量的状態を持つ”である。ここの“量的状態”は精確な状態ではない。たとえば、

(117) 弟弟有哥哥那么高。(弟は兄のような身長を持つ。)

(118) 妹妹有姐姐那么漂亮。(妹は姉のような美しさを持つ。)

例(117)の意味は“弟は兄の身長と同じおよび近似している”である。例(118)の意は“妹は姉の美しさと大体同じ”である。

“有”構文の文型意味は“同一あるいは近似”を表すことである。“有”構文の構造は「X有Y这么/那么W」である。この構造は五つの成分を含んでいる。

A成分：X（比較主体である）

B成分：Y（比較客体である）

C成分：“有”

D成分：“这么/那么”（YはWの属性において程度を表す）

E成分：W（比較する属性である）

2.3.5 来燕飞(2008)による研究

来燕飞(2008)は「標識」理論を導入し、比較を表す“有”構文の中の形容詞について考察している。

「標識」理論は言語における非対称性を記述するため、プラハ学派(Prague School)が創立した。“標識がある”と“標識がない”という術語はもとは音声学の概念であるが、後には文法論と意味論を記述するものとしても用いられる。比較を表す「A+(没)有+B+C」の文型のC位置上の形容詞に対して、もし一方の量的範疇がそれ自身の反義語の量的範疇を含めば、それは「標識」がないことと見なすことができる。そうでなければ、「標識」があることと考えられる。たとえば、

(119) 你的胆只有芥菜子这么大。(君の度胸はカラシナの種のような大きさだ。)(钱钟书『围城』)

(120) 他们的面皮只有那么厚。(彼らの面の皮はただそのような厚さだ。)(老舍『四世同堂』)

例(119)と(120)の中の形容詞“大”と“厚”は量的状態の形容詞であり、ものの性質の量的値を表す。“大”は“大きさ”を、“厚”は“厚さ”(つまり体積)を表す。“B”は比較客体であり、さらに比較の基準としてその“大きさ”と“厚さ”が確定される。“A”は比較主体であり、その具体的な量的値は確定できない。例(119)と(120)の“大”と“厚”

は「標識がない」形容詞と見なすことができる。

さらに、来燕飛は“有”構文を肯定式と否定式に分け、その中の形容詞について考察している。肯定式において、その中の“C”としては、量的状態の強い単音節形容詞がよく用いられる。たとえば、“高、大、寛、厚、深、多”などである。否定式において、その中の“C”としては、量的状態を表す形容詞と性状を表す形容詞が用いられる。また、性状を表す場合には“C”が貶義の形容詞である。たとえば、“荒唐、难看、昏庸、糟糕、猖獗、势利、笨、坏”などである。

3. 平等比較構文の論理構造と文型意味

ここで、平等比較構文の主な文型を古代中国語と現代中国語に分け、それぞれの文型意味と論理構造について分析する。

3.1 古代中国語における平等比較構文の論理構造と文型意味

3.1.1 「X + 形容詞 + 如/若/似/同 + Y」の文型意味と論理構造

古代中国語における平等比較構文の主な文型は「X + 形容詞 + 如/若/似 + Y」である。次の用例の論理式を分析してみよう。

(121) 孟施捨似曾子。(孟施捨は曾子に似たり³²。)(『孟子・公孙丑上』)

この文の論理式は次のようになる。

ト		アル	～ニ	～ガ	アル	～ニ	～ガ
(121')	似'	[孟施捨 ³³ , 曾子(施捨), 有' (孟施捨, [善 1]) & 有' (曾子(施捨), [善 2])					
	アル	～ガ	～ト				
	α	β		γ 1			
	ヒク	カラ	～ヲ	ナル	～ガ	～ニ	
	& 有' {減' ([善 1], [善 2]), [差数]} & 到' ([差数], 零)}						
	アル	～ニ	～ガ				
				～トイウ状態ニ			
	γ 2			γ 3			

ここで、(121')の意味を説明しよう。この文は「孟施捨は曾子に似たり」という意味を表し、その複合命題は論理式では「似' [孟施捨, 曾子(施捨)], 有' (孟施捨, [善 1]) & 有' (曾子(施捨), [善 2]) & 有' {減' ([善 1], [善 2]), [差数]} & 到' ([差数], 零)]]」のように表示できる。次に、この論理式について詳しく説明する。「有' (孟施捨, [善 1])」は「“孟施捨”には論理形式の要素[善 1]がある」の意を、「有' (曾子(施捨), [善 2])」は「“曾子(施捨)”にも論理形式の要素[善 2]がある」の意を、「有' {減' ([善 1], [善 2]), [差数]} & 到' ([差数], 零)]]」は「善の差は零」の意を表す。用例(121)の意味は前述のすべての命題を含まなければならない。さらに、γ 1では「孟施捨」と「曾子(施捨)」が「経験者格」を、「善 1」と「善 2」が「対象格」を表すので、格役割を表示する。γ 2は減法で差があること、つまり数量化を表している。γ 3は差のないこと、言い換えれば「差がゼロの量に達している」こと、つまり一種の「着点」を表している。

³² 『中国の古典 4・孟子』(大島晃訳 昭和 58 年)の日本語訳による。

³³ 実は、“孟施捨”の論理式は“有' (孟, 施捨)”である。しかし、ここでの論述の中心は比較構文であるため、繁雑になるのを避けてそのまま“孟施捨”と記する。“曾子(施捨)”は同じである。

例(121)の文についてタイプ理論を用いたモデルによって説明してみよう。(121)のタイプ分析は樹形図で簡略表示すると、図12となる。

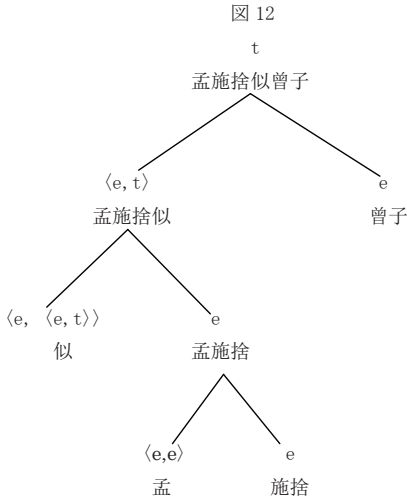


図12からみると、“似”のタイプ式は“ $\langle e, \langle e, t \rangle \rangle$ ”の二項述語であり、“曾子”と“施捨”はであり、“孟”は複合定項“ $\langle e, e \rangle$ ”である。

次に、論理式の作成の過程を有限オートマトンと順序論理回路のモデルを使用して説明しよう。有限オートマトン、順序論理回路、入力記憶によると、用例(121)の順序論理回路は以下ようになる。

図 13

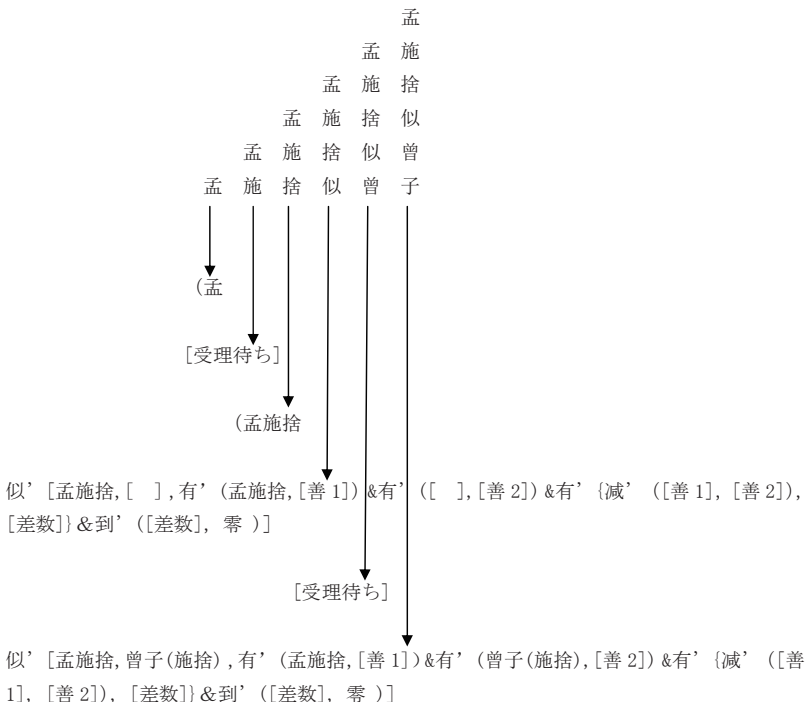
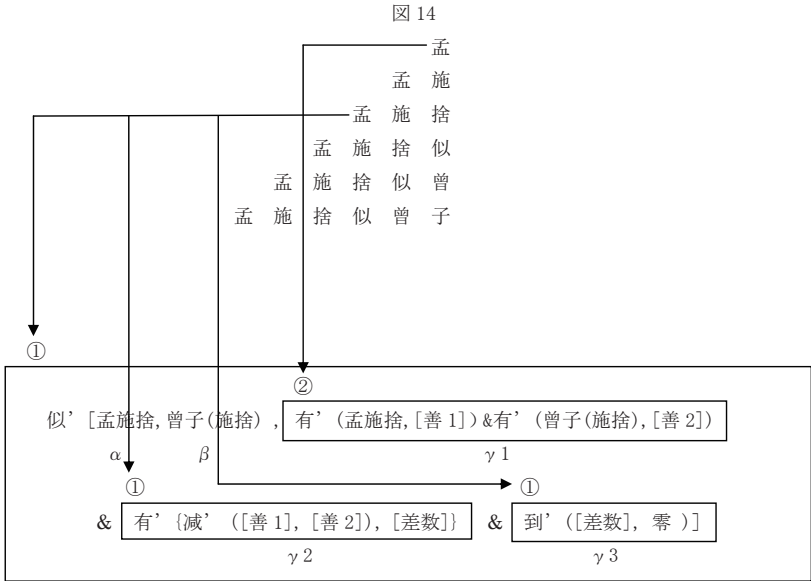


図 13 について説明しよう。図 13 の矢印の上の部分は自然言語を表し、下の部分は論理言語を表し、矢印は「対応する関係」を表す。まず“孟”を入力し、論理式は“(孟)”になる。第二に“孟施”を入力し、ここで“受理待ち”の状態になる。第三に“孟施捨”を入力し、論理式は“(孟施捨)”になる。第四に“孟施捨似”を入力し、論理式は“似' [孟施捨, [], 有' (孟施捨, [善 1]) &有' ([], [善 2]) &有' {減' ([善 1], [善 2]), [差数]} &到' ([差数], 零)]”になる。第五に“孟施捨似曾”を入力し、ここで“受理待ち”の状態になる。最後に“孟施捨似曾子”を入力し、文のすべての入力完了する。その論理式は“似' [孟施捨, 曾子(施捨), 有' (孟施捨, [善 1]) &有' (曾子(施捨), [善 2]) &有' {減' ([善 1], [善 2]), [差数]} &到' ([差数], 零)]”になる。この図からみると、“似”の入力とともに、文の全体の構造が決められている。これは“似”の役割の重要であること

を明らかに示している。

入力記憶によって文を構成するすべての成分を作りあげることができる。その生成過程は次の図14になる。



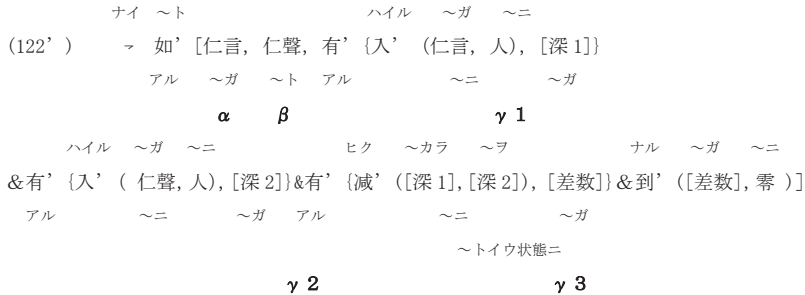
論理式は入力記憶によって作成される。まず①で似' [α , β , $\gamma 1$ & $\gamma 2$ & $\gamma 3$]の三項関数、 $\gamma 2$ の「量化」と $\gamma 3$ の「着点」が、第二に②で $\gamma 1$ の「格役割」が決定される。

3.1.2 「X+形容詞+如/若/似/同+Y」の否定式の論理構造と文型意味

3.1.1の文型の否定式は「X+否定詞+如/若/似/同+Y+形容詞」である。この場合には形容詞は第二項のYの後ろに現れる。

(122) 仁言不如仁聲之入人深也。(仁言は仁声の人に入るの深きに如かざるなり。)(『孟子・尽心上』)

この文の論理式は次のようになる。



ここで、(122')の意味を説明しよう。この文は「仁言が仁声ト人に入るの深きの同じという状態に(アル)ナイ³⁴」という意味を表し、その複合命題は論理式では「~如' [仁言, 仁聲, 有' {入' (仁言, 人), [深 1]} &有' {入' (仁聲, 人), [深 2]}&有' {減' ([深 1], [深 2]), [差数]}&到' ([差数], 零)}」のように表示できる。次に、この論理式について詳しく説明する。「有' {入' (仁言, 人), [深 1]}は「仁言が人に入ること」には論理形式の要素[深 1]がある」の意を、「有' {入' (仁聲, 人), [深 2]}は「仁聲が人に入ること」にも論理形式の要素[深 2]がある」の意を、「有' {減' ([深 1], [深 2]), [差数]}&到' ([差数], 零)}は「[深]の差は零」の意を表す。「~」は文全体を否定している。用例(122)の意味は前述のすべての命題を含まなければならない。さらに、γ 1では「仁言」と「仁聲」が「経験者格」を、「深 1」と「深 2」が「対象格」を表すので、格役割を表示する。γ 2は減法で差があること、つまり数量化を表している。γ 3は差のないこと、言い換えれば差がゼロの量に達していること、つまり一種の「着点」を表している。

³⁴ 確かに「仁言が仁声ト人に入るの深きの同じという状態に(アル)ナイ」はメタ言語である。ここでは論理式の内包意味を明らかに表すため、このように記述している。

例(122)の文についてタイプ理論を用いたモデルによって説明してみよう。(122)のタイプ分析は樹形図で簡略表示すると、図15となる。

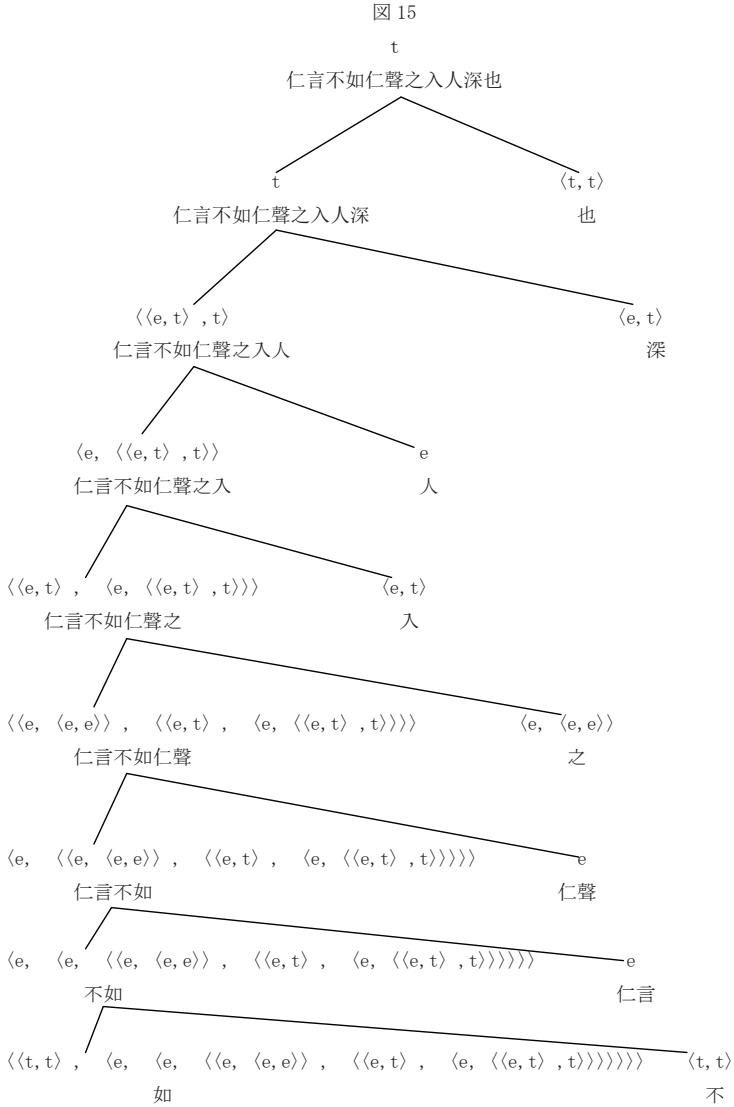


図 15 からみると、前置詞“如”のタイプ式は“ $\langle \langle t, t \rangle, \langle e, \langle e, \langle e, \langle e, e \rangle \rangle \rangle, \langle \langle e, t \rangle, \langle e, \langle \langle e, t \rangle, t \rangle \rangle \rangle \rangle$ ”の七項述語であり、“仁言”、“仁聲”と“人”は個体定項“e”であり、“深”は一項述語“ $\langle e, t \rangle$ ”である。否定詞の“不”は論理タイプ“ $\langle t, t \rangle$ ”³⁵である。古文虚詞の“之”は二項述語“ $\langle e, \langle e, e \rangle \rangle$ ”であり、“也”は“ $\langle t, t \rangle$ ”³⁶である。

この例が示しているように、タイプ式による樹系図は文を構成するすべての要素のタイプを決定できる。

³⁵ 『逻辑语义学』によれば、“ $\langle t, t \rangle$ ”の意味は「式“t”と結合し、もう一つの式“t”が生じる」ことである。これは一項述語、すなわち否定接続詞である。(方立 2000:90)

³⁶ 『逻辑语义学』によれば、“ $\langle t, \langle t, t \rangle \rangle$ ”の意味は「式“t”と結合し、一つの項述語“ $\langle t, t \rangle$ ”が生じる。また、“ $\langle t, t \rangle$ ”と結合し、もう一つの式“t”が生じる。すべての二項述語はこの論理タイプに属することである。さらに、注意することは「この論理式の中のアウトタイプ“ $\langle t, t \rangle$ ”は否定接続詞でなく、次のような文を指す。

a. and Zhang San likes Zhao Ying. (并且张三喜欢赵英。)

b. or Zhang San likes Zhao Ying. (或是张三喜欢赵英。)

a と b は独立な文ではないから、文頭のアルファベットは小文字を用いる。a と b は語ではないけれども、それらの機能は否定接続詞と同じである。すなわち、一つの文と結合し、もう一つの文が生じる。(方立 2000:91 参照)

ここの“也”はこの論理タイプに属する。

次に、論理式の作成の過程を有限オートマトンと順序論理回路のモデルを使用して説明しよう。有限オートマトン、順序論理回路、入力記憶によると、用例(122)の順序論理回路は以下ようになる。

図 16

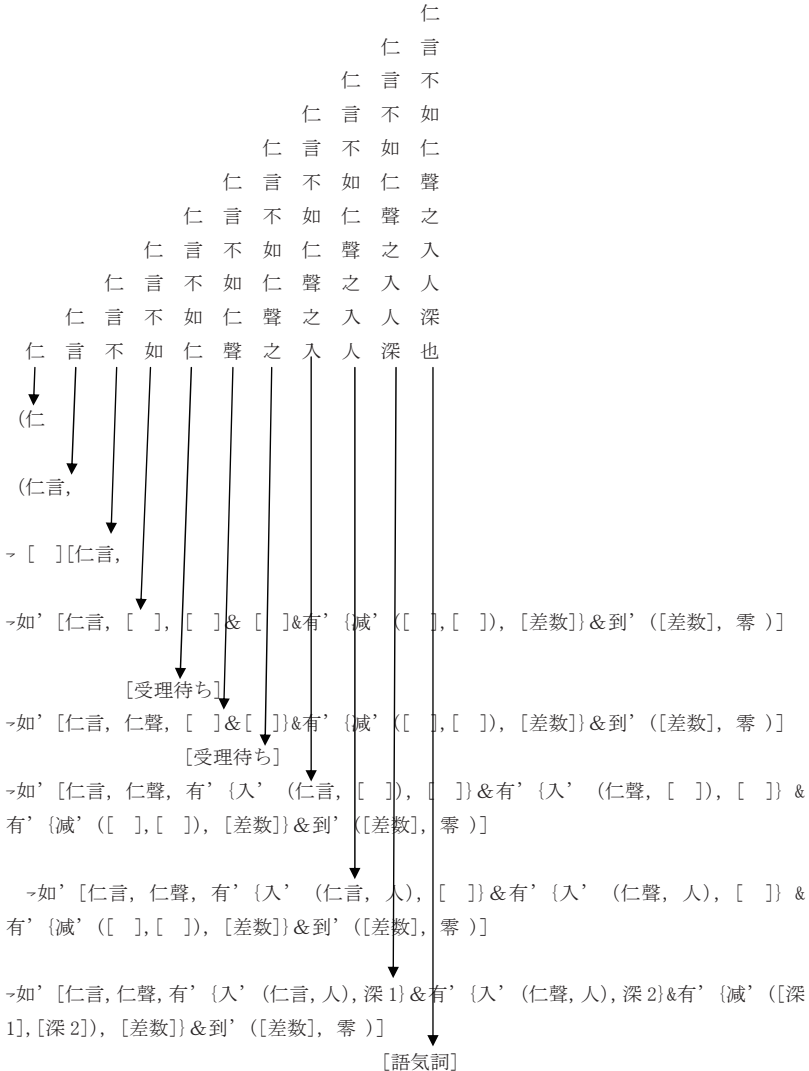
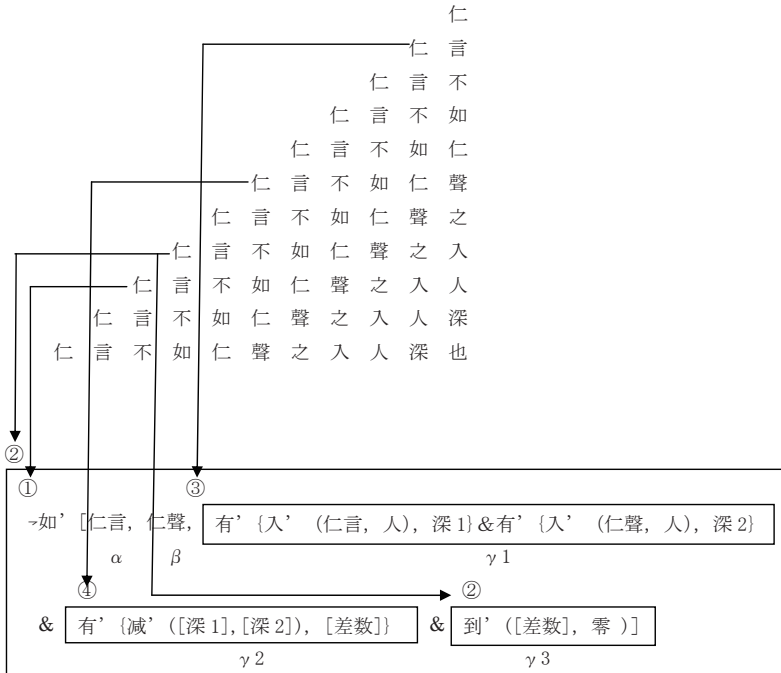


図 16 について説明しよう。まず“仁”を入力し、論理式は“(仁)”になる。第二に“仁言”を入力し、論理式は“(仁言)”になる。第三に“仁言不”を入力し、論理式は“¬ [] [仁言,]”になる。第四に“仁言不如”を入力し、論理式は“¬如’ [仁言, [], []]& []&有’ {減’ ([], []), [差数]}&到’ ([差数], 零))”になる。第五に“仁言不如仁”を入力し、“受理待ち”になる。第六に“仁言不如仁聲”を入力し、ここで論理式は“¬如’ [仁言, 仁聲, []& []]&有’ {減’ ([], []), [差数]}&到’ ([差数], 零))”になる。第六に“仁言不如仁聲之”を入力し、“受理待ち”になる。第七に“仁言不如仁聲之入”を入力し、論理式は“¬如’ [仁言, 仁聲, 有’ {入’ (仁言, []), []}&有’ {入’ (仁聲, []), []}&有’ {減’ ([], []), [差数]}&到’ ([差数], 零))”になる。第八に“仁言不如仁聲之入人”を入力し、論理式は“¬如’ [仁言, 仁聲, 有’ {入’ (仁言, 人), []}&有’ {入’ (仁聲, 人), []}&有’ {減’ ([], []), [差数]}&到’ ([差数], 零))”になる。第九に“仁言不如仁聲之入人深”を入力し、論理式は“¬如’ [仁言, 仁聲, 有’ {入’ (仁言, 人), 深 1}&有’ {入’ (仁聲, 人), 深 2}&有’ {減’ ([深 1], [深 2]), [差数]}&到’ ([差数], 零))”になる。最後に古文の虚語“也(判断)”を入力し、文のすべての入力完了する。“也”については詳細な記述は省略する。この図からみると、“若”の入力とともに、文の全体の構造が決められている。

入力記憶によって文を構成するすべての成分を作りあげることができる。その生成過程は次の図 17 になる。

図 17



論理式は入力記憶によって作成される。まず①で否定“→”が、第二に②で如' [α, β, γ 1&γ 2&γ 3]の三項関数とγ 3の「着点」が、第三に③でγ 1の「格役割」が、第四に④でγ 2の「量化」が決定される。

3.2 現代中国語における平等比較構文の論理構造と文型意味

3.2.1 平等比較を表す“跟”構文の論理構造と文型意味

平等比較を表す“跟”構文の基本構造は「跟…一样」であり、この文型は平等比較を表す最も典型的な文型である。この中の“一样”のものの意味は「同様の・差別がない」の意であり、さらに「類似する」の意も表せる。自然言語における「跟…一样」の文型意味は「どの面についてもXはYと同じである」ことである。この文型の平等比較を表すキーワードは“一样”であり、“跟”の役割は比較対象を導入することである。この前置詞は“跟”以外、また“和、像、同”などを用いることができる。この類の前置詞の役割は“跟”とまったく同様であるから、“跟”構文に入れる。ここで、具体的な用例を通して、「跟…一样」構文の論理構造と文型意味を論じる。

(123) 说跟读一样重要。(話すことは読むことと同様に重要だ。)

この用例の論理構造は次のようになる。

~ト	ハナス~ガ	ヨム	~ガ	アリ	~ニ	~ガ	アル	~ニ
(123')	跟'	[说' (φ), 读' (φ), 有' (说' (φ), [重要1]) & 有' (读' (φ),						
	アル	~ガ	~ト					
		α	β			γ1		
	~ガ	ヒク	~カラ	~ヲ	ナル	~ガ	~ニ	
		[重要2] & 有'	{減' ([重要1], [重要2]), [差数]} & 到' ([差数], 零)					
	アル		~ニ	~ガ				
				~トイウ状態ニ				

γ2

γ3

“说”は動詞であるので、関数の項になれない。関数の項になるためには命題でなければならない。そこで、第一項を“说' (φ)”と記述する。“φ”は不確定な動作主を表示する。同様に、“读”も“读' (φ)”という命題になおして、第二項に配置する。

次に、(123')の意味を説明する。この文は「話すことは読むことと同様に重要だという状態にある」という意味を表し、その複合命題は論理式では「跟' [说' (φ), 读' (φ), 有' (说' (φ), [重要1]) & 有' (读' (φ), [重要2]) & 有' {減' ([重要1], [重要2]), [差数]} & 到' ([差数], 零)]」のように表示できる。ここで、この論理式について詳しく説明する。「有' (说' (φ), [重要1])」は「“話すこと”には論理形式の要素[重要1]がある」の意を、「有' (读' (φ), [重要2])」は「“読むこと”にも論理形式の要素[重要2]がある」の意を、「有' {減' ([重要1], [重要2]), [差数]} & 到' ([差数], 零)]」は「[重要]の差は零」の意を表す。用例(123)の意味は前述のすべての命題を含まなければならない。さらに、γ1では「说」と「读」が「経験者格」を、「重要1」と「重要2」が「対象格」を表すので、格役割を表示する。γ2は減法で差があること、つまり数量化を表している。γ3は差のないこと、言い換えれば差がゼロの量に達していること、つまり一種の「着点」を表している。

例(123)の文についてタイプ理論を用いたモデルによって説明してみよう。(123)のタイプ分析は樹形図で簡略表示すると、図18となる。

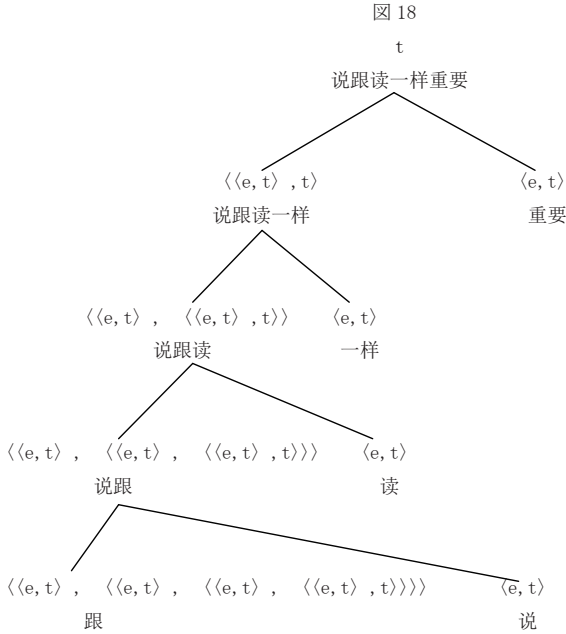


図18からみると、前置詞“跟”のタイプ式は“ $\langle\langle e, t \rangle, \langle\langle e, t \rangle, \langle\langle e, t \rangle, \langle\langle e, t \rangle, t\rangle\rangle\rangle$ ”の四項述語であり、“说”、“读”、“一样”と“重要”は一項述語“ $\langle e, t \rangle$ ”である。

次に、論理式の作成の過程を有限オートマトンと順序論理回路のモデルを使用して説明しよう。有限オートマトン、順序論理回路、入力記憶によると、用例(123)の順序論理回路は以下ようになる。

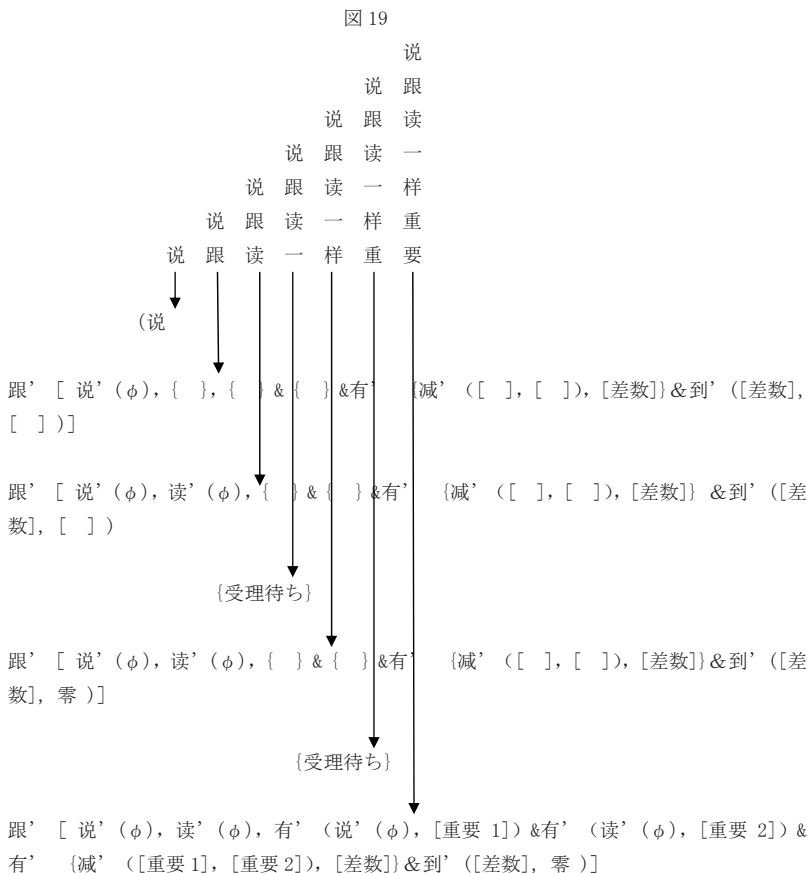
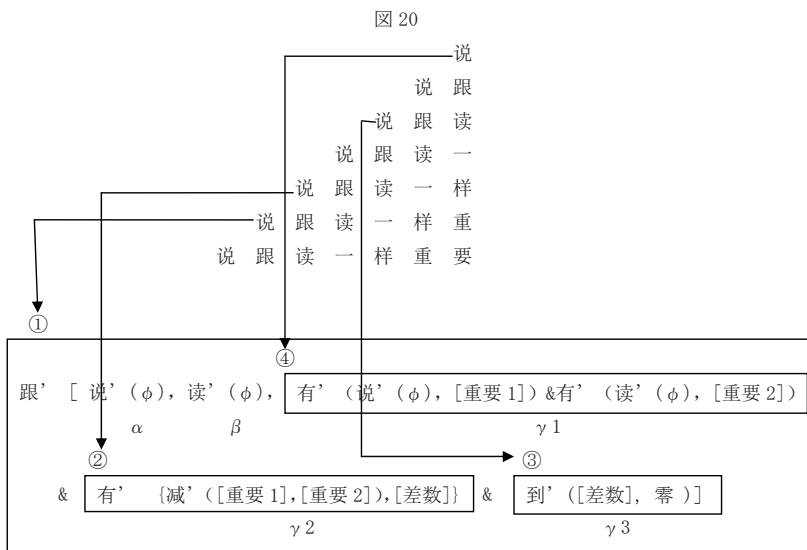


図 19 について説明しよう。まず“说”を入力し、論理式は“(说)”になる。第二に“说跟”を入力し、論理式は“跟' [说' (φ), { }, { } & { } & 有' { 减' ([], [], [差数]) & 到' ([差数], [])]”になる。第三に“说跟读”を入力し、論理式は“跟' [说' (φ), 读' (φ), { } & { } & 有' { 减' ([], [], [差数]) & 到' ([差数], [])”になる。第四に“说跟读一”を入力し、“受理待ち”になる。第五に“说跟读一样”を入力し、ここで論理式は“跟' [说' (φ), 读' (φ), { } & { } & 有' { 减'

([], []), [差数]&到' ([差数], 零)]”になる。第六に“说跟读一样重”を入力し、“受理待ち”になる。最後に“说跟读一样重要”を入力し、文のすべての入力完了する。その論理式は“跟' [说' (ϕ), 读' (ϕ), 有' (说' (ϕ), [重要 1]) &有' (读' (ϕ), [重要 2]) &有' (减' ([重要 1], [重要 2]), [差数]) &到' ([差数], 零)]”になる。この図からみると、“跟”の入力とともに、文の全体の構造が決められている。

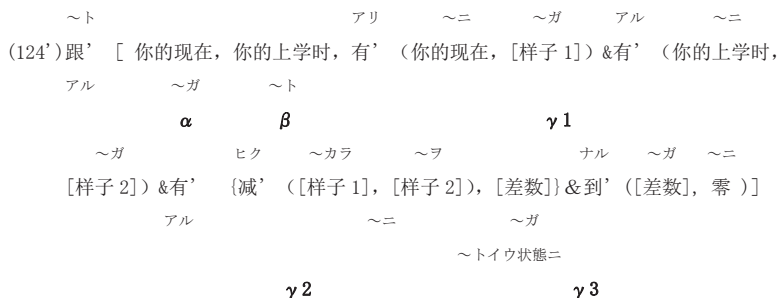
入力記憶によって文を構成するすべての成分を作りあげることができる。その生成過程は次の図 20 になる。



論理式は入力記憶によって作成される。まず①で跟' [α , β , $\gamma 1$ & $\gamma 2$ & $\gamma 3$]の三項関数が、第二に②で $\gamma 2$ の「量化」が、第三に③で $\gamma 3$ の「着点」が、第四に④で $\gamma 1$ の「格役割」が決定される。

(124) 你跟上学时完全一样, 一点儿没变。(君は学生時代とまったく同じであり、全然変わっていない。)

この用例の論理構造は次のようになる。



例(124)において、主語“你”と“跟”の目的語“上学时”は比較することができない。そこで、主語の“你”を“你的现在”、“跟”の目的語の“上学时”を“你的上学时”と解釈しなおす。そうすると“你的现在”と“你的上学时”の双方から論理形式の[様子]を抽出することができる。それぞれの論理形式を[様子 1]、[様子 2]として、その差を演算した結果が“零”になればよい。

この文は「君の現在の様子が学生時代の様子と同じという状態にある」という意味を表し、その複合命題は論理式では「跟' [你的现在, 你的上学时, 有' (你的现在, [様子 1]) &有' (你的上学时, [様子 2]) &有' {減' ([様子 1], [様子 2]), [差数]} &到' ([差数], 零)]」のように表示できる。ここで、この論理式について詳しく説明する。「有' (你的现在, [様子 1])」は「“你的现在”には論理形式の要素[様子 1]がある」の意を、「有' (你的上学时, [様子 2])」は「“你的上学时”にも論理形式の要素[様子 2]がある」の意を、「有' {減' ([様子 1], [様子 2]), [差数]} &到' ([差数], 零)]」は「[様子]の差は零」の意を表す。用例(124)の意味は前述のすべての命題を含まなければならない。さらに、γ 1では「你的现在」と「你的上学时」が「経験者格」を、「様子 1」と「様子 2」が「対象格」を表すので、格役割を表示する。γ 2は減法で差があること、つまり数量化を表している。γ 3は差のないこと、言い換えれば差がゼロの量に達していること、つまり一種の「着点」を表している。

例(124)の文についてタイプ理論を用いたモデルによって説明してみよう。この文のタイプ分析は樹形図で表示すると、図 21 となる。

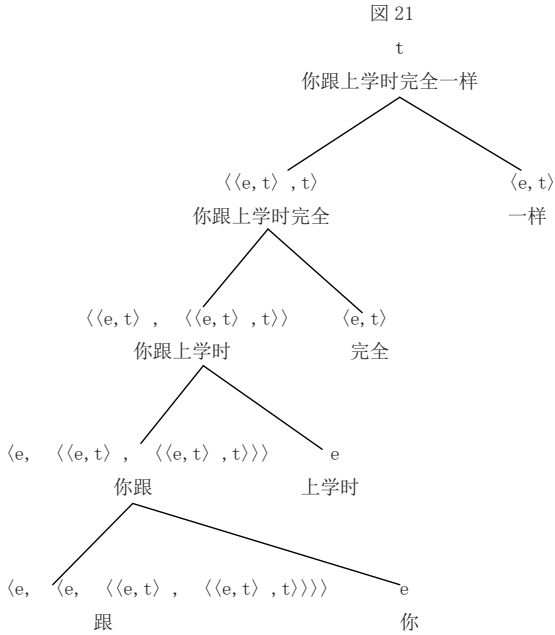


図 21 からみると、前置詞“跟”のタイプ式は“<(e, <(e, <(e, t), <(e, t), t>>>>”の四項述語であり、“完全”と“一样”は“<(e, t)>”の一項述語であり、“你”と“上学时”は個体定項“e”である。

次に、論理式の作成の過程を有限オートマトンと順序論理回路のモデルを使用して説明しよう。有限オートマトン、順序論理回路、入力記憶によると、用例(124)の順序論理回路は以下ようになる。

図 22

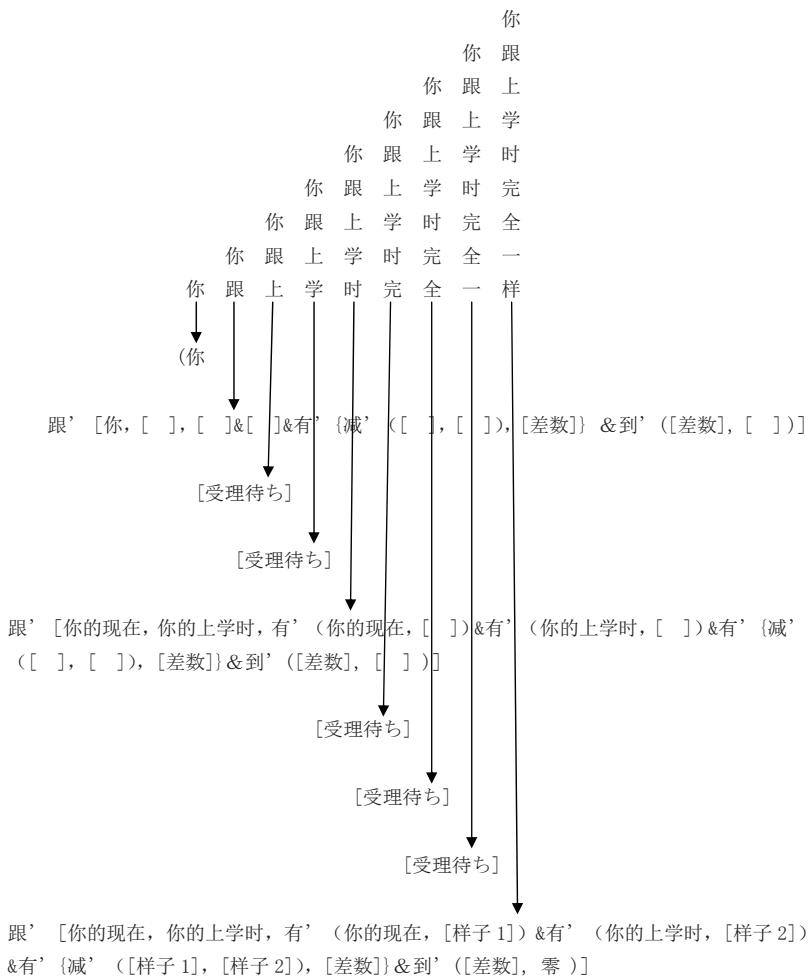
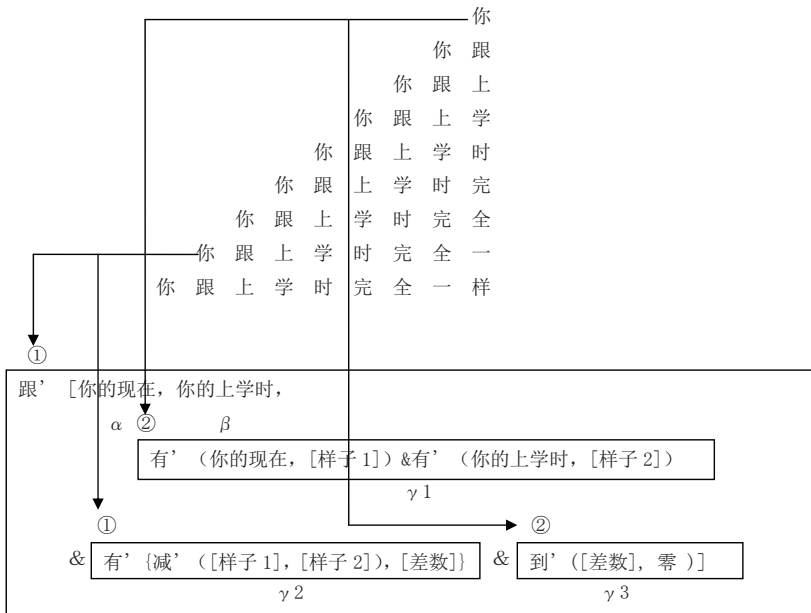


図 22 について説明しよう。まず“你”を入力し、論理式は“(你”になる。第二に“你跟”を入力し、論理式は“跟' [你, [], []&[]&有' {減' <[], []), [差数]} &到' ([差数], [])]”

&到' ([差数], [])]”になる。第三に“你跟上”を入力し、ここで“受理待ち”の状態になる。第四に“你跟上学”を入力し、ここも“受理待ち”になる。第五に“你跟上学时”を入力し、ここで論理式は“跟' [你的现在, 你的上学时, 有' (你的现在, [])&有' (你的上学时, [])&有' {減' ([], []), [差数]}&到' ([差数], [])]”になる。第六に“你跟上学时完”、第七に“你跟上学时完全”、第八に“你跟上学时完全一”を入力し、ずっと“受理待ち”の状態になる。最後に“你跟上学时完全一样”を入力し、文のすべての入力完了する。その論理式は“跟' [你的现在, 你的上学时, 有' (你的现在, [様子1])&有' (你的上学时, [様子2])&有' {減' ([様子1], [様子2]), [差数]}&到' ([差数], 零)]”になる。この図からみると、前置詞の“跟”の入力とともに、文の全体の構造が決められている。

入力記憶によって文を構成するすべての成分を作りあげることができる。その生成過程は次の図 23 になる。

図 23



論理式は入力記憶によって作成される。まず①で跟' [α, β, γ1&γ2&γ3]の三項関数とγ2の「量化」が、第二に②でγ1の「格役割」とγ3の「着点」が決定される。

3.2.2 “跟”構文の否定式の論理構造と文型意味

「跟…一样」構文の否定式は否定詞の位置により、二種類がある。ここで、この二種の否定式の論理構造から、具体的な用例の分析を通してその違いを説明したい。

3.2.2.1 「跟…不一样」

この否定式の否定詞は“一样”の前に位置する。

(125) 我的毛衣跟你的不一样。(私のセーターは君のと同じでない。)

この文の論理式は次のようになる。

~ト		アリ		~ニ	~ガ	アル	~ニ
(125') 跟' [我的毛衣, 你的(毛衣), 有' (我的毛衣, [样子1]) &有' (你的(毛							
アル	~ガ	~ト					
	α	β	$\gamma 1$				
~ガ	ヒク	~カラ	~ヲ	(ナイ)ナル	~ガ	~ニ	
衣), [样子2]) &有' {減' ([样子1], [样子2]), [差数]} &~到' ([差数], 零)]							
アル		~ニ	~ガ				
			~トイウ同ジテナイ状態ニ				
	$\gamma 2$		$\gamma 3$				

次に、(125')の意味を説明する。この文は「私のセーターは君の(セーター)と“样子”という論理形式で同じでない状態にアル」という意味を表し、その複合命題は論理式では「跟' [我的毛衣, 你的(毛衣), 有' (我的毛衣, [样子1]) &有' (你的(毛衣), [样子2]) &有' {減' ([样子1], [样子2]), [差数]} &~到' ([差数], 零)]」のように表示できる。ここで、この論理式について詳しく説明する。「有' (我的毛衣, [样子1])」は「“我的毛衣”には論理形式の要素[样子1]がある」の意を、「有' (你的(毛衣), [样子2])」は「“你的(毛衣)”にも論理形式の要素[样子2]がある」の意を、「有' {減' ([样子1], [样子2]), [差数]} &~到' ([差数], 零)]」は「[样子]の差は零ではない」の意を表す。用例(125)の意味は前述のすべての命題を含まなければならない。さらに、 $\gamma 1$ では「我的毛衣」と「你的(毛衣)」が「経験者格」を、「样子1」と「样子2」が「対象格」を表すので、格役割を表示する。 $\gamma 2$ は減法で差があること、つまり数量化を表している。 $\gamma 3$ は差のないこと、言い換えれば差がゼロの量に達していること、つまり一種の「着点」を表している。「~」は否定の意を表している。

例(125)の文についてタイプ理論を用いたモデルによって説明してみよう。(125)のタイプ分析は樹形図で簡略表示すると、図24となる。

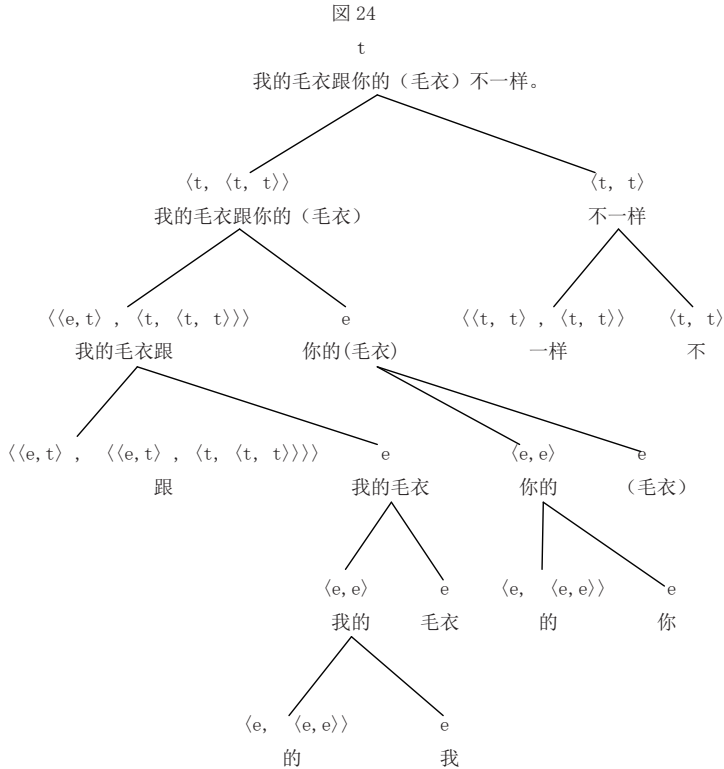
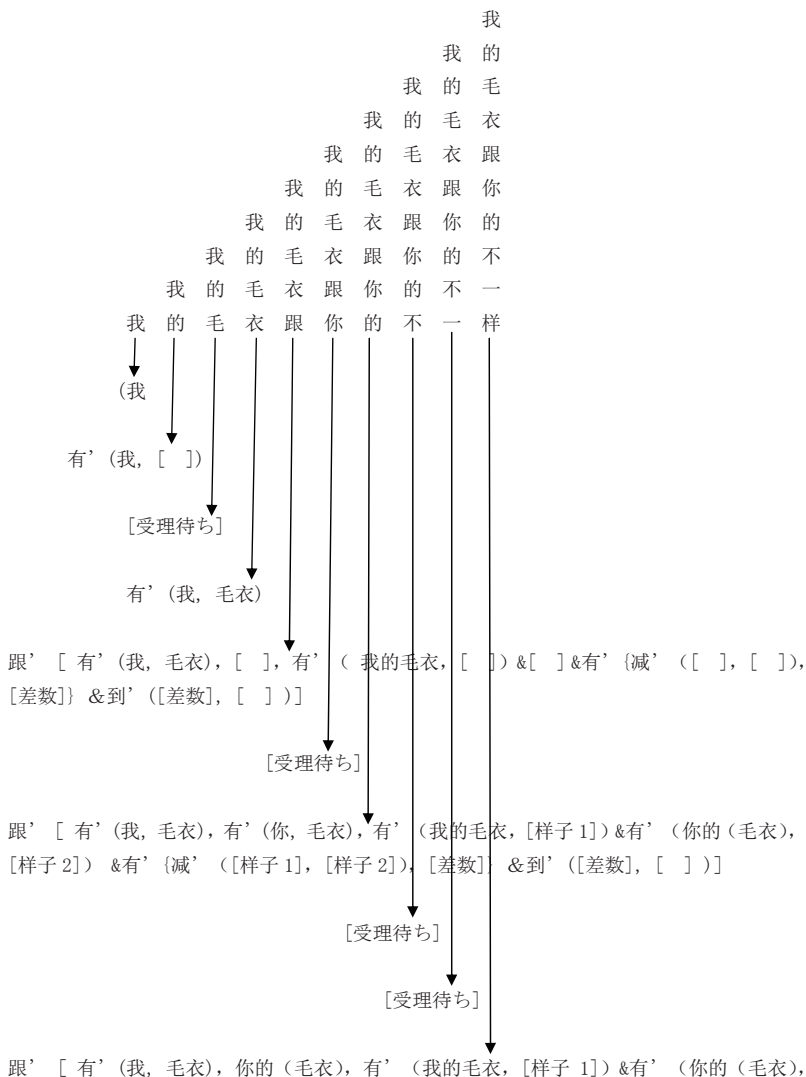


図24からみると、“跟”のタイプ式は“ $\langle \langle e, t \rangle, \langle \langle e, t \rangle, \langle t, \langle t, t \rangle \rangle \rangle \rangle$ ”の四項述語であり、“我”と“你”は個体定項“e”であり、“毛衣”は複合定項“ $\langle e, e \rangle$ ”であり、“一样”は二項述語“ $\langle \langle t, t \rangle, \langle t, t \rangle \rangle$ ”であり、“的”は二項述語“ $\langle e, \langle e, e \rangle \rangle$ ”であり、否定詞の“不”は論理タイプ“ $\langle t, t \rangle$ ”である。

次に、論理式の作成の過程を有限オートマトンと順序論理回路のモデルを使用して説明しよう。有限オートマトン、順序論理回路、入力記憶によると、用例(125)の順序論理回路は以下ようになる。

図 25

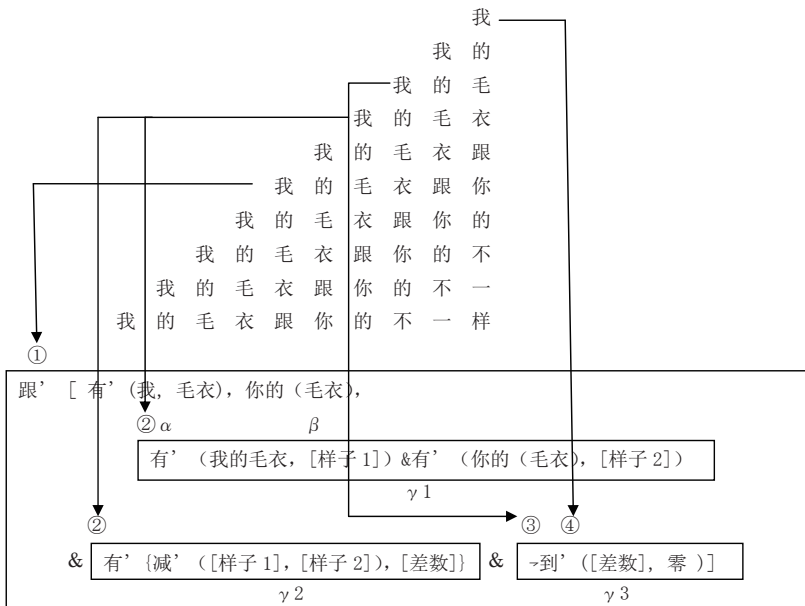


[様子 2]) &有' {減' ([様子 1], [様子 2]), [差数]} &~到' ([差数], 零)]

図 25 について説明しよう。まず“我”を入力し、論理式は“(我)になる。第二に“我的”を入力し、論理式は“有' (我, [])”になる。第三に“我的毛”を入力し、“受理待ち”の状態になる。第四に“我的毛衣”を入力し、論理式は“有' (我, 毛衣)”になる。第五に“我的毛衣跟”を入力し、ここで論理式は“跟' [有' (我, 毛衣), [], 有' (我的毛衣, []) & [] &有' {減' ([], []), [差数]} &到' ([差数], [])]”になる。第六に“我的毛衣跟你”を入力し、“受理待ち”になる。第七に“我的毛衣跟你的”を入力し、論理式は“跟' [有' (我, 毛衣), 有' (你, 毛衣), 有' (我的毛衣, [様子 1]) &有' (你的(毛衣), [様子 2]) &有' {減' ([様子 1], [様子 2]), [差数]} &到' ([差数], [])]”になる。第八に“我的毛衣跟你的不”を入力し、“受理待ち”になる。第九に“我的毛衣跟你的不一”を入力し、また“受理待ち”の状態になる。最後に“我的毛衣跟你的不一样”を入力し、文のすべての入力完了する。その論理式は“跟' [有' (我, 毛衣), 你的(毛衣), 有' (我的毛衣, [様子 1]) &有' (你的(毛衣), [様子 2]) &有' {減' ([様子 1], [様子 2]), [差数]} &~到' ([差数], 零)]”になる。

入力記憶によって文を構成するすべての成分を作りあげることができる。その生成過程は次の図 26 になる。

図 26



論理式は入力記憶によって作成される。まず①で跟' [α, β, γ 1& γ 2& γ 3]の三項関数が、第二に②でγ 1の「格役割」とγ 2の「量化」が、第三に③で否定“→”が、第四に④でγ 3の「着点」が決定される。

3.2.2.2 「不跟…一样」

この否定式の否定詞は“跟”の前に位置する。

(126) 我的毛衣不跟你的**一样**。(私のセーターは君のと同じでない。)

この文の論理式は次のようになる。

(ナイ)～ト		アリ	～ニ	～ガ	アル	～ニ
(126') →跟'	[我的毛衣, 你的 (毛衣), 有' (我的毛衣, [様子 1]) &有' (你的 (毛					
	アル	～ガ	～ト			
		α	β		γ 1	
	～ガ	ヒク	～カラ	～ヲ	ナル	～ガ ～ニ
衣), [様子 2]) &有' {減' ([様子 1], [様子 2]), [差数]} &到' ([差数], 零)]						
	アル		～ニ	～ガ		
					～トイウ同ジアル状態ニ	
		γ 2			γ 3	

次に、(126') の意味を説明する。この文は「私のセーターは君の(セーター)と“様子”という論理形式で同じである状態にある(ある)ない」という意味を表し、その複合命題は論理式では「→跟' [我的毛衣, 你的 (毛衣), 有' (我的毛衣, [様子 1]) &有' (你的 (毛衣), [様子 2]) &有' {減' ([様子 1], [様子 2]), [差数]} &到' ([差数], 零)]」のように表示できる。ここで、この論理式について詳しく説明する。「有' (我的毛衣, [様子 1])」は「“我的毛衣”には論理形式の要素[様子 1]がある」の意を、「有' (你的 (毛衣), [様子 2])」は「“(你的 (毛衣)”にも論理形式の要素[様子 2]がある」の意を、「有' {減' ([様子 1], [様子 2]), [差数]} &到' ([差数], 零)]」は「[様子]の差は零」の意を表す。「～」は否定の意を表している。用例(126)の意味は前述のすべての命題を含まなければならない。さらに、γ 1では「我的毛衣」と「你的 (毛衣)」が「経験者格」を、「様子 1」と「様子 2」が「対象格」を表すので、格役割を表示する。γ 2は減法で差があること、つまり数量化を表している。γ 3は差のないこと、言い換えれば差がゼロの量に達していること、つまり一種の「着点」を表している。

この例についてもタイプ理論を用いて説明しておこう。(126)のタイプ分析は樹形図で簡略表示すると、図27となる。

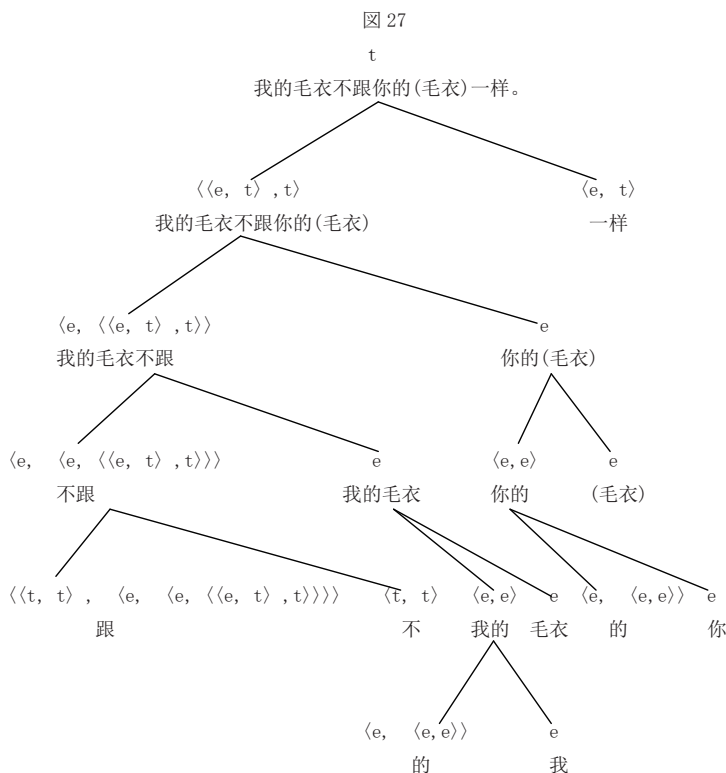


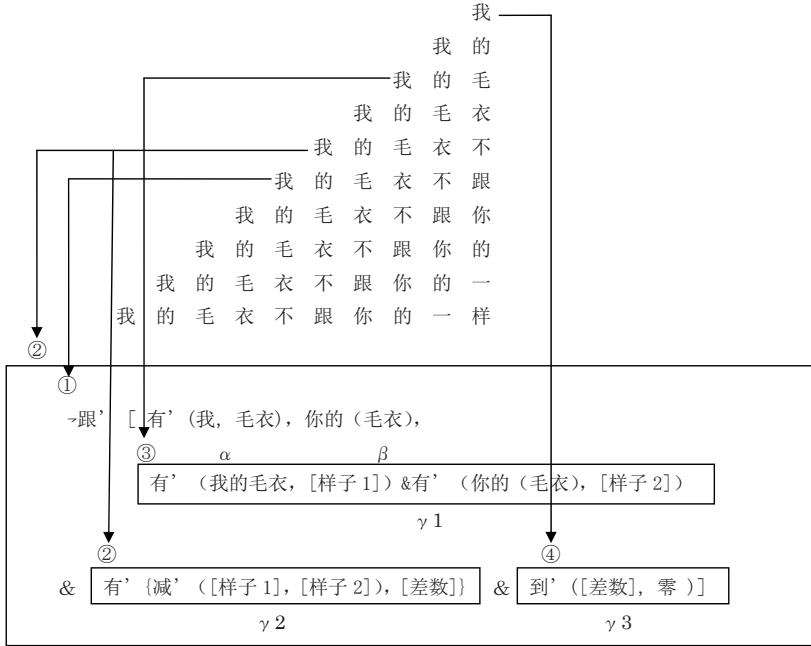
図27からみると、“跟”のタイプ式は“$\langle\langle t, t \rangle, \langle e, \langle e, \langle\langle e, t \rangle, t\rangle\rangle\rangle$”の四項述語であり、“我”、“你”と“毛衣”は個体定項“e”であり、“一样”は“$\langle e, t \rangle$”の一項述語であり、“的”は“$\langle e, \langle e, e \rangle\rangle$”の二項述語であり、否定詞の“不”は論理タイプ“$\langle t, t \rangle$”である。

[様子 2]) &有' {減' ([様子 1], [様子 2]), [差数]} &到' ([差数], 零)]

図 28 について説明しよう。まず“我”を入力し、論理式は“(我)になる。第二に“我的”を入力し、論理式は“有' (我, [])”になる。第三に“我的毛”を入力し、“受理待ち”の状態になる。第四に“我的毛衣”を入力し、論理式は“有' (我, 毛衣)”になる。第五に“我的毛衣不”を入力し、ここでは“受理待ち”になる。第六に“我的毛衣不跟”を入力し、論理式は“~跟' [有' (我, 毛衣), [], 有' (我的毛衣, [])&[]&有' {減' ([], []), [差数]} &到' ([差数], [])]”になる。第七に“我的毛衣不跟你”を入力し、“受理待ち”になる。第八に“我的毛衣不跟你的”を入力し、論理式は“~跟' [有' (我, 毛衣), 有' (你, 毛衣), 有' (我的毛衣, [様子 1])&有' (你的 (毛衣), [様子 2]) &有' {減' ([様子 1], [様子 2]), [差数]} &到' ([差数], [])]”になる。第九に“我的毛衣不跟你的一”を入力し、“受理待ち”の状態になる。最後に“我的毛衣不跟你的一样”を入力し、文のすべての入力完了する。その論理式は“~跟' [有' (我, 毛衣), 你的 (毛衣), 有' (我的毛衣, [様子 1])&有' (你的 (毛衣), [様子 2])&有' {減' ([様子 1], [様子 2]), [差数]} &到' ([差数], 零)]”になる。

入力記憶によって文を構成するすべての成分を作りあげることができる。その生成過程は次の図 29 になる。

図 29

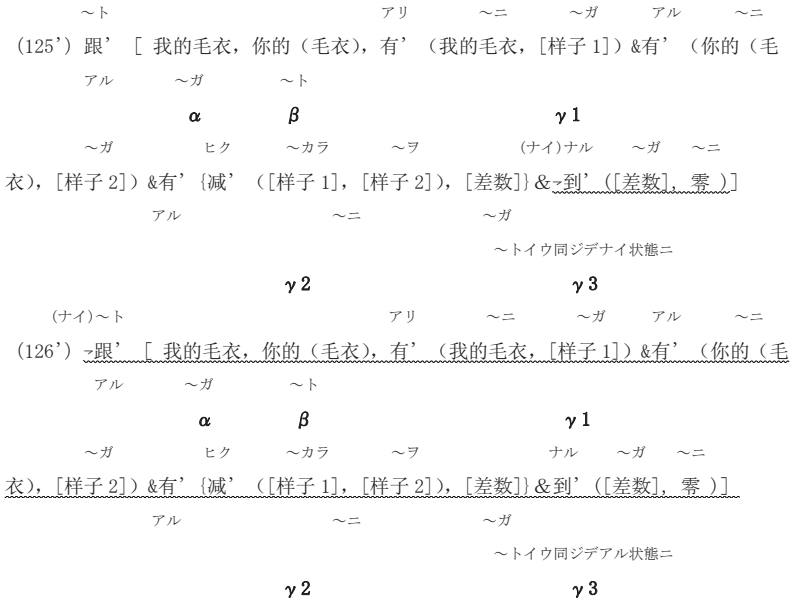


論理式は入力記憶によって作成される。まず①で否定“不”が、第二に②で跟'[α , β , $\gamma 1$ & $\gamma 2$ & $\gamma 3$]の三項関数と $\gamma 2$ の「量化」 $\gamma 1$ の「格役割」が、第三に③で $\gamma 1$ の「格役割」が、第四に④で $\gamma 3$ の「着点」が決定される。

3.2.2.3 「跟…不一样」と「不跟…一样」との異同

自然言語の意味理解からみると、「跟…不一样」と「不跟…一样」はまったく同じである。例(125)と(126)の意味はどちらも「私のセーターは君のと同じでない」である。

しかし、論理言語から考えると、「跟…不一样」と「不跟…一样」との意味構造は異なる。



(126)の否定詞の作用域は全体の文に至り(波線部分)、否定記号は“跟”の前に位置する。(125)の否定詞“不”の作用域はただ $\gamma 3$ の部分だけであり(波線部分)、否定記号は“到”の前に位置する。

3.2.3 平等比較を表す“有”構文の論理構造と文型意味

平等比較を表す“有”構文は「性質や数量が一定の程度に達している」という意味であり、いつも程度を表す副詞“那么/这么”とペアにして用いる。ここで、具体的な用例を通して、平等比較を表す“有”構文の論理構造と文型意味を説明しよう。

(127) 这种苹果有那种那么甜。(このリンゴはあのリンゴの甘さに達している。)

この文の論理式は次のようである。

～ト	アリ	～ニ	～ガ	アル	～ニ
(127') 有'	[这种苹果, 那种(苹果), 有' (这种苹果, [甜1]) & 有' (那种(苹果),				
アル	～ガ	～ト			
	α	β		$\gamma 1$	
～ガ	ヒク	～カラ	～ヲ	ナル	～ガ
	[那么甜2]] & 有' {減' ([甜1], [那么甜2]), [差数]} & 到' ([差数], 零))				
	アル	～ニ	～ガ		
			～トイウ状態ニ		
	$\gamma 2$		$\gamma 3$		

(127') は「このリンゴはあのリンゴの甘さに達している」という命題内容は論理式では「有' [这种苹果, 那种(苹果), 有' (这种苹果, [甜1]) & 有' (那种(苹果), [那么甜2]) & 有' {減' ([甜1], [那么甜2]), [差数]} & 到' ([差数], 零)}」のように表示できる。次に、この論理式について詳しく説明する。「有' (这种苹果, [甜1])」は「这种苹果」には[甜1]がある」の意を、「有' (那种(苹果), [那么甜2])」は「那种(苹果)」には[那么甜2]がある」の意を、「有' {減' ([甜1], [那么甜2]), [差数]} & 到' ([差数], 零)}」は「[甜1]から[那么甜2]を引いて差がゼロになる」の意を表す。この“到”は「達している」の意を表す。用例(127)の意味は前述のすべての命題内容を含んでいる。さらに、 $\gamma 1$ は「这种苹果」と「那种(苹果)」が「経験者格」を、「甜1」と「那么甜2」が「属格(対象格)」を表すので、「格役割」を表示する。 $\gamma 2$ は減法で差があること、つまり「数量化」を表している。 $\gamma 3$ は差がないこと、言い換えれば「差がいくらかの量に達している」こと、つまり一種の「着点」を表している。

なぜ“[那么甜2]”の論理形式の中には“那么”が必要になるのか。この文は“那种(苹果)”の“甜”が「基準となる値」である。「基準となる値」は[不確定]であってはならない。従って、[確定的]である。この文において、[確定性]を表示するのが指示詞“那么”である。これも平等比較を表す“有”構文の中に、“有”と“那么”がペアとして用いられる理由であると考えられる。

次に、論理式の作成の過程を有限オートマトンと順序論理回路のモデルを使用して説明しよう。(127)の文の有限オートマトン、順序論理回路、入力記憶に基づいて作成した論理式は次のようになる。

図 31

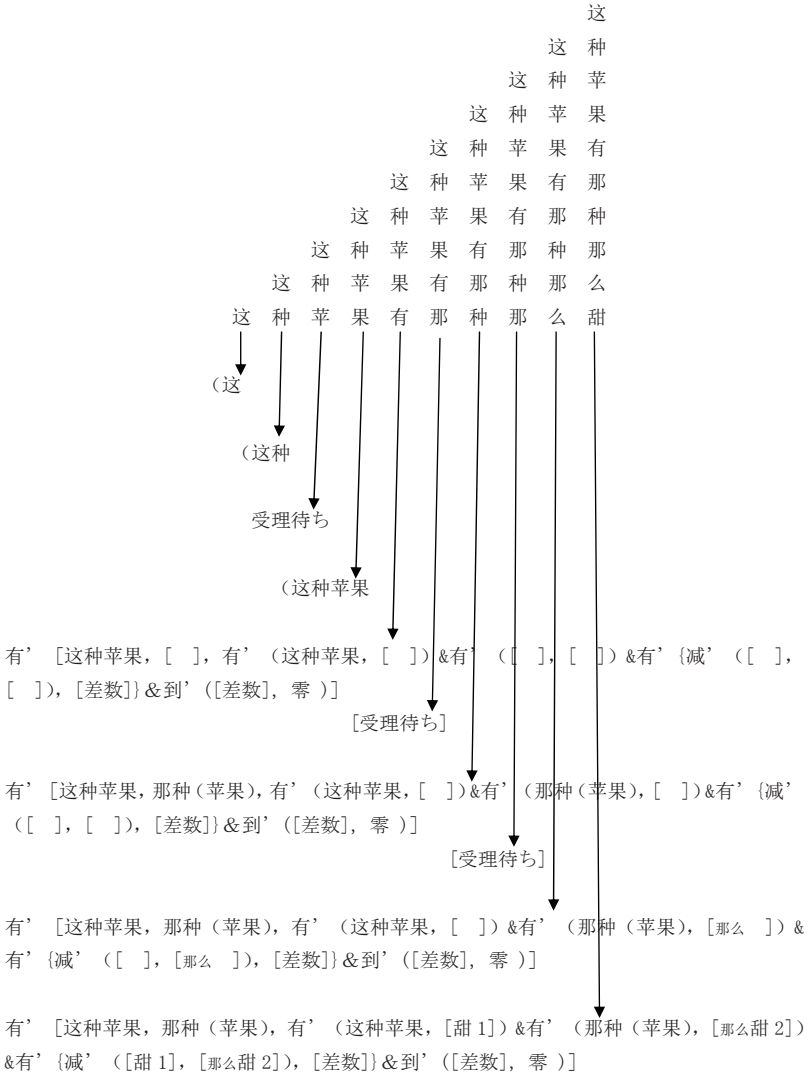
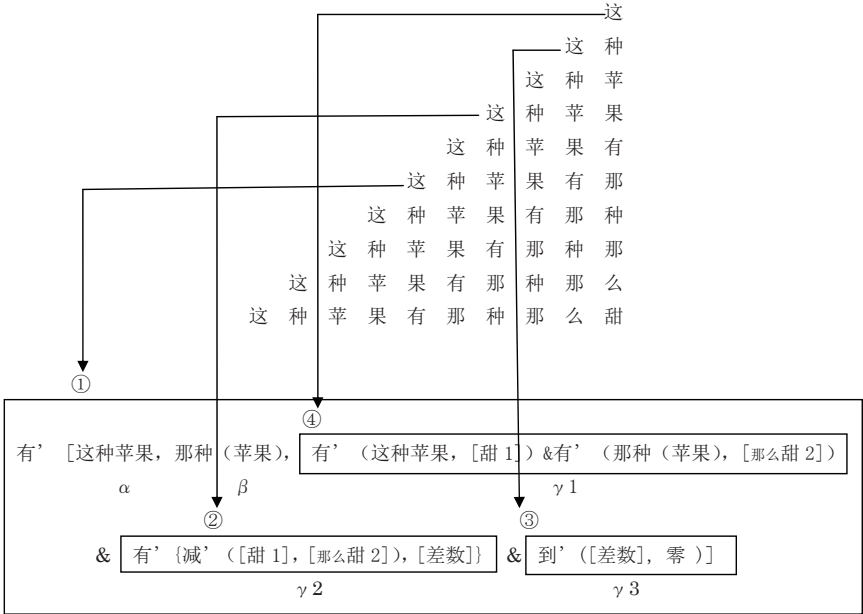


図 31 について説明しよう。まず“这”を入力し、論理式は“(这)”になる。第二に“这种”を入力し、論理式は“(这种)”になる。第三に“这种苹”を入力し、ここで[受理待ち]になる。第四に“这种苹果”を入力し、論理式は“(这种苹果)”になる。第五に“这种苹果有”を入力し、論理式は“有’ [这种苹果, [], 有’ (这种苹果, [])&有’ ([], [])&有’ {減’ ([], []), [差数]}&到’ ([差数], 零))”になる。第六に“这种苹果有那”を入力し、“受理待ち”になる。第七に“这种苹果有那种”を入力し、論理式は“有’ [这种苹果, 那种 (苹果), 有’ (这种苹果, [])&有’ (那种 (苹果), [])&有’ {減’ ([], []), [差数]}&到’ ([差数], 零))”になる。第八に“这种苹果有那种那”を入力し、ここで[受理待ち]になる。第九に“这种苹果有那种 (苹果) 那么”を入力し、論理式は“有’ [这种苹果, 那种 (苹果), 有’ (这种苹果, [])&有’ (那种 (苹果), [那么])&有’ {減’ ([], [那么]), [差数]}&到’ ([差数], 零))”になる。最後に“这种苹果跟那种一样甜”を入力し、文のすべての入力完了する。その論理式は“有’ [这种苹果, 那种 (苹果), 有’ (这种苹果, [甜 1])&有’ (那种 (苹果), [那么甜 2])&有’ {減’ ([甜 1], [那么甜 2]), [差数]}&到’ ([差数], 零))”になる。

入力記憶によって文を構成するすべての成分を作りあげることができる。その生成過程は次の図 32 になる。

図 32



論理式は入力記憶によって作成される。まず①で有' [α , β , $\gamma 1$ & $\gamma 2$ & $\gamma 3$]の三項関数が、第二に②で $\gamma 2$ の「量化」が、第三に③で $\gamma 3$ の「着点」が、第四に④で $\gamma 1$ の「格役割」が決定される。

3.2.4 平等比較を表す“有”構文の否定式の論理構造と文型意味

平等比較を表す“有”構文の否定式は否定詞“没”を用い、「X没有Y(那么/这么)…」の構造である。「XがYの性質や数量に一定の程度に達していない」という意味を表す。ここで、具体的な用例を通して、“没有”構文の論理構造と文型意味を説明しよう。

(128) 上海没有北京这么冷。(上海は北京の寒さに達していない。)

この文の論理式は次のようになる。

～ト	アリ	～ニ	～ガ	アル	～ニ	～ガ
(128')	有'	[上海, 北京, 有'	(上海, [冷1])	&有'	(北京, [这么冷2])	
	アル	～ガ	～ト			
	α	β		$\gamma 1$		
	ヒク	～カラ	～ヲ	ナル	～ガ	～ニ
	&有'	{減' ([冷1], [这么冷2]), [差数]}	&～到' ([差数], 零)]			
	アル	～ニ	～ガ			
				～トイウ状態ニ		
	$\gamma 2$			$\gamma 3$		

(128')は「上海は北京の寒さに達していない」という命題内容を論理式で「有' [上海, 北京, 有' (上海, [冷1])&有' (北京, [这么冷2])&有' {減' ([冷1], [这么冷2]), [差数]}&～到' ([差数], 零)]」のように表示できる。次に、この論理式について詳しく説明する。「有' (上海, [冷1])」は「“上海”には[冷1]がある」の意を、「有' (北京, [这么冷2])」は「“北京”には[这么冷2]がある」の意を、「有' {減' ([冷1], [这么冷2]), [差数]}&～到' ([差数], 零)]」は「[冷1]から[这么冷2]を引いて差がゼロにならない」の意を表す。ここの“到”は「達している」の意を表す。「～」は否定の意を表す。用例(128)の意味は前述のすべての命題内容を含んでいる。さらに、 $\gamma 1$ は「上海」と「北京」が「経験者格」を、「冷1」と「这么冷2」が「属格(対象格)」を表すので、「格役割」を表示する。 $\gamma 2$ は減法で差があること、つまり「数量化」を表している。 $\gamma 3$ は差がないこと、言い換えれば「差がいくらかの量(ゼロ)に達している」こと、つまり一種の「着点」を表している。この文の否定の作用域は $\gamma 3$ で、従って否定記号は“到”の前に位置する。

なぜ“没有”構文において、“[这么冷2]”の論理形式の中に“这么”が必要になるのか。この文は“北京”の“冷”が「基準となる値」である。「基準となる値」は[不確定]であってはならない。従って、[確定的]である。この文において、[確定性]を表示するのが指示詞“这么”である。これが“没有”構文の中に、“有”と“这么/那么”がペアとして用いられる理由であると考える。さらに、話し手が北京にいる場合には“这么”を用い、話し手が北京以外のところにいる場合には“那么”を用いる。

この文についてもタイプ理論を用いたモデルによって説明してみよう。(128)のタイプ分析は樹形図で簡略表示すると、図33となる。

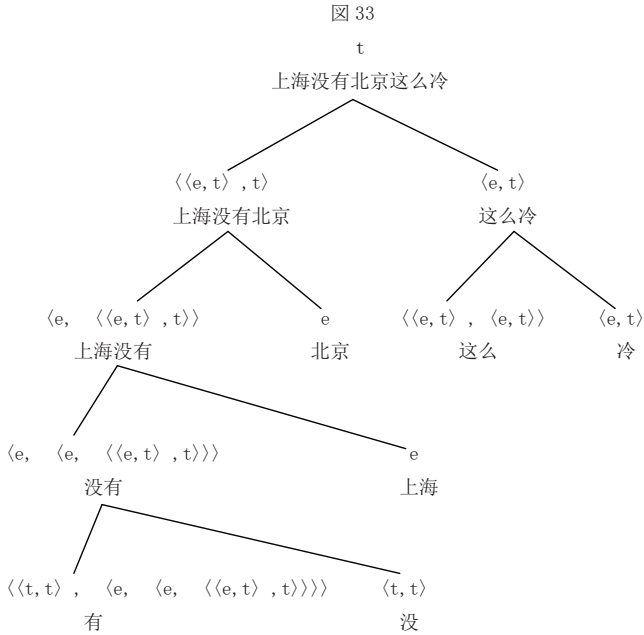


図33からみると、“有”のタイプ式は“<<t, t>, <e, <e, <(e, t), t>>>”の四項述語であり、“上海”と“北京”は個体定項“e”であり、“这么”は“<<(e, t), <(e, t)>>”の二項述語であり、“冷”は“<(e, t)>”の一項述語であり、否定詞“没”は論理タイプ“<t, t>”である。

次に、論理式の作成の過程を有限オートマトンと順序論理回路のモデルを使用して説明しよう。この文の有限オートマトン、順序論理回路、入力記憶に基づいて作成した論理式は次のようになる。

図 34

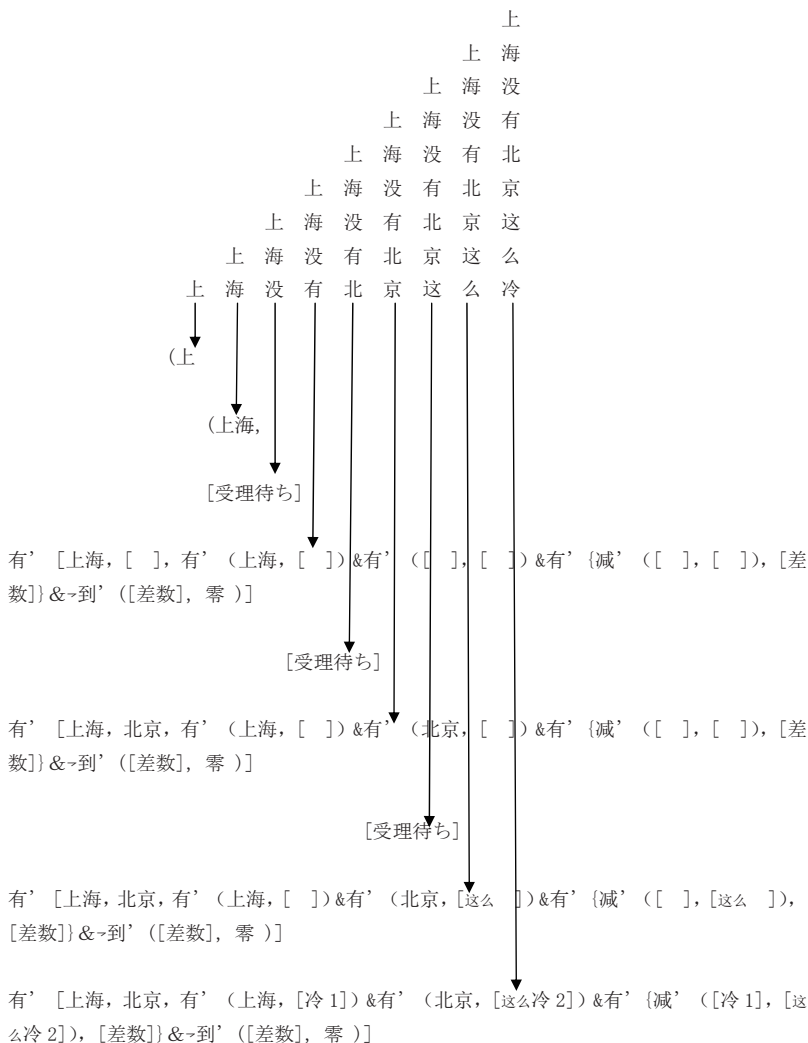
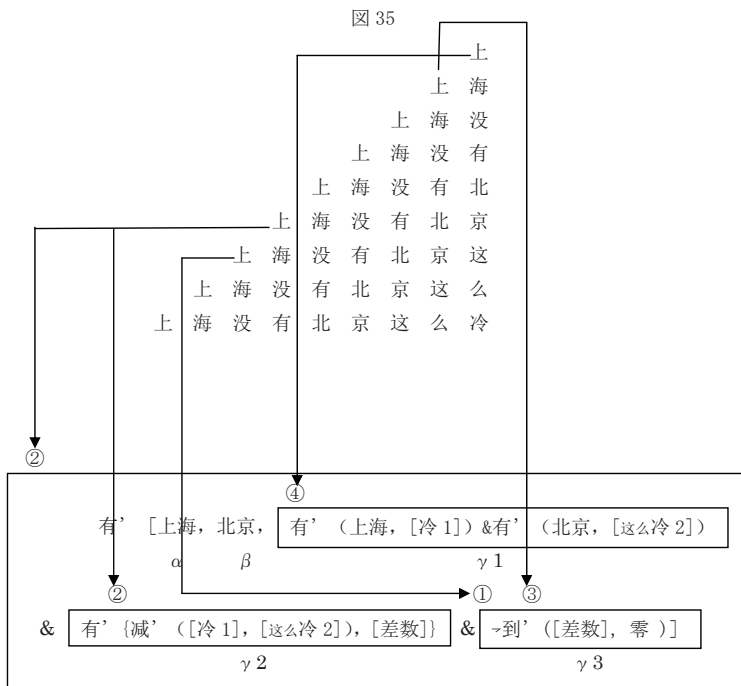


図 34 について説明しよう。まず“上”を入力し、論理式は“(上)”になる。第二に“上海”を入力し、論理式は“(上海)”になる。第三に“上海没”を入力し、ここで[受理待ち]になる。第四に“上海没有”を入力し、論理式は“有’ [上海, []], 有’ (上海, [])&有’ ([], [])&有’ {減’ ([], []), [差数]}&→到’ ([差数], 零)”になる。第五に“上海没有北”を入力し、ここで“受理待ち”になる。第六に“上海没有北京”を入力し、論理式は“有’ [上海, 北京, 有’ (上海, [])&有’ (北京, [])&有’ {減’ ([], []), [差数]}&→到’ ([差数], 零)”になる。第七に“上海没有北京这”を入力し、“受理待ち”になる。第八に“上海没有北京这么”を入力し、論理式は“有’ [上海, 北京, 有’ (上海, [])&有’ (北京, [这么])&有’ {減’ ([], [这么]), [差数]}&→到’ ([差数], 零)”になる。最後に“上海没有北京这么冷”を入力し、文のすべての入力完了する。その論理式は“有’ [上海, 北京, 有’ (上海, [冷 1])&有’ (北京, [这么冷 2])&有’ {減’ ([冷 1], [这么冷 2]), [差数]}&→到’ ([差数], 零)”になる。

入力記憶によって文を構成するすべての成分を作りあげることができる。その生成過程は次の図 35 になる。



論理式は入力記憶によって作成される。まず①で否定“-”が、第二に②で有’ [α, β, γ1&γ2&γ3]の三項関数とγ2の「量化」が、第三に③でγ3の「着点」が、第四に④でγ1の「格役割」が決定される。

4. まとめ(二)

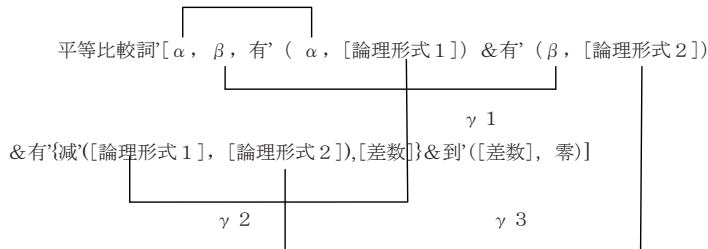
本章で、中国語における平等比較構文の論理構造と文型意味について考察した。表にまとめると、次の図 36 になる。

図 36

	肯定文型	文型意味	論理構造	その否定式	否定式の論理式
平等比較構文	古代中国語 「X + 形容詞 + 如/若/似/同 + Y」	X は Y の性質・程度と同じである。	如/若/似/同' (α , β , $\gamma 1$ & $\gamma 2$ & $\gamma 3$)	「X + 形容詞 + 否定詞 + 如/若/似/同 + Y」	\neg 如/若/似/同' (α , β , $\gamma 1$ & $\gamma 2$ & $\gamma 3$)
	現代中国語 「X 跟 Y 一样 + 形容詞」	どの面についても X は Y と同じである	跟' (α , β , $\gamma 1$ & $\gamma 2$ & $\gamma 3$)	「X 不跟 Y 一样 + 形容詞」	\neg 跟' (α , β , $\gamma 1$ & $\gamma 2$ & $\gamma 3$)
				「X 跟 Y 不一样 + 形容詞」	跟' (α , β , $\gamma 1$ & $\gamma 2$ & $\neg \gamma 3$)
現代中国語 「X 有 Y 那么/这么 + 形容詞」	X の性質や数量が一定の程度 (Y) に達している	有' (α , β , $\gamma 1$ & $\gamma 2$ & $\gamma 3$)	「X 没有 Y 那么/这么 + 形容詞」	有' (α , β , $\gamma 1$ & $\gamma 2$ & $\neg \gamma 3$)	

各文型の用例の分析からみると、平等比較構文の論理構造は以下のようにまとめることができる。

図 37



演繹モデル

この構造の中の α 、 β 、[論理形式 1]、[論理形式 2] は図 37 の通りで、すべて「演繹モデル」に従う。先行する命題の第一項は α に繰り上がり、第二の命題の第一項は β に繰り上がる。この式の比較対象は[確定]していなければ演算ができない。そこで、比較対象の

論理形式に添え字の“1”と“2”を付加する。全体からみると、 α 、 β と γ の三項関数項の論理関係がはっきりしている。

平等比較構文の比較詞は「如/若/似、跟、有」などがある。比較する対象の「X」と「Y」はほとんど高低・優劣がなく、論理式は「平等比較詞[α , β , 有’(α , [論理形式1]) & 有’(β , [論理形式2]) & 有’{減’([論理形式1], [論理形式2]), [差数]}& 到’([差数], 零)]」である。この式は「 α ガ β ト γ トイウ状態ニアル」の意を表す。さらに、“ γ ”の項を“ γ 1”、“ γ 2”、“ γ 3”に下位分類ができる。“ γ 1”は「格役割」を表し、“ γ 2”は減法で差があること、つまり「数量化」を表し、“ γ 3”は差がないこと、言い換えれば「差が零に達している」こと、つまり一種の「着点」を表している。これが平等比較構文の論理構造およびそれが表す意味である。

次の章では中国語における「差異比較構文」の論理構造と文型意味について解析する。

第三章 中国語における差異比較構文の研究

1. 「差異比較構文」とは何か

差異比較構文（“差比文”）について、『馬氏文通』は「差異比較構文とは、形容詞を用いて、比較する二つの対象の間で高低、優劣に違いがある比較構文である」と定義している（馬建忠 1898：138）。

呂叔湘は「優劣（“高下”）の比較」について、「ある性質に基づいて、二つの事物の比較を行う。これにより、両者の優劣、大小、長短、難易などを区別している。比較する関係により、“優”から“劣”への関係には“高比較(胜过)”の関係であり、“劣”から“優”への関係は“低比較(不及)”の関係であり、“優劣”がなれば“同一(均齐)”の関係であり、個体が全体を超えるのは“最上級(尤最)”の関係である。」と論じている（呂叔湘 1942:359）。

劉焱は差異比較構文について、「比較前項と比較後項の間に量的状態において、一定の差が存在しているものである」と定義している（劉焱 2004：43）。

つまり、比較主体(X)と比較客体(Y)がある面において、異なるレベルにある（すなわち“X>YあるいはX<Y”）の比較構文が「差異比較構文」である。たとえば、

(1) 我 比 他高。(私は彼より身長が高い。)

↓ ↓
X > Y (身長において)

(2) 这条裤子比那条裤子短。(このズボンはこのズボンより短い。)

↓ ↓
X < Y (長さにおいて)

2. 先行研究

2.1 差異比較構文の比較する範疇と文型構造についての研究

2.1.1 馬建忠(1898)による研究

『馬氏文通』は「差異比較構文とは、形容詞を用いて、比較する二つの対象の間で高低、優劣に違いがある比較構文である。（馬建忠 1898：138）」と定義している。普通は「于」、「於」、「乎」などの語彙を用いて、比較する項目の間にある形容詞の後ろに位置する。さらに、具体的用例を通して、説明している。

(3) 季氏富於周公。(季氏は周公より富んでいた³⁷。)(『论语・先進』)

例(3)について、「季氏」と「周公」が比較する二つの対象であり、その比較の基準は“富”（“富”は形容詞）であり、比較を表す語彙は“於”である。この文の意味は「季氏」と「周公」を“富”において比較し、その差は“季氏”が勝るである。従って、「季氏与周公较富，则此差於彼」といってもよい。（馬建忠 1898：138 参照）

差異比較構文の“于”およびその後ろの成分は“焉”に書き替えることができる。この

³⁷ 『中国の古典 1・論語』(藤堂明保訳昭和六十一年七月)の日本語訳より。

場合の“焉”は“于此”の意を表し、前には“有”、“无”、“莫”などを用いなければならない。たとえば、

(4) 晉國，天下莫强焉。(晋国は天下之焉より強きは莫³⁸き。)(『孟子・梁惠王章句上』)

例(4)の“莫强焉”は“莫强于此”の意である。“此”は“晋国”のことを指す。

さらに、“于/於”を省略してもよい。

(5) 退而让頗，名重太山。(名は太山より重し³⁹。)(『史记・廉颇列传』)

例(5)の“名重太山”は“名重于太山”の省略である。

2.1.2 赵元任(1968)による研究

赵元任(1968)は形容詞の比較級を「明示比較」と「暗示比較」の二種類に分けている。比較標識“比”が文の中に現れる文は「明示比較文」であり、比較標識“比”が文の中に現れない文は「暗示比較文」である。たとえば、

(6) 北风说：我的本事比你 (的) 大。(北風は「私の腕前は君より上だ」と言った。)

(7) 到底是太阳的本事大。(結局、太陽の腕前が上だ。)

例(6)は「明示比較」であり、例(7)は「暗示比較」である。

日常生活において、「明示比較」がよく用いられる形式は二つある。一つは“比”に替わって“品”を用いる。たとえば、

(8) 这个品那个长。(これはそれより長い。)

赵氏は「“品”が方言の中の“比”の変化音である」と説明した。

もう一つは「短い文」を用いる比較である。ここで、赵氏がいわゆる「短い文」というのは比較客体の中心語の省略と理解することができる。たとえば、

(9) 我的铅笔比你的尖。(私の鉛筆は君のより鋭い。)

例(9)について、赵氏は“你”の後ろの“鉛筆”が省略された」と説明している。

「明らかな比較級」の相反式は「不+比」の構造である。たとえば、

(10) 我不比他懒。(私は彼よりものぐさでない。)

なぜ「明らかな比較級」の相反式は「比+不」の構造ではないか。この理由について、赵氏は次の用例を使用して、このように解釈している。

(11) 这个比那个不好。(これはあれよりよくない。)

この文の“不”は連動式の第二動詞の一部であり、第二動詞と結合して複合詞になっている。この“不好”は第二動詞の“好”の相反式および反対式であり、“坏”の意を指す。

「含蓄の比較」は簡単な相反式がない。普通は、“不是”を用いて否定する。たとえば、

(12) A: 他们谁高?(彼らのだれが背が高いか。)

B: 老二高。(二男坊が高い。)

A: 不，我想不是老二高。(いいえ、二男坊が高いと思わない。)

³⁸ 『中国の古典4・孟子』(大島晃昭昭和五十八年五月)の日本語訳による。

³⁹ 『漢文入門』(小川環樹・西田太郎訳)の日本語訳による。

さらに、赵氏は「形容詞の比較級の語尾は形容詞の後ろにおける轻声等位目的語の“一点儿”である」ことを指摘した。しかし、明示比較と暗示比較に対して、“一点儿”は文の中に現れなくてもよい。例(6)と(7)の文の中には“一点儿”を用いていない。もし“大一点儿”あるいは“大点儿”を使用しても、意味はほぼ変わらない。

2.1.3 刘月华・潘文娛・故鞞 (1983)による研究

刘月华・潘文娛・故鞞氏は『实用現代漢語語法』において、事物・性質の差異と優劣を比較する文型を四つに分けて考察している。

2.1.3.1 “比”構文

刘月华等は“比”構文の構造を二種類に分けている。

2.1.3.1.1 「A(主語)+比B(状況語)+述語」の構造

この構造において、述語としては形容詞、動詞および形容詞連語、動詞連語、主述連語などが使用される。たとえば、

(13) 这座山比那座山高。(この山はあの山より高い。)

(14) 我父亲比我母亲身体好。(父は母より調子がいい。)

ここで、刘月华等は述語の状況について考察している。

2.1.3.1.1.1 述語が形容詞である場合

述語が形容詞である場合には、形容詞の後に補語とする“一点儿”、“一些”、“多了”、“得多”あるいは“数量詞”を添えることができる。たとえば、

(15) 这座山比那座山高一些。(この山はあの山より少し高い。)

(16) 往后的日子比这好一百倍。(これからの生活は現在より百倍よくなる。)

2.1.3.1.1.2 述語が“有+抽象名詞”である場合

述語が“有+抽象名詞”である場合には、述語の後に“多了”、“得多”を添えることができる。しかし、具体的な差異を表す“数量詞”を添えることができない。たとえば、

(17) 小王比他师父有办法多了，办事也很灵活。(王君は彼の師匠よりやり手だ、また融通性を持っている。)

また、“抽象名詞”の前に“一点儿”、“一些”を添えることができる。

(18) 老张的看法比他的有一些道理。(張さんの考えは彼より少し道理がある。)

2.1.3.1.1.3 述語が“心理活動”を表す動詞である場合

述語が“心理活動”を表す動詞である場合には、述語の後に“一点儿”、“一些”、“得多”等の補語を添えることができる。たとえば、

(19) 姐妹两个都喜欢跳舞，姐姐比妹妹更喜欢一些。(姉妹ともダンスが好きだが、姉は妹よりもっと好きだ。)

2.1.3.1.1.4 述語が一般の動詞である場合

述語が一般の動詞である場合には、述語の動詞の前に“早”、“晚”、“先”、“后”、“难”、“好(易)”、“多”、“少”などの状況語を添えることができるし、後に目的語あるいは“一

点儿”、“一些”、“多了”、“得多”などの補語をを添えることもできる。たとえば、
 (20) 这些汉字比那些汉字难写一些。(これらの漢字はあれらの漢字よりちょっと書きにくい。)

2.1.3.1.1.5 述語が“一般の動詞+形容詞”である場合

述語が“一般の動詞+形容詞”である場合には、形容詞の後に“一点儿”、“一些”、“多了”、“得多”などの補語をを添えることもできる。たとえば、
 (21) 她比我睡得晚一点儿。(彼女は私よりちょっと遅く寝ていた。)

2.1.3.1.1.6 述語が“可能動詞+動詞”である場合

述語が“可能動詞+動詞”である場合には、動詞の後に“一些”、“多了”などの補語を添えることもできる。この構造の中の“可能動詞”は“会”、“能”などのような動詞である。たとえば、

(22) 她比我会说话多了。(彼女は私よりけっこうしゃべれる。)

2.1.3.1.1.7 述語が“増加あるいは減少”を表す動詞である場合

述語が“増加あるいは減少”を表す動詞である場合には、動詞の後に目的語とする数量詞あるいは名詞連語を添えることができる。

(23) 今年这个村粮食亩产比几年前增加了二百多公斤。(今年、この村の食糧のムー当たりの生産量は何年前より二百キログラムぐらい増えた。)

2.1.3.1.2 「主語+A比B(状況語)+述語」の構造

この構造は「同一の事物が異なる時間あるいは異なる場所において異なる状況がある」の意を表す。たとえば、

(24) 他现在比以前进步多了。(彼は現在が以前よりずいぶん進歩している。)

(25) 你的发言这次比上次好多了。(君の発言は今回が前回よりずいぶんよくなっている。)

2.1.3.2 “不比”構文

刘月华等は「“不比”構文の構造は「A不比B…」である。形式からみると、“不比”構文は“比”構文の否定式であるが、実際は“比”構文の否定式は「A没有B…」である」と指摘している。“不比”構文の基本的意味は「AがBとほぼ同じ」であり、すなわち「AとBの両者は差があきらかでない」の意を表す。ここの「差があきらかでない」ということは二つの意味を含んでいる。一つは「差がほぼない」の意で、この場合は「平等比較」を表す。二つ目は「AがBを少し超えるあるいは及ばない」の意で、この場合は「差異比較」を表す。たとえば、

(26) A：小李比你高吧？(李さんは君より背が高いか。)

B：他不比我高。我一米七，他也一米七。(彼は私より背が低い。私の身長は1.7メートルであり、彼の身長も1.7メートルである。)

(27) A：小李比你高吧？(李さんは君より背が高いか。)

B：他不比我高，可能比我还矮一点。（彼は私より背が高くなく、私よりちょっと背が低いかもしれない。）

例(26)は「AとBの差がほぼない」の意を表し、「平等比較構文」である。例(27)は「AがBを少し超えるあるいは及ばない」の意を表し、「差異比較構文」である。

2.1.3.3 “没有”構文

刘月华等は「“没有”構文は“没有”を用いて比較する文である」と定義している。この構造は「A(主語)+没有B(状況語)+述語」であり、「AがBの程度に及ばない」の意を表す。この“B”は比較の基準である。意味上から考えると、「A没有B…」を表す意味は「B比A…」であり、すなわち「A没有B好” = “B比A好”であるから、「A没有B…」は「A比B…」の否定式であるはずだと思う。

“没有”構文の構造の特徴は以下のようである。

(一) 述語の前に程度副詞“那么/这么”を用いる。たとえば、

(28) 他们那里没有这儿这么冷。（彼らのところはこのような寒さではない。）

(二) 述語として用いられる品詞は“形容詞”、“心理状態を表す動詞”、“一般動詞+情態補語”、“可能動詞+動詞”の四種類である。たとえば、

(29) 他唱歌没有小李唱歌好。（彼の歌は李さんのように上手でない。）

(30) 姐姐没有弟弟那么爱打球。（姉は弟のようにバスケットボールが好きではない。）

(31) 我没有他来得那么早。（私は彼のように早く来ていない。）

(32) 她没有你这么会造句。（彼女は君のように文を作ることができない。）

2.1.4 太田辰夫(1987)による研究

太田辰夫(1987)は「差異比較構文は絶対的なものと相対的なものがあり、絶対的なものは明確さを欠くきらいがあり、決定に困難なことがある」と指摘している。

2.1.4.1 絶対的差異比較

絶対的な差異比較を表す場合、現代中国語では形容詞の前に“更”を用いる。

(33) 这个更好。（これはもっとよい。）

ところが古代中国語においては、これに相当する言い方がない。

次に、太田氏は高名凱の『汉语语法论』に取り上げた差異比較を表す六つの方法(“更”、“益”、“愈”、“尤”、“於”、“较…为…”)について考察している。その論述は以下のようになる。古代の“更”は現代語のそれとは違って差異比較を表すものではないし、“益”と“愈”は漸層を表すもので比較ではない。“尤”は特殊なもので、これを差異比較とすることも一理があるが、最上級の一種とみることもでき、“於”と“较…为…”は差異比較ではあるが相対的なもので、ことに後者は近世の口頭語に基づいてうみ出された新しい文語である。最後に、「古代中国語には現代語におけるごとき明確な絶対的差異比較は存在しないといっても過言ではないのである」という結論を出している。(173頁参照)

差異比較を表す“更”の意味変遷は以下のようなものである。

古代中国語における“更”は“复”、“再”（再び）の意で、同様の動作が二度行われることを意味する。それゆえ、動詞の修飾語として用いられたもので、現代語のごとく形容詞を修飾するものではない。

(34) 虞不腊矣；在此行也，晋不更舉矣。（虞国は腊祭をするまでもないであろう、この軍のついでに虞もまた滅され晋は二度兵をあげるまでもないであろう。）（『左传』）

時代が降ると“更”は漸層を示し、いよいよという意味に用いられるようになった。

(35) 去之所以更遠。（これを去ることいよいよ遠いゆえんである。）（『世说新语・德行』）

(36) 蝉噪林逾静，鳥鳴山更幽。（蝉さわいで林いよいよ静かに、鳥ないて山さらに幽なり。）（王籍詩）

例(35)と(36)のように“更”が“远”と“幽”のごとき形容詞についたものは、漸層であっても比較の語気を生じやすい。両者の区別は文脈によることが多く、時間の先後する二つの事物を比較すれば漸層となり、時間的なものがなければ差異比較のようにとれる。たとえば、

(37) 任是深山更深处，也应無計避征徭。（たとい深山のもっと深いところでも租税と夫役とはのがれようがないであろう。）（杜荀鹤詩）

2.1.4.2 相対的差異比較

相対的差異比較のうち単に、「A比B…」のごときものを基本的なものとする。このほかこれに絶対的差異比較を併用したものや、補語をとるものなどがある。相対的差異比較には二つの語順がある。すなわち、

A式：A＋形容詞＋前置詞（介詞）＋B

B式：A＋前置詞（介詞）＋B＋形容詞

A式は古代中国語における語順であるが、近世においてもなお用いられる。B式は近世以降にのみ存するもので現代中国語ではもっぱらこれを用いる。

2.1.4.2.1 A式(古代中国語式)

まず、太田氏はA式に用いられる前置詞について考察している。

2.1.4.2.1.1 “于（於）”を用いるもの

“于（於）”を用いるものは古代より唐五代頃まで用いられたらしい。

(38) 季氏富於周公。（季氏は周公より富んでいた。）（『论语・先進』）

(39) 苛政猛于虎。（苛政は虎よりもあらあらしい。）（『礼記・檀弓』）

2.1.4.2.1.2 “过”を用いるもの

太田氏の考察により、現在でも広西南部では、「金重过羽毛（金は羽毛より重い）」のごとき言い方があるという。古代中国語のよい例は見当たらない。例えば次のごときは、ややこれに類似しているが、形容詞の後に用いたものでなく、これを比較文といえるかどうか疑わしい。

(40) 由也好勇过我。(由は勇を好むこと私以上である。)(『论语・公冶長』)

次のような例はほぼ比較の表現に近いものと考えてよいであろう。

(41) 貧於揚子三倍，老过榮公六七年。(揚子の二三倍も貧しく、榮公よりも六七歳年となっている。)(白居易詩)

(42) 直如富过石崇家，誰免身為墳下土。(たとい石崇よりも富むとも、誰が墓の土となるのを免がれようか。)(『十二時』)

2.1.4.2.1.3 “如”を用いるもの

“如”は元來同動詞で類似を表すから、比較に用いられるときは平等比較である。太田氏の考察により、“如”が差異比較に転じたものは近世に多く、唐代におこった。平等比較との区別がつかないものも多い。平等比較には「如斗大」のごとき語順ができたので、「大如斗」のごときはこれと区別して差異比較に用いられた。たとえば、

(43) 虽然诗胆大如斗。(詩胆は一斗ますより大であるが。)(陸龟蒙詩)

2.1.4.2.1.4 “似”を用いるもの

(44) 本寺遠於日，新詩高似雲。(本寺は日よりも遠く、新詩は雲よりも高し。)(姚合詩)

(45) 更饒富似石崇家。(たとい石崇より金持ちでも。)(『十二時』)

太田氏の考察により、“似”を用いるものができたのは唐代で、用いられることは“如”よりも多いようである。“如”と同様に平等比較が強調されて差異比較となったものかと考えられるが、あるいはこの場合の“似”は同動詞から出たものではなく、それとは別の助動詞で、それが形容詞に用いられて差異比較となり、のち“如”がそれとの類似から差異比較に使われるようになったものかもしれない。

さらに、古代中国語では差異比較に副詞や補語を併用し、その差がどの程度であるかいうことがないようである。しかし、唐代以後ではそれが可能となったが、A式の語順ではなお十分に発達しなかった。

副詞をとる例は次のようである。

(46) 眼见的泪点儿更多如他那秋夜雨。(涙が秋夜の雨よりも更に多いことはあきらかである。)(『潇湘雨』)

(47) 你的更勝似我的。(あなたのは私のより更に優れている。)(『望江亭』)

補語をとる例は次のようである。

(48) 小如员外三四十岁。(員外よりも三四十歳若い。)(『警世通言』)

2.1.4.2.2 B式(現代中国語式)

太田氏は「B式は前置詞として“比”を使用し、その語順もA式(古代中国語)と異なる。これはおそらく“比”が本来の前置詞ではなく、動詞から出ているところからきているであろう(p. 176)」と論じている。

“比”を用いるものは唐代からみられるが、「くらべる・なぞらえる」の意味であるが、これをただちに差異比較とすることには疑問がある。たとえば、

- (49) 若比李三優自勝。(もし李三にくらべたらまだましである。)(白居易詩)
- (50) 官職比君雖校小。(官職は君にくらべるとやや下であるが。)(白居易詩)
のごときなお差異比較とはいえないが、次のごときものはこれを差異比較としてもさしたる不可はない。
- (51) 色比瓊漿猶嫩。(色は瓊漿よりなお柔らかい。)(郎士元詩)
- “比”による比較構文に副詞・助形詞(後助形容詞)・補語を用い、差異比較をさらに細かく表現することは、白話の特徴である。
- 副詞を併用する場合には、“还・更”を用いる。たとえば、
- (52) 我这支笔比刀子还快哩。(私のこの筆は刀よりもっと鋭い。)(『教孝子』)
- (53) 你比我更傻。(あなたは私よりもっと馬鹿です。)(『紅』)
- 補語を用いる場合には、数詞を含んだ数量比較補語である。
- (54) 比梅花瘦几分。(梅よりどれくらい痩せたか。)(程垓詩)
- (55) 比你这淫婦好些儿。(お前みたいなたよりましだ。)(『金瓶梅』)

2.1.5 黎锦熙(1992)による研究

黎锦熙(1992)は差異比較構文について、「比較の勝る方はつねに“主句”にある。その理由は、意味上からみると比較主体が中心から、“付属句”⁴⁰の位置を前置と後置に分けるのは接続詞によって決められる」と論じている。

- (a) “高比較”を表す接続詞を用いる場合には、“付属句”はいつも後置する。たとえば、
- (56) 我和你谈话一夜，赛过我自己读书十年。(君と一晚話すのは、私が自ら十年間の勉強す

↓ ↓
“接続詞” “付属句”

ることに勝る。)

- (b) “低比較”を表す接続詞を用いる場合には、“付属句”はいつも前置する。たとえば、
- (57) 我在学堂坐着，心里也闷；不如往他家放牛，倒快活些。(私は教室に座っても退屈だ。

↓ ↓
“付属句” “接続詞”

彼のお宅で牛飼いするほうがいい、たのしい。)

図で説明すると、次のようになる。

⁴⁰ 『新著国語语法(黎锦熙1992)』の中に、「主句」は「比較主体」を表し、「付属句」は「比較客体」を表すと考える。

図1(黎锦熙 1992 : 225)



差異比較構文の接続詞は二種類ある。

(一) “高比較”を表す接続詞

赛过(赛似、胜过、过于)、强于(强如)など

(二) “低比較”を表す接続詞

不如、不及、没有、差似(次于)など

“胜”、“强”、“差”などは形容詞であり、“过”、“于”、“似”などの接続詞と結合していると分析できる。たとえば、

(58) 我从二十岁上進学，到而今做了三十七年的秀才。一日穷似一日。(私は二十歳の頃に“進士”になり、現在まで三十七年間“秀才”になっている。日々貧しくなっている。)

(59) 这繁华的都市，在没入于一个梦境，一天深似一天的；那梦境的气氛，一天浓似一天的。(この賑やかな都市は夢の世界に入っているし、日々深くなっている。あの夢の世界の雰囲気も日々濃くなっている。)

図で分析すると、次のようである。

図2(黎锦熙 1992 : 226)



2.1.6 刘焱(2004)による研究

刘焱(2004)は「差異比較構文は比較前項と比較後項が量的状態において、一定の差が存在しているものである」と定義している(刘焱 2004 : 43)。また、「差異比較は“低比較”、“高比較”と“最上級比較”⁴¹⁾の三種類を含んでいる」ことを指摘している。

2.1.6.1 低比較

ここで、刘焱氏は“低比較”を表す文型を四種類に分けて、考察している。

⁴¹⁾ 本章では“低比較”と“高比較”について説明し、“最上級比較”については次の章で説明する。

2.1.6.1.1 「X没有Y R」

(60) (他)也没有胡迪箐那样创造现实的勇气和魄力。(彼も胡迪箐のように現実をつくる勇氣と氣迫を持っていない。)(『93 中篇小说选』)

2.1.6.1.2 X不如Y (R)

(61)他不如妹妹聪明。(彼は妹の賢さに及ばない。)

2.1.6.1.3 「X比较R」

(62)参加当时各派群众组织的群众,绝大多数是好的和比较好的,坏人只是少数。(民衆の組織に参加する民衆の大部分はいい人間あるいは比較的いい人間であるが、悪い人はただ少数人数である。)(『中共中央整党工作指导委员会九号通知』李杰 1992)

2.1.6.1.4 「X不像Y这样/那样R」

(63)他不像张思叶、张思蕊这样满足于做梦。(彼は张思叶と张思蕊のように夢に満足することはない。)(『93 中篇小说选』)

2.1.6.2 高比較

ここで、刘焱氏は“高比較”を表す文型を五種類に分けて、考察している。

2.1.6.2.1 「X比Y I R (I⁴²)」

(64)用他们自己的话来说,镇长叫起来也比乡长响亮。(彼らのことばで、町長を呼ぶのは郷長より大きい。)(『97 中篇小说选(上)』)

2.1.6.2.2 「XR, Y更R」

(65)以您这年龄,这职业,恐怕喜欢听戏的人不多,懂戏的人更不多。(あなたのような年齢、職業の方はおそらく京劇が好きな人は少なく、分かっている人はもっと少ないでしょう。)(『皇城根』)

2.1.6.2.3 「越…越…」

(66)我们话剧,越演越亏钱,不演还好点儿。(我々の現代劇は演ずれば演ずるほど損する。演じないほうがいい。)(『北京人』)

2.1.6.2.4 「越来越…」

(67)现在的人,心眼儿真是越来越大了。(現代の人は気がますます大きくなった。)(『朱自清散文选』)

2.1.6.2.5 「相比之下/和…相比, X很…」

(68)跟很多人比,我已经很知足了。(たくさんの人と比べて、私はもうとても満足した。)

2.1.7 蒋绍愚・曹广顺(2005)による研究

蒋绍愚・曹广顺は『近代汉语语法史研究综述』において、太田辰夫とピレネー(Peyraube, Alain)の研究に基づいて、差異比較構文の歴史の変遷について論じた。

まず、蒋・曹は太田辰夫の差異比較構文の歴史の変遷についての研究について述べた。

⁴² この“1”は程度副詞を指す。

太田辰夫は中国語における差異比較構文を古代語と現代語に分けて、各自の構造と前置詞の歴史の変遷について論じている（この研究の内容は本章の2.1.4を参照されたい）。

次に、蔣・曹はピレネー(Peyraube, Alain)の差異比較構文の歴史の変遷についての研究について述べた。ピレネー(Peyraube, Alain)は差異比較構文の歴史の変遷について三つの時期に分けている。第一時期は春秋時代から漢代まで(紀元前5世紀から紀元3世紀まで)であり、第二時期は魏晋南北朝から唐代まで(紀元3世紀から10世紀まで)であり、第三時期は宋元時代(紀元10世紀から14世紀まで)である。ピレネーの差異比較構文の文型の歴史の変遷についての考え方は太田辰夫のそれと大体同じであるが、前置詞“如、若、似”の生まれた時代については異論を提出している。杜甫の詩、『敦煌变文集』、『六祖坛经』の中の「X+形容詞+如/若/似+Y」の文型の用例の考察を通して、ピレネーはずっと唐の末期までこの文型がただ平等比較を表し、差異比較に用いられたことがないと考えている。さらに、太田氏がとりあげた「虽然诗胆大如斗。(詩胆は一斗ますより大であるが“如は一に於につける”。)(陆龟蒙诗)」と「本寺远於日,新诗高似云。(本寺は日よりも遠く、新詩は雲よりも高し。)(姚合诗)」の用例は差異比較構文ではないと思っている。

ピレネーは「中国語の差異比較構文の文型は宋元時代に大きな変化がおこった」ことを指摘している。この時期には「X+形容詞+于(於)/过+Y」の文型の使用が少なくなり、以前の平等比較を表す「X+形容詞+如/若/似+Y」の文型が差異比較を表すことが始まった。たとえば、

(69) 東風寒似夜來些。(東風は夜の風より寒くなった。)(贺铸『浣溪沙』)

宋元時代には、差異比較の文型の最大の変化は唐代にうまれた「X+比+Y+…」の文型が盛んになっている。“Y”の後の成分は動詞連語あるいは形容詞連語(形容詞)が使用されている。この影響はずっと現在に至っている。

(70) (这桥)比在前十分好。(この橋は以前のよりずいぶんよくなった。)(『老乞大』)

2.1.8 车竞(2005)による研究

车竞(2005)は「差異比較構文はXとYがある面において差が存する比較構文である」と定義している。また、差異比較の状況を以下のように分類している。

2.1.8.1 XとYの差異だけを示す、優劣を示さない場合

(71) 这条狗跟我买的那条不一样。(この犬は私が買った犬と同じでない。)

(72) 王老师讲课方法跟别的老师有些不同。(王先生の教え方はほかの先生とちょっと違う。)

例(71)は二匹の犬に違いがあることを表示しているが、どちらがいいのかを表示していない。例(72)は王先生の教え方が異なることを示しているが、効果はどうかを示していない。

2.1.8.2 XがYを基準とし、ある面においてこの基準にそれる場合

(73) 我母亲比我父亲身体好。(母は父より調子がいい。)

(74) 这条裤子比那条裤子短几公分。(このズボンはそのズボンより何センチか短い。)

(75) 目前美国经济的发展速度落后于我国。(現在アメリカの経済の発展のスピードは我が国より遅い。)

(76) 今年农民的收入好于往年。(今年農民の収入は昔よりよくなった。)

例(73)と(76)はXとYを比較し、前者が後者を超越することを表示している。例(74)と(75)は前者が後者に及ばないことを表示している。この類の比較はよく“比”と“形容詞+于”を用いる。

2.1.8.3 XがYの程度に及ばないことを明らかに示している場合

(77) 吃中药不如吃西药来得快。(漢方薬は西洋医薬の効果の速さに及ばない。)

(78) 他的能力可赶不上你。(彼の能力は君に及ばない。)

例(77)と(78)は比較主体が比較客体に及ばないことを表している。この類の比較構文はよく“赶不上”、“不如”、“比不上”、“不及”、“没有”などの否定を表す比較詞を用いる。

2.2 “比”構文についての研究

2.2.1 呂叔湘(1980)による研究

呂叔湘(1980)は『現代漢語八百詞』において、比較を表す“比”を以下のように説明している。

“比”は前置詞であり、事物の性状と程度を比較する場合に用いられる。具体的な用法は次のようである。

2.2.1.1 二つの異なる事物の比較を表す場合

この場合には、“比”の前と後に名詞、動詞、形容詞、連語が使用され、前と後の品詞の種類あるいは構造が一般的に同じである(省略する場合もある)。たとえば、

(79) 他比你高。(彼は君より背が高い。)

(80) 他的热情比年轻人还高。(彼の熱意は若者より高い。)

2.2.1.2 同一のものの異なる時期の比較を表す場合

この場合には、“比”の後は時間を表す語彙を用いる。

(81) 身体比过去结实了。(体は昔より丈夫になっている。)

2.2.1.3 述語が形容詞である場合

この場合には、述語とする形容詞の前あるいは後ろに数量か程度を表す成分をつける。

(82) 小赵比我小五岁。(趙君は私より五歳下である。)

2.2.1.4 述語が動詞である場合

この場合には、能力、希望、趣味、増減を表す動詞あるいは“有、没有”などが使用される。

(83) 他比我会下棋。(彼は私より将棋が上手だ。)

(84) 产量比上个月增加百分之十。(生産量は前月より十パーセント増えている。)

2.2.1.5 一般の動作を表す動詞を用いる場合

一般の動作を表す動詞を用いる場合には、“得”構文だけを使用する。“比”は“得”

構文の前あるいは後ろに位置することができ、その場合文の意味は変わらない。たとえば、(85) 他的散文比诗写得好。= 他的散文写得比诗好。(彼が書いた散文は詩より上手だ。)

2.2.1.6 「一+数量詞+比+一+数量詞」

「一+数量詞+比+一+数量詞」の文型は程度の漸層(漸次性)を表す。

(86) 生活一天比一天好。(生活がますますよくなっている。)

2.2.2 朱德熙(1983)による研究

朱德熙(1983)は『关于“比”字句』において、「我(的)年纪比他大(私の年は彼より上だ)」の文が論理的ではない」と指摘している。この理由について、朱德熙氏は以下のように分析している。

構造からみると、「我的年纪比他大」は次のように分析できる。

(87) 我的年纪/比他大

ここの主語は「我的年纪」である。実は、「我年纪比他大」は二つの異なる構造を代表している。

(88) 我年纪/比他大

(89) 我/年纪比他大

(90)の主語は「我年纪」であり、述語は「比他大」である。(78)の主語は「我」であり、述語は「年纪比他大」である。

意味上からみれば、(88)、(89)と(90)の比較する対象は「我」と「他」の二人の年ではなく、「我」と「他」の二人である。「我的年纪比他大」の意味は「论年纪我比他大(年において私は彼より上だ)」であるから、以下の言い方が論理的に成立できる。

(91) 年纪我比他大, 力气我比他小。(年において私が彼より上であり、力において私が彼より弱い。)

これ以外、「我比他年纪大」の言い方も成立できる。なぜなら、この文の比較する対象は“人”であり、“年”ではないからである。

もう一組の用例を分析すると、

(92) 我的书比他多

(93) 我的书比他的多

例(92)と(93)の意味が違う。例(92)の比較する対象は“人”であり、例(93)の比較する対象は“本”である。

以上の用例の分析から、朱德熙氏は次の二つの文型をまとめた。

(94) $N_1(\text{的}) + N_2 + \text{比} + N_3 + \text{V P}$

(95) $N_1 \text{的} + N_2 + \text{比} + N_3 \text{的} + (N_2) + \text{V P}$

形式からみると、この二つの文型の主な区別は(94)の N_3 の後には“的”をつけてあるのに対し、(95)の N_3 の後には“的”をつけてないことである。意味上から考えると、(94)は N_1 と N_3 を N_2 において比較することであり、(95)は“ N_1 的 N_2 ”と“ N_3 的 N_2 ”を比較することである。

2.2.3 ビレネー(Peyraube, Alain) (1989)による研究

ビレネー(Peyraube, Alain) (1989)は「比」の動詞から前置詞への虚詞化の歴史の変遷について考察している。その結果を整理すると、次の図3になる。

図3

時期	“比”の 品詞属性	文型構造	用例
春秋戦国時代から漢代まで	動詞	X + 比 + 于 (於) + Y	竊 <u>比</u> 於我老彭。(窃かに我を老彭に比す ⁴³ 。)(『论语・述而』)
		比 + X + 于 (於) + Y	爾何曾 <u>比</u> 予於管仲。(爾何ぞ曾ち予を管仲に比するや ⁴⁴ 。)(『孟子・公孙丑上』)
		X + 比 + Y	夫世愚學之人 <u>比</u> 有術之士也猶蟻蛭之 <u>比</u> 大陵也。(猶蟻蛭の大陵に比するがごとく ⁴⁵ 。)(『韓非子・奸劫弑臣』)
		X + Y + 比	美惡從而 <u>比</u> 焉。(美と悪はこれに比す。)(『韓非子・飾邪』)
		X + 以 + Y + 比	必以先王之法為 <u>比</u> 。(必ず先王の法に比す。)(『韓非子・有度』)
		X + 与 + Y + 比	取食之重者與礼之輕者而 <u>比</u> 之。(色の重き者と礼の軽き者とを取りて之を比せば ⁴⁶)(『孟子・告子下』)
魏晋南北朝時代	動詞	以 + X + 比 + Y	王夷甫以王東海 <u>比</u> 樂令。(王夷甫王東海を以て樂令に比す ⁴⁷ 。)(『世說新語・品藻』)
		X + 比 + Y + V P	周頤 <u>比</u> 臣有國士門風。(周頤は臣に比すれば、國士の門風あり ⁴⁸ 。)(『世說新語・品藻』)
唐代と宋元時代	前置詞	X + 比 + Y + V P	色 <u>比</u> 瓊漿猶嫩。(色は瓊漿よりなお柔らかい。)(郎士元詩)

⁴³ 『中国の古典 1・論語』(藤堂明保訳昭和六十一年七月)の日本語訳による。

⁴⁴ 『中国の古典 4・孟子』(大島晃訳昭和五十八年五月)の日本語訳による。

⁴⁵ 『中国の古典 9・韓非子』(内山俊彦訳昭和五十七年十月)の日本語訳による。

⁴⁶ 『中国の古典 4・孟子』(大島晃訳昭和五十八年五月)の日本語訳による。

⁴⁷ 『中国の古典 22・世說新語下』(竹田晃訳昭和五十九年四月)の日本語訳による。

⁴⁸ 『中国の古典 22・世說新語下』(竹田晃訳昭和五十九年四月)の日本語訳による。

2.2.4 王业兵・吕靖・邓海波(2007)による研究

王业兵・吕靖・邓海波(2007)は比較構文の中の形容詞の属性により、“比”構文を「明示的“比”構文」と「暗示的“比”構文」に分けている。

(96)张三比我跑的快。(張三は私より走りが早い。)

(97)张三比我喜欢猫。(張三は私より猫が好きだ。)

(98)产量比1985年提高了20%。(生産量は1985年より20パーセント高めている。)

例(96)と(97)のように、明示的な形容詞あるいは動詞を用いる“比”構文は「明示的“比”構文」という。例(98)のように、独立あるいは明示的な形容詞あるいは動詞を用いていない“比”構文は「暗示的“比”構文」という。

次は、王业兵などは「明示的“比”構文」と「暗示的“比”構文」を区別し、その中の“比”の属性について考察している。

2.2.4.1 「優性的“比”構文」における“比”の属性

ここで、王业兵などは“優性的“比”構文”の中の“比”は動詞であり、その意味は「超える(“超过”)」である“という結論を提出した。さらに、二つの面からこの結論を証明している。

2.2.4.1.1 疑問文の「A—不—A」の文型からの考察

まず、王业兵などは動詞と判断する基準を疑問文の「A—不—A」の文型から判断して“比”の属性を考察している。この文型に適用される品詞はすべて「動詞」である。たとえば、

(99)a 他明天来不来? (明日、彼が来ますか。)

b 你空闲时爬不爬山? (暇のとき、君は山登りをしますか。)

“比”はこの文型に使用される。ほかの“把”、“被”、“如”などの助動詞⁴⁹はこの用法を持たない。たとえば、

(100)a 你比不比汤姆高? (君はトムより背が高いか。)

b *他要把不把稿子修改一下?

c *那个拳击手被不被他的对手打败了?

d *那儿的冬天如不如夏天一样寒冷?

2.2.4.1.2 “比”が単独で疑問文の回答になれる

次に、王业兵などは「動詞が単独で疑問文の回答になれる」という特性から“比”の属性を考えている。たとえば、

(101)甲：你来不来? (あなたが来ますか。)

乙：来。(来ます。)

似ている用法は、趙元任(1970)もとりあげている。

(102)甲：你比他大吗? (あなたは彼より年上ですか。)

乙：比。(年上です。)

⁴⁹ 袁丹(2004)は「“比”が“把”、“被”、“如”などのような助動詞である」と論じている。

この二点から、王业兵などは「優性的“比”構文」の中の“比”は動詞である“と指摘している。

また、王业兵などは「優性的“比”構文」の中の“比”の意味について説明している。

(103) 我 比 你 高。(私は君より背が高い。)

字面上の意味：我 超过 你 高。(私が君の身長を超える。)

文の意味：我的高度超过你的高度。(私の身長が君の身長を超える。)

(104) a 出门 不 比 在家，你要照顾好自己。(旅に出ることは家にいるのに及ばない、自分を世話してくれ。)

字面上の意味：出门 否定 超过 在家，你要照顾好自己。

文の意味：出门不如在家，你要照顾好自己。

b 我 不 比 你，你上过大学。(私は君に及ばない、君は大学卒業したから。)

字面上の意味：我 否定 超过 你，你上过大学。

文の意味：我不如你，你上过大学。

2.2.4.2 「潜在的“比”構文」における“比”の属性

ここで、王业兵などは「潜在的“比”構文」の中の“比”は前置詞(“介詞”)であり、そのうしろの成分と組み合わせ「前置詞連語」になる。“比”の機能は比較の対象を導入するためである」と指摘している。さらに、“比”の「依頼性(文脈依存性)」と「融通性」から「明示的“比”構文」と「暗示的“比”構文」の違いを論述している。

(105) a 他比我高。(彼は私より背が高い。)

b 他高。(彼は背が高い。)

例(105-a)は「明示的“比”構文」であり、身長の程度について比較している。この文の“比”を省略すれば(105-b)になり、比較の意味がなくなってしまう。

(106) a 产量比1985年提高了20%。(生産量は1985年より20パーセント高まっている。)

b 产量提高了20%。(生産量は20パーセント高まっている。)

例(106-a)は「潜在的“比”構文」であり、この文の“比”を省略すると(106-b)になる。(106-b)の中は“比”が出てなくても「比較」の意を表している。

ここからみると、「潜在的“比”構文」における“比”の「依頼性(文脈依存性)」は「優性的“比”構文」より強い。

次に、“比”構文の「融通性」について考察する。

(107) a 他比我高。(彼は私より背が高い。)

b *比我他高。

(108) a 产量比1985年提高了20%。(産量は1985年より20パーセント高めている。)

b 比1985年产量提高了20%。

例(107-a)の“比”は文頭に移動すると(107-b)になり、文は成立できない。例(108-a)の“比”は文頭に移動すると(108-b)になるが、文は成立できる。

ここからみると、「潜在的“比”構文」における“比”の「融通性」も「優性的“比”構文」より強い。

2.2.5 胡斌彬 (2009) による研究

胡斌彬 (2009) は現代中国語における“比”構文と“于”構文との共通点と相違点について考察している。

2.2.5.1 “比”構文と“于”構文との共通点

胡斌彬 (2009) は「“比”構文(X比YW) は現代中国語で最も使用される差異比較構文である。これ以外に、“于”構文(XW于Y)も差異比較を表し、表示する意味は“比”構文と同じである」と論じている。その共通点は以下ようになる。

- (一) 統語構造からみると、両方とも「前段」、「中段」、「後段」の三つの部分で構成される。
 (二) 意味上からみると、両方とも「比較前項」、「比較後項」と「比較結果」の三つの意味成分を含んでいる。
 (三) 機能からみると、両方とも「差異比較」を表す。場合により、両方とも「比喩」を表すこともできる。

これらの共通点に基づき、“比”構文は“于”構文と書きかえることができ、意味がほぼ変わらない。たとえば、

(109) 她的演唱水平比其他选手明显要高。⇔她的演唱水平明显要高于其他选手。

(彼女の歌のレベルはほかの選手より明らかに高い。)

(110) 今年的庄稼长势好于前几年。⇔今年的庄稼长势比前几年好。

(今年の農作物の成長ぶりは以前よりよくなっている。)

(111) 自以为他的文章是前无古人后无来者五百年难遇一篇，其实臭于粪土。⇔自以为他的文章是前无古人后无来者五百年难遇一篇，其实比粪土还臭。

(彼は自分の文章が空前絶後だと思っているが、実は糞便と土より臭い。)

例(109)と(110)は「差異比較」をあらわし、例(111)は「比喩」を表す。

2.2.5.2 “比”構文と“于”構文との相違点

胡斌彬 (2009) は“于”構文を基準とし、統語、意味と語用の面から“比”構文と“于”構文の相違点について考察している。

2.2.5.2.1 統語上の分析

統語構造からみると、“比”構文と“于”構文の「比較後項」と「比較結果」の語順が異なる。“比”構文は「比較前項+比+比較後項+比較結果」であり、“于”構文は「比較前項+比較結果+于+比較後項」である。また、前置詞連語「比Y」と「于Y」の統語機能も異なる。「比Y」は述語の前に位置し、状況語である。「于Y」は述語の後に位置し、補語である。

さらに、比較結果の構成成分からみると、“于”構文の結果項は主に単音節の形容詞と少

数の動詞(“过”、“胜”など)で構成され、多音節の形容詞と動詞はほとんど使用されない。

“比”構文は音節の制限がなく、形容詞以外は心理動詞、性状動詞、関係動詞、数量の変化を表す動詞などが使用される。たとえば、

(112) 茶花比那桃花红。⇔茶花红于那桃花。(ツバキはあの桃花より赤い。)

(113) 妹妹比姐姐更喜欢打扮。(妹は姉より化粧が好きだ。)→*妹妹更喜欢打扮于姐姐。

それ以外、“于”構文の結果項の成分と構造は“比”構文と比べ、比較的簡単である。

(114) 你比他更应该来。(君は彼よりもっと来るべきだ。)→*你更应该来于他。

(115) 我比你更咽不下这口气。(私は君よりもっと我慢できない。)→*我更咽不下这口气于你。

2.2.5.2.2 意味上の分析

胡斌彬(2009)は以下の用例を通して、“比”構文と“于”構文の意味上の違いを説明している。

(116) 不要老夸我, 我做得很不够, 比你们不如。(いつも褒めないで、私がやることはまだ足りない、あなたたちに及ばない。)→*我做得很不够, 不如于比你们。

(117) 你要凶, 我比你更凶。(君が凶悪であれば、私は君よりもっと凶悪である。)→*你要凶, 我更凶于你。

(118) 今年全国公务员的工资水平比去年提高了百分之二十。(今年の全国の公務員の給料は去年より二十パーセント高まっている。)→*今年全国公务员的工资水平提高于去年百分之二十。

(119) 这种卑鄙行为同于盗贼, 实在令人不齿。(この汚い行為は強盗と同じく、人に軽蔑される。)→*这种卑鄙行为比盗贼同, 实在令人不齿。

(120) 开学伊始, 整个校园呈现出一派异于往日的新气象。(新学期が始まったばかり、キャンパスは昔と異なる情景を示している。)→*开学伊始, 整个校园呈现出比往日迥异的新气象。

例(116)、(117)と(118)は“比”構文であり、“于”構文に書きかえることができない。例(116)は“低比較”を表し、(117)は“絶対比較”を表し、(118)は“数量の変化”を表す。ここからみると、“比”構文は“低比較”、“絶対比較”と“数量の変化”を表示でき、“于”構文ができない。例(119)と(120)は“于”構文であり、“比”構文に書きかえることができない。ここからみると、“于”構文は異同の比較ができ、“比”構文はできない。

これ以外、“比”構文は性状の比較以外、動作の比較もできる。“于”構文は一般的に性状の比較に限られる。

2.2.5.2.3 語用上の分析

胡斌彬(2009)は芸術文章、口頭文章、政治文章、科学文章と事務文章(法律文章)の五つの文章から、“比”構文と“于”構文の使用頻度について考察した。その結果は次の図4になる。

図4(『湖南文理学院学报(第25卷)』117頁参照)

文章種類	参考文献	文字数	“于”構文	“比”構文
芸術文章	『获奖作品佳作』(小説)	約27万	4(3.6%)	106(96.4%)
口頭文章	『北京話口語』	約6万	16(28.6%)	40(71.4%)
政治文章	『毛澤東選集』(第四卷)	約17万	23(31.5%)	50(68.5%)
科学文章	『兒童的心理世界』(方富熹・方格)	約27万	65(34.0%)	126(66.0%)
事務文章	『憲法』などの34部法律法規	約37万	101(97.1%)	3(2.9%)

図4からみると、事務文章(法律文章)において、“于”構文は絶対的な優位を立っている。芸術文章において、“比”構文の使用頻度は“于”構文よりはるかに多い。口頭文章、政治文章、科学文章において、“比”構文の使用頻度は“于”構文より倍以上である。

3. 差異比較構文の論理構造と文型意味

ここで、差異比較構文の主な文型を古代中国語と現代中国語に分け、それぞれの文型意味と論理構造について分析する。

3.1 古代中国語における差異比較構文の論理構造と文型意味

3.1.1 「X+形容詞+于(於)+Y」の文型意味と論理構造

古代中国語における差異比較構文の主な文型は「X+形容詞+于(於)+Y」である。次の用例の論理式を分析してみよう。

(121) 苛政猛于虎。(苛政は虎よりも猛なるなり⁵⁰。)(『礼記・檀弓』)

この文の論理式は次のようである。

~ト	アリ	~ニ	~ガ	アル	~ニ	~ガ
(121') 于' [苛政, 虎, 有' (苛政, [猛1]) & 有' (虎, [猛2]) &						
アル	~ガ	~ト				
α	β			γ1		
ヒク	~カラ	~ヲ	ナル		~ガ	~ニ
有' {減' ([猛1], [猛2]), [差数]} & 到' ([差数], 多少)]						
アル	~ニ			~ガ		
			~トイウ状態ニ			
γ2			γ3			

ここで、(121')の意味を説明しよう。この文は「苛政が虎より猛なるなり」という命題内容は論理式では「于' [苛政, 虎, 有' (苛政, [猛1]) & 有' (虎, [猛2]) & 有' {減'

⁵⁰ 『漢語入門』(小川環樹・西田太郎訳)の日本語訳による。

([猛 1], [猛 2]), [差数] & 到' ([差数], 多少)) のように表示できる。次に、この論理式について詳しく説明する。「有' (苛政, [猛 1])」は「苛政には[猛 1]がある」の意を、「有' (虎, [猛 2])」は「虎には[猛 2]がある」の意を、「有' (減' ([猛 1], [猛 2]), [差数] & 到' ([差数], 多少))」は「[猛 1]から[猛 2]を引くと差がある」の意を表す。用例(121)の意味は前述のすべての命題内容を含んでいることになる。さらに、 $\gamma 1$ は「苛政」と「虎」が「経験者格」を、「猛 1」と「猛 2」が「属格(対象格)」を表すので、「格役割」を表示する。 $\gamma 2$ は減法で差があること、つまり「数量化」を表している。 $\gamma 3$ は差がいくらかあること、言い換えれば「差がいくらかの量に達している」こと、つまり一種の「着点」を表している。

例(121)の文についてタイプ理論を用いたモデルによって説明してみよう。(121)のタイプ分析は樹形図で簡略表示すると、図5となる。

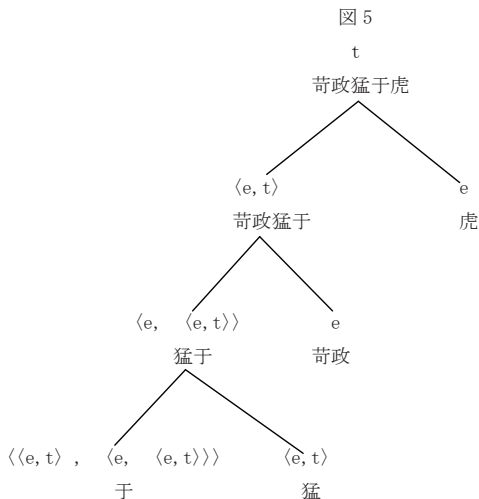


図5からみると、“于”のタイプ式は“<<e, t>, <e, <e, t>>>”の三項述語であり、“苛政”と“虎”は個体定項“e”であり、“猛”は“<e, t>”の一項述語である。

次に、論理式の作成の過程を有限オートマトンと順序論理回路のモデルを使用して説明しよう。(121)の文の有限オートマトン、順序論理回路、入力記憶に基づいて作成した論理式は次のようになる。

図 6

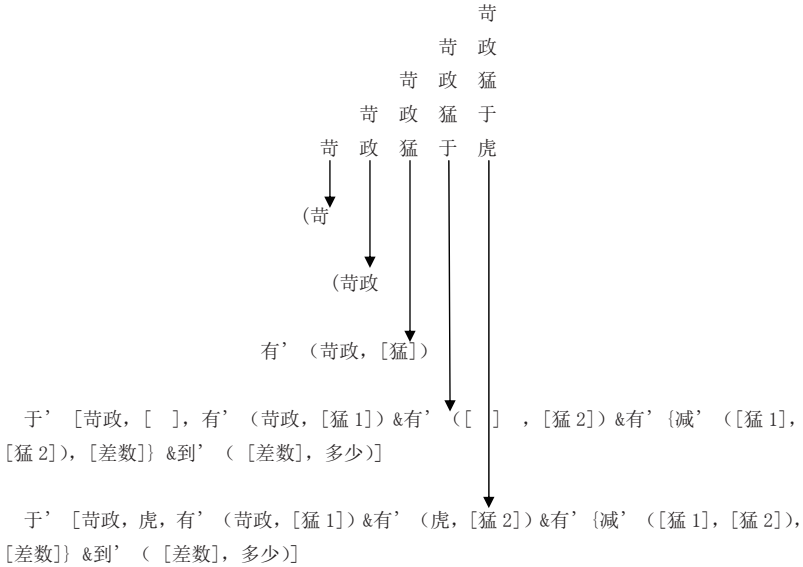
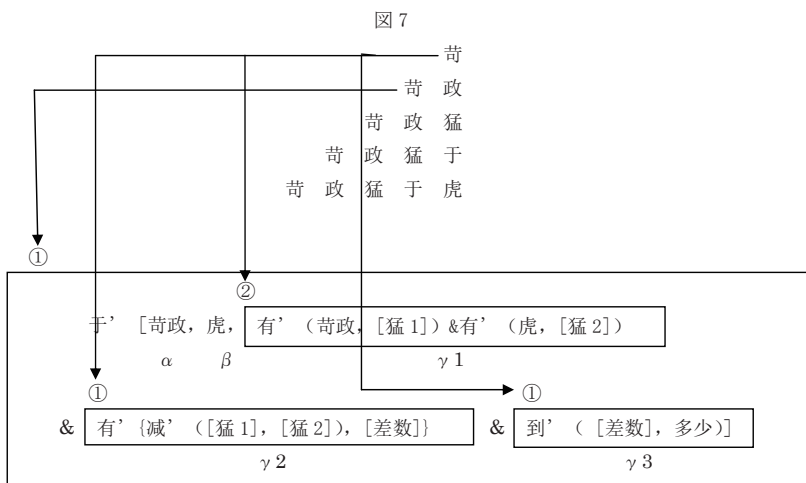


図 6 について説明しよう。まず“苛”を入力し、論理式は“(苛)”になる。第二に“苛政”を入力し、論理式は“(苛政)”になる。第三に“苛政猛”を入力し、論理式は“有’ (苛政, [猛])”になる。第四に“苛政猛于”を入力し、論理式は“于’ [苛政, [], 有’ (苛政, [猛 1]) & 有’ ([], [猛 2]) & 有’ {減’ ([猛 1], [猛 2]), [差数]} & 到’ ([差数], 多少)]”になる。最後に“苛政猛于虎”を入力し、文のすべての入力完了する。その論理式は“于’ [苛政, 虎, 有’ (苛政, [猛 1]) & 有’ (虎, [猛 2]) & 有’ {減’ ([猛 1], [猛 2]), [差数]} & 到’ ([差数], 多少)]”になる。この図からみると、“于”の入力とともに、文の全体の構造が決められている。

入力記憶によって文を構成するすべての成分を作りあげることができる。その生成過程は次の図7になる。



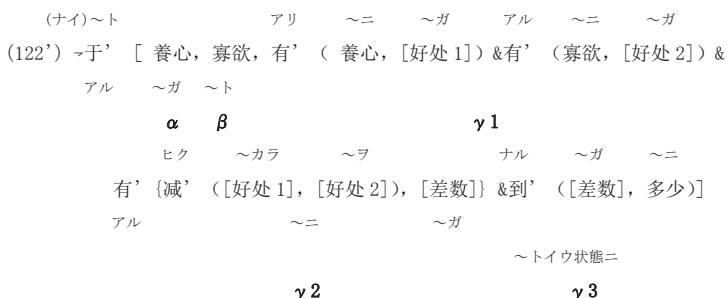
論理式は入力記憶によって作成される。まず①で于' [α , β , $\gamma 1$ & $\gamma 2$ & $\gamma 3$] の三項関数、 $\gamma 2$ の「量化」と $\gamma 3$ の「着点」が、第二に②で $\gamma 1$ の「格役割」が決定される。

3.1.2 「X + 形容詞 + 于 (於) + Y」の否定式の論理構造と文型意味

3.1.1 の文型の否定式は「X + 否定詞 + 形容詞 + 于 (於) + Y」である。

(122) 養心莫善于寡欲。(心を養うは寡欲より善きはなし⁵¹。)(『孟子・尽心下』)

この文の論理式は次のようである。



ここで、(122')の意味を説明しよう。この文は「心を養うは寡欲より善きはなし」とい

⁵¹ 『中国の古典 4・孟子』(大島晃訳昭和五十八年五月)の日本語訳による。

う命題内容は論理式では「 \neg 于' [養心, 寡欲, 有' (養心, [好处 1]) & 有' (寡欲, [好处 2])] & 有' { 減' ([好处 1], [好处 2]), [差数] } & 到' ([差数], 多少)]」のように表示できる。次に、この論理式について詳しく説明する。「有' (養心, [好处 1])」は「養心には[好处 1]がある」の意を、「有' (寡欲, [好处 2])」は「寡欲には[好处 2]がある」の意を、「有' { 減' ([好处 1], [好处 2]), [差数] } & 到' ([差数], 多少) }」は「[好处 1]から[好处 2]を引くと差がある」の意を表す。用例(122)の意味は前述のすべての命題内容を含んでいることになる。さらに、 γ 1 は「養心」と「寡欲」が「経験者格」を、「好处 1」と「好处 2」が「属格(対象格)」を表すので、「格役割」を表示する。 γ 2 は減法で差があること、つまり「数量化」を表している。 γ 3 は差がいくらかあること、言い換えれば「差がいくらかの量に達している」こと、つまり一種の「着点」を表している。記号「 \neg 」は文全体を否定している。

例(122)の文についてタイプ理論を用いたモデルによって説明してみよう。(122)のタイプ分析は樹形図で簡略表示すると、図8となる。

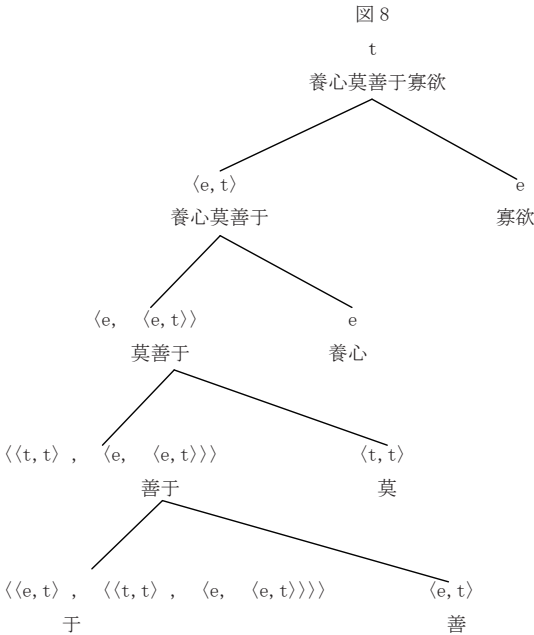


図 8 からみると、“于”のタイプ式は“ $\langle \langle e, t \rangle, \langle \langle t, t \rangle, \langle e, \langle e, t \rangle \rangle \rangle$ ”の四項述語であり、“養心”と“寡欲”は個体定項“e”であり、“善”は“ $\langle e, t \rangle$ ”の一項述語であり、否定詞の“莫”は論理タイプ“ $\langle t, t \rangle$ ”である。

次に、論理式の作成の過程を有限オートマトンと順序論理回路のモデルを使用して説明しよう。(122)の文の有限オートマトン、順序論理回路、入力記憶に基づいて作成した論理式は次のようになる。

図 9

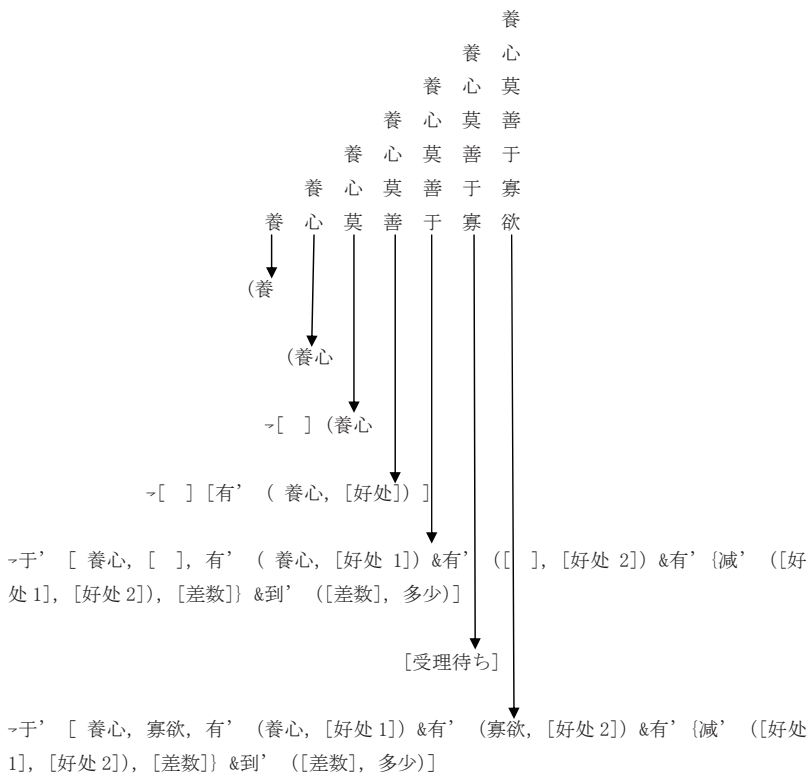
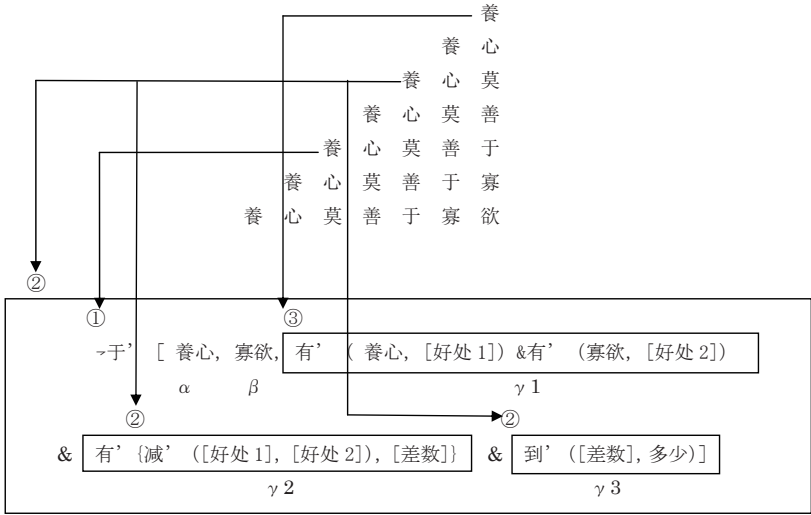


図 9 について説明しよう。まず“養”を入力し、論理式は“(養)”になる。第二に“養心”を入力し、論理式は“(養心)”になる。第三に“養心莫”を入力し、論理式は“~[] (養心)”になる。第四に“養心莫善”を入力し、論理式は“~[] [有' (養心, [好处])]”になる。第五に“養心莫善于”を入力し、ここで論理式は“~于' [養心, [], 有' (養心, [好处 1]) &有' ([], [好处 2]) &有' {減' ([好处 1], [好处 2]), [差数]} &到' ([差数], 多少)]”になる。第六に“養心莫善于寡”を入力し、ここで“受理待ち”の状態になる。最後に“養心莫善于寡欲”を入力し、文のすべての入力は完了する。その論理式は“~于' [養心, 寡欲, 有' (養心, [好处 1]) &有' (寡欲, [好处 2]) &有' {減' ([好处 1], [好处 2]), [差数]} &到' ([差数], 多少)]”になる。

处 1], [好处 2]), [差数] &到' ([差数], 多少)]”になる。この図からみると、“于”の入力とともに、文の全体の構造が決められている。

入力記憶によって文を構成するすべての成分を作りあげることができる。その生成過程は次の図 10 になる。

図 10



論理式は入力記憶によって作成される。まず①で「 \neg 」の否定が、第二に②で「 α , β , $\gamma 1$ & $\gamma 2$ & $\gamma 3$ 」の三項関数、 $\gamma 2$ の「量化」と $\gamma 3$ の「着点」が、第三に③で $\gamma 1$ の「格役割」が決定される。

3.2 現代中国語における差異比較構文の論理構造と文型意味

現代中国語における差異比較構文は“比”構文であり、その文型は「X+比+Y+VP」である。ここで、筆者は差異比較構文の「比較の意味基準」を用いて、差異比較構文の論理構造と文型意味を解析したい。

「比較の意味基準」とは対象が主として比較される部分のことである。比較主体(X)と比較客体(Y)の優劣を比較するとき、XとYのある性状について比較でき、XとYの動作方式/情態についても比較でき、これ以外にさらにXとYの数量についても比較できる。このように比較できる「性状」、「動作方式/情態」と「数量」が「比較面」である。

3.2.1 「性状」を「比較の意味基準」とする差異比較構文の論理構造と文型意味

「性状」を「比較の意味基準」とする差異比較構文の文型は二種に分けられる。次の「X+比+Y+形容詞」と「一+数量詞+比+一+数量詞+形容詞」である。

3.2.1.1 「X+比+Y+形容詞」

まず「X+比+Y+形容詞」から説明する。「性状の比較」はよく用いられる「比較の意味基準」の比較である。現代中国語における「性状の比較」は直接に形容詞を用いて比較する。この形容詞はいつも比較の結果項(比較値)の中に現れ、文の述語になっている。一般的には、性状を表す形容詞は単音節あるいは二音節形容詞である。この場合、この形容詞は「比較の意味基準」と「比較値」の二つの役割を持っている。その構造は「X+比+Y+形容詞」である。次に、この文型の論理構造と文型意味を分析する。

(123) 今天比昨天冷。(今日は昨日より寒い。)

この文の論理式は次のようである。

~ト	アリ	~ニ	~ガ	アル	~ニ	~ガ
(123') 比' [今天, 昨天, 有' (今天, [气温 1]) & 有' (昨天, [气温 2]) &						
アル	~ガ	~ト				
α	β				$\gamma 1$	
ヒク	~カラ	~ヲ				
有' {減' ([气温 1], [气温 2]), [差数]} & 到' {[差数], 有' (冷, 多少)}]						
アル	~ニ	~ガ	ナル	~ガ	~ニ	
~トイウ状態ニ						
$\gamma 2$			$\gamma 3$			

ここで、(123')の意味を説明しよう。この文の「今日は昨日より寒い」という命題内容は論理式では「比' [今天, 昨天, 有' (今天, [气温 1]) & 有' (昨天, [气温 2]) & 有' {減' ([气温 1], [气温 2]), [差数]} & 到' {[差数], 有' (冷, 多少)}]」のように表示できる。

次に、この論理式について詳しく説明する。「有' (今天, [气温 1])」は「今日には[气温 1]がある」の意を、「有' (昨天, [气温 2])」は「昨日には[气温 2]がある」の意を、「有' {減' ([气温 1], [气温 2]), [差数]} & 到' {[差数], 有' (冷, 多少)}]」は「[气温 1]から[气温 2]を引くと差がある」の意を表す。「…比…冷」の“冷”は「はつきりした差がない」ことを表す。このことを「有' (冷, 多少)」で表現することにする。用例(123)の意味は前述のすべての命題内容を含んでいることになる。さらに、 $\gamma 1$ は「今天」と「昨天」が「経験者格」を、「气温 1」と「气温 2」が「属格(対象格)」を表すので、「格役割」を表示する。 $\gamma 2$ は減法で差があること、つまり「数量化」を表している。 $\gamma 3$ は差がいくらあること、言い換えれば「差がいくらかの量に達している」こと、つまり一種の「着点」を表している。

この文についてタイプ理論を用いたモデルによって説明してみよう。(123) のタイプ分析は樹形図で簡略表示すると、図 11 となる。

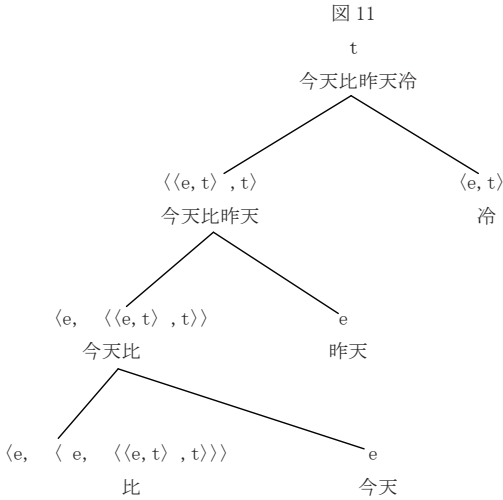


図 11 からみると、“比” のタイプ式は “<e, < e, <(e, t), t>>>” の三項述語であり、“今天” と “昨天” は個体定項 “e” であり、“冷” は “<(e, t)>” の一項述語である。

次に、論理式の作成の過程を有限オートマトンと順序論理回路のモデルを使用して説明しよう。(123)の文の有限オートマトン、順序論理回路、入力記憶に基づいて作成した論理式は次のようになる。

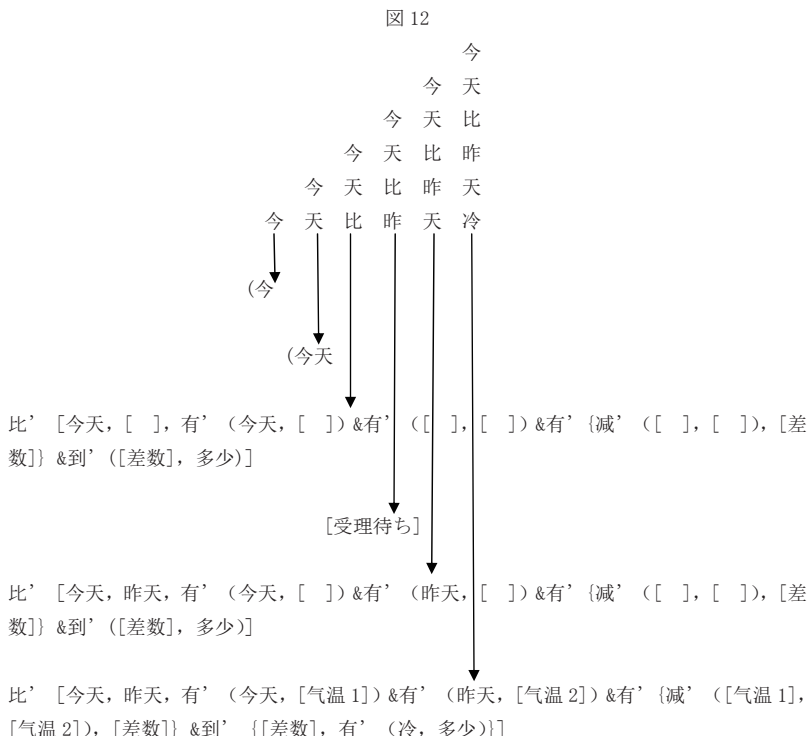
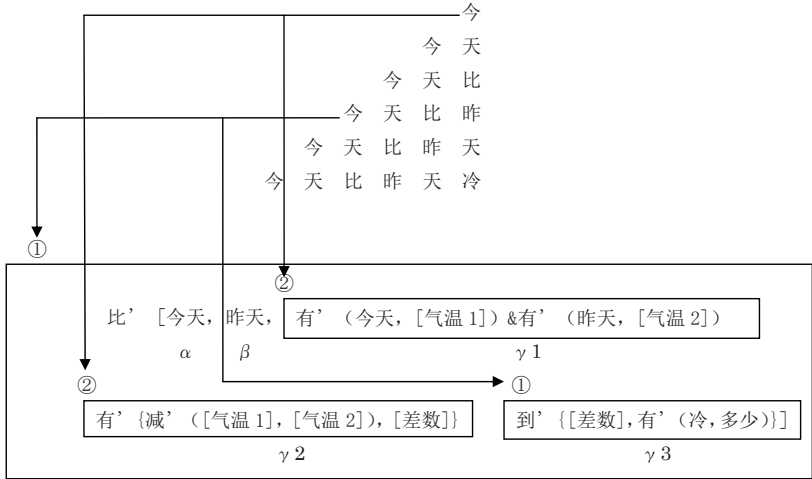


図 12 について説明しよう。まず“今”を入力し、論理式は“(今”になる。第二に“今天”を入力し、論理式は“(今天”になる。第三に“今天比”を入力し、論理式は“比' [今天, [], 有' (今天, []) &有' ([], []) &有' {減' ([], []), [差数]} &到' ([差数], 多少)]”になる。第四に“今天比昨”を入力し、ここで“受理待ち”になる。第五に“今天比昨天”を入力し、ここで論理式は“比' [今天, 昨天, 有' (今天, []) &有' (昨天, []) &有' {減' ([], []), [差数]} &到' ([差数], 多少)]”になる。最後に“今天比昨天冷”を入力し、文のすべての入力は完了する。その論理式は“比' [今天, 昨天, 有' (今天, [气温 1]) &有' (昨天, [气温 2]) &有' {減' ([气温 1], [气温 2]), [差数]} &到' [[差数], 有' (冷, 多少)]]”になる。この図からみると、“比”の入力とともに、文の全体の構造が決められている。

入力記憶によって文を構成するすべての成分を作りあげることができる。その生成過程は次の図 13 になる。

図 13



論理式は入力記憶によって作成される。まず①で比' [α, β, γ 1& γ 2& γ 3]の三項関数と γ 3の「着点」が、第二に②で γ 1の「格役割」と γ 2の「量化」が決定される。

3.2.1.2 「一+数量詞+比+一+数量詞+形容詞」

“比”構文は性状あるいは程度の「漸次性(递进)」を表すこともできる。この場合には、「一+数量詞+比+一+数量詞+形容詞」を用いる。

(124) 枪声一阵比一阵激烈。(銃声がだんだん激しくなっている。)

この文の論理式は次のようである。

～ト			アリ	～ニ		～ガ	
(124') 比'	[一阵 1, 一阵 2, 有' {一阵 1, 有' (枪声, [激烈 1])}]	&有' {一阵 2,					
アル	～ガ	～ト	アリ	～ニ		～ガ	アリ
							～ニ
	α	β					γ 1
アル	～ニ	～ガ		ヒク	～カラ		～ヲ
			有' (枪声, [激烈 2])	&有' {減' ([激烈 2], [激烈 1]), [差数]}			
			～ガ	アル		～ニ	～ガ
							γ 2
ナル	～ガ	～ニ					
			&到' ([差数], 多少)]				
			～トイウ状態ニ				
			γ 3				

ここで、(124')の意味を説明しよう。この文の「銃声がだんだん激しくなっている」という命題内容は論理式では「比' [一阵 1, 一阵 2, 有' {一阵 1, 有' (枪声, [激烈 1])}]&有' {一阵 2, 有' (枪声, [激烈 2])}&有' {減' ([激烈 2], [激烈 1]), [差数]}&到' ([差数], 多少)]」のように表示できる。次に、この論理式について詳しく説明する。「有' {一阵 1, 有' (枪声, [激烈 1])}」は「“一阵 1”には“枪声”の[激烈 1]がある」の意を、「有' {一阵 2, 有' (枪声, [激烈 2])}」は「“一阵 2”には“枪声”の[激烈 2]がある」の意を、「有' {減' ([激烈 2], [激烈 1]), [差数]}&到' ([差数], 多少)]」は「[激烈 2]から[激烈 1]を引くと差がある」の意を表す。用例(124)の意味は前述のすべての命題内容を含んでいることになる。さらに、γ 1は「一阵 1」と「一阵 2」が「経験者格」を、「激烈 1」と「激烈 2」が「属格(対象格)」を表すので、「格役割」を表示する。γ 2は減法で差があること、つまり「数量化」を表している。γ 3は差がいくらあること、言い換えれば「差がいくらかの量に達している」こと、つまり一種の「着点」を表している。

この文についてタイプ理論を用いたモデルによって説明してみよう。(124) のタイプ分析は樹形図で簡略表示すると、図 14 となる。

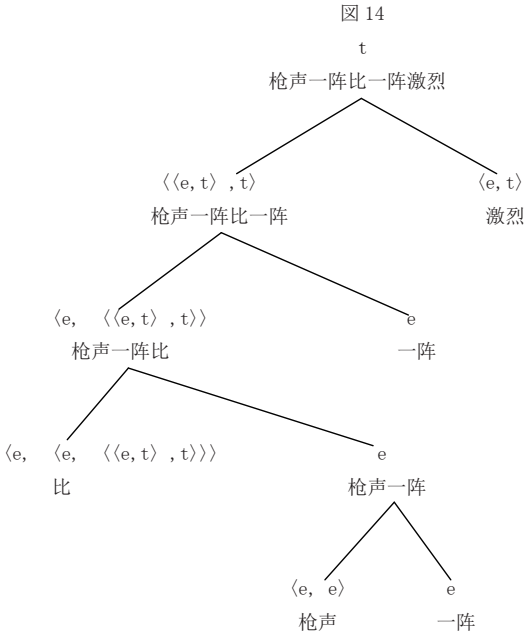


図 14 からみると、“比” のタイプ式は “<(e, <(e, <(e, t), t>>>” の三項述語であり、“一阵” は個体定項 “e” であり、“枪声” は “<(e, e)>” の複合定項であり、“激烈” は “<(e, t)>” の一項述語である。

次に、論理式の作成の過程を有限オートマトンと順序論理回路のモデルを使用して説明しよう。(124)の文の有限オートマトン、順序論理回路、入力記憶に基づいて作成した論理式は次のようになる。

図 15

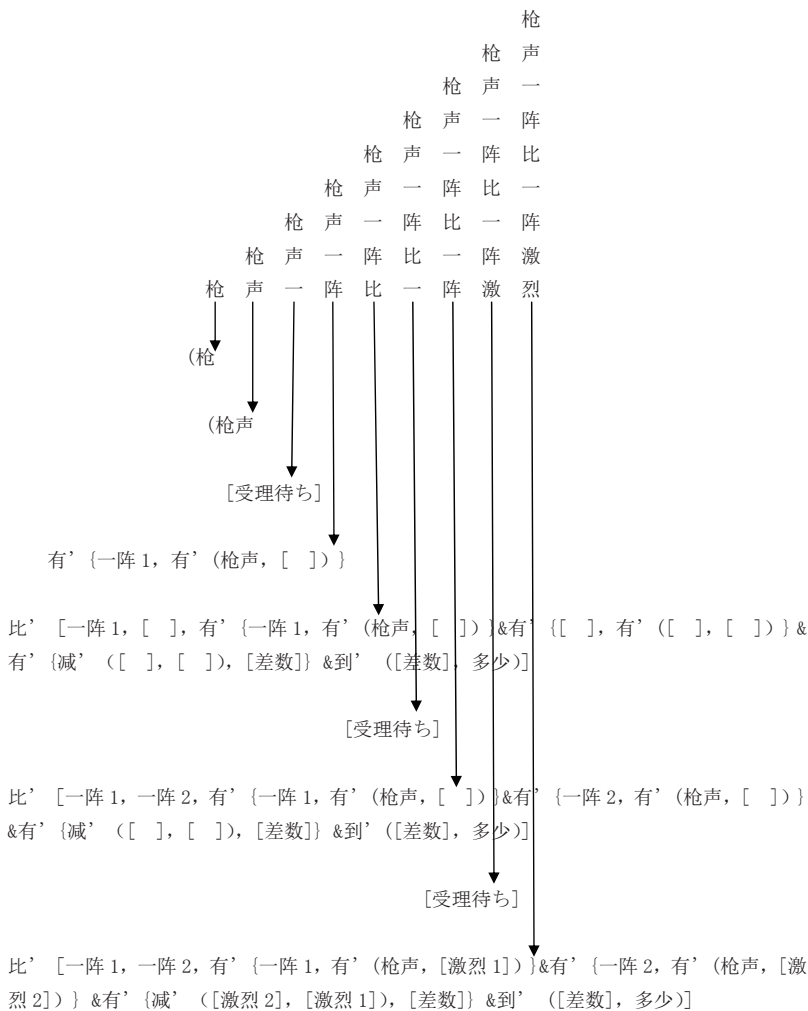
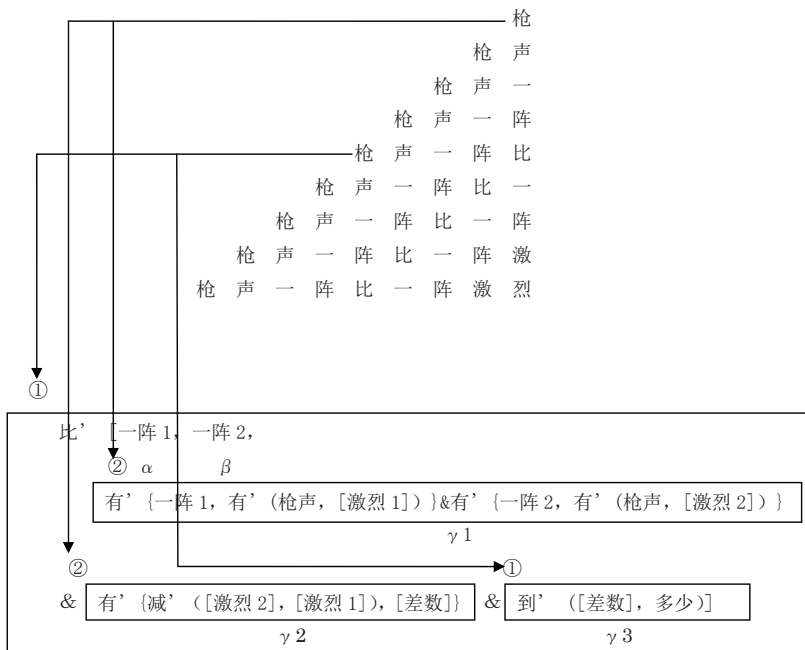


図 15 について説明しよう。まず“枪”を入力し、論理式は“(枪) になる。第二に“枪声”を入力し、論理式は“(枪声) になる。第三に“枪声一”を入力し、ここで“受理待ち”になる。第四に“枪声一阵”を入力し、論理式は“有’ {一阵 1, 有’ (枪声, [])}”になる。第五に“枪声一阵比”を入力し、ここで論理式は“比’ [一阵 1, [], 有’ {一阵 1, 有’ (枪声, [])} &有’ {[], 有’ ([], [])} &有’ {減’ ([], []), [差数]} &到’ ([差数], 多少)]”になる。

第六に“枪声一阵比一”を入力し、ここで“受理待ち”になる。第七に“枪声一阵比一阵”を入力し、論理式は“比’ [一阵 1, 一阵 2, 有’ {一阵 1, 有’ (枪声, [])} &有’ {一阵 2, 有’ (枪声, [])} &有’ {減’ ([], []), [差数]} &到’ ([差数], 多少)]”になる。第八に“枪声一阵比一阵激”を入力し、ここで“受理待ち”になる。最後に“枪声一阵比一阵激烈”を入力し、文のすべての入力完了する。その論理式は“比’ [一阵 1, 一阵 2, 有’ {一阵 1, 有’ (枪声, [激烈 1])} &有’ {一阵 2, 有’ (枪声, [激烈 2])} &有’ {減’ ([激烈 2], [激烈 1]), [差数]} &到’ ([差数], 多少)]”になる。この図からみると、“比”の入力とともに、文の全体の構造が決められている。

入力記憶によって文を構成するすべての成分を作りあげることができる。その生成過程は次の図 16 になる。

図 16



論理式は入力記憶によって作成される。まず①で比' [α, β, γ1&γ2&γ3]の三項関数とγ3の「着点」が、第二に②でγ1の「格役割」とγ2の「量化」が決定される。

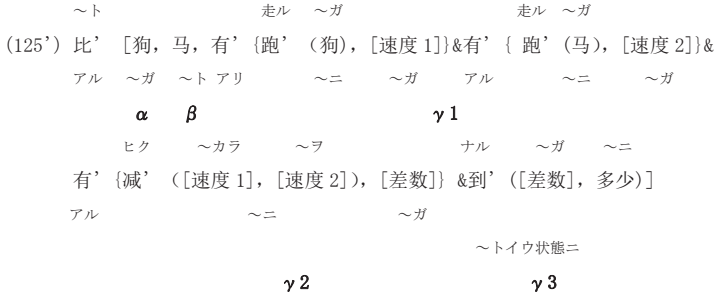
3.2.2 「動作方式/情態」を「比較の意味基準」とする差異比較構文の論理構造と文型意味

“比”構文において、「動作方式/情態」の比較は直接に動詞連語を用いて比較する。この場合、“比”構文の結果項はよく“得+形容詞”の動詞補語構造を使用し、「比較の意味基準」を表す。具体的な構造は二つに分けられる。一つは「X+比+Y+動詞+得+形容詞」であり、二つ目は「X+動詞+得+比+Y+形容詞」である。ここで、論理構造と文型意味から、次の用例を用いてこの二つの構造の異同を説明してみよう。

3.2.2.1 「X+比+Y+動詞+得+形容詞」

(125) 狗比马跑得快。(犬は馬より走るのが速い。)

この文の論理式は次のようになる。



ここで、(125')の意味を説明しよう。この文の「犬が馬と走るスピードの差があるという状態にある」という命題内容は論理式では「比' [狗, 马, 有' {跑' (狗), [速度 1]}&有' {跑' (马), [速度 2]}&有' {減' ([速度 1], [速度 2]), [差数]} &到' ([差数], 多少)]」のように表示できる。

次に、この論理式について詳しく説明する。「有' {跑' (狗), [速度 1]}」は「犬が走ることに[速度 1]がある」の意を、「有' {跑' (马), [速度 2]}」は「馬が走ることに[速度 2]がある」の意を、「有' {減' ([速度 1], [速度 2]), [差数]} &到' ([差数], 多少)]」は「[速度 1]から[速度 2]を引くと差がある」の意を表す。用例(125)の意味は前述のすべての命題内容を含んでいることになる。さらに、γ 1は「狗」と「馬」が「経験者格」を、「速度 1」と「速度 2」が「属格(対象格)」を表すので、「格役割」を表示する。γ 2は減法で差があること、つまり「数量化」を表している。γ 3は差がいくらかあること、言い換えれば「差がいくらかの量に達している」こと、つまり一種の「着点」を表している。

この文についてタイプ理論を用いたモデルによって説明してみよう。例 (125) のタイプ分析は樹形図で簡略表示すると、図 17 となる。

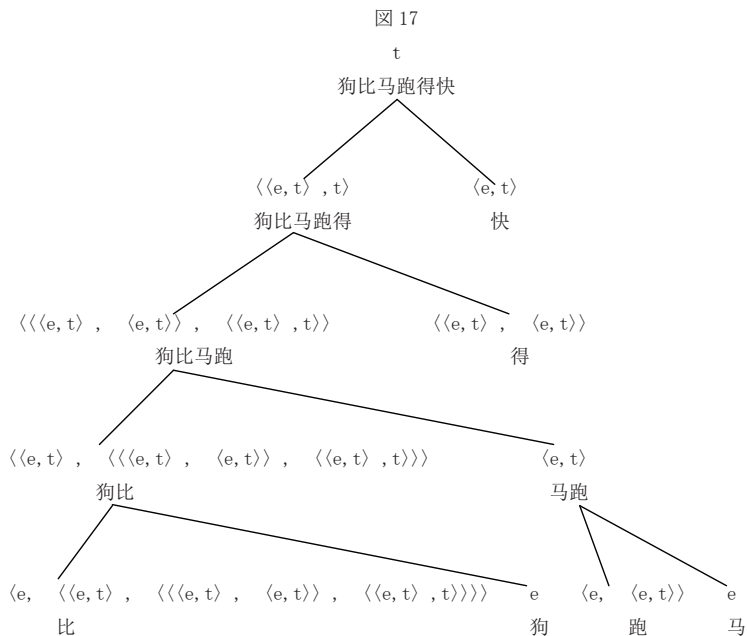


図 17 からみると、“比”のタイプ式は“<(e, <(e, t), <<(e, t), (e, t)>>, <(e, t), t>>>>”の四項述語であり、“狗”と“马”は個体定項“e”であり、“得”は“<(e, t), <(e, t)>>”の二項述語であり、“跑”は“<(e, <(e, t)>>”の二項述語であり、“快”は“<(e, t)>”の一項述語である。

この例が示しているように、タイプ式による樹形図は文を構成するすべての要素のタイプを決定できる。

この用例について、その論理式の成立のプロセスを有限オートマトンと順序論理回路のモデルを用いて説明しておこう。(125)の文の有限オートマトン、順序論理回路、入力記憶に基づいて作成した論理式は次のようになる。

図 18

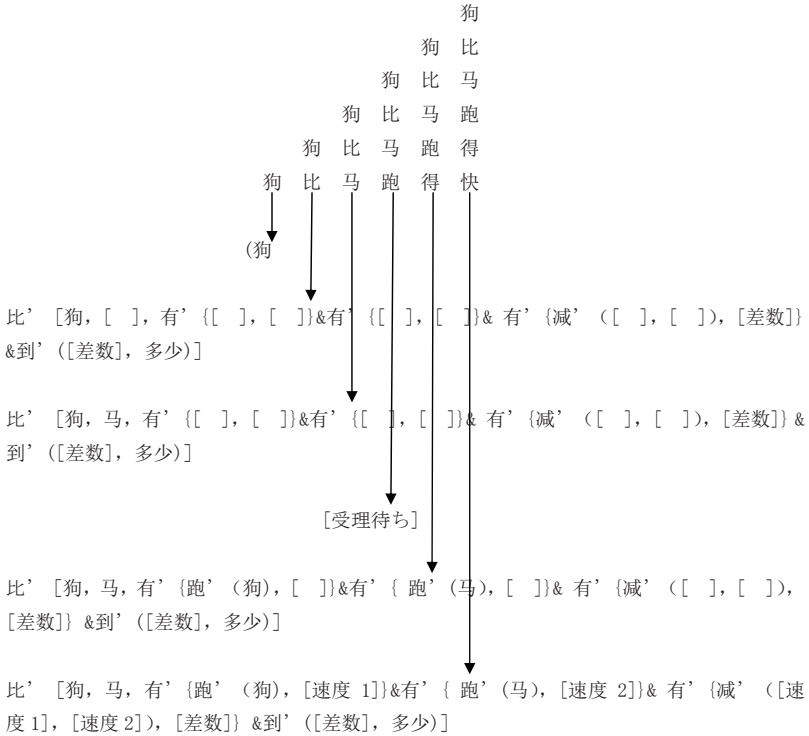
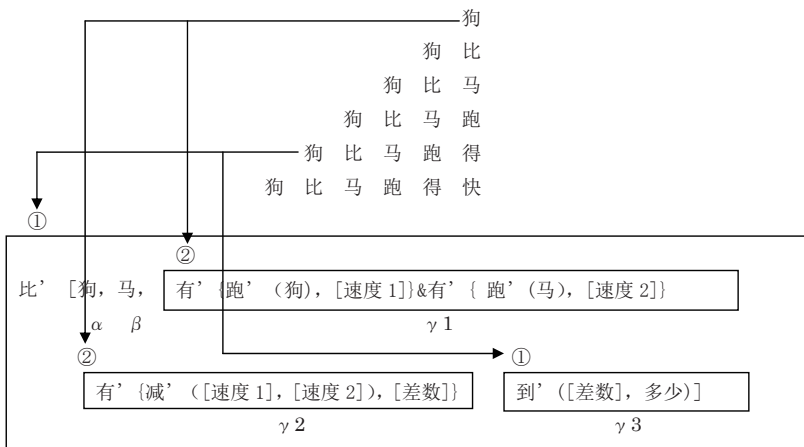


図 18 について説明しよう。まず“狗”を入力し、論理式は“(狗)”になる。第二に“狗比”を入力し、論理式は“比' [狗, [], 有' {[], []}&有' {[], []}&有' {減' ([], []), [差数]}&到' ([差数], 多少)]”になる。第三に“狗比马”を入力し、論理式は“比' [狗, 马, 有' {[], []}&有' {[], []}&有' {減' ([], []), [差数]}&到' ([差数], 多少)]”になる。第四に“狗比马跑”を入力し、ここで“受理待ち”になる。第五に“狗比马跑得”を入力し、ここで論理式は“比' [狗, 马, 有' {跑' (狗), []}&有' {跑' (马), []}&有' {減' ([], []), [差数]}&到' ([差数], 多少)]”になる。最後に“狗比马跑得快”を入力し、文のすべての入力は完了する。その論理式は“比' [狗, 马, 有' {跑' (狗), [速度 1]}&有' {跑' (马), [速度 2]}&有' {減' ([速度 1], [速度 2]), [差数]}&到' ([差数], 多少)]”になる。

([速度 1], [速度 2]), [差数] & 到' ([差数], 多少)]" になる。この図からみると、“比”のととも、文の全体の構造が決められている。

入力記憶によって文を構成するすべての成分を作りあげることができる。その生成過程は次の図 19 になる。

図 19

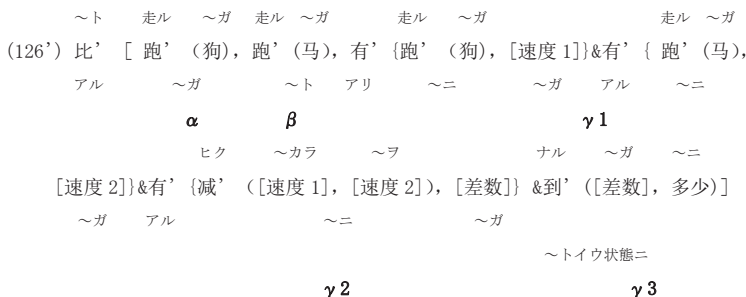


論理式は入力記憶によって作成される。まず①で比' [α, β, γ1 & γ2 & γ3] の三項関数と γ3 の「着点」が、第二に②で γ1 の「拡張された格役割⁵²」と γ2 の「量化」が決定される。

3.2.2.2 「X+動詞+得+比+Y+形容詞」

(126) 狗跑得比马快。(犬は馬より走るのが速い。)

この文の論理式は次のようである。



⁵² 「拡張された格役割」とは命題の持つ格役割を言う。

ここで、(126')の意味を説明しよう。この文の「犬の走るスピードが馬の走るスピードと差があるという状態にある」という命題内容は論理式では「比」[跑' (狗), 跑' (马), 有' { 跑' (狗), [速度 1]} & 有' { 跑' (马), [速度 2]} & 有' { 減' ([速度 1], [速度 2]), [差数]} & 到' ([差数], 多少)] のように表示できる。

次に、この論理式について詳しく説明する。「有' { 跑' (狗), [速度 1]}」は「“犬が走ること”には[速度 1]がある」の意を、「有' { 跑' (马), [速度 2]}」は「“馬が走ること”には[速度 2]がある」の意を、「有' { 減' ([速度 1], [速度 2]), [差数]} & 到' ([差数], 多少)]」は「[速度 1]から[速度 2]を引くと差がある」の意を表す。用例(126)の意味は前述のすべての命題内容を含んでいることになる。さらに、 $\gamma 1$ は「跑' (狗)」と「跑' (马)」が「拡張された経験者格」を、「速度 1」と「速度 2」が「属格(対象格)」を表すので、「格役割」を表示する。 $\gamma 2$ は減法で差があること、つまり「数量化」を表している。 $\gamma 3$ は差がいくらかあること、言い換えれば「差がいくらかの量に達している」こと、つまり一種の「着点」を表している。

この文についてタイプ理論を用いたモデルによって説明してみよう。例 (126) のタイプ分析は樹形図で簡略表示すると、図 20 となる。

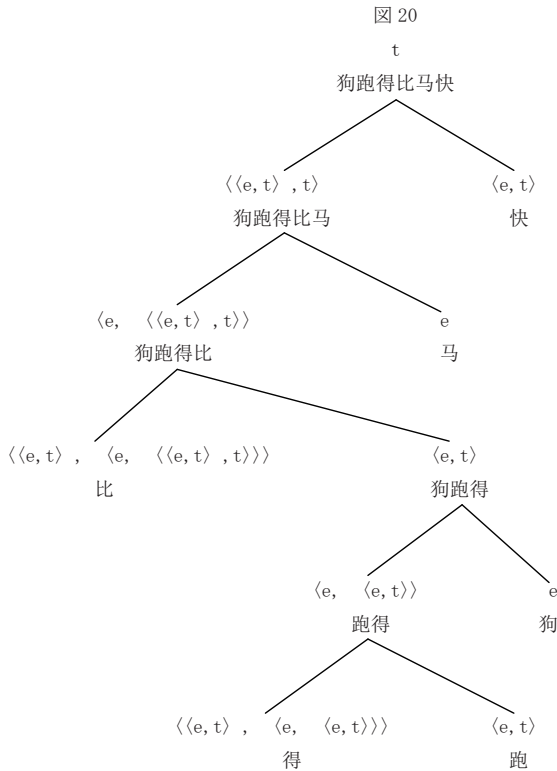


図 20 からみると、“比”のタイプ式は“ $\langle (e, t), \langle e, \langle (e, t), t \rangle \rangle$ ”の三項述語であり、“狗”と“马”は個体定項“e”であり、“得”は“ $\langle (e, t), \langle e, \langle (e, t) \rangle \rangle$ ”の三項述語であり、“跑”と“快”は“ $\langle (e, t) \rangle$ ”の一項述語である。

この例が示しているように、タイプ式による樹形図は文を構成するすべての要素のタイプを決定できる。

この用例についても、その論理式の成立のプロセスを有限オートマトンと順序論理回路のモデルを用いて説明しておこう。(126)の文の有限オートマトン、順序論理回路、入力記憶に基づいて作成した論理式は次のようになる。

図 21

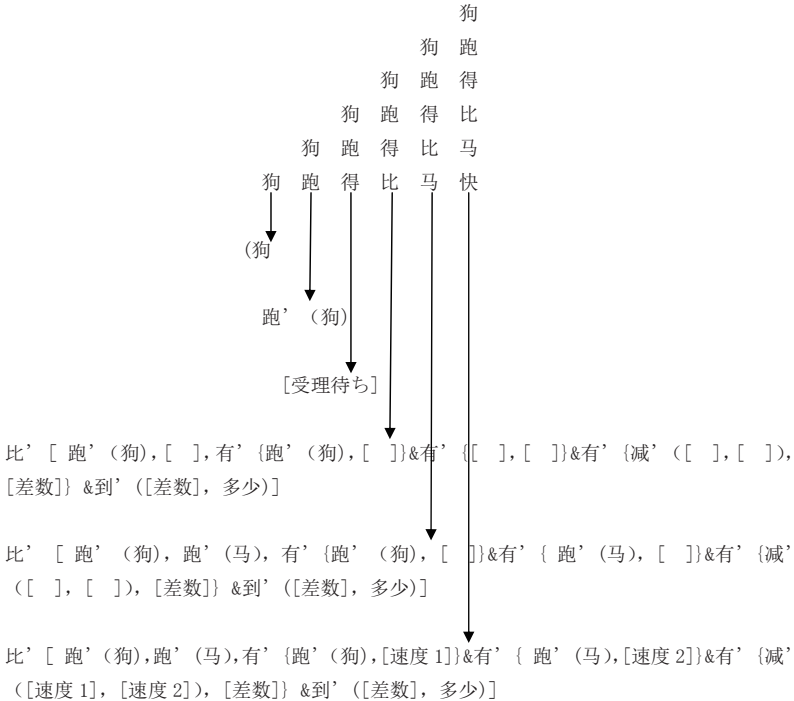
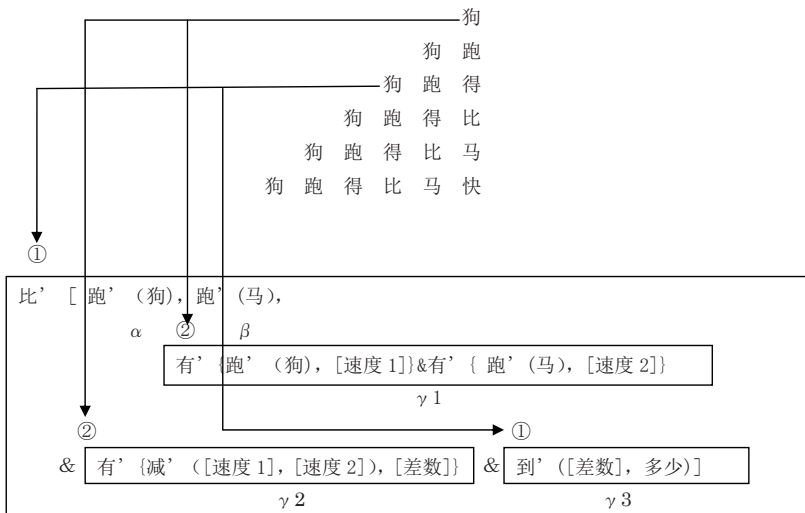


図 21 について説明しよう。まず“狗”を入力し、論理式は“(狗)”になる。第二に“狗跑”を入力し、論理式は“跑’ (狗)”になる。第三に“狗跑得”を入力し、ここで“受理待ち”になる。第四に“狗跑得比”を入力し、論理式は“比’ [跑’ (狗), [], 有’ { 跑’ (狗), [] } & 有’ { [], [] } & 有’ { 减’ ([], []), [差数] } & 到’ ([差数], 多少)]”になる。第五に“狗跑得比马”を入力し、ここで論理式は“比’ [跑’ (狗), 跑’ (马), 有’ { 跑’ (狗), [] } & 有’ { 跑’ (马), [] } & 有’ { 减’ ([], [], [差数]) } & 到’ ([差数], 多少)]”になる。最後に“狗跑得比马快”を入力し、文のすべての入力完了する。その論理式は“比’ [跑’ (狗), 跑’ (马), 有’ { 跑’ (狗), [速度 1] } & 有’ { 跑’ (马), [速度 2] } & 有’ { 减’ ([速度 1], [速度 2]), [差数] } & 到’ ([差数], 多少)]”になる。この図からみると、“比”の入力とともに、文の全体の構造が決められている。

入力記憶によって文を構成するすべての成分を作りあげることができる。その生成過程は次の図 22 になる。

図 22



論理式は入力記憶によって作成される。まず①で比' [α, β, γ1&γ2&γ3]の三項関数とγ3の「着点」が、第二に②でγ1の「拡張された格役割」とγ2の「量化」が決定される。

3.2.2.3 共通点と相違点

次に、例(125)と(126)の異同を説明する。

(125) 狗比马跑得快。(犬は馬より走るのが速い。)

～ト 走る ～ガ 走る ～ガ

(125') 比' [狗, 马, 有' {跑' (狗), [速度 1]}&有' {跑' (马), [速度 2]}&

アル ～ガ ～ト アリ ～ニ ～ガ アル ～ニ ～ガ

α β

γ 1

ヒク ～カラ ～ヲ ナル ～ガ ～ニ

有' {減' ([速度 1], [速度 2]), [差数]} &到' ([差数], 多少)]

アル ～ニ ～ガ

～トイウ状態ニ

γ 2

γ 3

(126) 狗跑得比马快。(犬は馬より走るのが速い。)

～ト 走る ～ガ 走る ～ガ 走る ～ガ 走る ～ガ

(126') 比' [跑' (狗), 跑' (马), 有' {跑' (狗), [速度 1]}&有' {跑' (马),

アル ～ガ ～ト アリ ～ニ ～ガ アル ～ニ

α

β

γ 1

ヒク ～カラ ～ヲ ナル ～ガ ～ニ

[速度 2]}&有' {減' ([速度 1], [速度 2]), [差数]} &到' ([差数], 多少)]

～ガ アル ～ニ ～ガ

～トイウ状態ニ

γ 2

γ 3

例(125)と(126)の共通点：

(一) 自然言語からみると、意味は同じである。両方とも“犬は馬より走るのが速い”の意を表す。

(二) 論理構造からみると、γ 1、γ 2 と γ 3 の項は同じである。つまり、“格役割”、“量化”と“着点”は同じである。

例(125)と(126)の相違点：

論理構造からみると、α と β (波線部分)が異なる。つまり、“話題”と“副話題”が異なる。(125)はある[性質]を持つ“類”の集合の比較であり、(126)は“個体”の[動作]の比較である。

3.2.3 「数量」を比較の意味基準とする差異比較構文の論理構造と文型意味

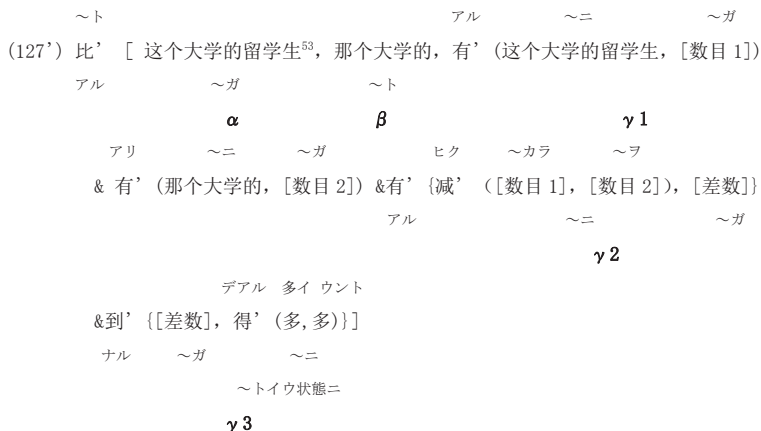
“比”構文は事物の具体的数量について比較することができる。ここで、「数量」を表す“比”構文の文型を二種類に分けて論じる。

3.2.3.1 「X+比+Y+形容詞(+動詞)+副詞(あるいは数量詞)」

「X+比+Y+形容詞あるいは動詞+副詞あるいは数量詞」の文型は「比較する対象に数量的差があること」の意を表す。副詞を用いる場合は「抽象的差」を表し、数量詞を用いる場合は「具体的差」を表す。

(127) 这个大学的留学生比那个大学的多得多。(この大学の留学生はあの大学よりうんと多い。)

この文の論理式は次のようになる。



ここで、(127')の意味を説明しよう。この文の「この大学の留学生はあの大学よりうんと多い」という命題内容は論理式では「比' [这个大学的留学生, 那个大学的, 有' (这个大学的留学生, [数目1]) & 有' (那个大学的, [数目2]) &有' {減' ([数目1], [数目2]), [差数]} &到' {[差数], 得' (多,多)}」のように表示できる。

次に、この論理式について詳しく説明する。「有' (这个大学的留学生, [数目1])」は「“这个大学的留学生”には[数目1]がある」の意を、「有' (那个大学的, [数目2])」は「“那个大学的”には[数目2]がある」の意を、「有' {減' ([数目1], [数目2]), [差数]} &到' {[差数], 得' (多,多)}」は「[数目1]から[数目2]を引くと差がある」の意を、「得' (多,多)」は「多い」と「たいへん」という「程度」の間には「得」という関係があるの意を表す。用例(127)の意味は前述のすべての命題内容を含んでいることになる。さらに、γ1は「这

⁵³ 実は、“这个大学的留学生”の論理式は“有(的)' (这个大学, 留学生)”である。しかし、ここでの論述の中心は比較構文であるため、繁雑になるのを避けてそのまま“这个大学的留学生”と記す。次の“那个大学的”も同じである。

个大学的留学生」と「那个大学的」が「経験者格」を、「数目1」と「数目2」が「属格(対象格)」を表すので、「格役割」を表示する。 $\gamma 2$ は減法で差があること、つまり「数量化」を表している。 $\gamma 3$ は差がいくらかあること、言い換えれば「差がいくらかの量に達している」こと、つまり一種の「着点」を表している。

この文についてタイプ理論を用いたモデルによって説明してみよう。例(127)のタイプ分析は樹形図で簡略表示すると、図23となる。

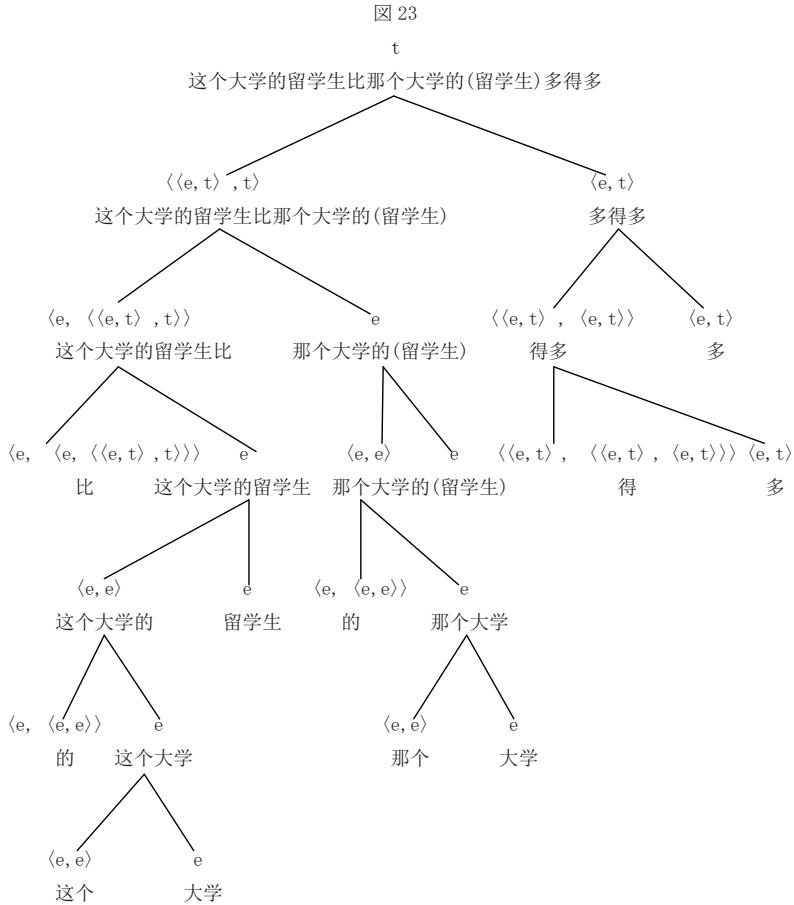
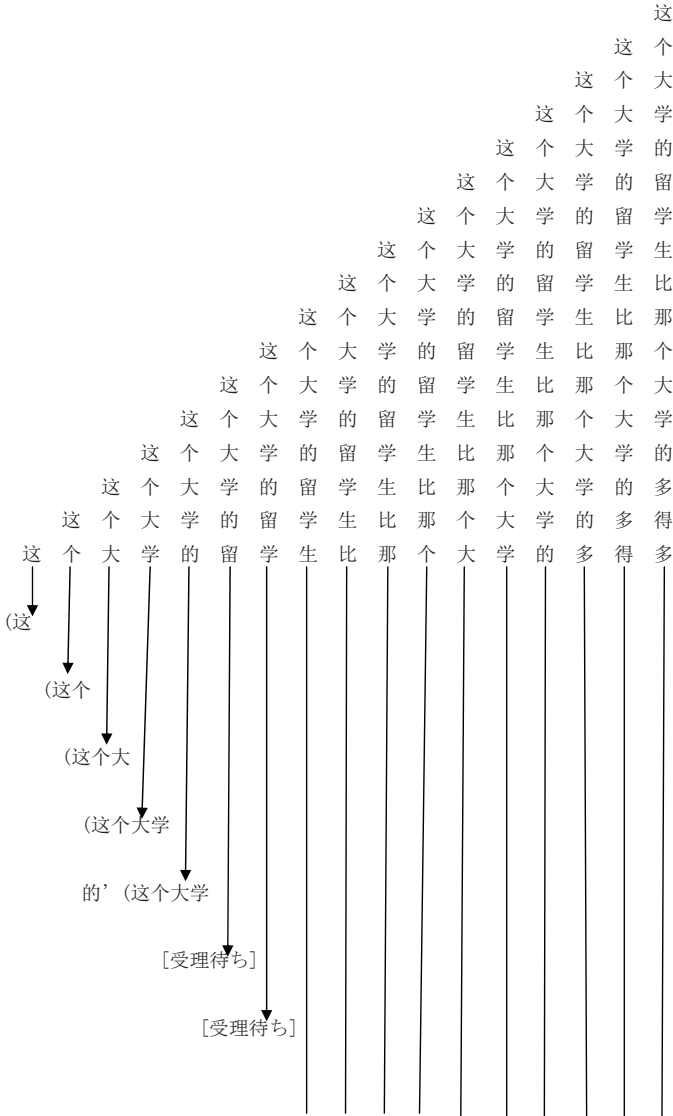


図 23 からみると、“比”のタイプ式は“ $\langle e, \langle e, \langle \langle e, t \rangle, t \rangle \rangle$ ”の三項述語であり、“大学”と“留学生”は個体定項“e”であり、“的”は“ $\langle e, \langle e, e \rangle$ ”の二項述語であり、“这个”と“那个”は“ $\langle e, e \rangle$ ”の複合定項であり、“得”は“ $\langle \langle e, t \rangle, \langle \langle e, t \rangle, \langle e, t \rangle \rangle$ ”の三項述語であり、“多”は“ $\langle e, t \rangle$ ”の一項述語である。

この例が示しているように、タイプ式による樹形図は文を構成するすべての要素のタイプを決定できる。

この用例についても、その論理式の成立のプロセスを有限オートマトンと順序論理回路のモデルを用いて説明しておこう。(127)の文の有限オートマトン、順序論理回路、入力記憶に基づいて作成した論理式は次のようになる。

図 24



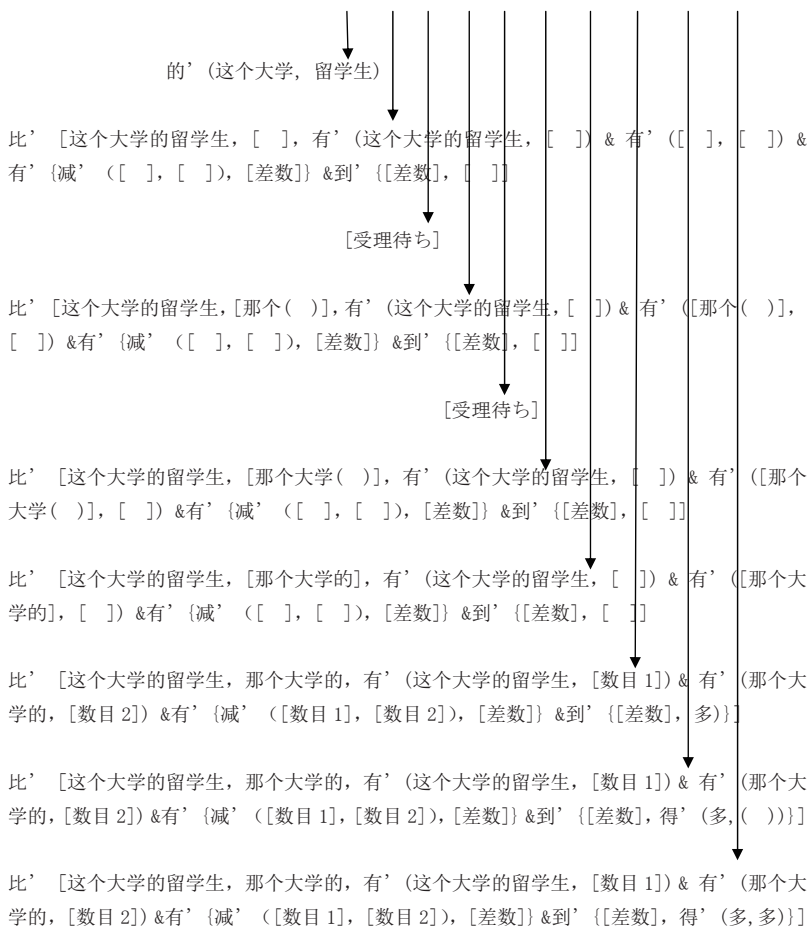


図 24 について説明しよう。まず“这”を入力し、論理式は“(这)になる。第二に“这个”を入力し、論理式は“(这个)になる。第三に“这个大”を入力し、論理式は“(这个大)になる。第四に“这个大学”を入力し、論理式は“(这个大学)になる。第五に“这个大学的”を入力し、ここで論理式は“的' (这个大学)になる。第六に“这个大学的留”を、第七に“这个大学的留学”を入力し、ずっと“受理待ち”の状態になる。第八に“这个大学的留学生”を入力し、ここで論理式は“的' (这个大学, 留学生)”になる。第九に“这个大学的留学生比”を入力し、論理式は“比' [这个大学的留学生, []], 有' (这个大学的留学生, []) & 有' ([], []) & 有' {減' ([], []), [差数]} & 到' {[差数],

[]”になる。第十に“这个大学的留学生比那”を入力し、ここで“受理待ち”の状態になる。

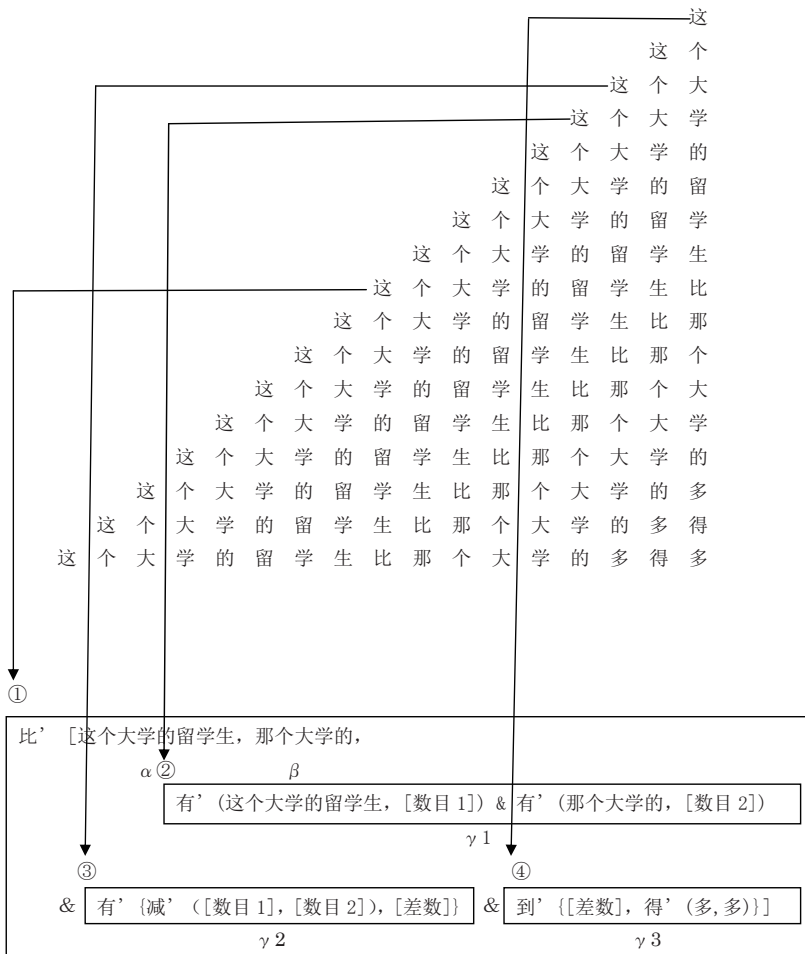
第十一に“这个大学的留学生比那个”を入力し、論理式は“比’ [这个大学的留学生, [那个()], 有’ (这个大学的留学生, []) & 有’ ([那个()], []) & 有’ {減’ ([], []), [差数]} & 到’ {[差数], []}]”になる。第十二に“这个大学的留学生比那个大”を入力し、ここで“受理待ち”の状態になる。第十三に“这个大学的留学生比那个大学”を入力し、論理式は“比’ [这个大学的留学生, [那个大学()], 有’ (这个大学的留学生, []) & 有’ ([那个大学()], []) & 有’ {減’ ([], []), [差数]} & 到’ {[差数], []}]”になる。第十四に“这个大学的留学生比那个大学的”を入力し、論理式は“比’ [这个大学的留学生, [那个大学的], 有’ (这个大学的留学生, []) & 有’ ([那个大学的], []) & 有’ {減’ ([], []), [差数]} & 到’ {[差数], []}]”になる。

第十五に“这个大学的留学生比那个大学的多”を入力し、論理式は“比’ [这个大学的留学生, 那个大学的, 有’ (这个大学的留学生, [数目 1]) & 有’ (那个大学的, [数目 2]) & 有’ {減’ ([数目 1], [数目 2]), [差数]} & 到’ {[差数], (多)}}”になる。第十六に“这个大学的留学生比那个大学的多得”を入力し、論理式は“比’ [这个大学的留学生, 那个大学的, 有’ (这个大学的留学生, [数目 1]) & 有’ (那个大学的, [数目 2]) & 有’ {減’ ([数目 1], [数目 2]), [差数]} & 到’ {[差数], 得’ (多, ())}]”になる。

最後に“这个大学的留学生比那个大学的多得多”を入力し、文のすべての入力完了する。その論理式は“比’ [这个大学的留学生, 那个大学的, 有’ (这个大学的留学生, [数目 1]) & 有’ (那个大学的, [数目 2]) & 有’ {減’ ([数目 1], [数目 2]), [差数]} & 到’ {[差数], 得’ (多, 多)}}”になる。この図からみると、“比”の入力とともに、文の全体の構造が決められている。

入力記憶によって文を構成するすべての成分を作りあげることができる。その生成過程は次の図 25 になる。

図 25

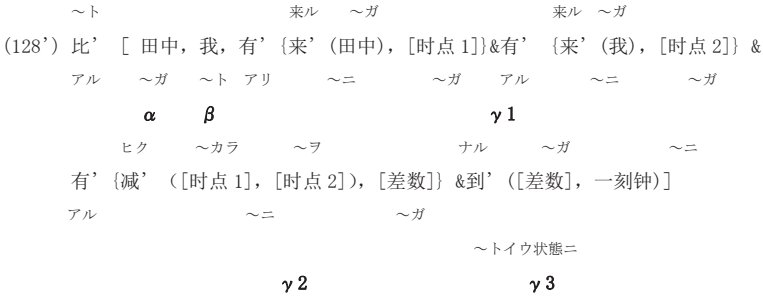


論理式は入力記憶によって作成される。まず①で比' [α, β, γ1&γ2&γ3]の三項関数が、第二に②でγ1の「格役割」が、第三に③でγ2の「量化」が、第四に④でγ3の「着点」が決定される。

次に、数量詞を用いた「具体的な差」のある構文を説明しよう。

(128) 田中比我早来了一刻钟。(田中さんは私より十五分間早く来ている。)

この文の論理式は次のようである。



ここで、(128')の意味を説明しよう。この文の「田中さんは私より十五分間早く来ている」という命題内容は論理式では「比' [田中, 我, 有' {来' (田中), [時点 1]} & 有' {来' (我), [時点 2]} & 有' {減' ([時点 1], [時点 2]), [差数]} & 到' ([差数], 一刻钟)]」のように表示できる。次に、この論理式について詳しく説明する。「有' {来' (田中), [時点 1]}」は「“田中来”には[時点 1]がある」の意を、「有' {来' (我), [時点 2]}」は「“我来”には[時点 2]がある」の意を、「有' {減' ([時点 1], [時点 2]), [差数]} & 到' ([差数], 一刻钟)]」は「[時点 1]から[時点 2]を引くと差(“一刻钟”)がある」の意を表す。用例(128)の意味は前述のすべての命題内容を含んでいることになる。さらに、γ 1は「田中」と「我」が「経験者格」を、「時点 1」と「時点 2」が「属格(対象格)」を表すので、「格役割」を表示する。γ 2は減法で差があること、つまり「数量化」を表している。γ 3は差がいくらかあること、言い換えれば「差がいくらかの量(“一刻钟”)に達している」と、つまり一種の「着点」を表している。

この文についてタイプ理論を用いたモデルによって説明してみよう。例 (128) のタイプ分析は樹形図で簡略表示すると、図 26 となる。

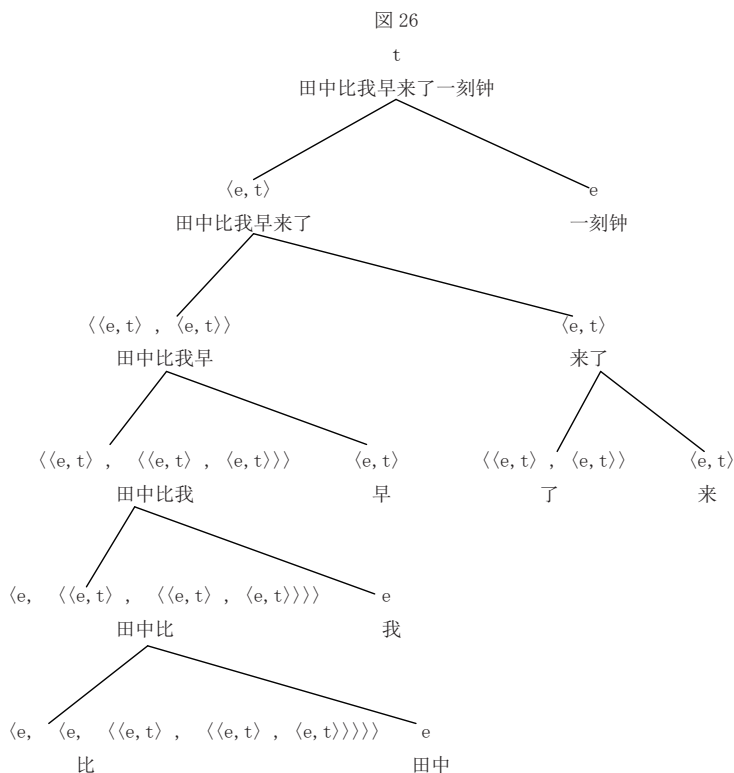


図 26 からみると、“比”のタイプ式は“ $\langle e, \langle e, \langle \langle e, t \rangle, \langle \langle e, t \rangle, \langle e, t \rangle \rangle \rangle \rangle$ ”の五項述語であり、“田中”、“我”と“一刻钟”は個体定項“ e ”であり、“了”は“ $\langle \langle e, t \rangle, \langle e, t \rangle$ ”の二項述語であり、“早”と“来”は“ $\langle e, t \rangle$ ”の一項述語である。

この例が示しているように、タイプ式による樹形図は文を構成するすべての要素のタイプを決定できる。

この用例についても、その論理式の成立のプロセスを有限オートマトンと順序論理回路のモデルを用いて説明しておこう。(128)の文の有限オートマトン、順序論理回路、入力記憶に基づいて作成した論理式は次のようになる。

図 27

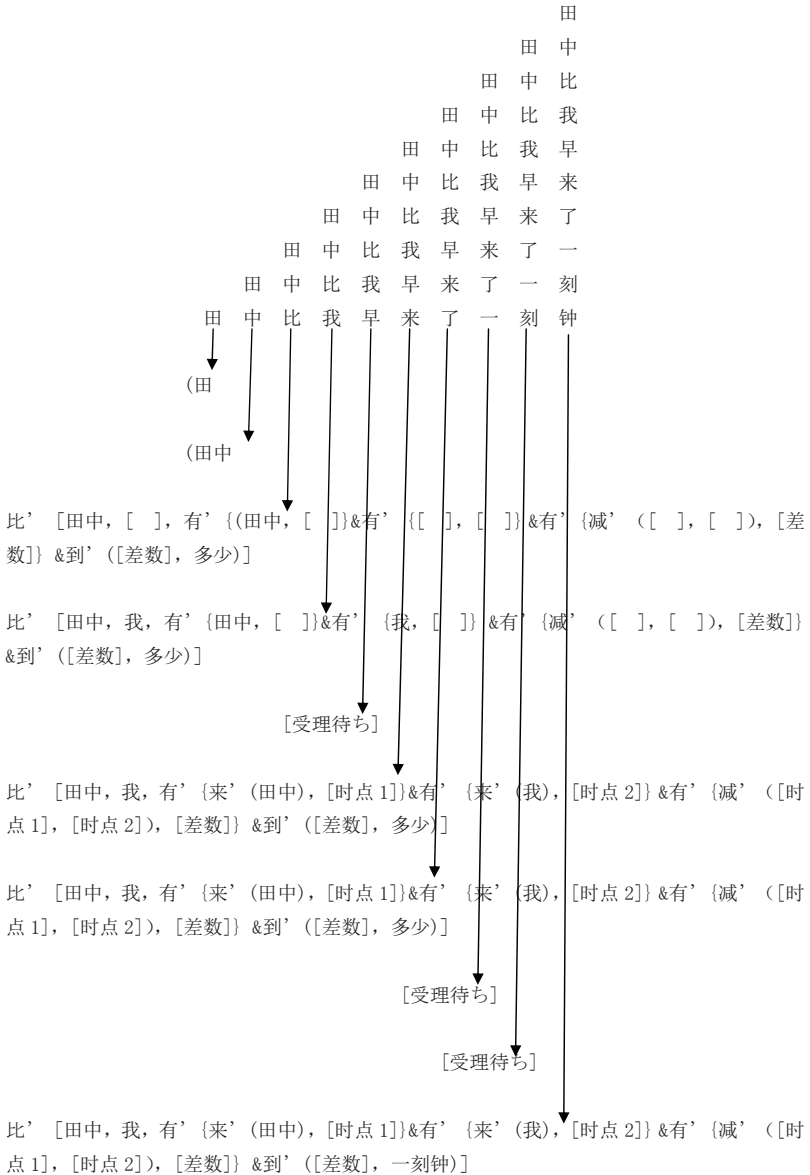
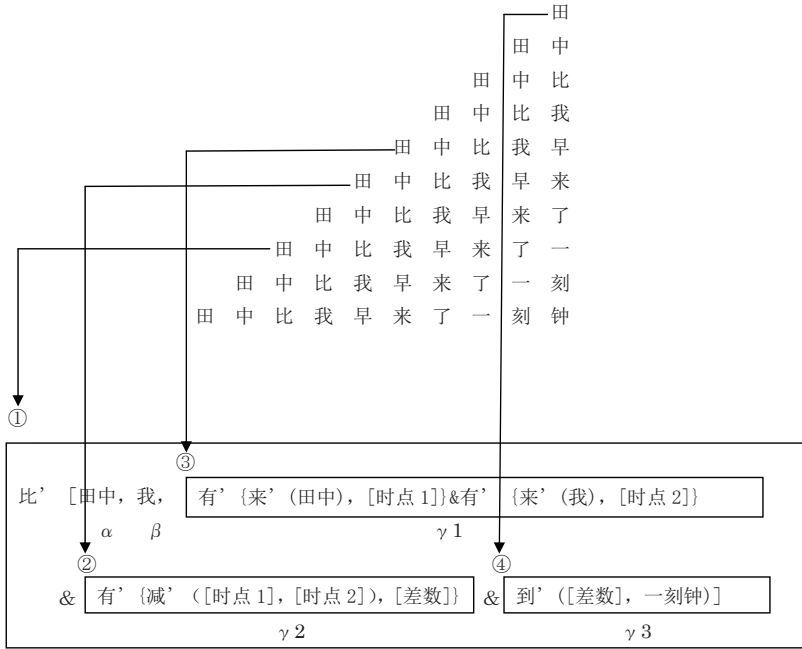


図 27 について説明しよう。まず“田”を入力し、論理式は“(田)”になる。第二に“田中”を入力し、論理式は“(田中)”になる。第三に“田中比”を入力し、論理式は“比’ [田中, [], 有’ {(田中, []}&有’ {[], []}&有’ {減’ ([], []), [差数]} &到’ ([差数], 多少)]”になる。第四に“田中比我”を入力し、論理式は“比’ [田中, 我, 有’ {田中, []}&有’ {我, []}&有’ {減’ ([], []), [差数]} &到’ ([差数], 多少)]”になる。第五に“田中比我早”を入力し、ここでは“受理待ち”になる。

第六に“田中比我早来”を入力し、ここで論理式は“比’ [田中, 我, 有’ {来’ (田中), [时点 1]}&有’ {来’ (我), [时点 2]}&有’ {減’ ([时点 1], [时点 2]), [差数]} &到’ ([差数], 多少)]”になる。第七に“田中比我早来了”を入力し、論理式は変わらない。第八に“田中比我早来了一”を、第九に“田中比我早来了一刻”を入力し、“受理待ち”の状態になる。最後に“田中比我早来了一刻钟”を入力し、文のすべての入力完了する。その論理式は“比’ [田中, 我, 有’ {来’ (田中), [时点 1]}&有’ {来’ (我), [时点 2]}&有’ {減’ ([时点 1], [时点 2]), [差数]} &到’ ([差数], 一刻钟)]”になる。この図からみると、“比”の入力とともに、文の全体の構造が決められている。

入力記憶によって文を構成するすべての成分を作りあげることができる。その生成過程は次の図 28 になる。

図 28



論理式は入力記憶によって作成される。まず①で比' [α , β , $\gamma 1$ & $\gamma 2$ & $\gamma 3$]の三項関数が、第二に②で $\gamma 2$ の「量化」が、第三に③で $\gamma 1$ の「拡張された格役割」が、第四に④で $\gamma 3$ の「着点」が決定される。

3.2.3.2 「X+比+Y+形容詞あるいは動詞+倍数あるいはパーセント(%)」

「X+比+Y+形容詞あるいは動詞+倍数あるいはパーセント(%)」の文型は「XがYより何倍あるいは何パーセント増加あるいは減少する」の意を表す。

(129) 今年の産量比去年増加了三倍。(今年の生産量は去年より三倍増えた。)

この文の論理式は次のようである。

～ト	アリ	～ニ	～ガ		
(129') 比' [今年の産量 ⁵⁴ , 去年(的産量), 有' (今年の産量, [数目 1])					
アル	～ガ	～ト			
	α	β		γ 1	
アル	～ニ	～ガ	ヒク	～カラ	～ヲ
&有' (去年(的産量), [数目 2]) &有' {減' ([数目 1], [数目 2]), [差数]}					
		アル		～ニ	～ガ
				γ 2	
ナル	～ガ	～ニ			
&到' ([差数], 四倍)]					
		～トイウ状態ニ			
		γ 3			

ここで、(129')の意味を説明しよう。この文の「今年の生産量は去年より三倍増えた」という命題内容は論理式では「比' [今年の産量, 去年(的産量), 有' (今年の産量, [数目 1]) &有' (去年(的産量), [数目 2]) &有' {減' ([数目 1], [数目 2]), [差数]} &到' ([差数], 四倍)]」のように表示できる。

次に、この論理式について詳しく説明する。「有' (今年の産量, [数目 1])」は「“今年の産量”には[数目 1]がある」の意を、「有' (去年(的産量), [数目 2])」は“去年(的産量)”には[数目 2]がある」の意を、「有' {減' ([数目 1], [数目 2]), [差数]} &到' ([差数], 四倍)」は「[数目 1]から[数目 2]を引くと差(差が四倍になる)がある」の意を表す。用例(129)の意味は前述のすべての命題内容を含んでいることになる。さらに、γ 1は「今年の産量」と「去年(的産量)」が「経験者格」を、「数目 1」と「数目 2」が「属格(対象格)」を表すので、「格役割」を表示する。γ 2は減法で差があること、つまり「数量化」を表している。γ 3は差がいくらかあること、言い換えれば「差がいくらかの量に達している」こと、つまり一種の「着点」を表している。

54 “今年の産量”の文成分の内部の関係は「今年」という項と「産量」という項には“的”という“関係”がある”ことであり、論理式は““有(的)’ (今年, 産量)”である。しかし、ここでの論述の中心は比較構文であるため、繁雑になるのを避けてそのまま“今年の産量”と記する。次の“去年(的産量)”も同じである。

この文についてタイプ理論を用いたモデルによって説明してみよう。例(129)のタイプ分析は樹形図で簡略表示すると、図29となる。

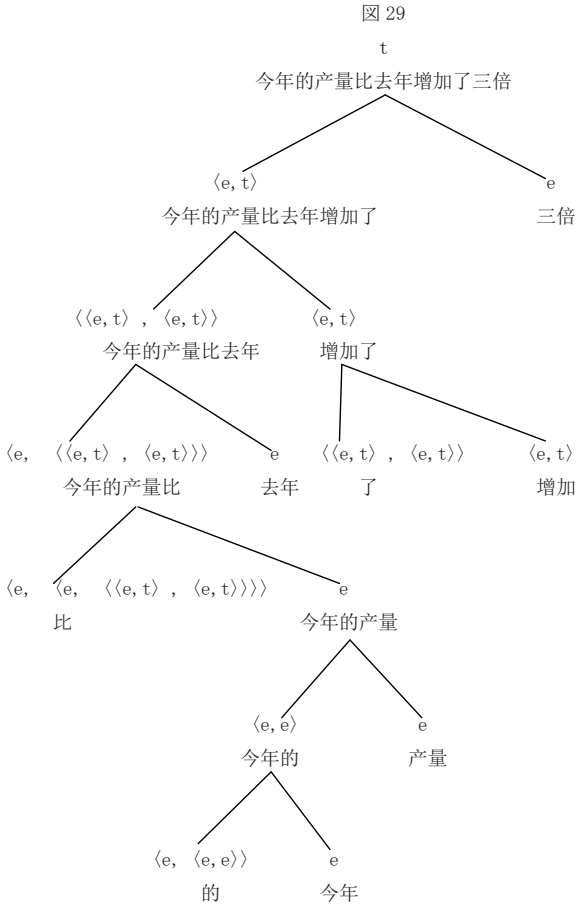
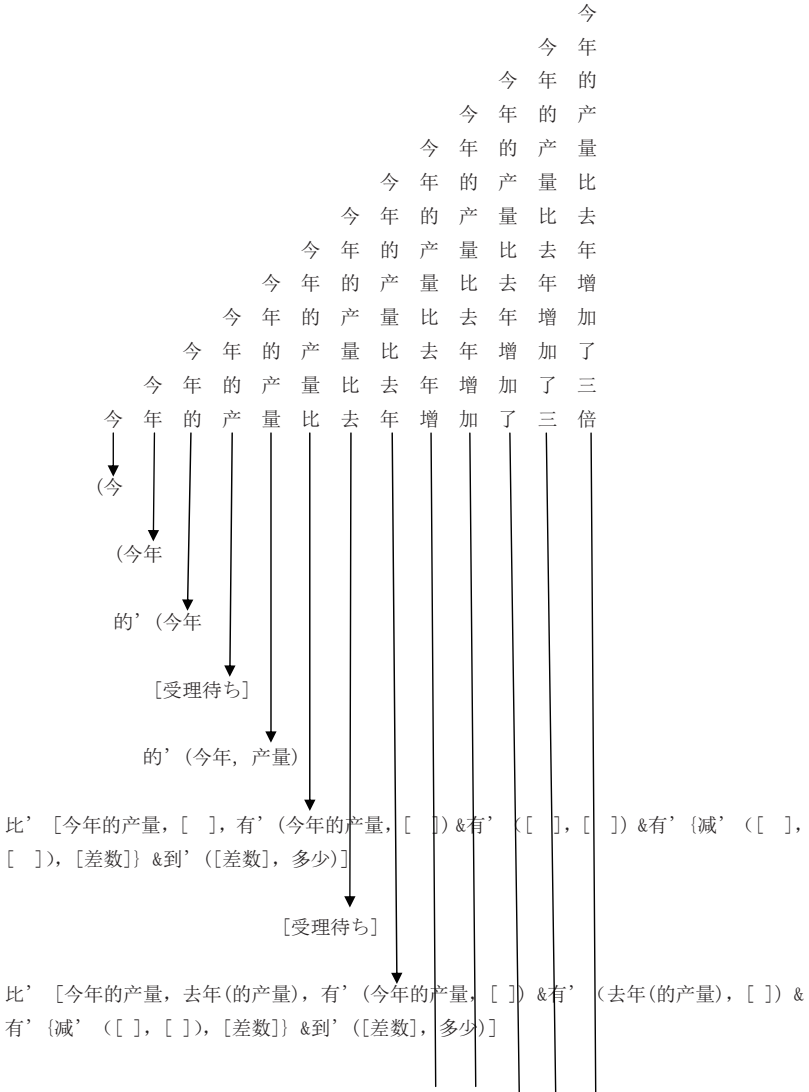


図29からみると、“比”のタイプ式は“<e, <e, <<e, t>, <e, t>>>”の四項述語であり、“今年”、“去年”、“三倍”と“产量”は個体定項“e”であり、“了”は“<<e, t>, <e, t>”の二項述語であり、“増加”は“<e, t>”の一項述語である。

この例が示しているように、タイプ式による樹形図は文を構成するすべての要素のタイプを決定できる。

この用例についても、その論理式の成立のプロセスを有限オートマトンと順序論理回路のモデルを用いて説明しておこう。(129)の文の有限オートマトン、順序論理回路、入力記憶に基づいて作成した論理式は次のようになる。

図 30



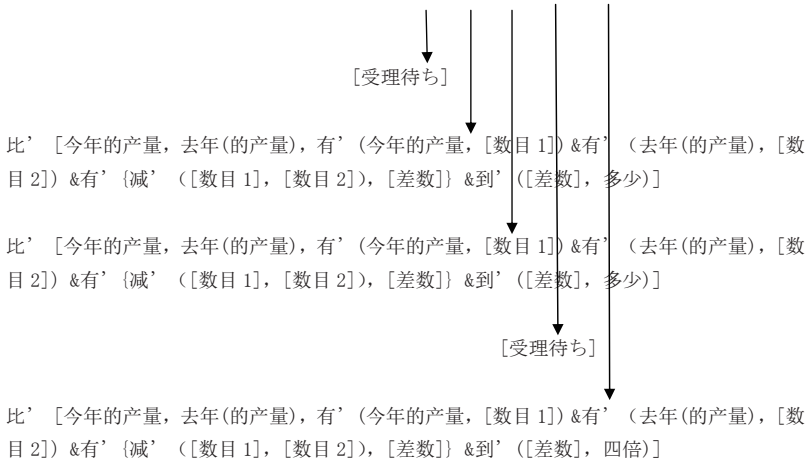


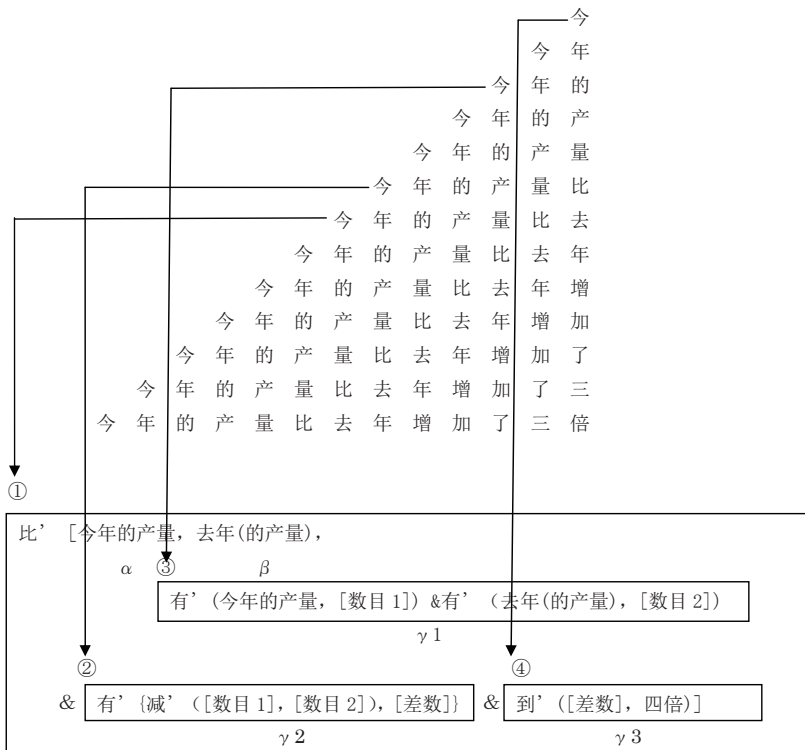
図 30 について説明しよう。まず“今”を入力し、論理式は“（今）になる。第二に“今年”を入力し、論理式は“（今年）になる。第三に“今年的”を入力し、論理式は“的'（今年）になる。第四に“今年的产”を入力し、ここで“受理待ち”になる。第五に“今年的产量”を入力し、ここで論理式は“的'（今年，产量）”になる。第六に“今年的产量比”を入力し、論理式は“比' [今年的产量, [], 有' (今年的产量, []) &有' ([], []) &有' {減' ([], []), [差数]} &到' ([差数], 多少)]”になる。第七に“今年的产量比去”を入力し、ここで“受理待ち”の状態になる。

第八に“今年的产量比去年”を入力し、ここで論理式は“比' [今年的产量, 去年(的产量), 有' (今年的产量, []) &有' (去年(的产量), []) &有' {減' ([], []), [差数]} &到' ([差数], 多少)]”になる。第九に“今年的产量比去年増”を入力し、ここで“受理待ち”になる。第十に“今年的产量比去年增加”を入力し、論理式は“比' [今年的产量, 去年(的产量), 有' (今年的产量, [数目 1]) &有' (去年(的产量), [数目 2]) &有' {減' ([数目 1], [数目 2]), [差数]} &到' ([差数], 多少)]”になる。

第十一に“今年的产量比去年增加了”を入力し、ここで論理式は変わらない。第十二に“今年的产量比去年增加了三”を入力し、ここで“受理待ち”の状態になる。最後に“今年的产量比去年增加了三倍”を入力し、文のすべての入力完了する。その論理式は“比' [今年的产量, 去年(的产量), 有' (今年的产量, [数目 1]) &有' (去年(的产量), [数目 2]) &有' {減' ([数目 1], [数目 2]), [差数]} &到' ([差数], 四倍)]”になる。この図からみると、“比”の入力とともに、文の全体の構造が決められている。

入力記憶によって文を構成するすべての成分を作りあげることができる。その生成過程は次の図 31 になる。

図 31



論理式は入力記憶によって作成される。まず①で比' [α , β , $\gamma 1$ & $\gamma 2$ & $\gamma 3$]の三項関数が、第二に②で $\gamma 2$ の「量化」が、第三に③で $\gamma 1$ の「格役割」が、第四に④で $\gamma 3$ の「着点」が決定される。

3.2.4 “比” 構文の否定式の論理式と文型意味

“比” 構文の否定式は「X+不+比+Y+形容詞」である。

まず、意味上からこの否定式(「X不比YW」)の前提と意味を説明しよう。

(130) 甲：您要什么？(何にしますか。)

乙：请问，有中国红葡萄酒吗？(あの、中国ワインがありますか。)

甲：没有了。您看，这种葡萄酒也很好，质量不比中国红葡萄酒差，价钱比那种便宜。(現在はありませんが、このワインもいいけれど、質は中国ワインよりわるくないし、値段も中国ワインよりやすい。) (『实用汉语课本』)

例(130)の会話は“不比” 構文の前提を示している。

この文の比較主体は“这种葡萄酒(質量)”であり、比較客体は“中国葡萄酒(質量)”である。記号で記述すると、“这种葡萄酒(質量)=X”、“中国葡萄酒(質量)=Y”である。XとYは以下の意味関係がある。

(131)a. Y很好。

b. X也很好。

c. X和Y都很好。

d. X不比Y差。

この意味関係のように、XとYを比較し、“不比”の文型を用い“X不比Y差”になる。

(131)のaとbは両方とも“好”の性質を持つが、dは“好”の相反意味“差”を用いる。すなわち、

(131') a. Y很W	}	→ d. X不比Y→W
b. X也很W		
c. X和Y都很W		

のように、a、b、cはdの前提である。

ここの「→W」は「W」の否定概念(つまり“反対の意味”)を表す。さらに、“X不比Y→W”の中の“→W”は“不+形容詞”の形を使用してはいけなから、“→W”は必ず肯定式(positive form)を用いなければならない。たとえば、“W”が“好”であれば、“→W”が“差”である。“W”が“高”であれば、“→W”が“矮”である。(相原茂 1992 参照)

次に、「X + 不 + 比 + Y + 形容詞」の論理構造と意味を説明してみよう。

(132) 今天不比昨天冷。(今日は昨日より寒くない。)

この文の論理式は次のようになる。

(ナイ) ~ト	アリ	~ニ	~ガ	アル	~ニ	~ガ
(132') ~比' [今天, 昨天, 有' (今天, [気温 1]) & 有' (昨天, [気温 2]) &						
アル	~ガ	~ト				
α β			γ 1			
ヒク	~カラ	~ヲ				
有' {減' ([気温 1], [気温 2]), [差数]} & 到' {[差数], 有' (冷, 多少)}			アル	~ニ	~ガ	
アル	~ニ	~ガ	ナル	~ガ	~ニ	
						~トイウ状態ニ
γ 2			γ 3			

ここで、(132')の意味を説明しよう。この文の「今日は昨日より寒くない」という命題内容は論理式では「~比' [今天, 昨天, 有' (今天, [気温 1]) & 有' (昨天, [気温 2]) & 有' {減' ([気温 1], [気温 2]), [差数]} & 到' {[差数], 有' (冷, 多少)}}」のように表示できる。次に、この論理式について詳しく説明する。「有' (今天, [気温 1])」は「今日には[気温 1]がある」の意を、「有' (昨天, [気温 2])」は「昨日には[気温 2]がある」の意を、「有' {減' ([気温 1], [気温 2]), [差数]} & 到' {[差数], 有' (冷, 多少)}}」は「[気温 1]から[気温 2]を引くと差がある」の意を表す。「…比…冷」の“冷”は「はっきりした差がない」ことを表す。このことを「有' (冷, 多少)」で表現することにする。「~」は文全体を否定している。メタ言語では「今日は昨日と寒さの差があるない」の意を表している。

用例(132)の意味は前述のすべての命題内容を含んでいることになる。さらに、γ 1は「今天」と「昨天」が「経験者格」を、「気温 1」と「気温 2」が「属格(対象格)」を表すので、「格役割」を表示する。γ 2は減法で差があること、つまり「数量化」を表している。γ 3は差がいくらかあること、言い換えれば「差がいくらかの量に達している」こと、つまり一種の「着点」を表している。

この文についてタイプ理論を用いたモデルによって説明してみよう。(132)のタイプ分析は樹形図で簡略表示すると、図 32 となる。

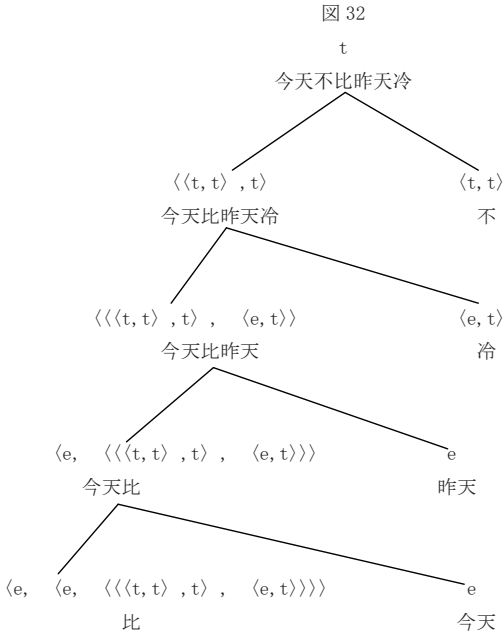


図 32 からみると、“比”のタイプ式は“<e, <e, <<<t, t>, t>, <e, t>>>>”の四項述語であり、“今天”と“昨天”は個体定項“e”であり、“冷”は“<e, t>”の一項述語であり、否定詞“不”は論理タイプ“<t, t>”である。

次に、論理式の作成の過程を有限オートマトンと順序論理回路のモデルを使用して説明しよう。(132)の文の有限オートマトン、順序論理回路、入力記憶に基づいて作成した論理式は次のようになる。

図 33

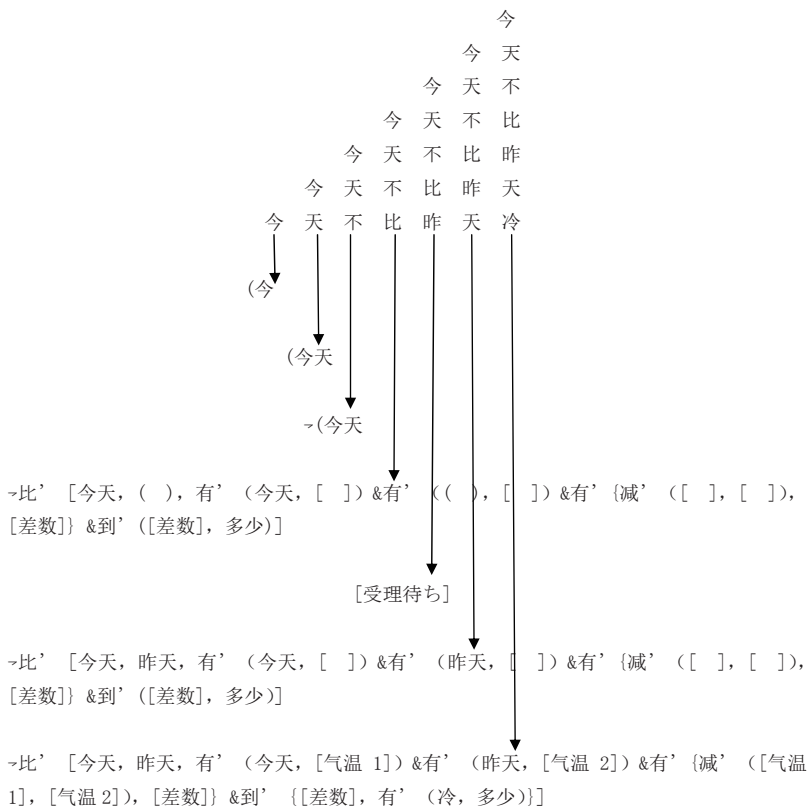


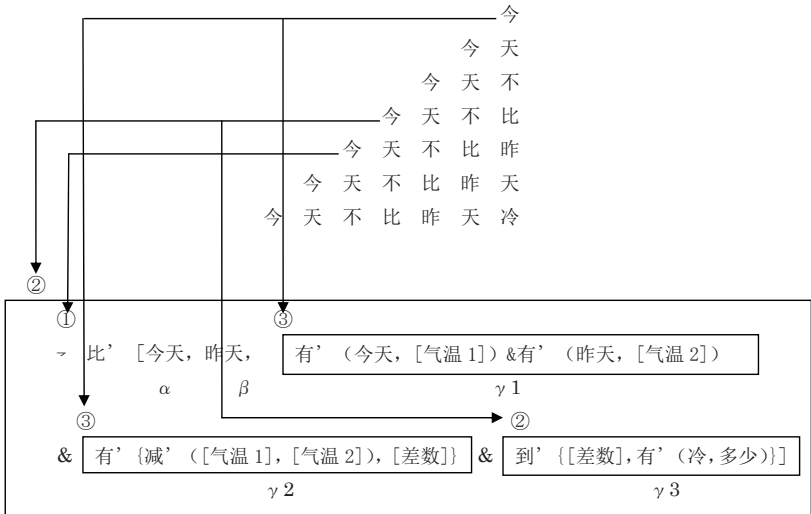
図 33 について説明しよう。まず“今”を入力し、論理式は“(今)”になる。第二に“今天”を入力し、論理式は“(今天)”になる。第三“今天不”を入力し、論理式は“¬(今天)”になる。第四に“今天不比”を入力し、論理式は“¬比' [今天, (), 有' (今天, []) &有' ((), []) &有' {減' ([], []), [差数]} &到' ([差数], 多少)]”になる。第五に“今天不比昨”を入力し、ここで“受理待ち”になる。

第六に“今天不比昨天”を入力し、ここで論理式は“¬比' [今天, 昨天, 有' (今天, []) &有' (昨天, []) &有' {減' ([], []), [差数]} &到' ([差数], 多少)]”

になる。最後に“今天不比昨天冷”を入力し、文のすべての入力完了する。その論理式は“¬比’ [今天, 昨天, 有’ (今天, [气温 1]) & 有’ (昨天, [气温 2]) & 有’ {減’ ([气温 1], [气温 2]), [差数]} & 到’ {[差数], 有’ (冷, 多少)}]”になる。この図からみると、“比”の入力とともに、文の全体の構造が決められている。

入力記憶によって文を構成するすべての成分を作りあげることができる。その生成過程は次の図 34 になる。

図 34



論理式は入力記憶によって作成される。まず①で「¬」の否定が、第二に②で比’ [α, β, γ1&γ2&γ3]の三項関数とγ3の「着点」が、第三に③でγ1の「格役割」とγ2の「量化」が決定される。

しかし、なぜ“比”構文の否定式は「X+比+Y+不+形容詞」にならないのか。この回答について、赵元任(1968)は「否定詞“不”の作用域が異なるからである(本章の2. 1.2 参照されたい)」と論じているが、筆者は「X+比+Y+不+形容詞」の文型は論理的ではないと考えている。次の用例の論理構造の分析を通して、説明しよう。

- (133)a. 今天比昨天冷。(今日は昨日より寒い。)
- b. 今天不比昨天冷。(今日は昨日より寒くない。)
- c. *今天比昨天不冷。(今日は昨日より寒くない。)

(133)の論理式は次のようになる。

～ト アリ ～ニ ～ガ アル ～ニ ～ガ
 a' .比' [今天, 昨天, 有' (今天, [气温 1]) &有' (昨天, [气温 2])] &
 アル ～ガ ～ト
 α β γ 1
 ヒク ～カラ ～ヲ アル ～ニ ～ガ
 有' {減' ([气温 1], [气温 2]), [差数]} &到' {[差数], 有' (冷, 多少)}]
 アル ～ニ ～ガ ナル ～ガ ～ニ
 ～トイウ状態ニ

γ 2 γ 3
 (ナイ)～ト アリ ～ニ ～ガ アル ～ニ ～ガ
 b' .比' [今天, 昨天, 有' (今天, [气温 1]) &有' (昨天, [气温 2])] &
 アル ～ガ ～ト
 α β γ 1
 ヒク ～カラ ～ヲ アル ～ニ ～ガ
 有' {減' ([气温 1], [气温 2]), [差数]} &到' {[差数], 有' (冷, 多少)}]
 アル ～ニ ～ガ ナル ～ガ ～ニ
 ～トイウ状態ニ

γ 2 γ 3
 ～ト アリ ～ニ ～ガ アル ～ニ ～ガ
 c' .比' [今天, 昨天, 有' (今天, [气温 1]) &有' (昨天, [气温 2])] &
 アル ～ガ ～ト
 α β γ 1
 ヒク ～カラ ～ヲ アル ～ニ ～ガ
 有' {減' ([气温 1], [气温 2]), [差数]} &到' {[差数], 有' (冷, 多少)}]
 アル ～ニ ～ガ ナル ～ガ ～ニ
 ～トイウ状態ニ

(133-a)は“比”構文である。(133-b)は a の否定文で、否定詞“不”は文全体を否定している。論理式からみると、(133-a')の“比' ”の前に否定記号“¬”をつけて否定式にする。(133-c)は“今天比昨天不冷(今日は昨日より寒くない)”の形式をとるが、これは“寒くない”という点(基準)で“今日”と“昨日”に差があることを表す。この基準としての“寒くない”は“少し暑い”、“暑い”あるいは“たいへん暑い”のどれを表すかが[不確定]である。このような[不確定なもの]を基準にして差があることを測定できない。さらに、(133-c')の論理式からみると、「否定」の対象が“比' ”の関数であるか、それとも“到' ”の関数であるかが不明である。従って、「X+比+Y+不+形容詞」の文型は論理的ではないと考えられる。

4. まとめ(三)

従来の中国語における比較構文についての研究の中では“比”構文についての研究が最も多い。本章の先行研究の部分ではその全部をとりあげることができなかった、ここで“比”構文に対する研究内容と代表的研究者を整理し、表でまとめると次の図 35 になる。

図 35

“比” 構文についての研究		
研究内容	代表的研究者	
“比” 構文の生成条件	邓文斌(1987)、吕叔湘(1942)、邵敬敏(1992) など	
“比” 構文の歴史の変遷	黄晓惠(1992)、史佩信(1993)、张国光(1998)、太田辰夫(1987)、章新传(1991、1995、1998、2002)、ピレネー(Peyraube, Alain)(1989)、石毓智・李讷(2001) など	
“比” 構文の構造	朱德熙(1982)、赵元任(1968)、刘月华(1983)、邵敬敏(1998)、任海波(1987)、李临定(1986) など	
“比” 構文の中に用いられる副詞の研究	陆俭明(1980)、马真(1986)、刘月华(1983)、周小兵(1995)、黄祥年(1984) など	
“比” 構文の意味成分と機能	邵敬敏(1992、2002)、李昌年(2003)、殷志平(1995) など	
“比” 構文の前項と後項の入れ替える規則(N1 的N+比+N2 的N+V P)および省略状況	黎锦熙(1992)、马真(1986)、邵敬敏(1990) など	
“比” 構文の語用研究	吕叔湘(1942)、叶峻林(2000)、李昌年(2003)、邵敬敏(1998) など	
“比” 構文の前項と後項の非対称性	李临定(1986)、刘月华(1982)、刘慧英(1992)、包华莉(1993) など	
“比” 構文の否定形の研究	相原茂(1992)、吕叔湘(1980)、刘月华(1983)、史有为(1994)、徐燕青(1997)、吴福祥(2004) など	
“比” 構文の特殊な文型についての研究	“一N比一N+V P”	武钦青(2011)、刘长征(2005) など
	“X比N还N”	张爱民(2002)、李杰(2003) など
	“比…大三倍”	伊井健一郎(1988) など
	“比” 構文の派生構造	胡斌彬 ⁵⁵ (2005) など

⁵⁵ 胡斌彬(2005)は「X比起Y(来)W」、「(X)和/与/同/跟Y(相)比,W」、「X和Y比起来,W」、「相比之下,XW」、「X比之YW」と「X和/与Y一比,W」の六つの“比”構文の派生構造について考察している。

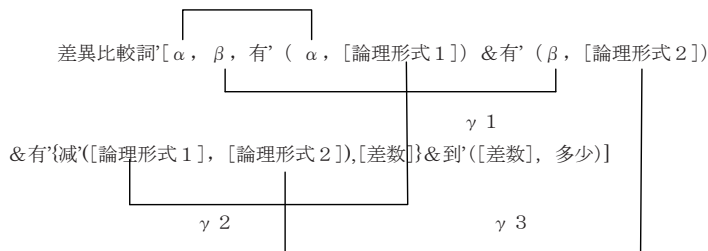
本章で、中国語における差異比較構文の論理構造と文型意味について考察した。表にまとめると、次の図 36 になる。

図 36

	古代	肯定文型	文型意味	論理式	その否定式	否定式の論理式
差異比較構文	中国語	「X+形容詞+于(於)+Y」	XはYと差がある	于(於)' (α , β , $\gamma 1$ & $\gamma 2$ & $\gamma 3$)	「X+否定詞+形容詞+于(於)+Y」	\neg 于(於)' (α , β , $\gamma 1$ & $\gamma 2$ & $\gamma 3$)
	現代中国語	「X+比+Y+VP」	性状において、XはYと差がある	比' (α , β , $\gamma 1$ & $\gamma 2$ & $\gamma 3$)	「X+不+比+Y+VP」	\neg 比' (α , β , $\gamma 1$ & $\gamma 2$ & $\gamma 3$)
			動作方式/情態において、XはYと差がある			
			数量において、XはYと差がある			

各文型の用例の分析からみると、差異比較構文の論理構造は以下のようにまとめることができる。

図 37



演繹モデル

この構造の中の α 、 β 、[論理形式1]、[論理形式2]は図37の通りで、すべて「演繹モデル」に従う。先行する命題の第一項は α に繰り上がり、第二の命題の第一項は β に繰り上がる。この式の比較対象は[確定]していなければ演算ができない。そこで、比較対象の論理形式に添え字の“1”と“2”を付加する。全体からみると、 α 、 β と γ の三項関数項の論理関係ははっきりしている。

差異比較構文の比較詞は「比、于(於)」などがある。比較する対象の「X」と「Y」は

ほとんど高低・優劣があり、論理式は「差異比較詞」[α , β , 有' (α , [論理形式1]) & 有' (β , [論理形式2]) & 有' {減' ([論理形式1], [論理形式2]), [差数]} & 到' ([差数], 多少)] である。この式は「 α ガ β ト γ トイウ状態ニアル」の意を表す。さらに、“ γ ”の項を“ γ 1”、“ γ 2”、“ γ 3”に下位分類ができる。“ γ 1”は「格役割」を表し、“ γ 2”は減法で差があること、つまり「数量化」を表し、“ γ 3”は差があること、つまり一種の「着点」を表している。これが差異比較構文の論理構造およびそれが表す意味である。

次の章では中国語における「最上級比較構文」の論理構造と文型意味について解析する。

第四章 中国語における最上級比較構文の研究

1. 「最上級比較構文」とは何か

最上級比較構文(“極比文”)について、『馬氏文通』は「最上級比較構文とは、比較する対象が二つではなく、より広い範囲において事物を比較し、最高のものを取り出す比較構文である」と定義している(馬建忠 1898 : 140)。

呂叔湘は「最上級比較は、比較する事物がある性質においてほかの類のすべてに勝る(あるいは及ばない)の意を表す」と論じている(呂叔湘 1942 : 363)。

劉焱は「最上級比較は三者あるいは三者以上の間に行われ、比較主体が比較されるすべての項よりすぐれている比較である」と論じている(劉焱 2004 : 46)。

つまり、比較主体(X)が比較されるすべての客体よりすぐれている比較構文が「最上級比較構文」である。たとえば、

(1) 北京菜里，烤鸭**最好吃**。(北京料理において、ペキンダックが一番美味しい。)



ペキンダック(X)がすべての北京料理(比較されるものの範囲)において、最も美味しい(最上級)位置にある。

(2) 珠穆朗玛峰**最高**。(チョモランマ山が一番高い。)



チョモランマ山(X)がすべての山(比較されるものの範囲)において、最も高い(最上級)位置にある。

2. 先行研究

2.1 最上級比較構文の比較する範疇と文型構造についての研究

2.1.1 馬建忠(1898)による研究

『馬氏文通』はすでに1でも述べたように、「最上級比較構文とは、比較する対象が二つではなく、より広い範囲において事物を比較し、最高のものを取り出す比較構文である」と定義している(馬建忠 1898 : 140)。さらに、それを二種類に分けている。

2.1.1.1 比較される対象が文の中に現れる場合

比較される対象が文の中に現れる場合には、比較主体はこの対象のすべての要素と比較し、最高であると判断する「最」を用いることが多い。たとえば、

(3) 然由居二千石中，最為暴酷驕恣。(由は二千石の中で最も暴虐である。)(『史记・酷吏列传』)

馬建忠の解釈によれば、「暴酷驕恣」は形容詞であり、つまり比較値である。ここで、“最”を“为”の前に位置づけ、「最上級」の意を表す。また、“由于二千石之中最暴酷驕恣”といってもよい。すなわち、比較される対象の中で最上位にあるという意味を表している。従って、比較される対象の後にいつも“中”、“间”などを用いる。(馬建忠 1898 : 140 参照)

2.1.1.2 比較される対象が文の中に現れない場合

比較される対象が文の中に現れない場合は、「広範囲の最上級比較」といえる。つねに、「至”、“極”、“甚”などの文字を用いる。たとえば、

(4) 泰伯其可謂至徳也已。(泰伯はそれ至徳と謂うべきなり⁵⁶。)(『论语・泰伯』)

馬建忠の解釈によれば、“至徳”というのは“徳”を最上級に位置づけ、これ以上のものはないという意味である。“徳”は名詞であり、前に“至”をつけて“徳”を最上位に位置づける」意を表す。この文の中で比較される対象が現れないのは「広範囲の最上級」と言える。(馬建忠 1898 : 141 参照)

また、動詞の後ろに“之至”、“之極”などをつけるのはこの類に属している。たとえば、(5) 寡助之至，親戚畔之；多助之至，天下順之。(助け寡きの至りは親戚も之に畔き、助け多きの至りは天下も之に順う⁵⁷。)(『孟子・公孙丑下』)

馬建忠の解釈によれば、“寡助之至”の意味は「協力する者」が少ないことを最上級に位置づける」ということであり、“多助之至”の意味は「協力する者」が多いことを最上位に位置づける」ということである。“助”は動詞であり、その後“之至”をつけること、「最上級」の意を表す。(馬建忠 1898 : 142 参照)

これ以外は、“最”、“至”、“極”などを使わず、“尤”、“益”などを用いても「最上級比較」を表す。たとえば、

(6) 如水益深，如火益热。(もし水がますます深く、火がますます熱ければ。)(『孟子・梁惠王章句下』)

馬建忠の解釈によれば、例(6)のように“益”を形容詞の前につけると、いつも「更に、甚だしい(“更甚”)」の意を表す。(馬建忠 1898 : 143 参照)

この点については、太田辰夫(1987)は異論を持っている⁵⁸。

さらに、同じ形容詞が文の中に二回現れる場合も「最上級比較」の意を表す。たとえば、(7) 戦而百勝，非善之善者也。(戦争はいつも勝利することは善の中の一善ではない。)(『汉书・赵充国传』)

馬建忠の解釈によれば、この文は“非善中之最善者”といってもよい。(馬建忠 1898 : 143 参照)

2.1.2 呂叔湘(1942)による研究

呂叔湘(1942)は「最上級比較は、比較する事物がある性質においてほかの類のすべてに優る(あるいは及ばない)の意を表す」と論じている。さらに、最上級比較をその表現方式により「正面的最上級比較」と「反面的最上級比較」に分けている。

⁵⁶ 『中国語の古典1・論語』(藤堂明保訳 昭和六十一年一月)の日本語訳による。

⁵⁷ 『中国語の古典4・孟子』(大島晃訳 昭和五十八年五月)の日本語訳による。

⁵⁸ 太田辰夫は「漸層は往々にして比較と混同されるが、比較は同一時における二物をくらべるもので、そこに時間的要素をふくまない。漸層は同一物あるいはそれに準ずべきものの異なった時における状態をくらべるものである。それゆえ述語は形容詞とはかぎらず動詞のことも多い。古代語では“益”、“愈”、“弥”などを用いる。」と論じている。(太田辰夫 1987 : 178-179)

2.1.2.1 正面的最上級比較

「正面的最上級比較」は肯定的面から表し、つねに“最”，“尤(尤其)”、“较(比較)”などの語彙を用いる。たとえば、

(8) 最后五分钟：最近三百年。(最後の五分間、最近の三百年間。)

(9) 西南山水，惟川蜀最奇。(西南部の山と水において、蜀のが一番特殊である。)(宋濂『送陈庭学序』)

“最”，“尤(尤其)”、“较(比較)”はすべて「ほかのものよりまさる」の意を表すが、内部的意味は多少違いがある。“最”は「純粋的最上級比較」を表し、比較される対象としての「ほかのもの」の性質には言及しない。“尤(尤其)”は比較される対象としての「ほかのもの」の性質がプラスの位置にあると推定している。たとえば、

(10) 流行性感冒是一种传染病，身体不好的人尤其容易传染。(インフルエンザは伝染病であり、体がよくない人はとりわけ伝染しやすい。)

“较(比較)”は比較される対象としての「ほかのもの」の性質がマイナスの位置にあると推定している。たとえば、

(11) 各科之中，数学较难。(すべての科目において、数学は比較的難しい。)

“数学较难”というのは、「ほかの科目は比較的やさしい」の意を表す。“数学尤难”というのは、「ほかの科目はとりわけやさしい」の意を表す。“数学最难”というのは、「ほかの科目はやさしいかどうか」に言及していない。

“尤”の意味は“更”に近く、“较”の意味は“些”と似ている。“较”は現代語の用法であり、“些”は口頭語においての昔の言い方である。“更”と“些”は「一物」と「ほかの物」との比較に用いられる。たとえば、

(12) 各种功课里头，就只算数难些。(すべての宿題において、数学だけ少し難しい。)

(13) 这得用隔年的雪水，立春前下的更好。(これは去年の雪水を使わなければならなく、春分以前のはもっとよい。)

2.1.2.2 反面的最上級比較

「反面的最上級比較」は「あるものよりまさること」を否定する表現を通して、「最上級」の意味を表す。「正面的最上級比較」よりもっと説得力がある。たとえば、

(14) 再没有比这一群建筑更调谐更匀称的了。(これらの建物よりもっとふさわしく調和とれているものはない。)

(15) 治地莫善于“助”，莫不善于“貢”。(地を治むるは助より善きは莫く、貢より善からざるは莫し⁵⁹。)(『孟子・滕文公上』)

2.1.3 高名凱(1957)による研究

高名凱(1957)は最上級比較を「相対的(比較的)最上級(relative superlative)」と「絶

⁵⁹ 『中国語の古典4・孟子』(大島晃訳 昭和五十八年五月)の日本語訳による。

対的最上級(absolute superlative)」に分けている。前者は比較により得る最上級である。たとえば、“最”、“最为”を用いる。

(16) 伊太太最愛喝中国茶。(伊さんの奥さんは中国のお茶が一番好きだ。)(『二馬』)

後者は量級の絶対的極点を表す。比較により得るものではない。たとえば、古代中国語は“至”、“极”、“绝”、“殊”を用い、口頭語は“太”、“挺”、“非常”、“特别”、“极顶”などを用いる。

(17) 遇见女子, 他的话是特别的多。(女性に会うと、彼の口は達者である。)(『二馬』)

さらに、高名凱は古代中国語における「相対的(比較的)最上級」の文型について以下のように考察している。

(一) “最”あるいは“最为”を用いる

(18) 王有孽子不害最长, 王弗爱。(王の子供の中に不害は長男であるが、王は彼のことが好きではない。)(『史记・淮南王传』)

(19) 諸侯咸来宾从, 而蚩尤最为暴。(諸侯がみんな従属に来たが、その中には蚩尤が一番凶暴である。)(『史记・五帝纪』)

(二) 虚詞“至”を用いる

(20) 陛下承宗廟, 当傳子孫于無窮, 統業至重。(陛下は祖先の事業を相続し、子孫に続けて伝わるべきだ。天下を統一することが一番重要である。)(『汉书・董贤传』)

(三) 虚詞“极”を用いる

(21) 李廣軍极簡易。(李広の軍隊の装備が一番粗末である。)(『史记・李将军传』)

(四) 虚詞“绝”を用いる

(22) 謝太傅絕重諸公。(謝太傅の地位がほかの人より一番重要である。)(『世说新語』)

(五) 虚詞“殊”を用いる

(23) 良殊大惊。(良はびっくり仰天している。)(『史记・留侯世家』)

(六) “…为…最”を用いる

(24) 政成_為天下守_之最。(政は天下の守備の一番重要な者になった。)(『太原王公神道碑』)

2.1.4 太田辰夫(1987)による研究

太田辰夫(1987)は最上級比較を「絶対的最上級比較」と「相対的最上級比較」に分けている。さらに、「絶対的な比較で明確なものは最上級比較のみである」と指摘している。

2.1.4.1 絶対的最上級比較

太田辰夫(1987)は「絶対的最上級比較は副詞を用いて表すが、古今を通じ語順に変化はない」と論じている。さらに、最上級比較構文の用いる比較詞について以下のように説明している。

“最”が古今を通じて用いられ、“頂”は現代語に用いられる。また古代語の“尤”は語気としては最上級とも考えられるが、近世においては、接尾語“其”をとった“尤其”とともに“比”を用いる比較構文にも用いるから、差異比較とみることもできる。

2.1.4.1.1 “最”の用法

(25) 吴起与士卒最下者同衣食。(呉起は士卒の最も下の者と衣食を同じくした。)(『史记・吴起列传』)

(26) 高祖以蕭何功最盛, 封為鄭侯。(高祖は蕭何の功が最もめざましいので鄭侯に封じた。)(『史记・蕭何世家』)

2.1.4.1.2 “頂”の用法

太田辰夫は「“頂”は元明時代から清代前期の資料では絶無というも過言ではない。おそらく、北方語ではなく、清代後期到北京語に入ったものである」と考察している。

(27) 星圖甚多, 只是難得似圓圖說得頂好。(星図は甚だ多いが、しかし円図が一番うまく説明しているのにまさるものはない。)(『朱子語類』)

(28) 我们这个船上, 有五个孩子, 頂好的有两个。(われわれのこの船には五人の少年がおりましたが、一番よいのが、二人おりました。)(『品花宝鑑』)

2.1.4.1.3 “尤”の用法

太田辰夫は「“最”が純粹の最上級比較であるに対し、“尤”は最上級比較とも考えられるがあるいは強調された差異比較であるかもしれない」と論じている。それは古代中国語では副詞はすべて“于(於)”を用いる比較構文には用いないため、文の構造上から最上級比較と差異比較を決める手がかりが得られず、純粹に意味だけから決めるほかはないことによる。」と論じている(太田辰夫 1987)。たとえば、

(29) 如大臣诛吕后时, 朱虚侯功尤大。(はじめ大臣たちが呂后を誅したとき、朱虚侯の功が一番大きかった。)(『史记・齊悼惠王世家』)

(30) 倉本好書, 無所不觀, 無所不通, 而尤善律例。(蒼はもとから本が好きで、読まないものではなく、通じないものはなかったが、とりわけ律曆に詳しかった。)(『史记・張丞相傳』)

2.1.4.1.4 “尤其”の用法

太田辰夫は「“尤”に接尾語“尤其”がついてできたものである」といっている。

(31) 樹枝上都像水洗過一番的, 尤其綠得可愛。(樹の上はみな水で一度洗ったようで、とりわけきれいな緑色をしていた。)(『儒林外史』)

(32) 再講到你這塊石頭的情節, 不但可笑可憐, 尤其令人可惱。(さらにあなたのこの石の一件になると、笑うべく憐むべきばかりではなく、とりわけ人を怒らせるのです。)(『儿女英雄傳』)

“尤其”も“比”を用いた比較構文に用いる。ゆえにこれは差異比較というべきである。

(33) 这河工…比地方官尤其難作。(この黄河工事は…地方官よりもっとやりにくい。)(『儿女英雄傳』)

2.1.4.2 相対的最上級比較

太田辰夫は相対的最上級比較を「限定式」と「非限定式」に分けている。

2.1.4.2.1 限定式

絶対的最上級比較に副詞的な修飾語が先行するもので、古今を通じ大して問題となる点はない。たとえば、

(34) 这一班学生里面, 老赵最勤快。(この一組の学生中では趙さんが一番めだ。)

(35) 諸子中, 胜最賢。(息子たちのうちで勝が一番賢い。)(『史记・平原君列传』)

2.1.4.2.2 非限定式

この言い方は現代中国語特有のもので、古代語にはない。その誕生はきわめて新しく、清代前期からである。たとえば、

(36) 这凤姑娘年纪儿虽小, 行事儿比是人都大呢。(この鳳のお嬢さんは年は若いですがことはだれよりもしっかりしています。)(『红楼梦』)

(37) 生日比别人都占先。(誕生日がほかの人よりも一番早い。)(『红楼梦』)

(38) 这是後纂的, 比一切的令都難。(これは後になって編纂したもので、どんな令より難しい。)(『红楼梦』)

以上のように、“是人”、“别人”、“一切的令”などひろく一切を指すものを用いているが、疑問代名詞は用いていない。しかし現代中国語では主として疑問代名詞を用い、

(39) 他比谁都聪明。(彼は誰よりも聡明である。)

(40) 这个比哪个都好。(これはどれよりもよい。)

のごとくいう。これは疑問が「任指(一切のものを指す)」に転じやすい(例え: 谁→无论谁)ことから用いられるようになったものである。

2.1.5 刘焱(2004)による研究

刘焱(2004)は「最上級比較は三者あるいは三者以上の間に行われ、比較主体が比較されるすべての項よりすぐれている比較である」と論じている。さらに、最上級比較構文の文型を三種類に分けている。

2.1.5.1 「X最/顶R」

(41) 全世界最好的饭菜在中国, 中国最好的西餐在香港。(世界中が一番美味しい料理は中国にあり、中国が一番美味しい西洋料理は香港にある。)(张辛欣・桑晔『北京人』)

2.1.5.2 「连X都/也R」

刘焱は「“连…都/也…”の文型は基本的情報を表す以外、また“一般的でない”の意味、“最不”の前提情報および“更に”の推定情報⁶⁰を含んでいるから、“最上級比較”の意味類型に入るべきである」と指摘している。

(42) 人家说皇后大饭店, 我连皇后大饭店是朝东的, 还是朝西的, 全都不知道。(「皇后大饭店」といつてるものについて、私が「皇后大饭店」の向きさえまったく知らない。)(『老舍文集1』)

2.1.5.3 「X比Y2还R」

⁶⁰ 崔希亮(1900)を参照されたい。

刘焱は「“X比Y还₂R”の文型は一般の“比”構文および“X比Y还₁R”⁶¹の文型と異なる」と指摘している。「X比Y还₂R」の文型は誇張法を用いている。比較客体“Y2”はある範囲においての最も典型的なメンバーを表し、“X”が“Y”を超えて最上級のメンバーになる。従って、「X比Y2还R」は最上級比較に属するはずである。

(43) 这物价,跑得比兔子还快。(この物価は上がるスピードがウサギよりもっと速い。)(『剧本2000.3』)

2.2 “最”構文についての研究

2.2.1 吕叔湘(1980)による研究

吕叔湘(1980)は「“最”は副詞であり、“極端”の意を表す」と指摘している。その具体的用法は以下ようになる。

2.2.1.1 「最+形容詞」

「最+形容詞」の後には“的”をつけ、名詞を修飾することができる。この構造の否定形“不最”がよく用いられない。

(44) 最尖端的产品(最も先進的な品物)

(45) 最重要的部门(最も重要な部門)

「最+形容詞」の後には名詞を直接につけることもできる。この構造は複合語に似ているが、単音節の形容詞しか用いられない。

(46) 最高阶段(最高段階)

(47) 最高气温(最高温度)

また、「最+形容詞」の構造は述語と補語になることができる。否定形になる。

(49) 他的嗓音最洪亮。(彼の声が一番大きい。)

(50) 黑龙江的冬天来得最早。(黒竜江の冬は来るのが一番早い。)

(51) 这个地方最不干净(*~不脏)。(ここは最も汚い。)

さらに、「最+形容詞」の構造は時間と数量を表す動詞連語を修飾する場合には、最大限度を表す。

(52) 最快也得三个钟头才能赶到。(一番速いといっても、三時間ぐらいかかります。)

(53) 最贵也要不了十块钱。(一番高いといっても、十元がかからない)

2.2.1.2 「最+動詞」

「最+動詞」の中の動詞は感情、態度、評価などの抽象的な心理活動を表す動詞しか用いられない。

(54) 最爱学习的孩子。(勉強が一番好きな子だ。)

(55) 我最愿意打篮球。(私はバスケットが一番好きだ。)

⁶¹ 刘焱(2004)は差異比較を表す文型を「X比Y还₁R」と記し、最上級を表す文型を「X比Y还₂R」と記している。

2.2.1.3 「最+方位詞(あるいは場所名詞)」

(56) 最上边(一番上)

(57) 站在场子最中间(広場の真ん中に立っている)

2.2.1.4 “最”と“頂”の違い

“最”と“頂”の基本用法は大体同じであるが、両者の違いには以下の二つがある。

(一)「最+形容詞」は直接に名詞を修飾することができるが、“頂”はできない。

(二)“先”、“后”、“前”、“本质”、“新式”などのような形容詞の前には、“最”が用いられるが、“頂”が用いられない。

2.2.2 刑福义(2000)による研究

刑福义(2000)は“最”構文の内包の内容から、その意味段階(“最”义级层)について考察している。さらに、“最”構文の表現形式を三種類に分けている。

2.2.2.1 多数の個体の数量表示形式

“多数の個体の数量表示形式”は“最”構文の一つ目の表現形式である。この形式の中には“最X”と“L”が一緒に現れる(“S”は“文”を表し、“L”は“数量詞”を表す)。すなわち、S(最X+L)の構造である。なお、文脈により“最X”と“L”の位置は固定していない。ここの数量詞“L”は“確定数量詞”、“非確定数量詞”と“類別を示す数量詞”の三種類が使える。

2.2.2.1.1 “L”は“確定数量詞”である場合

“L”が“確定数量詞”である場合は次のようである。

(58) 这是我们最了解情况的两位记者。(こちらはわれわれの状況を最も知っているお二人の記者です。)

(59) 她接待的客人几乎都有来头, 数起来共有八个最贴心的。(彼女が接待したお客さんはほとんど相当な身分である方であり、数えて最も親密な人が八人いる。)(方方『过程』)

例(58)と(59)の“两”と“八”は“確定数量詞”である。

2.2.2.1.2 “L”は“非確定数量詞”である場合

“L”は“非確定数量詞”である場合は次のようである。

(60) 这是我们最了解情况的几位记者。(こちらはわれわれの最も状況知っている何人かの記者です。)

(61) 中国男子, 一度几乎成了最厌恶女性的一群奇怪动物…(中国の男性は一度最も女性が嫌いなグループのへんな動物になったかもしれない…)(余秋雨『遥远的绝响』)

例(60)と(61)の“几位”と“一群”はおおよその数を表し、概数の判断は具体的な状況で決められる。

2.2.2.1.3 “L”が“類別を示す数量詞”である場合

“L”が“類別を示す数量詞”である場合はよく“这/那+L”の構造になる。たとえば、

(62) 这两位记者最了解情况。(この二人の記者が最も状況を知っている。)

(63) 她…转遍全城也要买回那几根最佳黄瓜。(彼女は…街をすべて回ってでも必ずあの何本かの最もおいしいキュウリを買いたい。)(王朔『浮出水面』)

例(62)と(63)のように、事物を区別するため、“数+量”の前に“这、那”をつけて“指示代名詞+数量詞”の構造になる。

2.2.2.2 多数の個体の並列表示形式

“多数の個体の並列表示形式”は“最”構文の二つ目の表現形式である。この形式の中に“最X”と“B”が一緒に現れる(“S”は“文”を表し、“B”は“並列構造”を表す)。すなわち、S(最X+B)の構造である。なお、文脈により“最X”と“B”の位置が変わる。刑福义はこの形式を“全部列挙性並列”、“突出列挙性並列”、“非名詞性並列”と“選択性並列”の四種類に分けている。

2.2.2.2.1 全部列挙性並列

“全部列挙性並列”の“最”構文には比較範囲の限度がある。“最”構文の比較対象のすべての内包項を取り上げる。つまり、並列項が二項である場合には内包項が二項であり、並列項が三項である場合には内包項が三項である。たとえば、

(64) 我最有名的作品是发在《小说群》上的《东太后传奇》和发在《作家林》上的《我要说我不想说但还是要说》。(私の一番有名な作品は『小説群』に発表した『東太后伝』と『作家林』に発表した『我要说我不想说但还是要说』です。)(王朔『顽主』)

2.2.2.2.2 突出列挙性並列

“突出列挙性並列”の“最”構文には比較範囲の限度がない。“最”構文の比較対象の内包項の中の代表的なものだけを取り上げる。いつも、列挙する項の後に“等/等等”をつける。たとえば、

(65) …其中包括“国家图书奖”“中国图书奖”“茅盾文学奖”“鲁迅文学奖”等最高奖项。(その中には、「国家図書奨」、「中国図書奨」、「茅盾文学奨」、「魯迅文学奨」など最高の奨を含む。)(『小説家』1998年第4期)

2.2.2.2.3 非名詞性並列

“非名詞性並列”の“最”構文の並列項は一般的に名詞を用いるが、たまに動詞あるいは形容詞も用いられる。たとえば、

(66) 女人最重要的是自重、自尊、自强。…(女にとって一番重要なのは自重、自尊、努力である。…)(白帆『寂寞的太太们』)

2.2.2.2.4 選択性並列

“選択性並列”の“最”構文の並列項は累加関係を表す。一般的には、各項の間に累加関係を表す“和”を用いる。しかし、選択関係を表す“或/或者”を用いることもできる。たとえば、

(67) 最差的是居委会或个体办的,无非是几个老太太合伙领着孩子玩,赚个零用钱花花。(質が一番悪いのは町内会事務所あるいは個人が造ったところで、ただ何人かのおばあさんが

一緒に子供をつれて遊ぶだけ、小遣いをかせぐだけだ。) (刘震云『一地鸡毛』)

2.2.2.3 多数の個体の暗示性総括形式

“多数の個体の暗示性総括形式”は“最”構文の三つ目の表現形式である。この形式の中に“最X”と“M”が一緒に現れる(“S”は“文”を表し、“M”は“総括性名詞”を表す)。すなわち、S〈最X+M〉の構造である。この形式は四つのモデルを持つ。

2.2.2.3.1 モデル1:最X的M・VP

モデル1は“最X的M・VP”である。この中の“最X的M”の部分は主語であり、“最X”と“M”の間は“その部分(那部分)、それらのような(那些个)”の意味を暗示している。言い換えると、“最X的+那部分+名詞”の式になり、“数量表示形式”に転じる。たとえば、

(68) 最敢说话的 记者 大受欢迎。(最も大胆に意見を述べるような記者が大人気だ。)

→ 最敢说话的 那部分 记者 大受欢迎。

2.2.2.3.2 モデル2:~VP・最X的M

モデル2は“~VP・最X的M”である。“最X的M”が“VP”の後に位置し、目的語になる。このモデルは並列成分を含んでいる“像”構造を添えることができ、“像abc 那样的+最X的+M”の式になり、“並列表示形式”に転じる。たとえば、

(69) 群众需要 最敢说话的 记者。(民衆は最も大胆に意見を述べる記者を必要とする。)

→ 群众需要 像 孙康、赵民 那样的 最敢说话的 记者。(民衆は孫康、趙民のような最も大胆に意見を述べる記者を必要とする。)

2.2.2.3.3 モデル3:他是最X的M

モデル3は“他是最X的M”である。“最X的M”は“是”の目的語であり、事物の所属を断定する。このモデルの主語は単数の人称代名詞“他、我、你”、あるいは単数の名詞を用いる。“某个人是最X的M之一(ある人は最もXであるMの一人である)”の意を表す。たとえば、

(70) 他是最敢说话的 记者。(彼は最も大胆に意見を述べる記者だ。)

→ 他是 最敢说话的 记者 之一。(彼は最も大胆に意見を述べる記者の一人だ。)

2.2.2.3.4 モデル4:他们是最X的M

モデル4は“他们是最X的M”である。“最X的M”は“是”の目的語であり、事物の同等性を断定する。このモデルの主語は複数の人称代名詞、あるいはグループ名詞を用いる。“某类人物之中的任何一个都是最X的M(ある種類の人物の中の誰もが最もXであるMである)”の意味を表す。たとえば、

(71) 他们都是 最敢说话的 记者。(彼らは全部最も大胆に意見を述べる記者である。)

→ 他们之中 任何 一个 都是 最敢说话的 记者。(彼らの中の誰もが最も大胆に意見を述べる記者である。)

それ以外、“暗示性総括形式”に関連する三つの特殊な表現形式もある。

(一) “最…之一”

実際の言語運用において、“最…之一”の形式はよく用いられる。すなわち、“某人或某物是最XのM之一(ある人あるいはあるものは最もXであるMの一つである)”の言い方である。たとえば、

(72) 沙漠是人类最顽强的自然敌人之一。(沙漠は人類の最も頑強な自然の敵の一つである。)

(二) “最最”

実際の言語運用において、“最最”の形式もよく用いられる。すなわち、“最最X”の言い方である。たとえば、

(73) …从永定门往北看一眼望到箭楼的是北京最最热闹的前门大街。(…永定門から北に向かって箭楼が一眼で見られるのは北京の最も賑やかな前門通りだ。)(魏潤身『扰攘』)

例(73)の文は“北京には賑やかな街がたくさんあるが、前門はその中の一番賑やかな街の中の一番賑やかな街である”の意味を示している。

(三) “第二最X”

実際の言語運用において、“第二最X”の言い方もよく聞く。この言い方は“最もXであるM”の意味に基づくものである。たとえば、

(74) 这是北京第二座最大的王府, 仅比怡亲王允祥的府邸略小一点, …(これは北京の第二番目に広い皇族の邸宅であり、ただ怡亲王允祥の邸宅より少し狭い。)(二月河『雍正王朝』)

例(74)の実際の意味は“北京には広い皇族の邸宅がたくさんあり、その中で怡亲王允祥の邸宅が一番であり、この廉親王の邸宅は二番目である”である。

2.2.3 赵军(2004)による研究

赵军(2004)は統語上と意味上から、「最上級比較」を表す“最”構文と“頂”構文の共通点と相違点について考察している。その結果をまとめると、次のようになる。

2.2.3.1 統語上の比較

2.2.3.1.1 統語構成における比較

統語構成において、赵军は“最”と“頂”が「V/VP」、「A/AP」と「N」を修飾する三つの状況に分けて論じている。

2.2.3.1.1.1 「V/VP」を修飾する場合

“最”と“頂”が「V/VP」を修飾する場合の共通点は両方とも心理動詞を修飾できることであり、表す意味はほぼ同じである。たとえば、

最喜欢=顶喜欢(一番好き)

最恨=顶恨(一番恨む)

最讨厌=顶讨厌(一番嫌い)

最担心=顶担心(一番心配だ)

その相違点は以下ようになる。

(一) “最”はすべての「可能と希望」を表す助動詞を修飾できるが、“頂”は“愿意”しか

修飾できない。たとえば、

最可以(*頂可以)、最能够(*頂能够)、最应该(*頂应该)

最愿意=頂愿意

(二) “最”はすべての「V+得/不C」の動詞連語を修飾できるが、“頂”は修飾する対象に限りがある。たとえば、

最经得/不起(*頂经得/不起)、最经得/不住(*頂经得/不住)、最惹得/不起(*頂惹得/不起)、最输得/不起(*頂输得/不起)、最舍得/不得(*頂舍得/不得)、最吃得/不消(*頂吃得/不消)、最对得/不起(*頂对得/不起)、最犯得/不着(*頂犯得/不着)、最吃得/不开(*頂吃得/不开)、最了得/不起(*頂了得/不起)

最受得/不了=頂受得/不了、最看得/不惯=頂看得/不惯

(三) “最”が「V₁+N+V₂」の動詞兼語文を修飾する場合、「V₁」は「誘発動詞」と「命令動詞」⁶²の両方が使用できる。“頂”が「V₁+N+V₂」の動詞連語を修飾する場合、「V₁」は「使役動詞」しか使用できない。

2.2.3.1.1.2 「A/AP」を修飾する場合

“最”と“頂”が「A/AP」を修飾する場合の共通点は両方も性質を表す形容詞あるいは形容詞連語を修飾できることであり、表す意味はほぼ同じである。たとえば、

最好=頂好(一番よい)、最好吃=頂好吃(一番美味しい)、最漂亮=頂漂亮(一番綺麗)など

その相違点は“最”は状態を表す形容詞あるいは形容詞連語を修飾できるが、“頂”はできない。たとえば、

最火爆(*頂火爆)、最火热(*頂火热)、最笔直(*頂笔直)、最典型(*頂典型)など

2.2.3.1.1.3 「N」を修飾する場合

ここで、赵军は「程度副詞はすべての名詞を修飾することができるわけではなく、量的な程度を表す名詞しか修飾できない」と指摘している。さらに、「程度量級」を表す名詞を「役柄を表す名詞(“权威、绅士、天才”など)」、「特徴を連想する名詞(“中国、日本、上海、香港”など)」、「特徴を表す名詞(“原則、艺术、青春、悲剧”など)」と「量的な意味を表す名詞(“高度、深度、细节; 底层、前沿、顶端; 本质、基础、根本”など)」の四種類に分けている。

“最”はすべての「量的な意味を表す名詞」を修飾でき、一部分の「役柄を表す名詞」と「特徴を表す名詞」を修飾できる。「特徴を連想する名詞」がほぼ修飾できない。

“頂”は「量的な意味を表す名詞」の中の上向きの方位名詞しか修飾できない。たとえば、“顶上面、顶上头”である。

⁶² 王珏(1992)は「兼語動詞」を「誘発動詞(“使、令、叫、招、让、惹、讨”など)」と「命令動詞(“请、派、托、嘱咐、命令”など)」の二種類に分けている。

2.2.3.1.2 文型構造における比較

2.2.3.1.2.1 「最/頂+A(単音節)+的+NP(二音節)」

この構造において、“最”を用いる場合には「A(単音節)」と「NP(二音節)」の間の構造助詞“的”が省略できる。省略すると、四字複合語に似る。たとえば、

“最大限度、最佳姿态、最大努力、最低价格、最低标准、最高理想、最新指示”など

“頂”を用いる場合には「A(単音節)」と「NP(二音節)」の間の構造助詞“的”が省略できない。たとえば、

顶好的朋友、顶坏的角色など

2.2.3.1.2.2 重ね形式と重複形式

“最”の重ね形式は“最最”と“最最最”の二種がある。たとえば、

(75) 去年秋天，我经历了平生中最最难忘的一件大事…(去年の秋に、私は人生においても大事なことがあった…) (『人民日报』)

(76) 最最最主要的，每天的晚上，他都开始想百林了…(最も重要なのは每晚彼は百林のことを思い始めたことだ…) (『埋伏』)

“頂”の重ねる形式は“頂頂”しかない。たとえば、

(77) 我想，一个人培育另外一个人，这可能是世界上顶顶需要责任心的事情了。(一人の人が他の人を育てることはもしかすると、この世で一番責任感を認められることかもしれない。) (『人民日报』)

さらに、“最”構造は重複形式を持ち、「最+X₁」+「最+X₂」+…+「最+X_n」の構造になる。たとえば、

(78) 她的儿子，是一个最可爱最可怜最好玩最懂事的孩子！(彼女のお子さんは最も可愛く、最も面白く、最もおとなしい子供だ。)(王朔)

2.2.3.1.2.3 「最/頂+A+不/莫过」

“最/頂”は形容詞を修飾する場合には“不/莫过”をつけて、「最上級」に至る意味を表す。「最+A+不/莫过」の中には単音節と多音節形容詞が使用される。たとえば、

(79) 可惜的是还不够普遍，如果能从新加坡的做法得到启示，创造出更适合我国国情的办法，是最好不过的。(残念なことはまだ及ばないことであり、もしシンガポールのやり方から啓示をもらい、もっと我が国に適合する方法をつくれれば、それは最もいいことである。)(『人民日报』)

(80) 其实，逆潮行进，人借涌势，最轻快不过的。(実は、逆行する人の波の力を借りるやり方は最も軽快だ。)(王朔)

「頂+A+不/莫过」の中には単音節だけ使用される。たとえば、

(81) “1940年冬天出生，您算算我多大？(1940年の冬に生まれ、今幾つと思うか。)”

“我看你顶大不过16岁。(せいぜい16歳にもみたないくらいでしょう。)” (人民日报)

2.2.3.1.2.4 「最/頂…之一」

“最”は「最…之一」の文型を持つ。たとえば、

(82) 那年秋天没再下一场雨，日日晴朗，是我记忆里最宜人的秋天之一。(あの秋には雨が全然降ってなく、日々晴れ、私の記憶において最も気持ちがよい秋の一つである。)(王朔)

“頂”は「頂…之一」の文型を持たないが、「頂頂…之一」の文型を持つ。たとえば、
 (83) 您好！请允许我这样称呼您，因为至今我还坚定地认为您是当今我国顶顶走红的作家之一。(こんには。この呼び方を許してください。あなたは今まで我が国の最も人気ある作家の一人であると思います。)(『人民日报』)

2.2.3.2 意味上の比較

最上級比較を表す“最”構文と“頂”構文の意味上の違いは次のようになる。

(84) 最+X : [+比較性][−親切性]

頂+X ; [+比較性][+親切性]

“最”構文は比較性を持つが、親切性を持たない。“頂”構文は比較性と親切性の両方を持つ。たとえば、

(85) a 他是我们班最好的学生。(彼はクラスで最も優秀な学生です。)

B 他是我们班顶好的学生。(彼はクラスで最も優秀な学生です。)

例(86-a)と(86-b)は「彼はクラスで最も優秀な学生です」の意を表すが、感情的(語氣的)に違いがある。(86-a)は客観的な事実を述べているが、(86-b)は客観的な事実を述べる上に、さらに「肯定」の感情を含んでいる。すなわち、[親切性]である。

以上が最上級比較を表す“最”構文と“頂”構文の共通点と相違点である。

3. 最上級比較構文の論理構造と文型意味

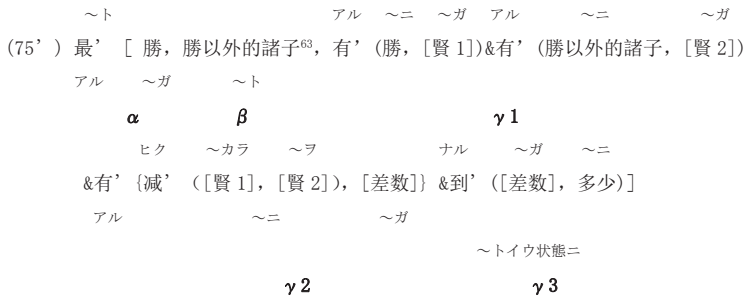
中国語における最上級比較構文は古今を通じ語順に変化はほぼない。ここで最上級比較構文の主な文型の論理構造と意味について分析する。

3.1 “最”構文

最上級を表す“最”構文の構造は「X+最+形容詞」である。

(75) 諸子中勝最賢。(息子たちのうちで勝が一番賢い。)(『史记・平原君列传』)

この文の論理式は次のようになる。



呂叔湘 (1942) は“一胜余曰极比”と定義している。この論述で、最上級比較構文の比較主体は“一”(すなわち“個体”)であり、比較客体は“余”(すなわち“個体以外の個体範囲”)である。比較主体と比較客体の間に“胜”(すなわち“差がある”)の関係がある。つまり、“個体”は“個体以外の個体範囲”と“差”があるという意味の文は「最上級比較構文」であると理解できる。

次に、(75')の意味を説明しよう。この文の「息子たちのうちで勝が一番賢い」という命題内容は論理式では「最' [勝, 勝以外の諸子, 有' (勝, [賢 1])&有' (勝以外の諸子, [賢 2])&有' {減' ([賢 1], [賢 2]), [差数]} &到' ([差数], 多少)]」のように表示できる。

次に、この論理式について詳しく説明する。「有' (勝, [賢 1])」は「勝」には[賢 1]がある」の意を、「有' (勝以外の諸子, [賢 2])」は「勝以外の諸子」には[賢 2]がある」の意を、「有' {減' ([賢 1], [賢 2]), [差数]} &到' ([差数], 多少)]」は「[賢 1]から[賢 2]を引くと差がある」の意を表す。用例(75)の意味は前述のすべての命題内容を含んでいることになる。さらに、γ 1は「勝」と「勝以外の諸子」が「経験者格」を、「賢 1」と「賢 2」が「属格(対象格)」を表すので、「格役割」を表示する。γ 2は減法で差があること、つまり「数量化」を表している。γ 3は差がいくらかあること、言い換えれば「差がいく

⁶³ “胜以外の诸子”の文成分の内部の関係は「“胜以外”という項と“诸子”という項には“的”という“関係”がある」ことであり、論理式は“有(的)' {以外' (胜), 诸子}”である。しかし、ここでの論述の中心は比較構文であるため、繁雑になるのを避けてそのまま“胜以外の诸子”と記する。ほかの用例も同じである。

らかの量に達している」こと、つまり一種の「着点」を表している。

この文についてタイプ理論を用いたモデルによって説明してみよう。(75) のタイプ分析は樹形図で簡略表示すると、図 1 となる。

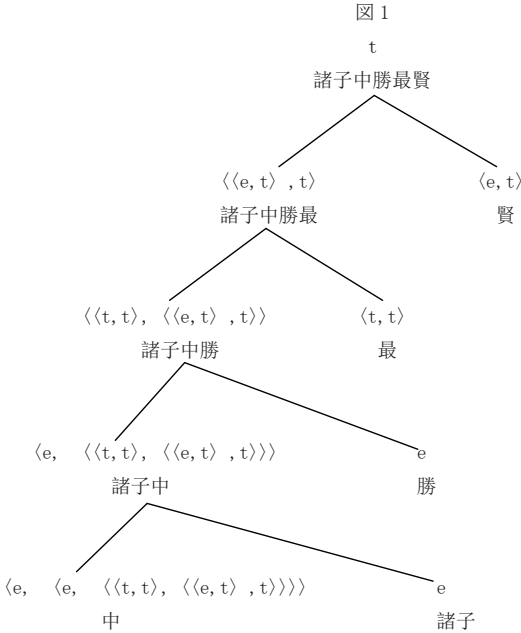
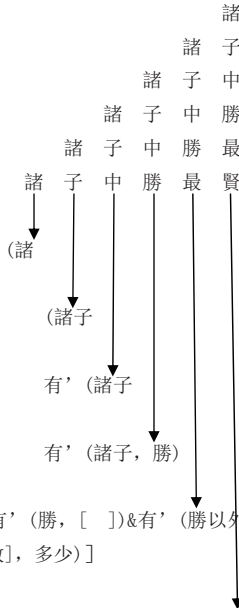


図 7 からみると、“最” のタイプ式は “<t, t>”⁶⁴ の論理タイプであり、“諸子” と “勝” は個体定項 “e” であり、“賢” は “<e, t>” の一項述語であり、“中” は “<e, <e, <t, t>, <e, t>, t'>” の四項述語である。

⁶⁴ ここでの “最” は注釈 34 の “也” と同じ論理タイプ “<t, t>” に属している。

この用例についても、その論理式の成立のプロセスを有限オートマトンと順序論理回路のモデルを用いて説明しておこう。(75)の文の有限オートマトン、順序論理回路、入力記憶に基づいて作成した論理式は次のようになる。

図 2

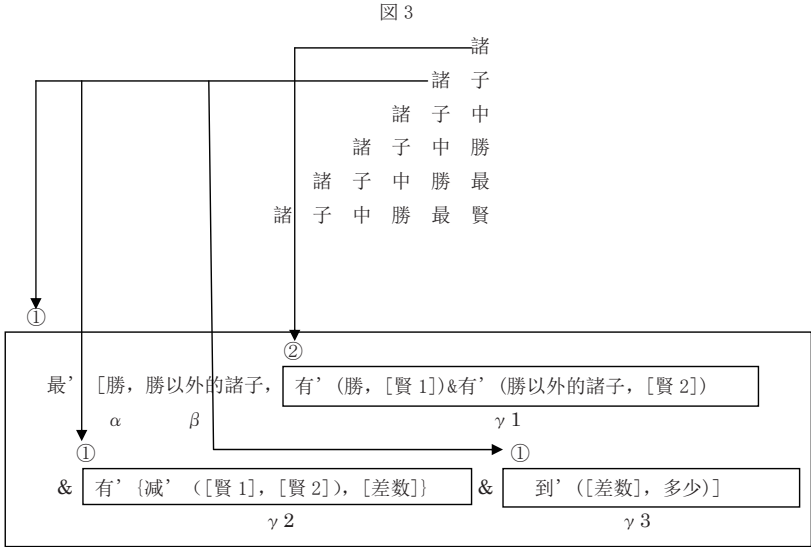


最' [勝, 勝以外の諸子, 有' (勝, []) & 有' (勝以外の諸子, []) & 有' {減' ([], []), [差数]} & 到' ([差数], 多少)]

最' [勝, 勝以外の諸子, 有' (勝, [賢 1]) & 有' (勝以外の諸子, [賢 2]) & 有' {減' ([賢 1], [賢 2]), [差数]} & 到' ([差数], 多少)]

図 2 について説明しよう。まず“諸”を入力し、論理式は“(諸)”になる。第二に“諸子”を入力し、論理式は“(諸子)”になる。第三に“諸子中”を入力し、論理式は“有' (諸子)”になる。第四に“諸子中勝”を入力し、論理式は“有' (諸子, 勝)”になる。第五に“諸子中勝最”を入力し、ここで論理式は“最' [勝, 勝以外の諸子, 有' (勝, []) & 有' (勝以外の諸子, []) & 有' {減' ([], []), [差数]} & 到' ([差数], 多少)]”になる。最後に“諸子中勝最賢”を入力し、文のすべての入力完了する。その論理式は“最' [勝, 勝以外の諸子, 有' (勝, [賢 1]) & 有' (勝以外の諸子, [賢 2]) & 有' {減' ([賢 1], [賢 2]), [差数]} & 到' ([差数], 多少)]”になる。この図からみると、“最”の入力とともに、文の全体の構造が決められている。

入力記憶によって文を構成するすべての成分を作りあげることができる。その生成過程は次の図3になる。



論理式は入力記憶によって作成される。まず①で最' [α, β, γ1&γ2&γ3]の三項関数、γ2の「量化」とγ3の「着点」が、第二に②でγ1の「格役割」が決定される。

3.2 最上級比較を表す“比”構文

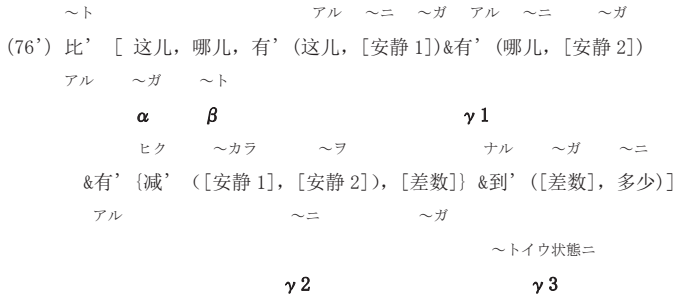
“比”構文の主な機能は「差異比較」を表すが、以下の二つの文型は「最上級比較」を表すこともできる。

3.2.1 「X+比+Y+都+形容詞」

「最上級比較」を表す「X+比+Y+都+形容詞」の中の“Y”は普遍的意味を表す成分に限られ、よく「不確定性」を表す疑問代名詞(“什么”, “谁”, “哪”, “哪儿”など)、広範指示代名詞(“一切”など)および形容詞(“任何”など)を用いる。

(76) 这儿比哪儿都安静。(ここはどこよりも静かです。)

この文の論理式は次のようになる。



ここで、(76')の意味を説明しよう。この文の「ここはどこよりも静かである」という命題内容は論理式では「比' [这儿, 哪儿, 有' (这儿, [安静 1])&有' (哪儿, [安静 2])&有' {減' ([安静 1], [安静 2]), [差数]} &到' ([差数], 多少)]」のように表示できる。次に、この論理式について詳しく説明する。

「有' (这儿, [安静 1])」は「“这儿”には[安静 1]がある」の意を、「有' (哪儿, [安静 2])」は「“哪儿”には[安静 2]がある」の意を、「有' {減' ([安静 1], [安静 2]), [差数]} &到' ([差数], 多少)]」は「[安静 1]から[安静 2]を引くと差がある」の意を表す。用例(76)の意味は前述のすべての命題内容を含んでいることになる。さらに、γ 1は「这儿」と「哪儿」が「経験者格」を、「安静 1」と「安静 2」が「属格(対象格)」を表すので、「格役割」を表示する。γ 2は減法で差があること、つまり「数量化」を表している。γ 3は差がいくらかあること、言い換えれば「差がいくらかの量に達している」こと、つまり一種の「着点」を表している。

この文の副話題としての“哪儿(どこ)”は“这儿以外的地方(ここ以外のところ)”の意を表す。言い換えると、例(76)は「“ここ”は“ここ以外のところ”と“静かさの差”がある」の意を表す。呂叔湘(1942)の「最上級比較」に対する定義により、「ここが一番静かである」の意を理解することができる。

(75')の“副話題”とするβ項は“胜以外の诸子”という比較範囲であり、(76')の“副

話題”とする β 項は“这儿以外的地方”という比較範囲である。“ α が α 以外の比較範囲ト差がある”構文は“最上級比較”を表すのは意味的に問題ない。従って、例(75)と(76)は“最上級比較構文”である。

この文についてタイプ理論を用いたモデルによって説明してみよう。(76)のタイプ分析は樹形図で簡略表示すると、図4となる。

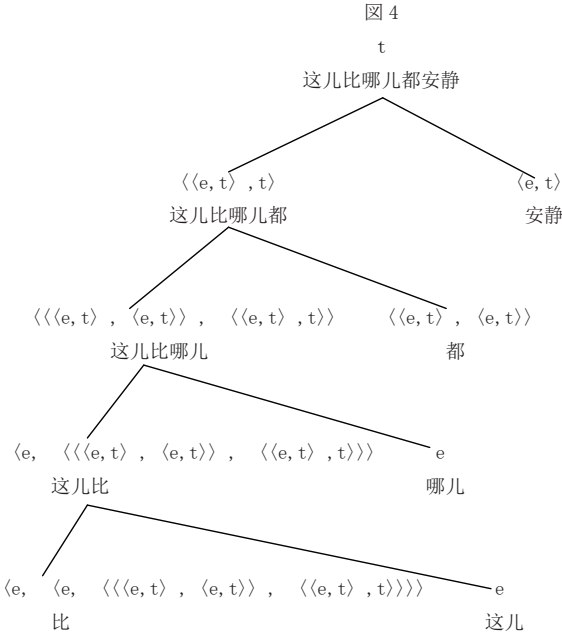


図4からみると、“比”のタイプ式は“ $\langle e, \langle e, \langle\langle\langle e, t \rangle, \langle e, t \rangle\rangle, \langle\langle e, t \rangle, t\rangle\rangle\rangle$ ”の四項述語であり、“这儿”と“哪儿”は个体定項“ e ”であり、“安静”は“ $\langle e, t \rangle$ ”の一項述語であり、“都”は“ $\langle\langle e, t \rangle, \langle e, t \rangle\rangle$ ”の二項述語である。

この用例についても、その論理式の成立のプロセスを有限オートマトンと順序論理回路のモデルを用いて説明しておこう。(76)の文の有限オートマトン、順序論理回路、入力記憶に基づいて作成した論理式は次のようになる。

図 5

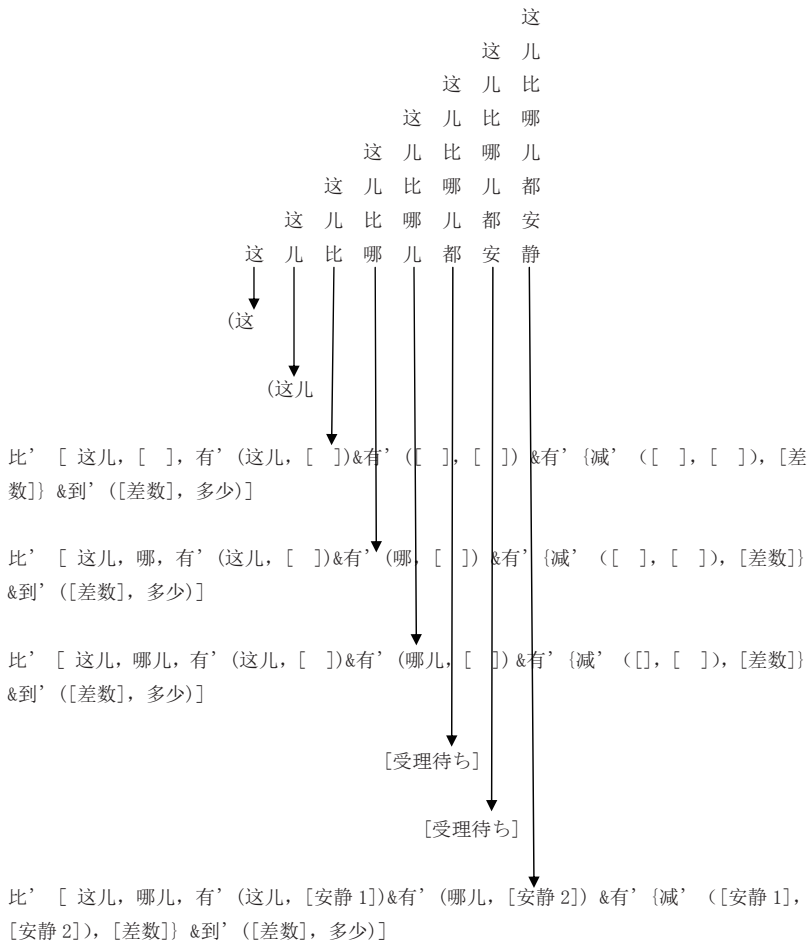


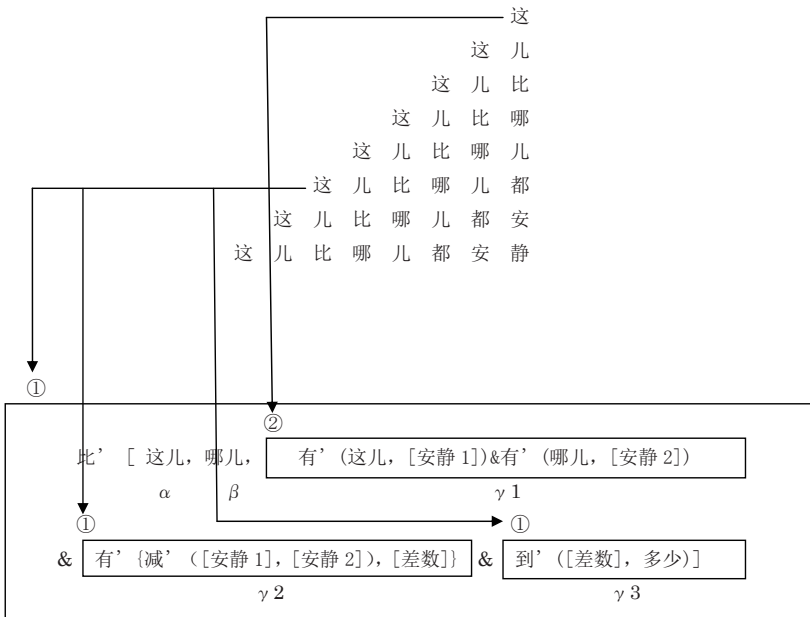
図 5 について説明しよう。まず“这”を入力し、論理式は“(这)になる。第二に“这儿”を入力し、論理式は“(这儿)になる。第三に“这儿比”を入力し、論理式は“比' [这儿, [], 有' (这儿, [])&有' ([], [])&有' {减' ([], []), [差数]} &到' ([差数], 多少)]”

数], 多少)]”になる。第四に“这儿比哪”を入力し、論理式は“比’ [这儿, 哪, 有’ (这儿, [])&有’ (哪, []) &有’ {減’ ([], []), [差数]} &到’ ([差数], 多少)]”になる。第五に“这儿比哪儿”を入力し、ここで論理式は“比’ [这儿, 哪儿, 有’ (这儿, [])&有’ (哪儿, []) &有’ {減’ ([], []), [差数]} &到’ ([差数], 多少)]”になる。

第六に“这儿比哪儿都”を、第七に“这儿比哪儿都安”を入力し、“受理待ち”の状態になる。最後に“这儿比哪儿都安静”を入力し、文のすべての入力完了する。その論理式は“比’ [这儿, 哪儿, 有’ (这儿, [安静 1])&有’ (哪儿, [安静 2]) &有’ {減’ ([安静 1], [安静 2]), [差数]} &到’ ([差数], 多少)]”になる。この図からみると、“比”の入力とともに、文の全体の構造が決められている。

入力記憶によって文を構成するすべての成分を作りあげることができる。その生成過程は次の図6になる。

図 6



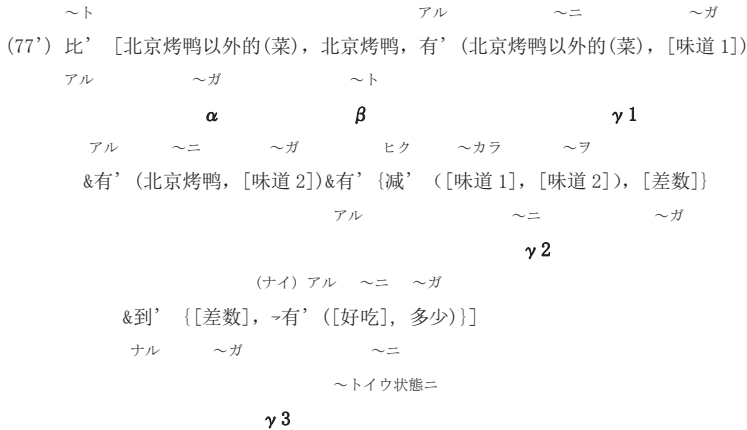
論理式は入力記憶によって作成される。まず①で比’ [α, β, γ1&γ2&γ3]の三項関数、γ2の「量化」とγ3の「着点」が、第二に②でγ1の「格役割」が決定される。

3.2.2 「(再也+) 没有+比+Y+更/还/再(+的+NP)+了」

現在まで、「(再也) 没有比」の文型が「最上級比較」を表すことを指摘した研究はあるが、なぜ「最上級比較」を表すのかについて研究した論文はない。ここで、筆者は「(再也) 没有比」の文型の論理構造と意味を説明し、それがなぜ「最上級比較」を表すかについて解釈してみたい。

(77) 再也没有比北京烤鸭更好吃的了。 (北京ダックよりもっと美味しいものは全然ない。)

この文の論理式は次のようである。



ここで、(77')の意味を説明しよう。この文の「北京ダックよりもっと美味しいものは全然ない」という命題内容は論理式では「比' [北京烤鸭以外的(菜), 北京烤鸭, 有' (北京烤鸭以外的(菜), [味道 1])&有' (北京烤鸭, [味道 2])&有' {減' ([味道 1], [味道 2]), [差数]} &到' {[差数], ~有' ([好吃], 多少)}」のように表示できる。次に、この論理式について詳しく説明する。「有' (北京烤鸭以外的(菜), [味道 1])」は「北京烤鸭以外的(菜)」には[味道 1]がある」の意を、「有' (北京烤鸭, [味道 2])」は「北京烤鸭」には[味道 2]がある」の意を、「有' {減' ([味道 1], [味道 2]), [差数]} &到' {[差数], ~有' ([好吃], 多少)}」は「[味道 1]から[味道 2]を引くと差がある(差が[好吃]が多少にないの程度になる)」の意を表す。「~」は“有' ([好吃], 多少)”を否定している。

用例(77)の意味は前述のすべての命題内容を含んでいることになる。さらに、γ 1は「北京烤鸭以外的(菜)」と「北京烤鸭」が「経験者格」を、「味道 1」と「味道 2」が「属格(対象格)」を表すので、「格役割」を表示する。γ 2は減法で差があること、つまり「数量化」を表している。γ 3は差がいくらかあること、言い換えれば「差がいくらかの量に達している」こと、つまり一種の「着点」を表している。

なぜ例(77)の論理構造が(77')のようになるのか。その理由は次の通りである。

方立(2000)は量化詞否定規則について、次のように論じている。

(78) 量化詞否定規則: $\forall x \neg \phi(x) \leftrightarrow \neg \exists x \phi(x)$

例: 大家都不喜欢王五。(すべての人は王五のことが好きでない。)

∴ 没有人喜欢王五。(王五のことを好きな人はいない。)(方立 2000: 197)

この“∀”は“普遍量化詞”であり、“すべてのもの(x)”を表す。“∃”は“存在量化詞”であり、“少なくとも一つのもの(x)がある”を表す。

例(78)を説明すると、“有人喜欢王五”の文は論理式で示すと、次のようになる。

「 $\exists x [人'(x) \& 喜欢(x, 王五)]$ 」(“至少有一个人喜欢王五(少なくとも一人は王五のことが好きである)”)の式になる。この式を否定すると、前に“没有”をつけて

「 $\neg \exists x [人'(x) \& 喜欢(x, 王五)]$ 」(“没有人喜欢王五(王五のことを好きな人はいない)”)の式になる。この式は、

「 $\forall x [人'(x) \& \neg 喜欢(x, 王五)]$ 」(“大家都不喜欢王五(すべての人は王五のことが好きでない)”)の式と等値である。

量化詞否定規則を例(77)に適用すると、

(79) $\neg \exists x \phi(x) \leftrightarrow \forall x \neg \phi(x)$

「有比北京烤鸭更好吃的(北京ダックよりもっと美味しいものがある)」という文の形式的な否定は「再没有比北京烤鸭更好吃的了。(北京ダックよりもっと美味しいものが全然ない。)」となる。

「再没有比北京烤鸭更好吃的了。(北京ダックよりもっと美味しいものが全然ない。)」という文は言い換えると「全都比北京烤鸭不好吃。(すべては北京ダックより美味しくない。)」のようになる。この二つの否定文をよく考えてみると、前者の“存在量化詞”を持つ文に対する否定と後者の“普遍量化詞”を持つ文の“着点”の部分に対する否定は同じである。つまり、“再没有比北京烤鸭更好吃的了”の文は“全都比北京烤鸭不好吃”と等値であり、“北京ダックが一番美味しい”という「最上級比較」の意味を表している。この“すべて”は“北京ダック以外のすべての料理”と理解できる。

従って、筆者は例(77)の論理構造を(77')のように分析したのである。

この文についてタイプ理論を用いたモデルによって説明してみよう。(77) のタイプ分析は樹形図で簡略表示すると、図7となる。

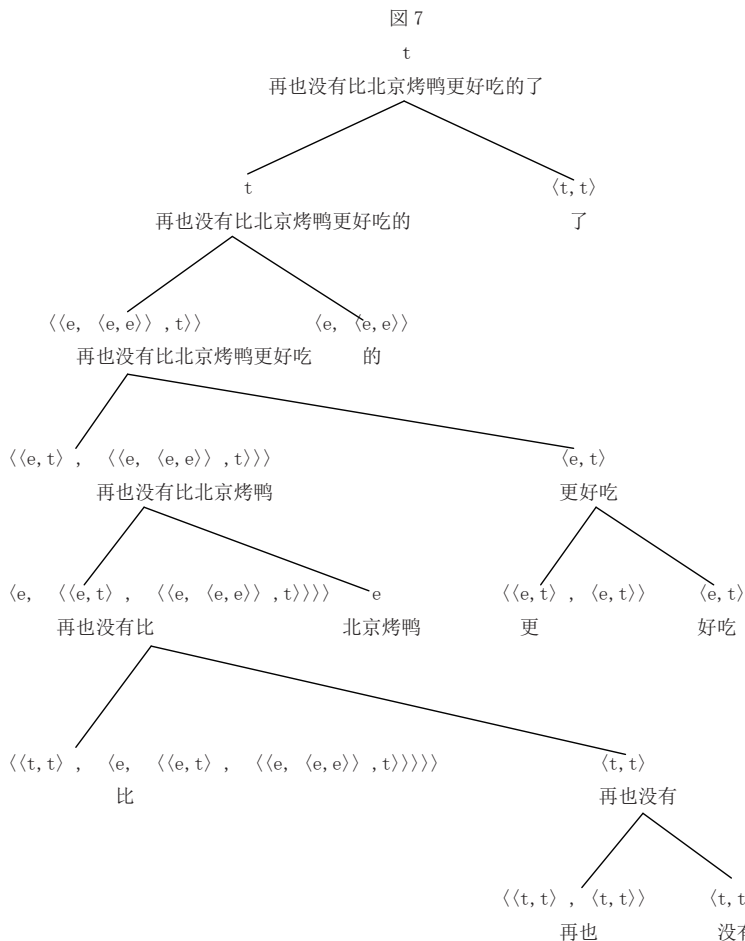


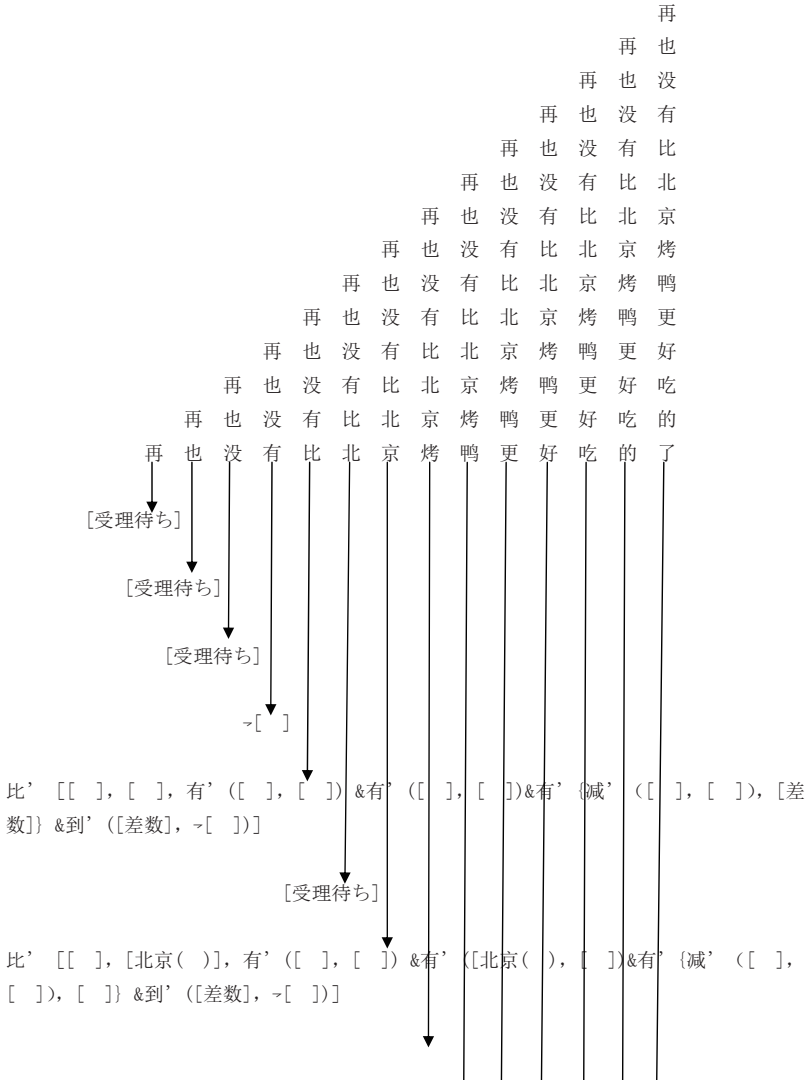
図7からみると、“比”のタイプ式は“<<t, t>, <e, <<e, t>, <<e, <e, e>, t>>>>”の五項述語であり、“北京烤鸭”は個体定項“e”であり、“好吃”は“<e, t>”の一項述語であり、“的”は“<e, <e, e>”の二項述語であり、“更”は“<<e, t>, <e, t>”の二項述語であり、“再也”は“<<t, t>, <t, t>”の論理タイプであり、“否定詞”“没有”は論理タイプ“<t, t>”である。

この例が示しているように、タイプ式による樹形図は文を構成するすべての要素のタイ

ブを決定できる。

この用例についても、その論理式の成立のプロセスを有限オートマトンと順序論理回路のモデルを用いて説明しておこう。(77)の文の有限オートマトン、順序論理回路、入力記憶に基づいて作成した論理式は次のようになる。

図 8



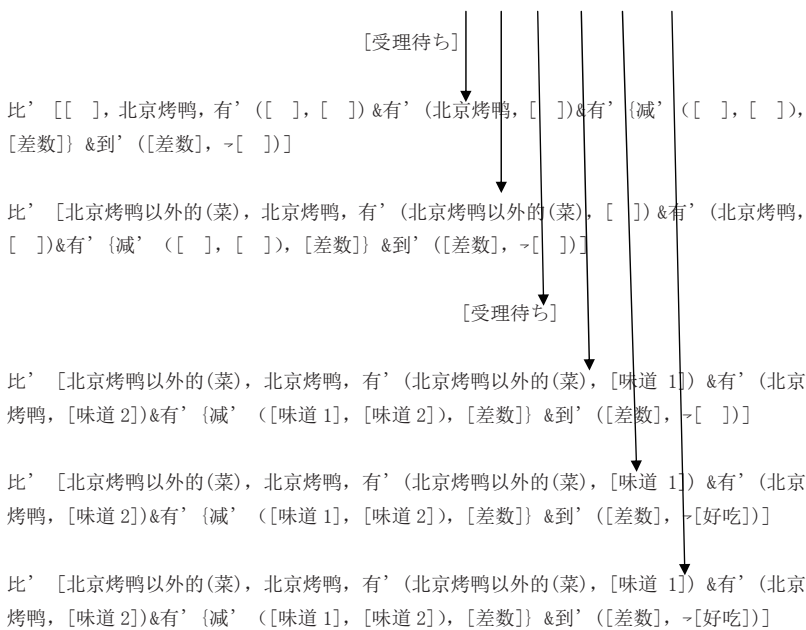


図 8 について説明しよう。まず“再”を、第二に“再也”を、第三に“再也没”を入力し、ずっと“受理待ち”の状態になる。第四に“再也没有”を入力し、論理式は“~[]”になる。第五に“再也没有比”を入力し、ここで論理式は“比' [[], [], 有' ([], []) &有' ([], []) &有' {減' ([], []), [差数]} &到' ([差数], ~[])]”になる。第六に“再也没有比北”を入力し、ここで“受理待ち”の状態になる。第七に“再也没有比北京”を入力し、論理式は“比' [[], [北京()], 有' ([], []) &有' ([北京(), []) &有' {減' ([], []), []} &到' ([差数], ~[])]”になる。

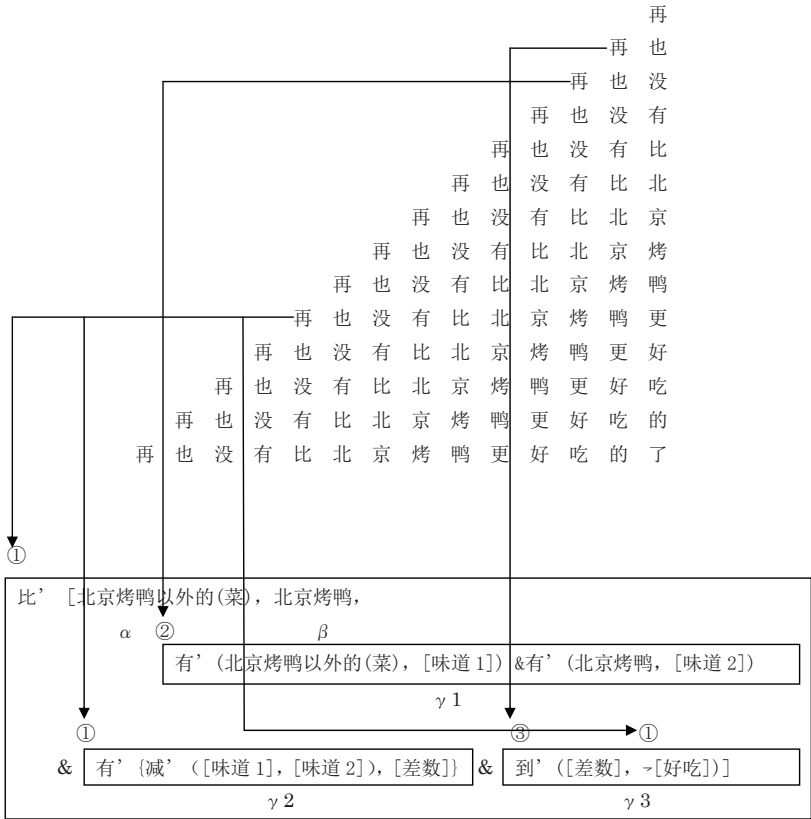
第八に“再也没有比北京烤”を入力し、ここで“受理待ち”になる。第九に“再也没有比北京烤鸭”を入力し、論理式は“比' [[], 北京烤鸭, 有' ([], []) &有' (北京烤鸭, []) &有' {減' ([], []), [差数]} &到' ([差数], ~[])]”になる。第十に“再也没有比北京烤鸭更”を入力し、論理式は“比' [北京烤鸭以外的(菜), 北京烤鸭, 有' (北京烤鸭以外的(菜), []) &有' (北京烤鸭, []) &有' {減' ([], []), [差数]} &到' ([差数], ~[])]”になる。第十一に“再也没有比北京烤鸭更好”を入力し、ここで“受理待ち”の状態になる。

第十二に“再也没有比北京烤鸭更好吃”を入力し、論理式は“比' [北京烤鸭以外的(菜), 北京烤鸭, 有' (北京烤鸭以外的(菜), [味道 1]) &有' (北京烤鸭, [味道 2]) &有' {減' ([味道 1], [味道 2]), [差数]} &到' ([差数], ~[])]”になる。第十三に“再也没有比北京

烤鸭更好吃的”を入力し、論理式は“比’ [北京烤鸭以外的(菜), 北京烤鸭, 有’ (北京烤鸭以外的(菜), [味道 1]) &有’ (北京烤鸭, [味道 2])&有’ {減’ ([味道 1], [味道 2]), [差数]} &到’ ([差数], ~[好吃])]”になる。最後に“再也没有比北京烤鸭更好吃的了”を入力し、文のすべての入力完了する。その論理式は変わらず、“比’ [北京烤鸭以外的(菜), 北京烤鸭, 有’ (北京烤鸭以外的(菜), [味道 1]) &有’ (北京烤鸭, [味道 2])&有’ {減’ ([味道 1], [味道 2]), [差数]} &到’ ([差数], ~[好吃])]”になる。この図からみると、“比”の入力とともに、文の全体の構造が決められている。

入力記憶によって文を構成するすべての成分を作りあげることができる。その生成過程は次の図9になる。

図 9



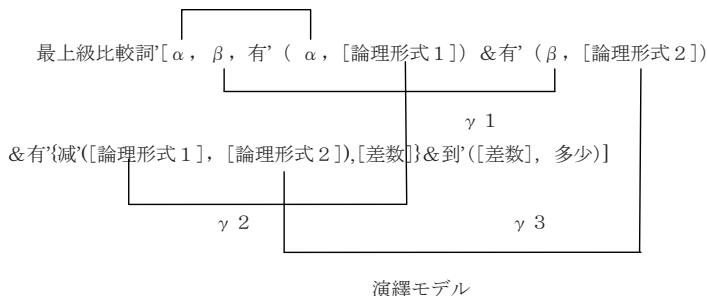
論理式は入力記憶によって作成される。まず①で比' [α, β, γ1&γ2&γ3]の三項関数とγ2の「量化」と否定「¬」が、第二に②でγ1の「格役割」が、第三に③でγ3の「着点」が決定される。

4. まとめ(四)

中国語における「最上級比較構文」についての研究は、「平等比較構文」と「差異比較構文」についての研究に比べ非常に少ない。刘丹青(2003)、刘焱(2004)、许国萍(2007)などの学者は「最上級比較構文」が「差異比較構文」の下位類であると考えている。さらに、许国萍(2007)は「二つの比較する対象が存在するとき、X以外のすべての対象あるいはY以外のすべての対象を一つの総体と見なせば、このような差異比較構文は最上級比較の意味が表せる。この場合は「差異比較の枠を超えている」といってよい」と論じている。本研究は、「最上級比較構文」の論理構造が「平等比較構文」と「差異比較構文」の論理構造と多少異なる点があること(β = “α以外のすべて”の構造)から考え、それは独立して別の比較構文になるはずであると考えている。

各文型の用例の分析からみると、最上級比較構文の論理構造は以下のようにまとめることができる。

図 10



演繹モデル

この構造の中のα、β、[論理形式 1]、[論理形式 2]は図 10 の通りで、すべて「演繹モデル」に従う。先行する命題の第一項はαに繰り上がり、第二の命題の第一項はβに繰り上がる。この式の比較対象が[確定]していなければ演算ができない。そこで、比較対象の論理形式に添え字の“1”と“2”を付加する。全体からみると、α、βとγの三項関数項の論理関係がはっきりしている。

最上級比較構文の典型的比較詞は「最、頂」などである。さらに、「比…都…」と「没有比」の特殊な“比”構文も最上級比較の意味を表せる。比較する対象の「X」と「Y」の一方は個体対象であり、もう一方は「X」あるいは「Y」以外のすべての対象の集合である。

最上級比較構文の論理式は「最上級比較詞」 $[\alpha, \beta, \text{有}'(\alpha, [\text{論理形式}1]) \& \text{有}'(\beta, [\text{論理形式}2]) \& \text{有}'\{\text{減}'([\text{論理形式}1], [\text{論理形式}2]), [\text{差数}]\} \& \text{到}'([\text{差数}], \text{多少})]$ である。この式は「 α が α 以外のすべてト、あるいは β 以外のすべてが β ト γ トイウ状態ニアル」の意を、つまり「 α (あるいは β)が最上級にある」の意を表す。さらに、“ γ ”の項を“ $\gamma 1$ ”、“ $\gamma 2$ ”、“ $\gamma 3$ ”に下位分類ができる。“ $\gamma 1$ ”は「格役割」を表し、“ $\gamma 2$ ”は減法で差があること、つまり「数量化」を表し、“ $\gamma 3$ ”は差があること、つまり一種の「着点」を表している。これが最上級比較構文の論理構造およびそれが表す意味である。

次の章では現代日本語における「比較構文」の論理構造と文型意味について説明する。

第五章 現代日本語における比較構文の研究

現代日本語における比較構文についての研究は使役構文、受身構文などの研究と比べて、非常に少ない。現在の日本語の文法に関する研究を調べると、比較構文はほとんど研究されていない。庵功雄など(2000)は「比較の表現はこれまで文法研究で取り上げられることが少なかった分野です(174頁)」と指摘している。さらに、中国語の比較構文についての研究と比べ、日本語の比較構文に関する研究は不十分であると思う。

本章で、筆者は従来の研究に基づき、現代日本語における比較構文の論理構造と文型意味を考察してみたい。

1. 先行研究

1.1 「比較構文」の定義

「比較構文」の定義について、日本語の研究者たちは以下のように述べている。

安達太郎(2001)は「二つ以上の要素の比較という意味を構造化して表した文を比較構文と呼ぶことにする」と定義している。

渡辺史央(1995)は「比較表現とは、話し手がある対象(人、モノ、コト)の属性(性質、状態)の程度に関して、それと同じ属性を有する別の対象の属性の程度を基準にして、その大小関係を述べたり、また同一の対象がもつ異なる属性の程度に関して、一方の属性の程度を基準として、他方の属性の程度との大小関係を述べる表現である」と論じている。

庵功雄など(2000・2001)は「比較の表現とは、二つ以上の事物をそれらが共通して持っている性質や特徴によって比較した表現である」と述べている。

野田時寛(2001)は「比較は二つ以上の対象を比べることだが、比較表現はそれを程度・数量の違い・大小として一つの尺度の中に位置づけるものである」と述べている。

1.2 「比較構文」の種類と文型

1.2.1 友清睦子・鈴木雅実(1992)による研究

友清睦子・鈴木雅実(1992)は「日本語の比較表現の基本的な形態には、「～より」、「方」、「～より～の方」、「一番」、「ほど～ない」、「同じくらい」、「どちらの方」、「以上」によって比較の概念がマークされている」と述べている。その表す意味により、日本語の比較構文を五種類に分けている。

(一) 二者比較

(1) 新幹線は飛行機より安い。

(二) 三者以上の比較

(2) 会場に一番近いホテルは……だ。

(三) 程度の比較

(3) 先生がよりよくご存知です。

(四) 量の比較

(4) 本数は阪急の方があります。

(五) 状況の比較

(5) マイクで呼び出すよりも直接手渡された方が良いと思います。

また、友清睦子・鈴木雅実は次の用例を通して、比較構文の述部の意味を説明した。

(6) 花子は太郎より若い。

この場合花子が「若い」の意味はない。なぜなら、「でも二人とも八十歳はくだるまい」の文をつけることができる。従って、「より」は、その文の前提条件である「比較において」を暗示し、比較の基準となるものをマークする。

さらに、友清睦子・鈴木雅実は「より」の各用法の考察から、意味構造の記述として「より」の場合少なくとも「比較するもの」、「比較の基準となるもの」と「判断事項(量、程度、状況)」の項が必要であると結論している。

1.2.2 庵功雄など(2000・2001)による研究

庵功雄など(2001)は二つ以上の事物をそれらが共通して持っている性質や特徴によって比較する表現として、次の三種類の表現を取り上げた。

(7) 田中さんは林さんより頭がいい。

(8) 鈴木さんは林さんと同じぐらい頭がいい。

(9) 田中さんは三人の中で一番頭がいい。

さらに、庵功雄などは日本語における比較の表現を「二つの事物を比較する表現」、「三つ以上の事物を比較する表現」と「基準・標準と比較する表現」の三種類に分けている。

「二つの事物を比較する表現」と「三つ以上の事物を比較する表現」では例(7)と(8)の類義表現を中心に指摘し、「基準・標準と比較する表現」では、関連する表現を、基準・標準と比較して述べる表現を扱うと指摘している。

1.2.2.1 二つの事物を比較する表現

二つの事物を比較する表現はよく「より、に比べて、と比べて、にもまして、以上にもっと、さらに、ずっと、まだ、より(程度副詞)」などを用いる。たとえば、

(10) 良子はみどりより若い。

(11) 兄は母に比べて背が高い。

(12) 以前{にもまして/以上に}物価上昇のスピードがはやくなった。

1.2.2.1.1 「AはBよりPだ」

「AはBよりPだ」は、AとBという二つの事物の性質に優劣・大小・多寡・長短などの差があることを表す文型である。この文型の述語部分「P」には形容詞、「副詞+動詞」や一部の程度性を持つ名詞が用いられる。たとえば、

(13) 父は母よりゆっくり歩く。(副詞+動詞)

(14) 弟は妹より楽道家だ。(名詞)

「A」が主題化されていない(「は」で示されていない場合は「Aの方がBよりP」または「BよりAの方がP」の形が使われる。たとえば、

- (15) 良子の方がみどりより若い。
 (16) 母より父の方がゆっくり歩く。

「より」に近い働きをする複合助詞に「に/と比べて」や「にもまして」、「以上に」を用いることができる。たとえば、

- (17) 良子はみどりに比べて背が高い。
 (18) 弟は妹にもまして楽道家だ。

「AはBよりPだ」の述部が否定の場合には、「AはBほど～ない」の形で表される。たとえば、

- (19) あこのテレビはこのテレビほど安くない。

二つ事物を比べる質問文では「どちら」を用い、「だれ」や「どれ」は使えない。また、二つの事物は「AとBとでは」や「AとBの」で示す。たとえば、

- (20) 田村君と高田さんとは{○どちら/×だれ}が早起きですか。
 (21) 和定食と洋定食の{○どちら/×だれ}が高いですか。

また、AとBの差がどのぐらいあるかを述べたいときは、述語の直前に数量詞や「ずつと、やや、少し」などの程度副詞を入れて表す。たとえば、

- (22) 兄は母より10センチ背が高い。
 (23) このテレビはあのテレビよりずっと新しい。
 (24) 和定食の方が洋定食よりやや高い。

さらに、庵功雄などは二つの事物を比べる比較表現を、細かく分けて次の三種類に分類している。

- (一) AとBを単純に比べてAのほうがよりPである場合
 (二) AもBもPであるがその二者を比べたらAのほうがよりPである場合
 (三) AもBも十分Pではないがその二者を比べたらAのほうがややPである場合

1.2.2.1.2 「AはBと同じぐらいPだ」

「AはBと同じぐらいPだ」は、AとBという二つの事物の性質に優劣・大小・多寡・長短などの差がないことを表す文型である。述部には「AはBよりPだ」と同じく、形容詞、「副詞+動詞」、程度性を持つ名詞などを用いることができる。たとえば、

- (25) この動物はウサギと同じぐらいすばやく働く。
 (26) 上村さんは山田さんと同じぐらい儉約家だ。

1.2.2.2 三つ以上の事物を比較する表現

三つ以上の事物を比較する表現はよく「一番、最も、～ほど～はない、～このうえない、～きわまらない、の極み、の至り」などを用いる。たとえば、

(27) 兄は家族の中で{一番/最も}背が高い。

(28) 田中さんほど親切な人はいない。

庵功雄などは「三つ以上の事物を比較してその中で最も程度が著しいものを挙げる場合には、副詞「一番、最も」を用いて、「AはX(の中で)一番/最も～だ」のように表すのが代表的である」と論じている。

「AはX(の中で)一番/最も～だ」の文型において、「Xで」と「Xの中で」のうち、「Xで」は場所を表す名詞に、「Xの中で」は人数や範囲を表す名詞に付くのが原則である。たとえば、

(29) 富士山は日本{○で/?の中で}一番高い山です。

(30) レズリーさんはこの四人{?で/○の中で}一番背が高い。

ただし、両方とも使える場合も多く、それほど強い使い分けの規則はない。

庵功雄などの考察により、「X(の中で)Aほど～は(い)ない」という文型は「AはX(の中で)一番/最も～だ」と同じ意味を表すことができる。たとえば、

(31) このクラスで田中さんほど親切な人はいない。＝このクラスで田中さんが一番親切だ。

ただし、「～ほど～は(い)ない」は比較する範囲の限定(「Xの中」)がなくでも使える点が「一番/最も～だ」と異なる。この場合「非常に～だ」のように程度の甚だしさを強調する意味になる。たとえば、

(32) 田中さんほど親切な人はいない。＝田中さんは非常に親切だ。

1.2.2.3 基準・標準と比較する表現

基準・標準と比較する表現はよく「にしては、わりに(は)」などを用いる。

1.2.2.3.1 「PにしてはQ」

「PにしてはQ」は、「Pという前提から一般的に予想される基準・標準と比べるとQだ」という意味を表す。Pには名詞と動詞が用いられる。たとえば、

(33) グレッグさんは欧米人にしては背が低い。(P:名詞)

(34) (これから山へ行く人に)富士山に登るにしては軽装ですね。(P:動詞)

Pはあくまで前提なので、現実には正しいかどうか不確定なときにも使うことができる。たとえば、

(35) A: あの人、この大学の先生かしら?

B: 先生にしては若すぎるよ。学生じゃないかな。

1.2.2.3.2 「Pわりに(は)Q」

「Pわりに(は)Q」は「Pの程度から一般的に予想される基準・標準と比べるとQだ」という意味を表す。Pは何らかの程度を表す表現であり、形容詞、尺度や程度を表す名詞や程度副詞を伴う動詞が用いられる。たとえば、

(36) このワインは高いわりにさほどおいしくない。(P:形容詞)

(37) ゆうた君は年齢のわりに体が小さい。(P: 尺度や程度を表す名詞)

(38) 彼はよく勉強しているわりに成績が上がらない。(P: 程度副詞を伴う動詞)

1.2.3 安達太郎(2001)による研究

安達太郎(2001)は「日本語の比較構文は多様な形式、文型を持つ興味深い構文である」と指摘している。さらに、典型的な比較構文をはじめとして比較の基準の諸形式、さまざまな文型、副詞から構成される比較構文について、それぞれの意味、特徴の記述を行うことによって日本語の比較構文の全体像について考察している。なお、五種類の文型に分けて論じている。

1.2.3.1 典型的な比較構文

安達太郎は「典型的な比較構文は、あるテーマに関して、ある要素を基準とすると別の要素が上位に置かれることを意味する。従って典型的な比較構文は、テーマを設定する述語、基準となる“より”句、そして比較の対象の三つの構成要素からなることにする」と論述している。さらに、具体的用例を通して、典型的な比較構文の構成成分と文型を説明している。

(39) 一般に、男と女とどちらが立派か、などと言ってみてもはじまらないが、年寄りだけについて言えば、おじいさんよりもおばあさんのほうが、毅然とした、骨のある人が多いような気がする。(高島俊男『お言葉ですが…』)

例(39)の文は、比較構文の述語が設定する「毅然とした、骨のある人の多さ」という比較のテーマに関して「おじいさん」を基準とすると、その基準を「おばあさん」が量的に上回っていることを表している。ここで、「より(も)」で表される句を「比較の基準」、その基準と比較される要素を「比較の対象」、述語を「比較述語」と呼ぶことにする。

典型的な比較構文は次のような文型で表される。

(40) Xより Y.(の方)が P.
 ↓ ↓ ↓
 比較の基準 比較の対象 比較述語

ここで、「比較述語」と呼ぶのはあくまで比較構文を成立させる主要因となる述語のことであり、それが必ずしも文の述語でない場合もある。たとえば、

(41) 佐藤も森内の、「サラダおかわり、ごはんおかわり、カルビ追加」の声につられたように、普段より多く注文する。果先生は私たちがあきれたように見ているのであった。(島 朗『純粋なるもの』)

例(41)においては、テーマを設定する比較述語「多く」は副詞として現れており、文の述語ではない。

また、比較構文は二つの要素を取り上げて比較するという意味を持つため、「～の方」を付加することによって、この対照が明示されることが多い。とくに場所や時間を比較する

場合には、必須的に「～の方が」を取る⁶⁵。たとえば、

(42) a 広島より東京の方がはるかに物価が高い。

b? 広島より東京がはるかに物価が高い。

(43) a いつもより今日の方が調子がいい。

b *いつもより今日が調子がいい。

1.2.3.2 比較述語を持たない比較構文

安達太郎は「より」によって比較の基準を設定しながらも比較述語が文中に存在しないタイプの文がある。このような文では何について比較を行うのかという比較のテーマが明示されるところから典型的な比較構文とは異なった意味を持つと考えられる」と論じている。なお、比較述語を持たない比較構文を以下の二種に分けている。

1.2.3.2.1 「VよりV」型比較構文

「VよりV」型比較構文について、安達は次の用例を取り上げた。

(44) 信夫は、父の死を悲しむよりも、むしろ父の死に心打たれていたのである。(三浦綾子『塩狩峠』)

例(44)の文は「父の死を悲しむ」という行為と「父の死に心打たれている」という行為を比較して後者を選択することを表すが、何について比較するのかというテーマが文中に明示されていない。

「VよりV」型比較構文に適用される動詞について、安達氏は「主語の心理的な状態や思考を表す心理動詞に限られるが、通常の動詞はこの構文を取りにくい」と指摘している。たとえば、

(45) びっくりすることは、他にもあった。背広にネクタイを締めたサラリーマン風の人が、電車の座席に座って、堂々と漫画を読んでいた。

いい年をして恥ずかしくないのかしらと呆けるよりも、まず目の前で行われていることが信じられなかった。けれども驚いたそぶりを見せる人はいない。周りを見回すと、そういう雑誌を読んでいる大人なら、まだ他にもいた。(北村薫『スキップ』)

(46) *昨日私はテレビを見るより音楽を聴いた。

1.2.3.2.2 「NよりV」型比較構文

安達太郎は「VよりV」型比較構文から派生する構文に「NよりV」型比較構文があると論じている。たとえば、

(47) ふつうなら人を殺してこんなに平然としていられる人間に恐怖を感じていいはずだった。だが、楊があまり物静かなので、奈美は怖さよりも、とまどいを覚えた。(大沢在昌『毒狼 新宿鮫II』)

この例については、安達氏は「より」が節を取るのではなく名詞を取るところが「VよりV」型比較構文と異なっているが、「覚える」が程度性を持たない心理述語であるという

⁶⁵ 野田尚史(1996: 230-232頁)参照。

点では「VよりV」型比較構文と同様の特徴を持っている。このタイプも動作動詞では難しい(量や頻度を含意する比較構文としては可能かもしれない)」と説明している。

(48) *昨日私はドラマよりニュースを見た。

1.2.3.3 名詞の役割による比較構文

ここで、安達氏は「典型的な比較構文では比較述語の意味が比較構文を成立させる鍵になっていた。しかし、述語には比較構文を成立させる意味的な条件が備わっていないにも関わらず、その文中で名詞が担っている意味関係や指示関係によって比較構文が成立しているとみられるものがある」と指摘している。なお、名詞の役割による比較構文を以下の二種類に分けている。

1.2.3.3.1 名詞の意味関係による比較

このタイプは、比較される要素と述語との意味的關係に基づいて比較構文が成立するものである。比較構文を成立させる意味的關係には原因理由、目的、方向、資格がある。

(一)原因理由

(49) 最近の敬語の使い分けは目上・目下の関係よりは、親疎の意識によるようである。(井上史雄『敬語はこわくない』)

(二)目的

(50) 和田 彼らは学術的な目的よりも、三攫千金を狙ってタイタニックを探索しているんですね。“碧洋のハート”っていう高価な青いダイヤモンドが金庫にあるはずなんですけど、出て来たのは碧洋のハートを身につけた女の人のヌードの絵だった。(和田誠・三谷幸喜『これもまた別の話』)

(三)方向

(51) 「まあ、はるかちゃんが—

そういって感心したような声をあげたパート達は、必ず何かを持って来た。

そして店長の英造よりも、はるかに向かって、それを見せるのである。(北村薫『はるか』)

(四)資格

(52) 『TUTU』以降のマイルスからは、あきらかに、サウンド・クリエイターとしてよりもいちトランペッターとしての視点で音楽に取り組む姿勢が顕著に感じられる。(中山康樹『マイルス・デイヴィス ジャズを超えて』)

1.2.3.3.2 名詞の値の比較

ここで名詞の値の比較として取り上げるタイプには「～のは～だ」のような値を指定する文(指定文)と制限的連体修飾節の二つの場合がある。

指定文は次のようになる。

(53) 「来週から、こちらに移るので

「じゃあ、普通のお医者さんになるんですか」

「ふつうっていうか、内科です」

ますますいい。結婚するなら学者より医者だ。(篠田節子『女たちのジハード』)

(54) 「東京でもあったのか？買い占め騒ぎ」

「あったよ。でも首都圏では、トイレットペーパーよりも洗剤じゃなかったかな。俺、何度もお袋に買いに行かされた覚えがある」(東野圭吾『白夜行』)

例(53)は、「結婚する」という条件に適した値を持つ名詞を「学者」と「医者」の比較から選ぶという意味を持っている。例(54)も「首都圏での買い占め騒ぎ」の対象として二つの要素を比較している。「結婚する」や「買い占め騒ぎ」自体は比較構文を構成する要件を満たさないので、この値の選定という意味から比較構文が成立するのがこのタイプの特徴である。

制限的連体修飾節の比較構文は次のようになる。

(55) セルフ・スタートを重視するよりも、人の動きを見てから他人に合わせて行動する生徒が後を絶たない。(阿満利磨『日本人はなぜ無宗教なのか』)

安達氏は「このタイプは、主名詞が示す値の幅を限定する機能を持つ連体修飾節を比較するものである」と述べている。例(55)は「セルフ・スタートを重視する」という節と「他人に合わせて行動する」という節を比較して後者を選ぶことによって、「生徒」の表す値が制限されている。

1.2.3.4 非典型的な比較構文

ここで、安達氏は比較の基準が「より」以外の形式で表されるものを「非典型的な比較構文」と呼んでいる。さらに、「非典型的な比較構文」を次の三種類に分けている。

1.2.3.4.1 「YはX以上にP」型比較構文

「YはX以上にP」型比較構文は「以上に」によって比較の基準を表す構文であり、典型的な比較構文と違う含意を持つものである。この文型には「以上」の原義が生きており、「XはP。しかし、それ以上にYはP」を含意する。たとえば、

(56) でもいいゲームでしたね。目の前で優勝を見せられた選手たちは、僕以上に悔しかったはず。これをいいクスリにして、今後大きな花を咲かせて欲しい(二宮清純『Do or Die』)

例(56)は、程度性を持つ比較述語「悔しい」によって比較のテーマが設定され、これに関して二つの要素の比較を行っている。さらに、「自分も悔しいが選手はそれ以上に悔しい」という含意を持っている。

1.2.3.4.2 「XするくらいならYする方がP」型比較構文

「XするくらいならYする方がP」型比較構文の意味的な特徴は、比較されている二つの行為のどちらもが話し手にとってはそれほど高く評価されていないが、どちらかと言えばYの方がましである、という判断を伝えるところである。ここから、比較される要素が行為に限られ、また比較述語が話し手の判断を表す述語に限られるという制限が出てくる。たとえば、

(57) 「ぼくも同じなんだなあ。古い書きつけを読んでいるとけっこう面白いんです。いまみたいなくだらん仕事をやるくらいなら、学者にでもなっていた方がよっぽどよかった」(志水辰夫『あした蜉蝣の旅』)

例(57)では比較構文の三つの要素をすべて持っているが、このタイプでは比較述語を省略して文末を行為系のモダリティの文にする次のようなパターンも可能である。

(57') いまみたいなくだらん仕事をやるくらいなら学者にでもなるよ。

1.2.3.4.3 「XというよりY」型比較構文

「XというよりY」型比較構文について、安達氏は「これまでに取り上げた比較構文と違って、この構文は述語の属性に関する比較を行うのではなく、二つの表現のどちらが適切かというメタ言語レベルでの比較をするところに特徴がある。従って、比較述語が不必要であるところが文型的な特徴である」と述べている。たとえば、

(58) 「どうしてコーヒーより紅茶の方がいいんです」

「よしあし、というより、好き嫌いです」(北村薫『砂糖合戦』)

1.2.3.5 副詞「より」による比較構文

ここで、安達氏は「比較構文の比較の基準を提示する「より」は副詞として用いられる用法」について考察している。たとえば、

(59) 彼は一つの教訓を得た。秘密を守るということよりも誰にも秘密を気づかせないことの方が、より大切だということである。(梶山季之『黒の試走車』)

例(59)のように、通常の比較の副詞が比較される対象間の隔たりの程度を表すのに対して、「より」はその比較の意味が含意されていることを表すところから、比較構文を構成する一翼を担っている。さらに、安達氏は副詞「より」による比較構文が「より[述語]」、「[より 副詞]述語」と「[より 述語]主名詞」の三つの構造を含んでいることを指摘した。

現代日本語の比較構文に関する研究において、安達太郎の研究は非常に系統的で、全面的で、詳細である。従って、筆者はここで安達氏の研究内容を詳しく紹介した。

1.2.4 野田時寛(2001)による研究

野田時寛(2001)は日本語の比較構文を単文と複文に分け、それぞれの比較表現について考察している。

1.2.4.1 単文における比較表現

1.2.4.1.1 二つのものの比較

ここで、野田時寛(2001)は「比較表現の基本である二つのものの比較は、その一つを主題として「Aは～」とする文型と二つの中から一つを選び出す「Aのほうが～」という文型に分けられる」と論じている。

1.2.4.1.1.1 一つを主題として

一つを主題としては、よく「AはBより大きい(か)」の文型を用いる。このAを主題とし、その大きさを示すために同類のBを比較の基準とする。この場合、Aは一般的な規準でも「大きい」とは限らない。

野田氏の説明により、「Aは大きい」は、A(やB)を含む同類のものの中で「大きい」と見なされることを表す。ところが、比較表現では「Aはかなり小さいが、Bよりも大きい。」ということができ、「Aが大きい」ことは保証されない。A・Bが一般的な規準から言って「大きい」ことを示すには「AはBよりもっと大きい」のように「もっと」などの比較の意味を含んだ程度副詞を使う。こうすると、「Bは大きい」ことが示唆され、従って「Aは大きい」ことが示される。

1.2.4.1.1.2 一つを焦点として

ここで、野田氏は「特に二つのうちの一つを主題とせず、二つのものを対等に比較し、一つを選び出す疑問表現がある」と論じている。たとえば、

「AとBと(で)(は)どちらが大きいか」

その答えは、

「Aが(Bより)大きい」

「Aのほうが(Bより)大きい」

という形になる。「ほうが」を使うほうが比較表現の形である。この場合も、一般的な規準で「Aが大きい」かどうかは分からない。なお、「どちら」は名詞の種類に関係なく使われる。「だれ」、「なに」、「どこ」などは使われない。

1.2.4.1.1.3 否定表現

ここで、野田氏は「比較表現の否定は、「一つを主題として「Aは～」とする文型」の「一つを主題とした」ものの否定しかない。「二つの中から一つを選び出す「Aのほうが～」という文型」のほうは「選択」することに文型としての意義があるので、基本的には否定の形はない。たとえば、

「BはAほど大きくない(Bも少し大きい)」

「×AのほうがBほど/より大きくない」

1.2.4.1.1.4 同程度比較

ここで、野田氏は「比較して、同程度である場合には「Nと同じくらい」を使う。「Nくらい」は話し言葉では使われるが、少々落ち着きが悪い」と論じている。たとえば、

「AはBと同じくらい大きい」

「AはBくらい大きい」

1.2.4.1.2 三者以上のものの比較

日本語には英語のような「最上級」を表す特別の形はない。「一番/最も 大きい」のように副詞を使うだけである。比較される対象の範囲を表すために、

「AとBとC(とD…)の中/うち で」

「Aの中で」

などの形が使われる。

1.2.4.2 複文における比較表現

野田氏は「単文の比較構文で名詞が入るところに節を入れることができる」と述べている。これは名詞節の一つの用法と考えることもできるが、「の」も「こと」も使わず、述語に直接「より」が接続できる点を重視して、名詞節とは別の構文として扱う。

1.2.4.2.1 「～ほうが」

単文の「AよりBのほうが～」に対応する複文は、

「A(現在形)より B(現在形/過去形)ほうが～」

となり、Bの現在形と過去形は多くの場合入れ替え可能である。たとえば、

(60) 店で買うより自分で作る/作った ほうが安く上がる。

(61) 手紙を書くより電話する/した ほうが時間の節約になる。

1.2.4.2.2 主題として

この場合は、「AはBより」の形である。Aは「～の/こと」の名詞節になる。たとえば、

(62) 車を買うのは、免許をとるよりやさしい。

(63) 失敗から学ぶことは、たまたま成功してしまうより価値がある。

1.2.4.2.3 「どちら」

「どちら/どっち」による疑問文は「～の/こと」名詞節を使う。たとえば、

(64) 車に乗るのと、歩くのと、どちらが好きですか。

1.2.4.2.4 否定表現

複合文の比較の否定は「名詞節+ほど」の形式をとり、「AはBほど～ない」という単文と並行している。たとえば、

(65) 冒険をして失敗することは、恐れて何もせぬことほど悪くない。

1.2.4.2.5 同程度比較

同程度を表す形は、名詞節を単文の比較表現にはめ込んだ形になる。

「～の/こと は ～の/ことと同じくらい～」の文型である。これは単文の比較表現の、

「AはちょうどB(と同じ)くらい～」に対応する文型である。たとえば、

(66) 山道を降りるのは、登るのと同じくらい難しい。

1.2.5 森山卓郎(2004)による研究

森山卓郎(2004)は否定表現との関係に着目し、日本語における狭義の「比較」というべき二者間での有差比較、二者間での同等認定および三者以上の要素での最上級認定について考察している。

1.2.5.1 二者間差比較

森山氏は「日本語の二者間差比較では、いわゆる英語の比較級のような形態はないが、二者間の要素の相対関係がさまざまな方法で対照される」と述べている。さらに、「高い」という述語を持つ文を例として、その二者間の有差比較の諸表現を取り上げて説明した。

(67) a 松茸は椎茸より高い。(「もっと高い」なども可能)

b 松茸の方が椎茸より高い。

c (椎茸は高いが、)松茸は{もう少し/より/さらに/もっと/遥かに}高い。

d 松茸と椎茸では、松茸の方が高い。

e 椎茸に比べ、松茸は高い。

例(67)の否定表現は次のようになる。

(67) a' ?? 松茸は椎茸より高くない。

b' ?? 松茸の方が椎茸より高くない。

c' * 椎茸は高いが、松茸は{さらに/もっと/遥かに}高い。(cf. 椎茸は松茸ほど高くない。)

d' 椎茸と松茸では、松茸の方が高くない。

e' 椎茸に比べ、松茸は高くない。

例(67)とその否定表現について、森山氏の説明は以下のようになる。

(67)のaとbでは「より」という起点表示の助詞によって、「椎茸(の高さ)」をいわば「地」(ground)として、そこから離れたものとしての「松茸(の高さ)」という「図」(figure)を取り上げることになっている。この場合、名詞に「～の方が」のように、「方」が共起することもある。(67)のcは「より～、もっと～」など、比較の程度副詞だけによる比較構文である。これらの文では否定表現(a'、b'とc')は基本的に言いにくい。これは「～より高くない」では、「～より」が属性の程度差を示すのに対し、否定表現がその属性を否定する点で、意味的に適合しないことによる。従って、「[松茸は椎茸より高い]わけではない」のようにいったん形式名詞によって主張を成立させた上での否定など、別の仕組みが必要である。

(67)のdのように、「(AとBでは)Aの方が～」という表現では、方向による枠づけにより、片方の要素だけを取り上げることで、比較を表すことになっている。この場合、述語に相当するのが当該(の片方)の要素であるということを指定するため、主語は「が」で示される。この場合の否定表現は、わざわざ否定を取り上げる点でのまわりくどさがあるも

の、不可能ではないようである。たとえば、文脈上「高くない」という述語が問題になっているような場合は(67)の d' のように成立できる。ただし、「高くない」という属性をもつ述語に相当するものを「～の方が」によってあてはめる点で、程度表現としての比較を否定するわけではない。

(67)の e では、「～に比べ」「～に比べると」のようなメタ的な断りによって比較という「空間」が構成され、その中で属性が述べられることによって、比較の意味が表示されている。これも、語彙的形式によって比較されるため、「より」「方」などの形式なしでも比較の意味を構成できる(共起は可能)。この否定表現は(67)の e' のように成立できる。比較はいわば注釈的に付加されているにすぎず、否定された属性が述べられることになっている。

さらに、森山氏は「d' のような「方が」と e' のような「比べると」を除くと、なぜ比較の文は否定が難しいのか」について考察している。この原因として考えられるのが、日本語では、そもそも、述語にそのまま接続した否定形式は通常は直前の形式を否定するという、さらに、否定された属性は属性の非存在を表すということである。日本語ではたとえば、

(68) *椎茸は大変高くない。(cf. ～高いとは限らない。)

のような表現は不可能である。「高くない」という否定表現は属性づけそのものを否定する。そのため、「大変」のような属性の程度修飾と共起しない。強い否定では、

(69) 椎茸は{全然・まったく}高くない。

のように、否定と呼応する副詞によって属性が零であることが強調されて表される。

1.2.5.2 同程度比較

森山氏は同程度比較について、以下の用例を取り上げている。

(70) 野生の舞茸は松茸ほど高い。

(71) 野生の舞茸は松茸と同じくらい高い。

(72) 野生の舞茸の高さは松茸と同じくらいだ。

例(70)～(72)のように、肯定文の「～ほど～」の場合は、程度を示す要素の方に目印的な特異属性が必要である。

(73) *なめ茸の値段はシメジの値段ほど普通だ。

例(73)のように、通常の属性では言いにくい。いわば特別値としての比較対象が必要なのである。

同程度比較の否定の場合、

(74) 椎茸は松茸ほど高くない。

のような表現が成立できる。いわば、否定表現の場合には特別値と同程度ではないという否定ができる。

「～と同じくらい」を否定した場合は、

(75) 椎茸は松茸と同じくらい高くない。(椎茸、松茸とも高くなく、その程度は同じ。) のように、「ない」の否定領域が直前の「高い」に限定されるので、「高い」ことが同様に否定されることになる。つまり、その点で、同程度であることだけの否定表現なら「[椎茸は松茸と同じくらい高い]わけではない」などの方が適切である。

1.2.5.3 最上級比較

ここで、森山氏は「最上級は、基本的に「最も」「一番」のような副詞が属性と共に起ることで表示される」と論じている。たとえば、

(76) 茸の中では松茸が【最も・一番】高い。

この文の論理的な関係では、

(77) 松茸 {ほど・より} 高い茸はない。

のように、同等ないしそれ以上のものが存在しないことをいうことでも同じ関係は表せる。

さらに、森山氏は「最上級そのものを否定することは、あまり一般的ではない」と指摘している。

(78) ?茸の中では、シメジが最も高くない。

という表現はあまり一般的ではない。「高くない」では属性が否定されるのに対し、最上級の修飾は他者との比較を表すからである。言い換えると、逆方向の属性では「最も安い」のように反対方向の表現を使うことで表現は成立する。

ただし、語彙的には、次のように、可能な場合もある。

(79) 就任前の仁杉総裁は「国鉄再建監理委と国鉄のきしみが最もよくない」といいながらも。(朝日 85・6・23)

例(79)では、「悪い」とも言えるはずだが、「悪い」が極端な方向まで含意するのに対し、「よくない」は「よい」の否定だけであり、中間部分も含んで表現がやわらかくなる。

2. 現代日本語における比較構文の論理構造と文型意味

ここで、筆者は先行研究を踏まえ、現代日本語の比較構文を「平等比較構文(同程度比較)」、「差異比較構文(二者間の有差比較)」と「最上級比較構文(三者以上の比較)」の三種類に分けてそれぞれの論理構造と文型意味について考察してみたい。

2.1 現代日本語における平等比較構文の論理構造と文型意味

2.1.1 平等比較構文の肯定表現の論理構造と文型意味

現代日本語における平等比較構文(同程度比較)の主な文型は「XはYと同じくらい～」である。

(80) 野生の舞茸は松茸と同じくらい高い。(森山 2004)

この文の論理式は次のようになる。

$$\begin{array}{ccccccc}
 & \sim\text{ト} & & & \sim\text{ニ} & & \sim\text{ガ} \\
 (80') & \text{同ジクライ}' & [& \text{野生の舞茸}^{66}, & \text{松茸}, & \text{アル}' & (\text{野生の舞茸}, [\text{値段 } 1]) \\
 & \text{アル} & & \sim\text{ハ} & & \sim\text{ト} & \\
 & & & \alpha & & \beta & & \gamma 1 \\
 & \sim\text{ニ} & & \sim\text{ガ} & & \sim\text{カラ} & & \sim\text{ヲ} \\
 & \&\text{アル}' & (\text{松茸}, [\text{値段 } 2]) & \&\text{アル}' & \{ \text{引ク}' & ([\text{値段 } 1], [\text{値段 } 2]), [\text{差数}] \\
 & & & & & \sim\text{ニ} & & \sim\text{ガ} \\
 & & & & & \gamma 2 & & \\
 & \sim\text{ガ} & & \sim\text{ニ} & & & & \\
 & \&\text{至ル}' & ([\text{差数}], \text{零}) & & & & \\
 & \sim\text{トイウ状態ニ} & & & & & & \\
 & \gamma 3 & & & & & &
 \end{array}$$

次に、(80')の意味を説明する。この文は「野生の舞茸は松茸と同じくらい高い」という意味を表し、その複合命題は論理式では「同ジクライ」[野生の舞茸, 松茸, アル'(野生の舞茸, [値段 1])&アル'(松茸, [値段 2])&アル' {引ク}' ([値段 1], [値段 2]), [差数]}&至ル' ([差数], 零)]のように表示できる。ここで、この論理式について詳しく説明する。「アル'(野生の舞茸, [値段 1])」は「野生の舞茸」には論理形式の要素[値段 1]がある」の意を、「アル'(松茸, [値段 2])」は「松茸」にも論理形式の要素[値段 2]がある」の意を、「アル' {引ク}' ([値段 1], [値段 2]), [差数]}&至ル' ([差数], 零)」は「[値段]の差は零」の意を表す。用例(80)の意味は前述のすべての命題を含まなければならない。さらに、 $\gamma 1$ では「野生の舞茸」と「松茸」が「経験者格」を、「値段 1」と「値段 2」が「対象格」を表すので、格役割を表示する。 $\gamma 2$ は減法で差があること、つまり数量化を表している。 $\gamma 3$ は差のないこと、言い換えれば差がゼロの量に達している

⁶⁶ “野生の舞茸”の文成分の内部の関係は「野生」という項と“舞茸”という項には“の”という“関係”がある”ことであり、論理式は“アル(ノ)'(野生, 舞茸)”である。しかし、ここで述べた中心は比較構文であるため、繁雑になるのを避けてそのまま“野生の舞茸”と記する。

こと、つまり一種の「着点」を表している。

この文についてタイプ理論を用いたモデルによって説明してみよう。(80)のタイプ分析は樹形図で簡略表示すると、図1となる。

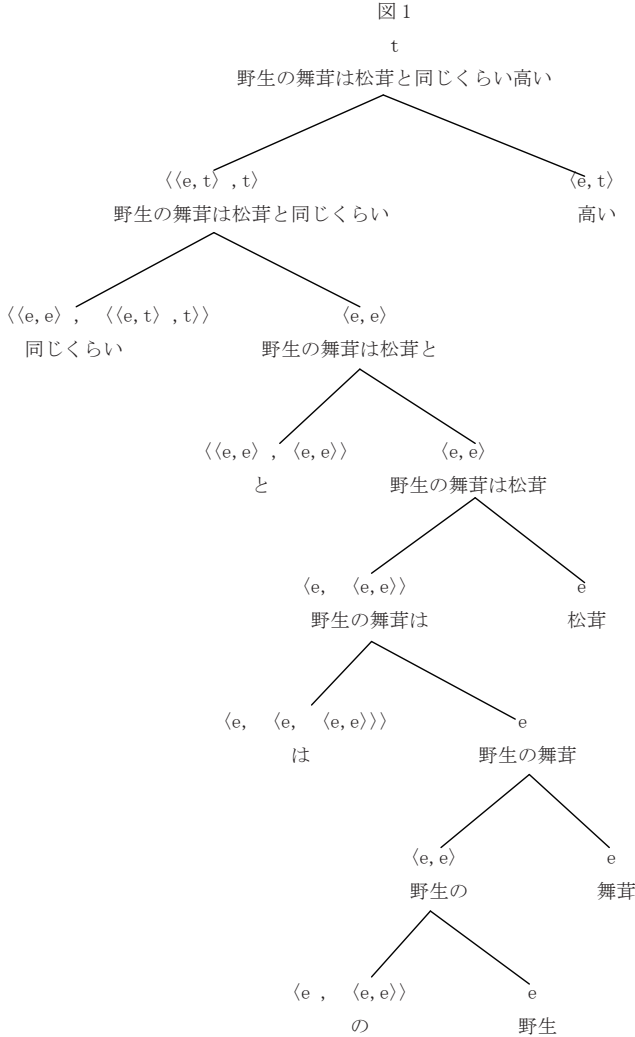
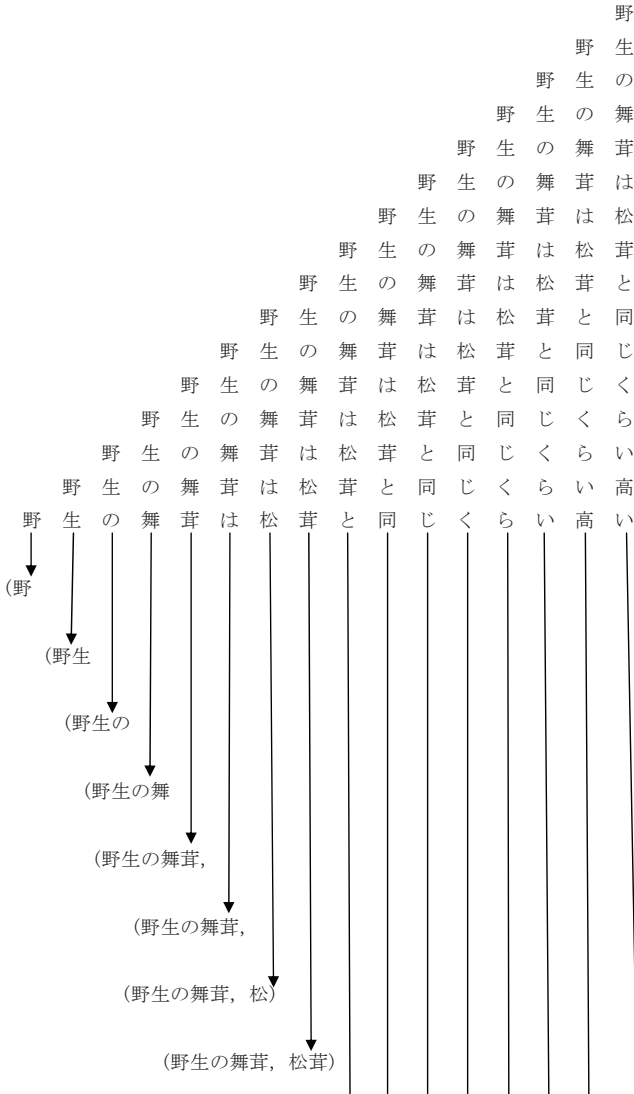


図1からみると、“同じくらい”のタイプ式は“ $\langle\langle e, e \rangle, \langle\langle e, t \rangle, t \rangle\rangle$ ”の二項述語であり、“野生”、“舞茸”と“松茸”は個体定項“e”であり、“は”は“ $\langle e, \langle e, \langle e, e \rangle \rangle$ ”の三項述語であり、“と”は“ $\langle\langle e, e \rangle, \langle e, e \rangle\rangle$ ”の二項述語であり、“の”は“ $\langle e, \langle e, e \rangle\rangle$ ”の二項述語であり、“高い”は“ $\langle e, t \rangle$ ”の一項述語である。

この例が示しているように、タイプ式による樹形図は文を構成するすべての要素のタイプを決定できる。

この用例についても、その論理式の成立のプロセスを有限オートマトンと順序論理回路のモデルを用いて説明しておこう。(80)の文の有限オートマトン、順序論理回路、入力記憶に基づいて作成した論理式は次のようになる。

図 2



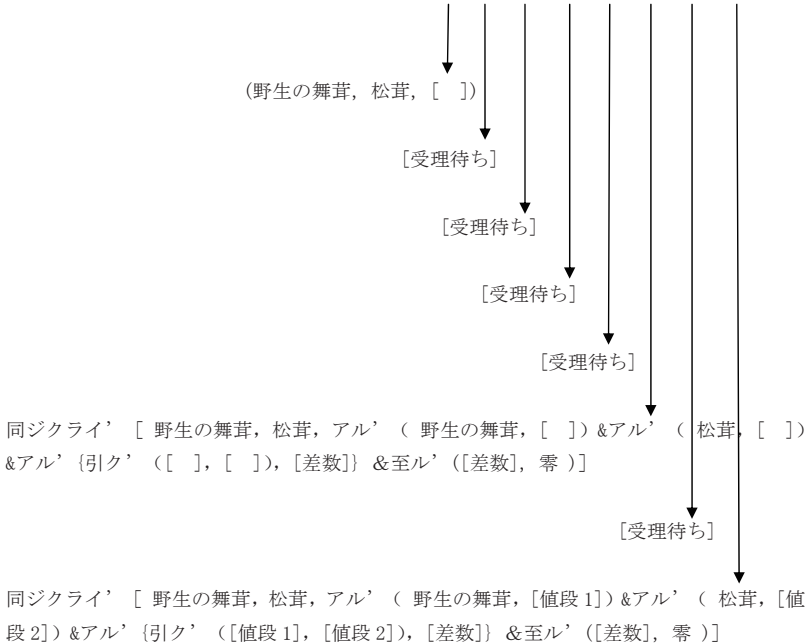


図2について説明しよう。まず“野”を入力し、論理式は“(野)になる。第二に“野生”を入力し、論理式は“(野生)になる。第三に“野生の”を入力し、論理式は“(野生の)になる。第四に“野生の舞”を入力し、論理式は“(野生の舞)になる。第五に“野生の舞茸”を入力し、ここで論理式は“(野生の舞茸)になる。第六に“野生の舞茸は”を入力し、論理式は変わらないが、メタ言語を「～ハ」とする。第七に“野生の舞茸は松”を入力し、“論理式は“(野生の舞茸, 松)”になる。第八に“野生の舞茸は松茸”を入力し、ここで論理式は“(野生の舞茸, 松茸)”になる。第九に“野生の舞茸は松茸と”を入力し、論理式は“(野生の舞茸, 松茸, [])”になる。

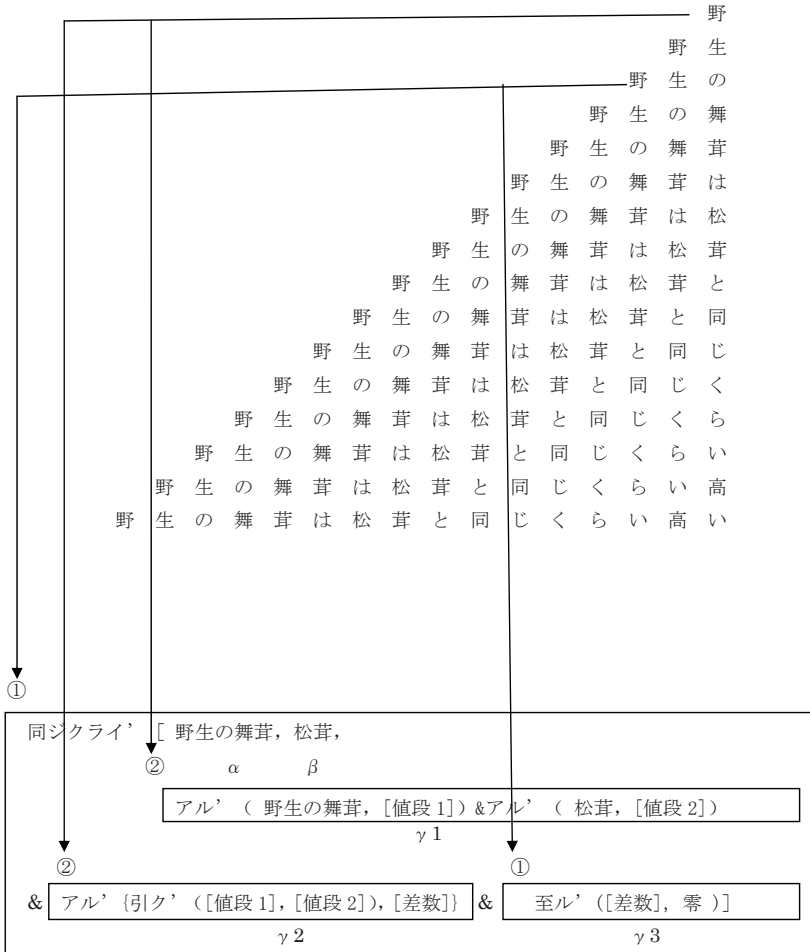
第十に“野生の舞茸は松茸と同”を、第十一に“野生の舞茸は松茸と同じ”を、第十二に“野生の舞茸は松茸と同じく”を、第十三に“野生の舞茸は松茸と同じくら”を入力し、ずっと“受理待ち”の状態になる。第十四に“野生の舞茸は松茸と同じくらい”を入力し、論理式は“同ジクライ' [野生の舞茸, 松茸, アル' (野生の舞茸, []) & アル' (松茸, []) & アル' {引ク' ([], []), [差数]} & 至ル' ([差数], 零)}”になる。

第十五に“野生の舞茸は松茸と同じくらい高”を入力し、“受理待ち”になる。最後に“野生の舞茸は松茸と同じくらい高い”を入力し、文のすべての入力完了する。その論理式は“同ジクライ' [野生の舞茸, 松茸, アル' (野生の舞茸, [値段 1]) & アル' (松茸, [値段 2]) & アル' {引ク' ([値段 1], [値段 2]), [差数]} & 至ル' ([差数], 零)}”にな

る。この図からみると、“同じくらい”の入力とともに、文の全体の構造が決められている。

入力記憶によって文を構成するすべての成分を作りあげることができる。その生成過程は次の図3になる。

図3



論理式は入力記憶によって作成される。まず①で同じくらい' [α, β, γ1&γ2&γ3]の三項関数とγ3の「着点」が、第二に②でγ1の「格役割」とγ2の「量化」が決定される。

2.1.2 平等比較構文の否定表現の論理構造と文型意味

現代日本語における平等比較構文(同程度比較)の「XはYと同じくらい～」という文型の否定表現は「XはYほど～はない」である。

(81) 椎茸は松茸ほど高くはない。(森山 2004)

この文の論理式は次のようになる。

$$\begin{array}{ccccccc}
 (\text{ナイ})\sim\text{ト} & & \sim\text{ニ} & \sim\text{ガ} & & \sim\text{ニ} & \sim\text{ガ} \\
 (81') \sim\text{ホド}' & [\text{椎茸, 松茸, アル}' & (\text{椎茸, [値段 1]}) & \& \text{アル}' & (\text{松茸, [値段 2]}) \\
 \text{アル} & \sim\text{ガ} & \sim\text{ト} & & & & \\
 & \alpha & \beta & & \gamma 1 & & \\
 & \sim\text{カラ} & \sim\text{ヲ} & & \sim\text{ガ} & \sim\text{ニ} & \\
 & \& \text{アル}' \{\text{引ク}' & ([\text{値段 1}], [\text{値段 2}]), [\text{差数}] \} & \& \text{至ル}' & ([\text{差数}], \text{ゼロ}) \\
 & & \sim\text{ニ} & & \sim\text{ガ} & & \\
 & & & & & \sim\text{トイウ状態ニ} & \\
 & \gamma 2 & & & & \gamma 3 &
 \end{array}$$

次に、(81')の意味を説明する。この文は「椎茸は松茸ほど高くはない」という意味を表し、その複合命題は論理式では「 $\sim\text{ホド}'$ [椎茸, 松茸, アル' (椎茸, [値段 1]) & アル' (松茸, [値段 2]) & アル' {引ク}' ([値段 1], [値段 2]), [差数]} & 至ル' ([差数], ゼロ)]」のように表示できる。ここで、この論理式について詳しく説明する。「アル' (椎茸, [値段 1])」は「“椎茸”には論理形式の要素[値段 1]がある」の意を、「アル' (松茸, [値段 2])」は「“松茸”にも論理形式の要素[値段 2]がある」の意を、「アル' {引ク}' ([値段 1], [値段 2]), [差数]} & 至ル' ([差数], ゼロ)」は「[値段]の差はゼロ」の意を表す。「 \sim 」は文全体を否定している。つまり、「椎茸」は「松茸」と[値段]の差は零という状態でない」の意を表す。用例(81)の意味は前述のすべての命題を含まなければならない。さらに、 $\gamma 1$ では「椎茸」と「松茸」が「経験者格」を、「値段 1」と「値段 2」が「対象格」を表すので、格役割を表示する。 $\gamma 2$ は減法で差があること、つまり数量化を表している。 $\gamma 3$ は差のないこと、言い換えれば差がゼロの量に達していること、つまり一種の「着点」を表している。

この文についてタイプ理論を用いたモデルによって説明してみよう。(81) のタイプ分析は樹形図で簡略表示すると、図4となる。

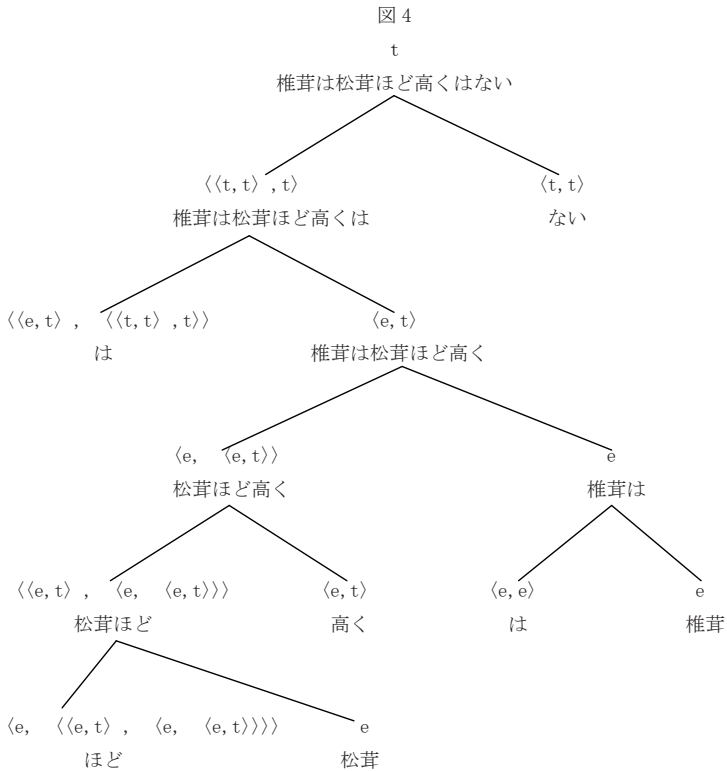
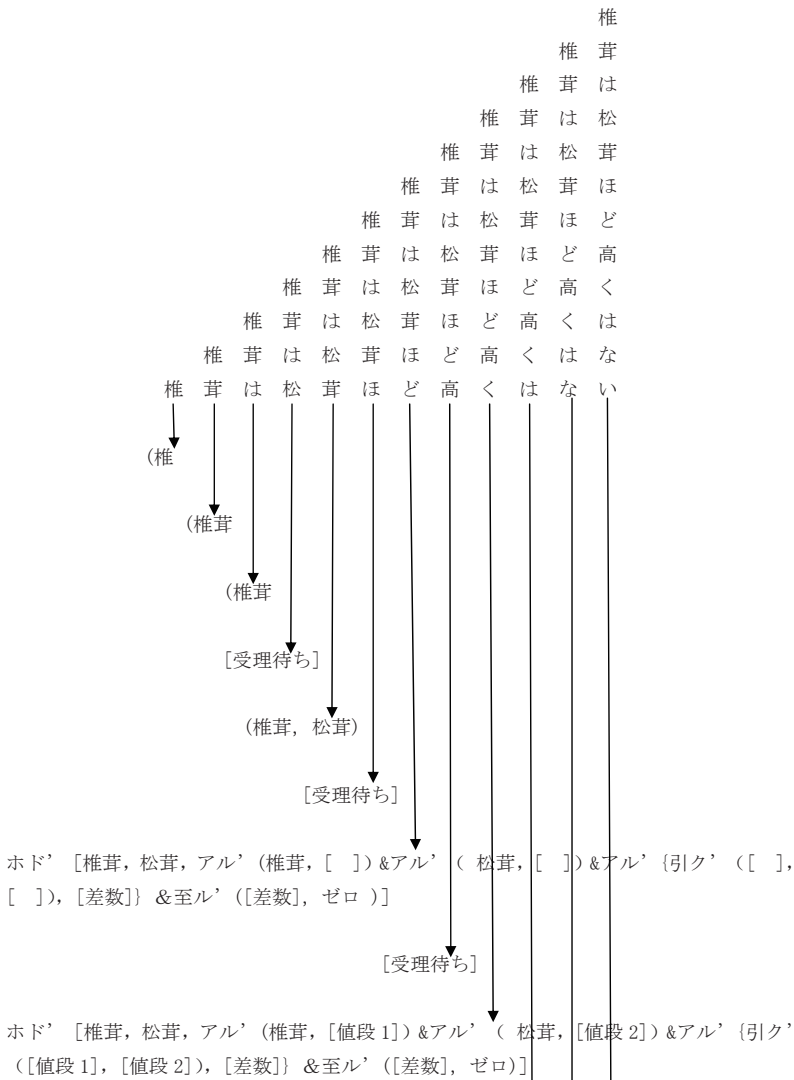


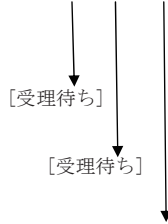
図4からみると、“ほど”のタイプ式は“<(e, <(e, t), <(e, <(e, t)>)>)”の四項述語であり、“椎茸”と“松茸”は個体定項“e”であり、“は”は複合定項“<(e, e)”であり、“高く”は“<(e, t)”の一項述語であり、否定詞の“ない”は論理タイプ“<t, t)”である。

この例が示しているように、タイプ式による樹形図は文を構成するすべての要素のタイプを決定できる。

この用例についても、その論理式の成立のプロセスを有限オートマトンと順序論理回路のモデルを用いて説明しておこう。(81)の文の有限オートマトン、順序論理回路、入力記憶に基づいて作成した論理式は次のようになる。

図 5





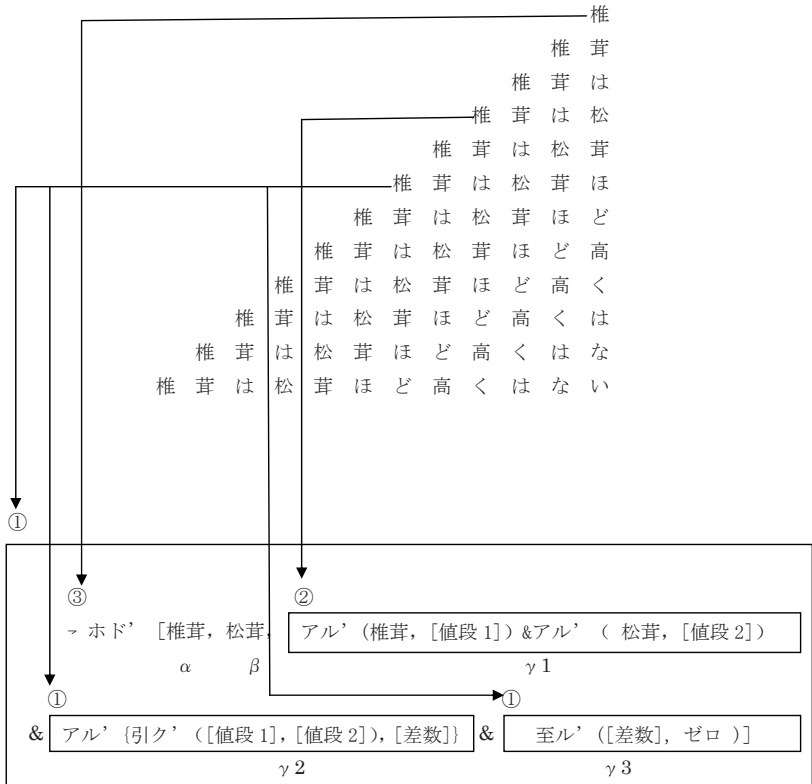
→ホド' [椎茸, 松茸, アル' (椎茸, [値段 1]) & アル' (松茸, [値段 2]) & アル' {引ク' ([値段 1], [値段 2]), [差数]} & 至ル' ([差数], ゼロ)]

図5について説明しよう。まず“椎”を入力し、論理式は“(椎”になる。第二に“椎茸”を入力し、論理式は“(椎茸”になる。第三に“椎茸は”を入力し、論理式は変わらないが、メタ言語を「～ハ」とする。第四に“椎茸は松”を入力し、ここで“受理待ち”の状態になる。第五に“椎茸は松茸”を入力し、ここで論理式は“(椎茸, 松茸)”になる。第六に“椎茸は松茸ほ”を入力し、“受理待ち”になる。第七に“椎茸は松茸ほど”を入力し、論理式は“ホド' [椎茸, 松茸, アル' (椎茸, []) & アル' (松茸, []) & アル' {引ク' ([], []), [差数]} & 至ル' ([差数], ゼロ)]”になる。第八に“椎茸は松茸ほど高”を入力し、ここで“受理待ち”になる。第九に“椎茸は松茸ほど高く”を入力し、論理式は“ホド' [椎茸, 松茸, アル' (椎茸, [値段 1]) & アル' (松茸, [値段 2]) & アル' {引ク' ([値段 1], [値段 2]), [差数]} & 至ル' ([差数], ゼロ)]”になる。

第十に“椎茸は松茸ほど高くは”を、第十一に“椎茸は松茸ほど高くはな”を入力し、ずっと“受理待ち”の状態になる。最後に“椎茸は松茸ほど高くはない”を入力し、文のすべての入力完了する。その論理式は“→ホド' [椎茸, 松茸, アル' (椎茸, [値段 1]) & アル' (松茸, [値段 2]) & アル' {引ク' ([値段 1], [値段 2]), [差数]} & 至ル' ([差数], ゼロ)]”になる。この図からみると、“ほど”の入力とともに、文の全体の構造が決められている。

入力記憶によって文を構成するすべての成分を作りあげることができる。その生成過程は次の図6になる。

図6



論理式は入力記憶によって作成される。まず①でホド' [α, β, γ1&γ2&γ3]の三項関数、γ2の「量化」とγ3の「着点」が、第二に②でγ1の「格役割」が、第三に③で否定の「~」が決定される。

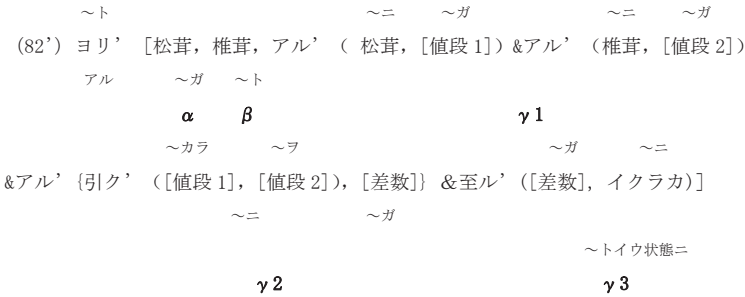
2.2 現代日本語における差異比較構文の論理構造と文型意味

ここで、現代日本語の差異比較構文(二者間の有差比較)を「XはYより～」と「Yに比べXは～」の二種類に分けて、その論理構造と文型意味を説明する。

2.2.1 「XはYより～」

(82) 松茸は椎茸より高い。(森山 2004)

この文の論理式は次のようになる。



次に、(82')の意味を説明する。この文は「松茸は椎茸より高い」という意味を表し、その複合命題は論理式では「ヨリ' [松茸, 椎茸, アル' (松茸, [値段 1]) & アル' (椎茸, [値段 2]) & アル' {引ク' ([値段 1], [値段 2]), [差数]} & 至ル' ([差数], イクラカ)]」のように表示できる。ここで、この論理式について詳しく説明する。「アル' (松茸, [値段 1])」は「“松茸”には論理形式の要素[値段 1]がある」の意を、「アル' (椎茸, [値段 2])」は「“椎茸”にも論理形式の要素[値段 2]がある」の意を、「アル' {引ク' ([値段 1], [値段 2]), [差数]} & 至ル' ([差数], イクラカ)」は「[値段 1]から[値段 2]を引くと差がある」の意を表す。「より高い」の“高さ”は「はっきりした差がある」ことを表す。このことを「至ル' ([差数], イカラカ)」で表現することにする。用例(82)の意味は前述のすべての命題内容を含んでいることになる。さらに、 $\gamma 1$ は「松茸」と「椎茸」が「経験者格」を、「値段 1」と「値段 2」が「属格(対象格)」を表すので、「格役割」を表示する。 $\gamma 2$ は減法で差があること、つまり「数量化」を表している。 $\gamma 3$ は差がいくらかあること、言い換えれば「差がいくらかの量に達している」こと、つまり一種の「着点」を表している。

この文についてタイプ理論を用いたモデルによって説明してみよう。(82) のタイプ分析は樹形図で簡略表示すると、図7となる。

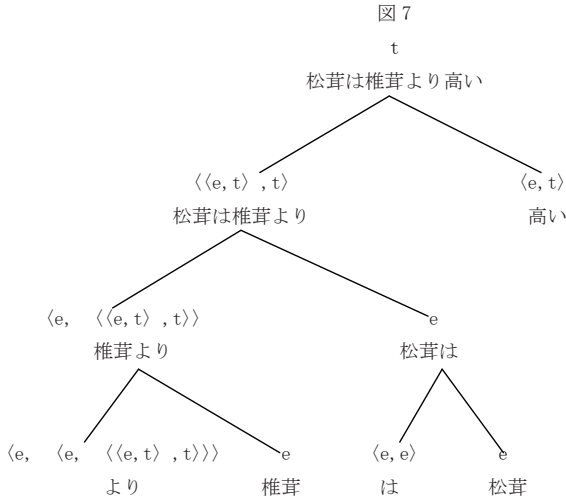


図7からみると、“より”のタイプ式は“ $\langle e, \langle e, \langle \langle e, t \rangle, t \rangle \rangle \rangle$ ”の三項述語であり、“松茸”と“椎茸”は個体定項“e”であり、“は”は“ $\langle e, e \rangle$ ”の複合定項であり、“高い”は“ $\langle e, t \rangle$ ”の一項述語である。

この例が示しているように、タイプ式による樹形図は文を構成するすべての要素のタイプを決定できる。

この用例についても、その論理式の成立のプロセスを有限オートマトンと順序論理回路のモデルを用いて説明しておこう。(82)の文の有限オートマトン、順序論理回路、入力記憶に基づいて作成した論理式は次のようになる。

図 8

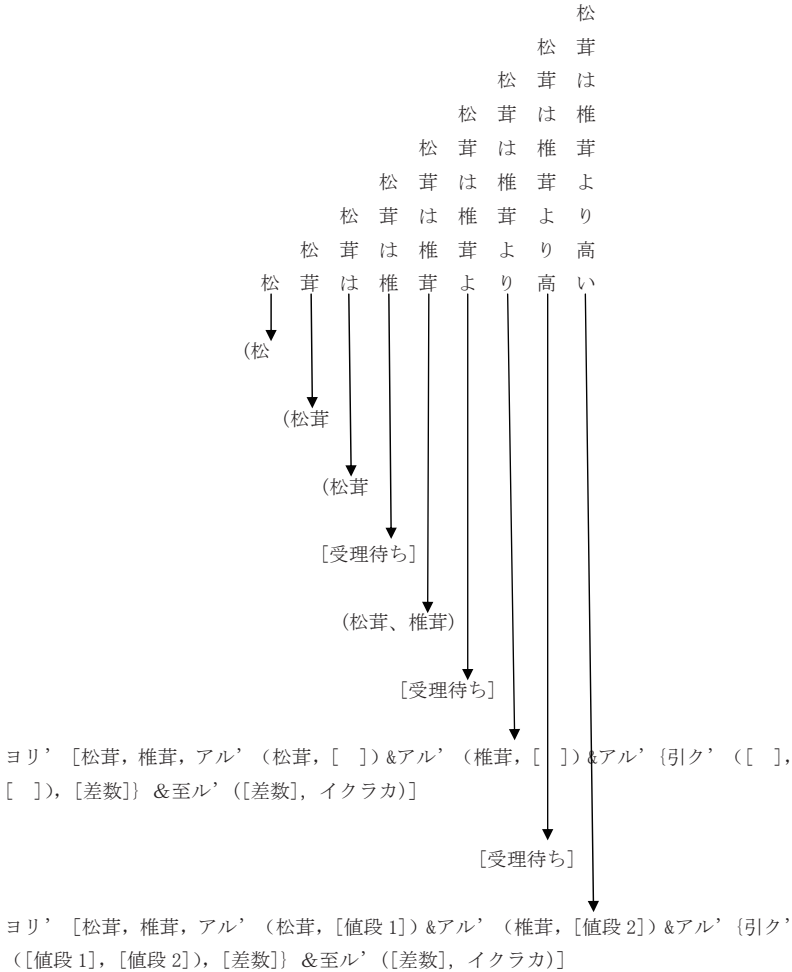
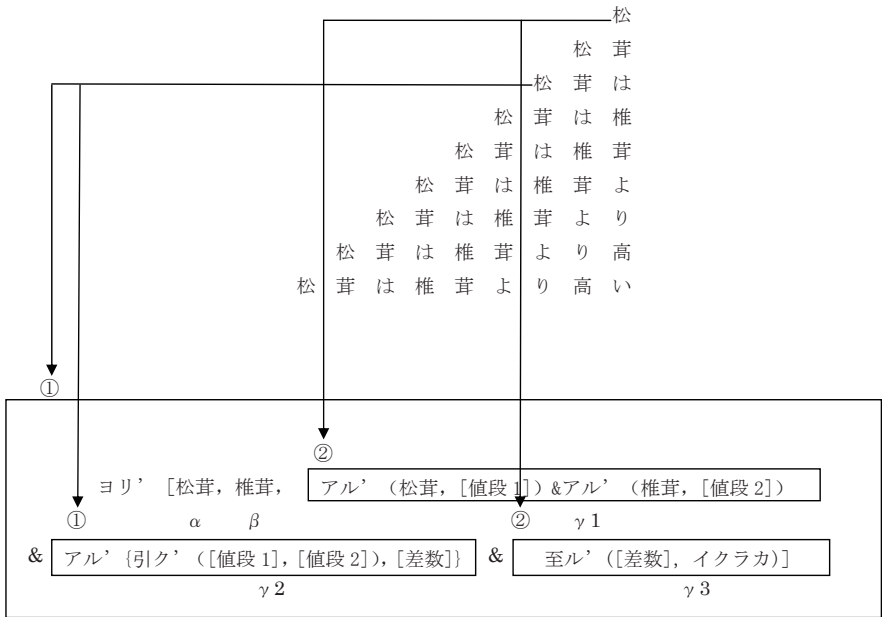


図 8 について説明しよう。まず“松”を入力し、論理式は“(松)”になる。第二に“松茸”を入力し、論理式は“(松茸)”になる。第三に“松茸は”を入力し、論理式は変わらない。

第四に“松茸は椎”を入力し、ここで“受理待ち”になる。第五に“松茸は椎茸”を入力し、ここで論理式は“(松茸、椎茸)”になる。第六に“松茸は椎茸よ”を入力し、“受理待ち”になる。第七に“松茸は椎茸より”を入力し、論理式は“ヨリ’ [松茸, 椎茸, アル’ (松茸, []) &アル’ (椎茸, []) &アル’ {引ク’ ([], []), [差数]} &至ル’ ([差数], イクラカ)]”になる。第八に“松茸は椎茸より高”を入力し、ここで“受理待ち”になる。最後に“松茸は椎茸より高い”を入力し、文のすべての入力完了する。その論理式は“ヨリ’ [松茸, 椎茸, アル’ (松茸, [値段 1]) &アル’ (椎茸, [値段 2])] &アル’ {引ク’ ([値段 1], [値段 2]), [差数]} &至ル’ ([差数], イクラカ)]”になる。この図からみると、“より”の入力とともに、文の全体の構造が決められている。

入力記憶によって文を構成するすべての成分を作りあげることができる。その生成過程は次の図9になる。

図9

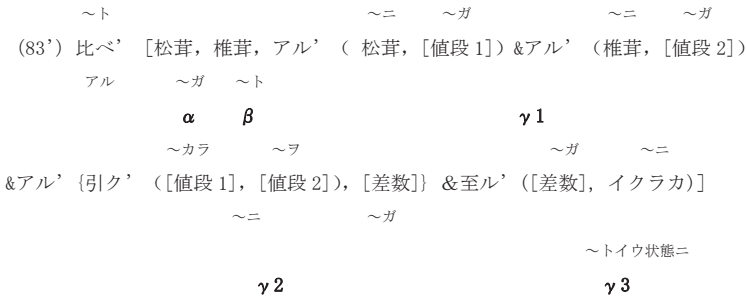


論理式は入力記憶によって作成される。まず①でヨリ’ [α , β , $\gamma 1$ & $\gamma 2$ & $\gamma 3$]の三項関数、 $\gamma 2$ の「量化」が、第二に②で $\gamma 1$ の「格役割」と $\gamma 3$ の「着点」が決定される。

2.2.2 「Yに比べXは～」

(83) 椎茸に比べ松茸は高い。(森山 2004)

この文の論理式は次のようになる。



ここで、(83') の意味を説明する。この文は「椎茸に比べ松茸は高い」という意味を表し、その複合命題は論理式では「比べ' [松茸, 椎茸, アル' (松茸, [値段 1]) & アル' (椎茸, [値段 2]) & アル' {引ク' ([値段 1], [値段 2]), [差数]} & 至ル' ([差数], イクラカ)』のように表示できる。ここで、この論理式について詳しく説明する。「アル' (松茸, [値段 1])」は「“松茸”には論理形式の要素[値段 1]がある」の意を、「アル' (椎茸, [値段 2])」は「“椎茸”にも論理形式の要素[値段 2]がある」の意を、「アル' {引ク' ([値段 1], [値段 2]), [差数]} & 至ル' ([差数], イクラカ)」は「[値段 1]から[値段 2]を引くと差がある」の意を表す。「より高い」の“高さ”は「はっきりした差がある」ことを表す。このことを「至ル' ([差数], イクラカ)」で表現することにする。用例(83)の意味は前述のすべての命題内容を含んでいることになる。さらに、γ 1は「松茸」と「椎茸」が「経験者格」を、「値段 1」と「値段 2」が「属格(対象格)」を表すので、「格役割」を表示する。γ 2は減法で差があること、つまり「数量化」を表している。γ 3は差がいくらかあること、言い換えれば「差がいくらかの量に達している」こと、つまり一種の「着点」を表している。論理構造からみると、(83)は(82)の文と比較標識(“比べ”と“より”)を除き、ほかの項と文型意味はまったく同じである。

この文についてタイプ理論を用いたモデルによって説明してみよう。(83) のタイプ分析は樹形図で簡略表示すると、図 10 となる。

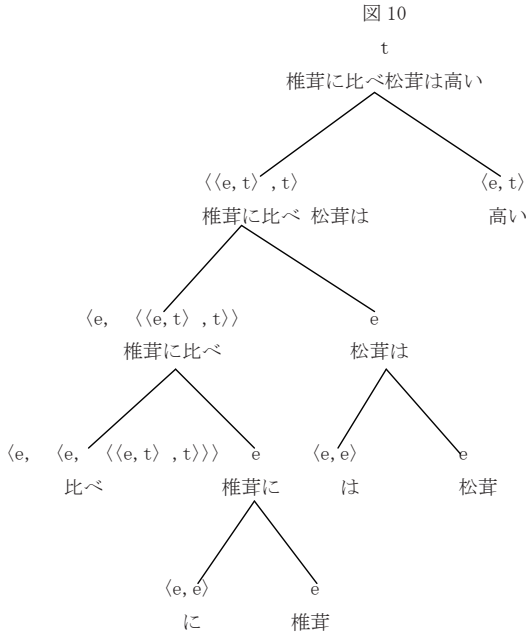
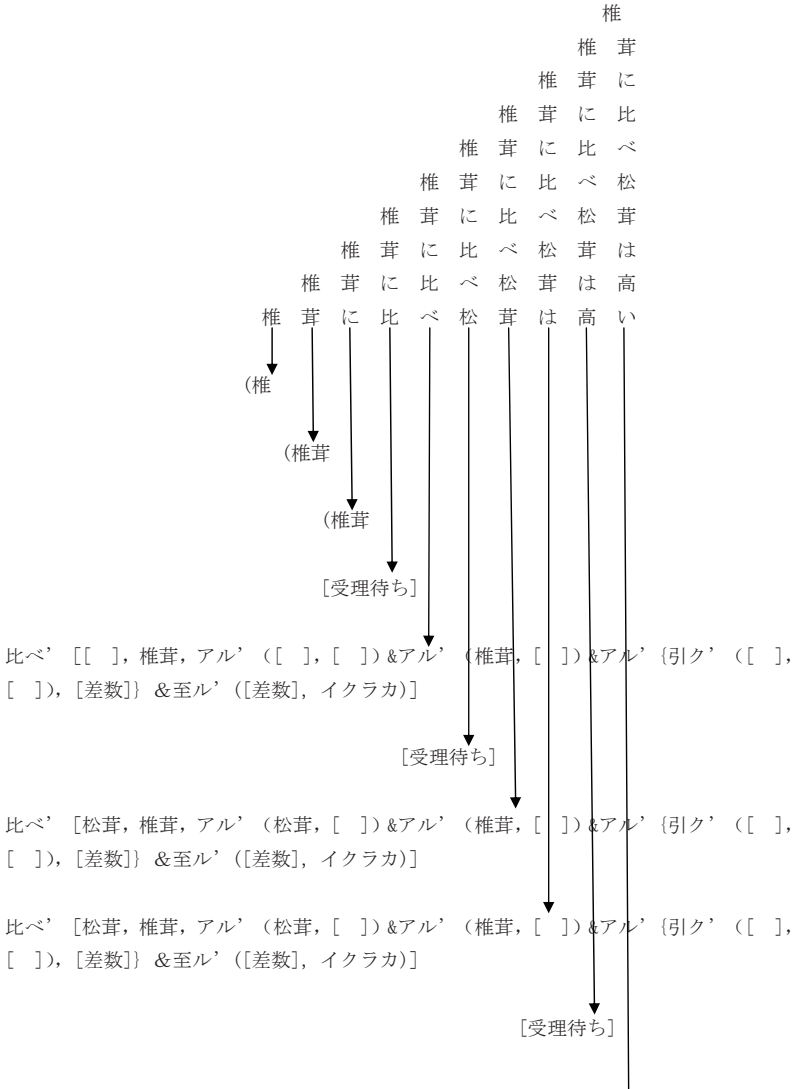


図 10 からみると、“比べ”のタイプ式は“ $\langle e, \langle e, \langle\langle e, t \rangle, t \rangle\rangle\rangle$ ”の三項述語であり、“松茸”と“椎茸”は個体定項“e”であり、“は”と“に”は“ $\langle e, e \rangle$ ”の複合定項であり、“高い”は“ $\langle e, t \rangle$ ”の一項述語である。

この例が示しているように、タイプ式による樹形図は文を構成するすべての要素のタイプを決定できる。例(83)の論理構造と文型意味は(82)とまったく同じであるが、タイプ構造が異なる。

この用例についても、その論理式の成立のプロセスを有限オートマトンと順序論理回路のモデルを用いて説明しておこう。(83)の文の有限オートマトン、順序論理回路、入力記憶に基づいて作成した論理式は次のようになる。

図 11



↓

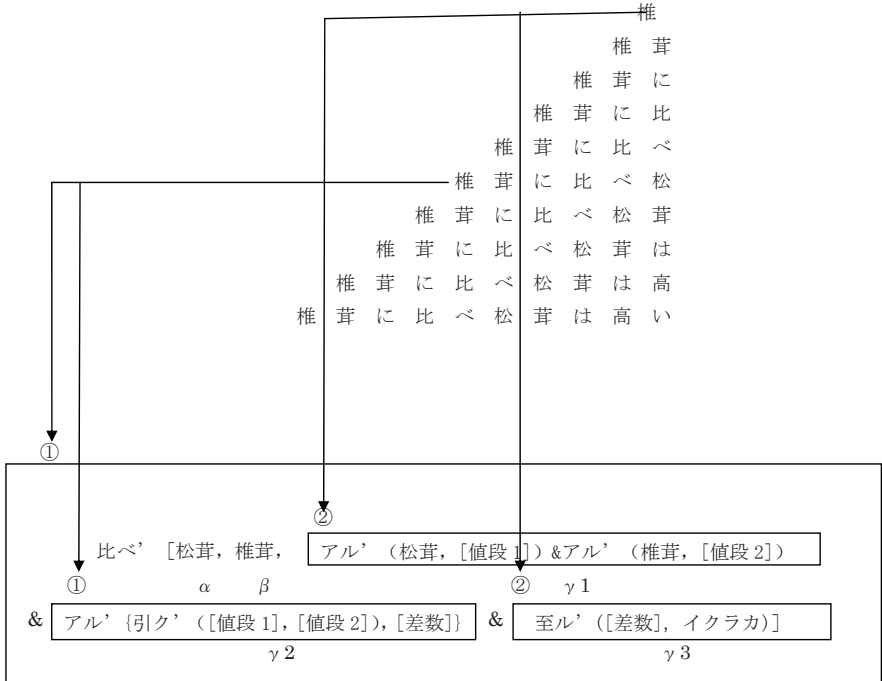
比べ' [松茸, 椎茸, アル' (松茸, [値段 1]) & アル' (椎茸, [値段 2]) & アル' {引ク' ([値段 1], [値段 2]), [差数]} & 至ル' ([差数], イクラカ)]

図 11 について説明しよう。まず“椎”を入力し、論理式は“(椎”になる。第二に“椎茸”を入力し、論理式は“(椎茸”になる。第三に“椎茸は”を入力し、論理式は変わらないがメタ言語を「～ハ」とする。第四に“椎茸に比”を入力し、ここで“受理待ち”になる。第五に“椎茸に比べ”を入力し、ここで論理式は“比べ' [[], 椎茸, アル' ([], []) & アル' (椎茸, []) & アル' {引ク' ([], []), [差数]} & 至ル' ([差数], イクラカ)]”になる。第六に“椎茸に比べ松”を入力し、“受理待ち”になる。

第七に“椎茸に比べ松茸”を入力し、論理式は“比べ' [松茸, 椎茸, アル' (松茸, []) & アル' (椎茸, []) & アル' {引ク' ([], []), [差数]} & 至ル' ([差数], イクラカ)]”になる。第八に“椎茸に比べ松茸は”を入力し、論理式は変わらない。第九に“椎茸に比べ松茸は高”を入力し、ここで“受理待ち”になる。最後に“椎茸に比べ松茸は高い”を入力し、文のすべての入力完了する。その論理式は“比べ' [松茸, 椎茸, アル' (松茸, [値段 1]) & アル' (椎茸, [値段 2]) & アル' {引ク' ([値段 1], [値段 2]), [差数]} & 至ル' ([差数], イクラカ)]”になる。この図からみると、“比べ”の入力とともに、文の全体の構造が決められている。

入力記憶によって文を構成するすべての成分を作りあげることができる。その生成過程は次の図 12 になる。

図 12



論理式は入力記憶によって作成される。まず①で比べ' [α , β , $\gamma 1 \& \gamma 2 \& \gamma 3$]の三項関数、 $\gamma 2$ の「量化」が、第二に②で $\gamma 1$ の「格役割」と $\gamma 3$ の「着点」が決定される。

2.2.3 「Yに比べXは～ない」

「Yに比べXは～ない」は2.2.2の否定表現である。(森山2004の考察により、2.2.1の文型は否定表現を持たないと指摘される。)

(84) 松茸に比べ椎茸は高くない。(森山2004)

この文の論理式は次のようになる。

(ナイ)～ト	～ニ	～ガ	～ニ	～ガ
(84') ㄱ比べ'	[椎茸, 松茸, アル'	(椎茸, [値段1]) & アル'	(松茸, [値段2])	
アル	～ガ	～ト		
α	β		γ1	
～カラ	～ヲ		～ガ	～ニ
& アル' {引ク' ([値段1], [値段2]), [差数]} & 至ル' ([差数], イクラカ)]				
	～ニ	～ガ		
			～トイウ状態ニ	
	γ2		γ3	

ここで、(84')の意味を説明する。この文は「松茸に比べ椎茸は高くない」という意味を表し、その複合命題は論理式では「ㄱ比べ' [椎茸, 松茸, アル' (椎茸, [値段1]) & アル' (松茸, [値段2]) & アル' {引ク' ([値段1], [値段2]), [差数]} & 至ル' ([差数], イクラカ)]」のように表示できる。ここで、この論理式について詳しく説明する。「アル' (椎茸, [値段1])」は「“椎茸”には論理形式の要素[値段1]がある」の意を、「アル' (松茸, [値段2])」は「“松茸”にも論理形式の要素[値段2]がある」の意を、「アル' {引ク' ([値段1], [値段2]), [差数]} & 至ル' ([差数], イクラカ)」は「[値段1]から[値段2]を引くと差がある」の意を表す。「より高い」の“高さ”は「はっきりした差がある」ことを表す。このことを「至ル' ([差数], イクラカ)」で表現することにする。「ㄱ」は文全体を否定している。つまり、「[椎茸]は[松茸]と[値段]の差があるない」のメタ言語の意味を持つ。用例(84)の意味は前述のすべての命題内容を含んでいることになる。さらに、γ1は「椎茸」と「松茸」が「経験者格」を、「値段1」と「値段2」が「属格(対象格)」を表すので、「格役割」を表示する。γ2は減法で差があること、つまり「数量化」を表している。γ3は差がいくらかあること、言い換えれば「差がいくらかの量に達している」こと、つまり一種の「着点」を表している。

この文についてタイプ理論を用いたモデルによって説明してみよう。(84) のタイプ分析は樹形図で簡略表示すると、図 13 となる。

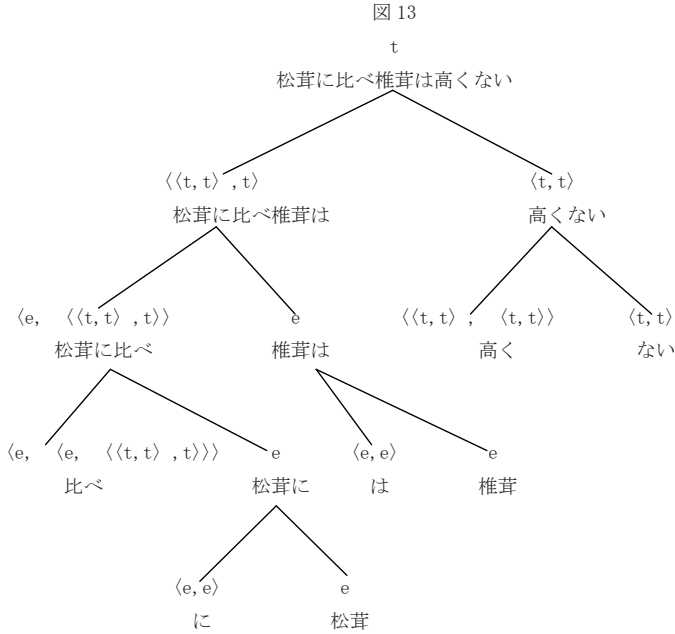
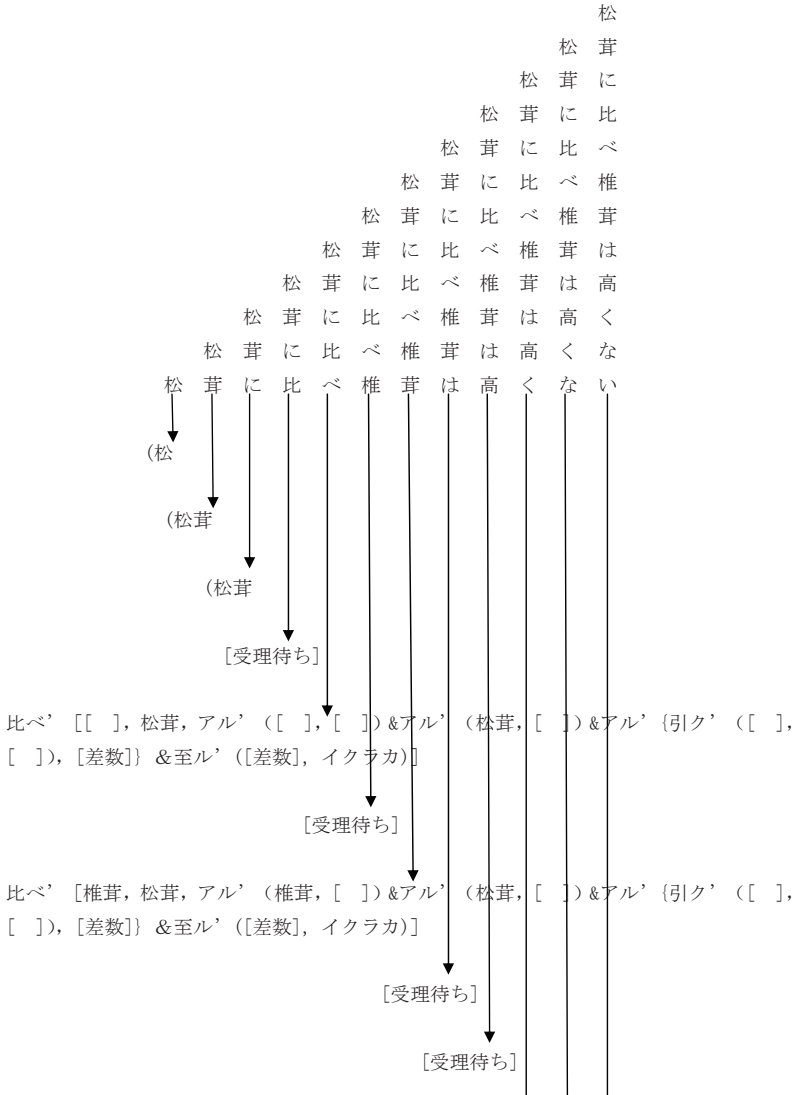


図 13 からみると、“比べ” のタイプ式は “ $\langle e, \langle e, \langle \langle t, t \rangle, t \rangle \rangle \rangle$ ” の三項述語であり、“椎茸” と “松茸” は個体定項 “e” であり、“は” と “に” は複合定項 “ $\langle e, e \rangle$ ” であり、“高く” は “ $\langle \langle t, t \rangle, \langle t, t \rangle \rangle$ ” の二項述語であり、否定詞の “ない” は論理タイプ “ $\langle t, t \rangle$ ” である。

この例が示しているように、タイプ式による樹形図は文を構成するすべての要素のタイプを決定できる。

この用例についても、その論理式の成立のプロセスを有限オートマトンと順序論理回路のモデルを用いて説明しておこう。(84)の文の有限オートマトン、順序論理回路、入力記憶に基づいて作成した論理式は次のようになる。

図 14



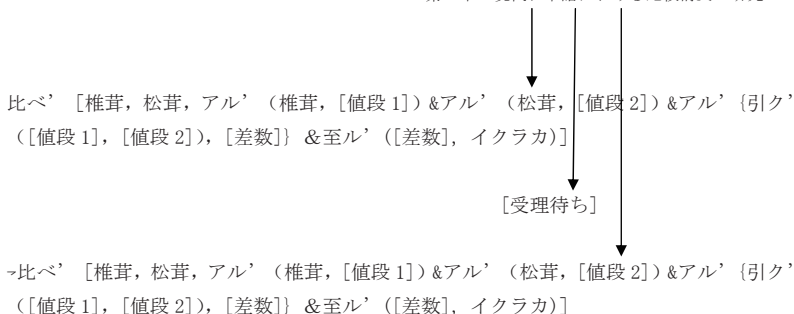
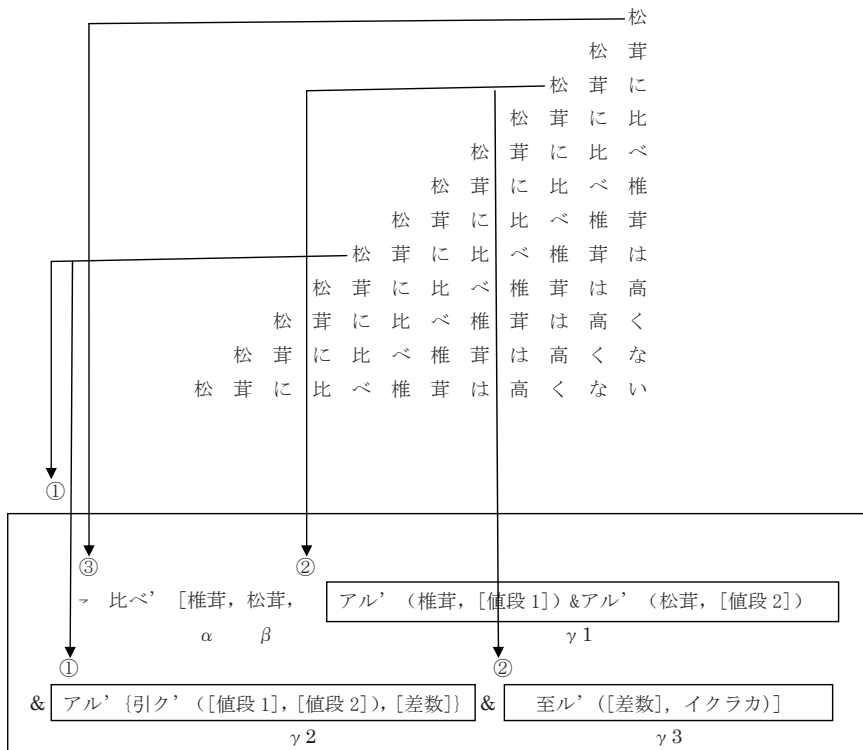


図 14 について説明しよう。まず“松”を入力し、論理式は“（松）になる。第二に“松茸”を入力し、論理式は“（松茸）になる。第三に“松茸に”を入力し、論理式は変わらないが、メタ言語を「～ハ」とする。第四に“松茸に比”を入力し、ここで“受理待ち”の状態になる。第五に“松茸に比べ”を入力し、ここで論理式は“比べ' [[], 松茸, アル' ([], []) & アル' (松茸, []) & アル' {引ク' ([], []), [差数]} & 至ル' ([差数], イクラカ)]”になる。第六に“松茸に比べ椎”を入力し、“受理待ち”になる。第七に“松茸に比べ椎茸”を入力し、論理式は“比べ' [椎茸, 松茸, アル' (椎茸, []) & アル' (松茸, []) & アル' {引ク' ([], []), [差数]} & 至ル' ([差数], イクラカ)]”になる。第八に“松茸に比べ椎茸は”を入力し、ここで論理式は変わらない。第九に“松茸に比べ椎茸は高”を入力し、“受理待ち”になる。

第十に“松茸に比べ椎茸は高く”を、論理式は“比べ' [椎茸, 松茸, アル' (椎茸, [値段 1]) & アル' (松茸, [値段 2]) & アル' {引ク' ([値段 1], [値段 2]), [差数]} & 至ル' ([差数], イクラカ)]”になる。第十一に“松茸に比べ椎茸は高くな”を入力し、“受理待ち”の状態になる。最後に“松茸に比べ椎茸は高くない”を入力し、文のすべての入力は完了する。その論理式は“比べ' [椎茸, 松茸, アル' (椎茸, [値段 1]) & アル' (松茸, [値段 2]) & アル' {引ク' ([値段 1], [値段 2]), [差数]} & 至ル' ([差数], イクラカ)]”になる。この図からみると、“比べ”の入力とともに、文の全体の構造が決められている。

入力記憶によって文を構成するすべての成分を作りあげることができる。その生成過程は次の図 15 になる。

図 15



論理式は入力記憶によって作成される。まず①で比べ' [α, β, γ1&γ2&γ3]の三項関数とγ2の「量化」が、第二に②でγ1の「格役割」とγ3の「着点」が、第三に③で否定の「~」が決定される。

2.3 現代日本語における最上級比較構文の論理構造と文型意味

ここで、現代日本語における最上級比較構文(三者以上の比較)の文型を以下の三種類に分けて、その論理構造と文型意味を説明する。

2.3.1 「XはY(の中)で一番/最も～だ」

(85) 兄は家族の中で一番背が高い。(庵功雄など 2001)

この文の論理式は次のようになる。

$$\begin{array}{ccccccc}
 \sim\text{ト} & & & & \sim\text{ニ} & \sim\text{ガ} & \\
 (85') \text{ 一番}' & [\text{兄}, \text{兄以外の家族メンバー}^{67}, \text{アル}' (\text{兄}, [\text{身長 } 1])] & \& \\
 \text{アル}' & \sim\text{ハ} & \sim\text{ト} & & & & \\
 & \alpha & \beta & & \gamma 1 & & \\
 & & \sim\text{ニ} & \sim\text{ガ} & & \sim\text{カラ} & \sim\text{ヲ} \\
 \text{アル}' (\text{兄以外の家族メンバー}, [\text{身長 } 2]) & \& \text{アル}' \{\text{引ク}' ([\text{身長 } 1], [\text{身長 } 2]), \\
 & & & & & \sim\text{ガ} & \\
 & & & & & \gamma 2 & \\
 & & \sim\text{ガ} & \sim\text{ニ} & & & \\
 [\text{差数}] & \& \text{至ル}' ([\text{差数}, \text{イクラカ}]) & & & & \\
 \sim\text{ニ} & & & & & & \\
 & & \sim\text{トイウ状態} & & & & \\
 & & \gamma 3 & & & &
 \end{array}$$

ここで、(85')の意味を説明する。この文は「兄は家族の中で一番背が高い」という意味を表し、その複合命題は論理式では「一番' [兄, 兄以外の家族メンバー, アル' (兄, [身長 1]) & アル' (兄以外の家族メンバー, [身長 2]) & アル' {引ク' ([身長 1], [身長 2]), [差数]} & 至ル' ([差数], イクラカ)]」のように表示できる。ここで、この論理式について詳しく説明する。「アル' (兄, [身長 1])」は「兄」には論理形式の要素[身長 1]がある」の意を、「アル' (兄以外の家族メンバー, [身長 2])」は「兄以外の家族メンバー」にも論理形式の要素[身長 2]がある」の意を、「アル' {引ク' ([身長 1], [身長 2]), [差数]} & 至ル' ([差数], イクラカ)」は「[身長 1]から[身長 2]を引くと差がある」の意を表す。用例(85)の意味は前述のすべての命題内容を含んでいることになる。さらに、 $\gamma 1$ は「兄」と「兄以外の家族メンバー」が「経験者格」を、「身長 1」と「身長 2」が「属格(対象格)」を表すので、「格役割」を表示する。 $\gamma 2$ は減法で差があること、つまり「数量化」を表している。 $\gamma 3$ は差がいくらかあること、言い換えれば「差がいくらかの量に達している」こと、つまり一種の「着点」を表している。

67 “兄以外の家族メンバー”の文成分の内部の関係は「兄以外」という項と“家族メンバー”という項には“の”という“関係”がある”ことであり、論理式は“アル(ノ)' {以外' (兄), 家族メンバー}”である。しかし、ここでの論述の中心は比較構文であるため、繁雑になるのを避けてそのまま“兄以外の家族メンバー”と記す。同類の用例も同じである。

この文についてタイプ理論を用いたモデルによって説明してみよう。(85) のタイプ分析は樹形図で簡略表示すると、図 16 となる。

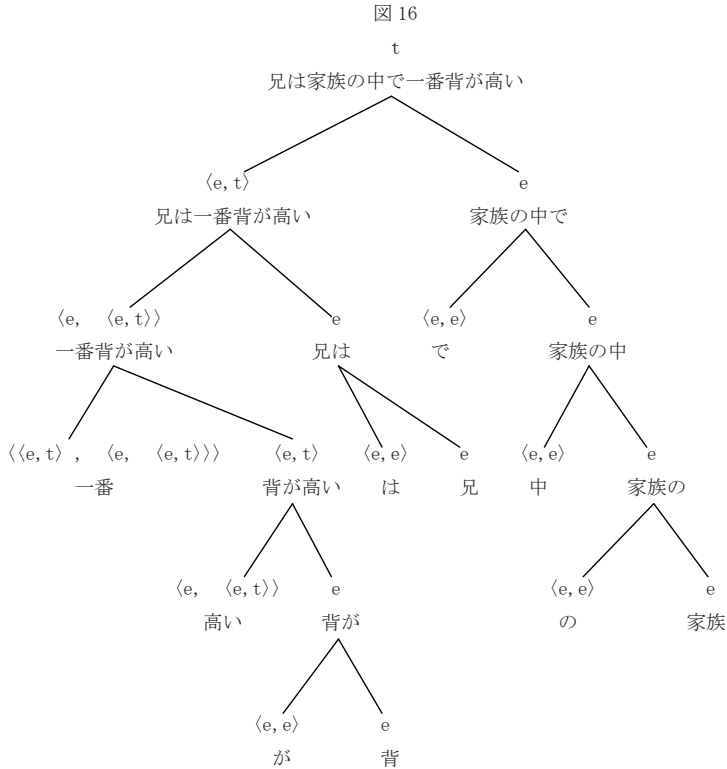
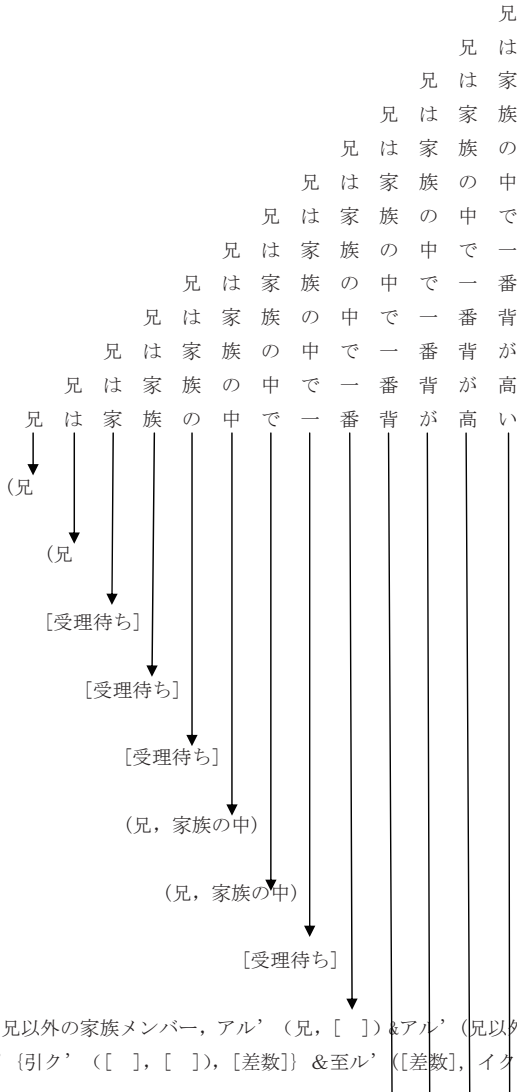


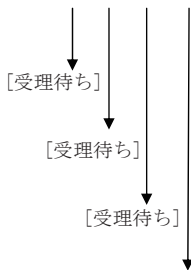
図 16 からみると、“一番” のタイプ式は “<<e, t>, (e, (e, t))>” の三項述語であり、“兄”、“家族” と “背” は個体定項 “e” であり、“は”、“の”、“が” と “中” は複合定項 “<e, e>” であり、“高い” は “<e, (e, t)>” の二項述語である。

この例が示しているように、タイプ式による樹形図は文を構成するすべての要素のタイプを決定できる。

この用例についても、その論理式の成立のプロセスを有限オートマトンと順序論理回路のモデルを用いて説明しておこう。(85)の文の有限オートマトン、順序論理回路、入力記憶に基づいて作成した論理式は次のようになる。

図 17





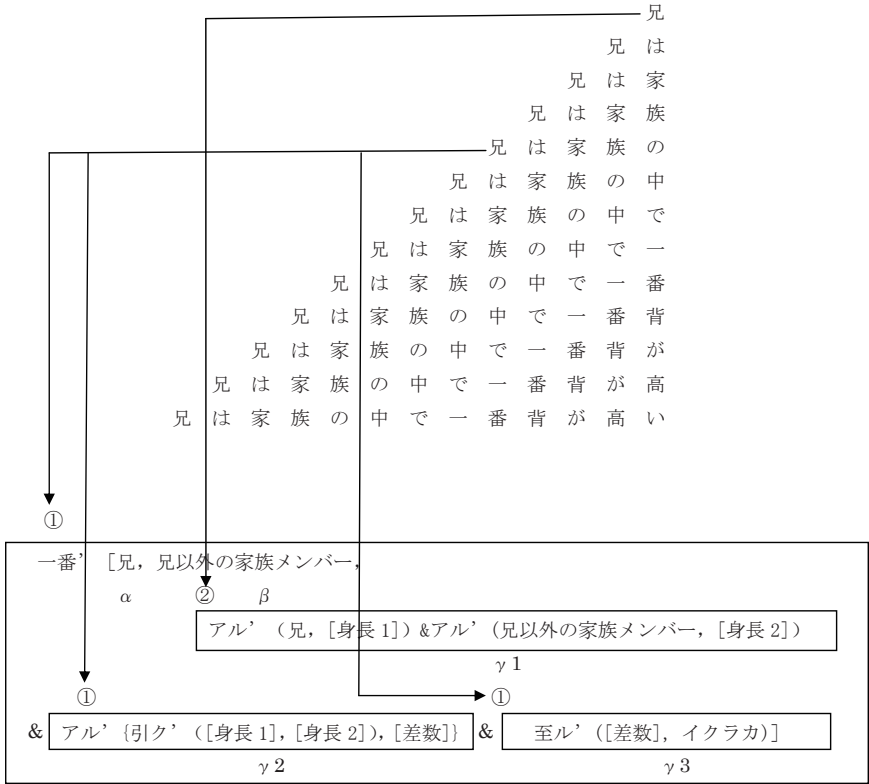
一番' [兄, 兄以外の家族メンバー, アル' (兄, [身長 1]) & アル' (兄以外の家族メンバー, [身長 2]) & アル' {引ク' ([身長 1], [身長 2]), [差数]} & 至ル' ([差数], イクラカ)]

図 17 について説明しよう。まず“兄”を入力し、論理式は“(兄)”になる。第二に“兄は”を入力し、論理式は変わらないが、メタ言語を「～ハ」とする。第三に“兄は家”を、第四に“兄は家族”を、第五に“兄は家族の”を入力し、ずっと“受理待ち”の状態になる。第六に“兄は家族の中”を入力し、論理式は“(兄, 家族の中)”になる。第七に“兄は家族の中”を入力し、論理式は変わらないが、メタ言語を「～デ」とする。第八に“兄は家族の中で”を入力し、ここで“受理待ち”の状態になる。第九に“兄は家族の中で一番”を入力し、ここで論理式は“一番' [兄, 兄以外の家族メンバー, アル' (兄, []) & アル' (兄以外の家族メンバー, []) & アル' {引ク' ([], []), [差数]} & 至ル' ([差数], イクラカ)]”になる。

第十に“兄は家族の中で一番背”を、第十一に“兄は家族の中で一番背が”を、第十二に“兄は家族の中で一番背が高”を入力し、ずっと“受理待ち”になる。最後に“兄は家族の中で一番背が高い”を入力し、文のすべての入力完了する。その論理式は“一番' [兄, 兄以外の家族メンバー, アル' (兄, [身長 1]) & アル' (兄以外の家族メンバー, [身長 2]) & アル' {引ク' ([身長 1], [身長 2]), [差数]} & 至ル' ([差数], イクラカ)]”になる。この図からみると、“一番”の入力とともに、文の全体の構造が決められている。

入力記憶によって文を構成するすべての成分を作りあげることができる。その生成過程は次の図 18 になる。

図 18



論理式は入力記憶によって作成される。まず①で一番' [α, β, γ1&γ2&γ3]の三項関数、γ2の「量化」とγ3の「着点」が、第二に②でγ1の「格役割」が決定される。

2.3.2 「XはY(疑問詞)よりも～」

(86) アジアで中国はどの国よりも広い。(李伟・杨政华 2009)

この文の論理式は次のようになる。

$$\begin{array}{ccccccc}
 \sim\text{ト} & & & & \sim\text{ニ} & \sim\text{ガ} & \\
 (86') \text{ ヨリモ}' & [\text{中国, アジアのどの国, アル}' & (\text{中国, [面積 1]}) & \& \\
 \text{アル}' & \sim\text{ハ} & \sim\text{ト} & & & & \\
 & \alpha & \beta & & \gamma 1 & & \\
 & & \sim\text{ニ} & \sim\text{ガ} & & \sim\text{カラ} & \sim\text{ヲ} \\
 \text{アル}' & (\text{アジアのどの国, [面積 2]}) & \& \text{アル}' & \{\text{引ク}' & ([\text{面積 1}], [\text{面積 2}]), & \\
 & & & & & \sim\text{ガ} & \\
 & & & & & \gamma 2 & \\
 & & \sim\text{ガ} & \sim\text{ニ} & & & \\
 [\text{差数}] & \& \text{至ル}' & ([\text{差数}], \text{イクラカ}) & & & \\
 \sim\text{ニ} & & & & & & \\
 & & \sim\text{トイウ状態ニ} & & & & \\
 & & \gamma 3 & & & &
 \end{array}$$

ここで、(86)の意味を説明する。この文は「アジアで中国はどの国よりも広い」という意味を表し、その複合命題は論理式では「ヨリモ」 [中国, アジアのどの国, アル' (中国, [面積 1]) & アル' (アジアのどの国, [面積 2]) & アル' {引ク' ([面積 1], [面積 2]), [差数]} & 至ル' ([差数], イクラカ)] のように表示できる。ここで、この論理式について詳しく説明する。「アル' (中国, [面積 1])」は「“中国”には論理形式の要素[面積 1]がある」の意を、「アル' (アジアのどの国, [面積 2])」は「“アジアのどの国”にも論理形式の要素[面積 2]がある」の意を、「アル' {引ク' ([面積 1], [面積 2]), [差数]} & 至ル' ([差数], イクラカ)」は「[面積 1]から[面積 2]を引くと差がある」の意を表す。用例(86)の意味は前述のすべての命題内容を含んでいることになる。さらに、 $\gamma 1$ は「中国」と「アジアのどの国」が「経験者格」を、「面積 1」と「面積 2」が「属格(対象格)」を表すので、「格役割」を表示する。 $\gamma 2$ は減法で差があること、つまり「数量化」を表している。 $\gamma 3$ は差がいくらかあること、言い換えれば「差がいくらかの量に達している」こと、つまり一種の「着点」を表している。

この文の副話題としての「アジアのどの国」は「中国以外のアジアのそれぞれの国」の意を表す。言い換えると、例(86)は「“中国”が“中国以外のアジアのそれぞれの国”と[面積]の差がある」の意を表し、つまり「アジアで中国が一番広い」の「最上級」の意を理解することができる。

この文についてタイプ理論を用いたモデルによって説明してみよう。(86) のタイプ分析は樹形図で簡略表示すると、図 19 となる。

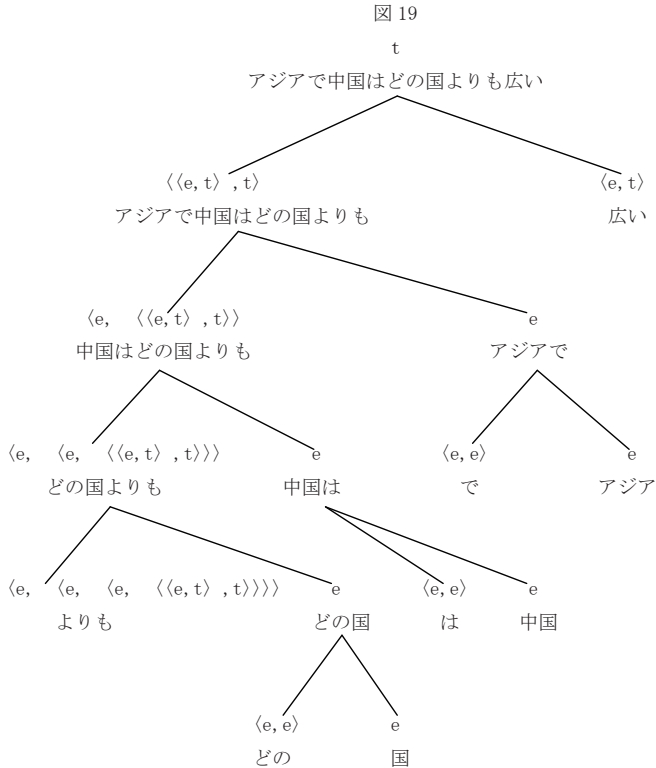
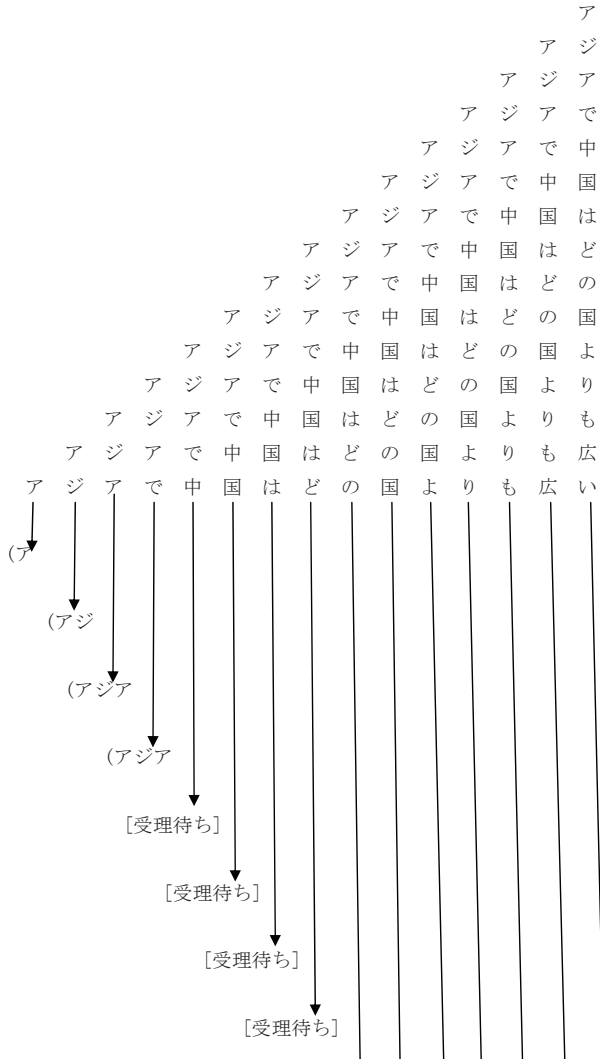


図 19 からみると、“よりも” のタイプ式は “<e, <e, <e, <e, t>, t>>>” の四項述語であり、“中国”、“アジア” と “国” は個体定項 “e” であり、“は”、“で” と “どの” は複合定項 “<e, e>” であり、“広い” は “<e, t>” の一項述語である。

この例が示しているように、タイプ式による樹形図は文を構成するすべての要素のタイプを決定できる。

この用例についても、その論理式の成立のプロセスを有限オートマトンと順序論理回路のモデルを用いて説明しておこう。(86)の文の有限オートマトン、順序論理回路、入力記憶に基づいて作成した論理式は次のようになる。

図 20



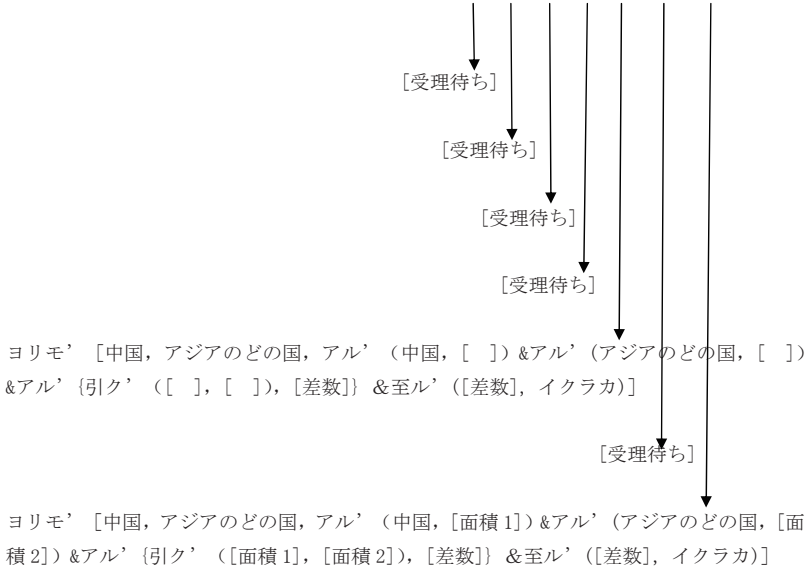


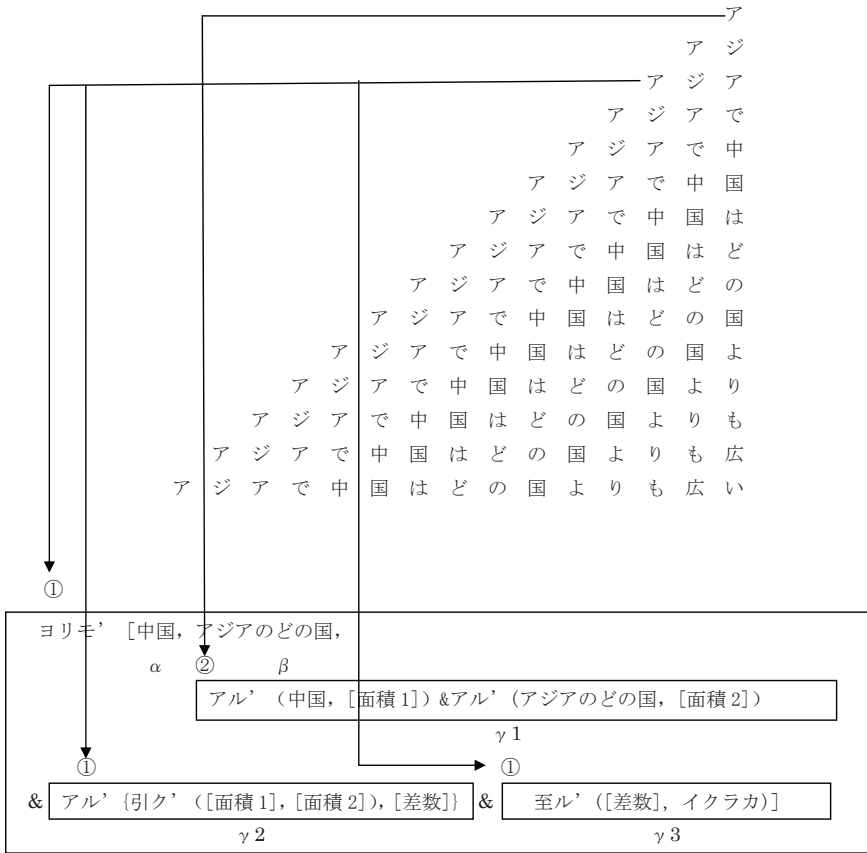
図 20 について説明しよう。まず“ア”を入力し、論理式は“(ア)になる。第二に“アジア”を入力し、論理式は“(アジア)になる。第三に“アジア”を入力し、論理式は“(アジア)になる。第四に“アジアで”を入力し、論理式は変わらないが、メタ言語を「～デ」とする。第五に“アジアで中”を、第六に“アジアで中国”を、第七に“アジアで中国は”を入力し、第八に“アジアで中国はど”を入力し、第九に“アジアで中国はどの”を入力し、第十に“アジアで中国はどの国”を入力し、第十一に“アジアで中国はどの国よ”を入力し、第十二に“アジアで中国はどの国より”を入力し、ずっと“受理待ち”の状態になる。

第十三に“アジアで中国はどの国よりも”を入力し、論理式は“ヨリモ' [中国, アジアのどの国, アル' (中国, []) & アル' (アジアのどの国, []) & アル' {引ク' ([], []), [差数]} & 至ル' ([差数], イクラカ)”になる。第十四に“アジアで中国はどの国よりも広”を入力し、ここで“受理待ち”の状態になる。

最後に“アジアで中国はどの国よりも広い”を入力し、文のすべての入力完了する。その論理式は“ヨリモ' [中国, アジアのどの国, アル' (中国, [面積 1]) & アル' (アジアのどの国, [面積 2]) & アル' {引ク' ([面積 1], [面積 2]), [差数]} & 至ル' ([差数], イクラカ)”になる。この図からみると、“よりも”の入力とともに、文の全体の構造が決められている。

入力記憶によって文を構成するすべての成分を作りあげることができる。その生成過程は次の図 21 になる。

図 21



論理式は入力記憶によって作成される。まず①でヨリモ' [α, β, γ1&γ2&γ3]の三項関数、γ2の「量化」とγ3の「着点」が、第二に②でγ1の「格役割」が決定される。

2.3.3 「X (の中)でYほど～は(い)ない」

(87) このクラスで田中さんほど親切な人はいない。(庵功雄など 2001)

この文の論理式は次のようになる。

$$\begin{array}{c}
 \sim\text{ト} \\
 (87') \text{ホド}' \quad [\text{田中さん以外のクラスメンバー}, \text{田中さん}, \\
 \text{アル} \qquad \qquad \qquad \sim\text{ガ} \qquad \qquad \qquad \sim\text{ト} \\
 \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \alpha \qquad \qquad \qquad \beta \\
 \qquad \qquad \qquad \sim\text{ガ} \qquad \qquad \qquad \sim\text{ニ} \qquad \qquad \qquad \sim\text{ガ} \qquad \qquad \sim\text{ニ} \\
 \text{アル}' \quad (\text{田中さん以外のクラスメンバー}, [\text{親切 1}]) \ \&\text{アル}' \quad (\text{田中さん}, [\text{親切 2}]) \\
 \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \gamma 1 \\
 \qquad \qquad \qquad \sim\text{カラ} \qquad \qquad \qquad \sim\text{ヲ} \\
 \&\text{アル}' \quad \{\text{引ク}' \quad ([\text{親切 1}], [\text{親切 2}]), [\text{差数}]\} \\
 \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \sim\text{ニ} \qquad \qquad \qquad \sim\text{ガ} \\
 \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \gamma 2 \\
 (\text{ナイ}) \qquad \qquad \sim\text{ガ} \qquad \qquad \sim\text{ニ} \\
 \&\sim\text{至ル}' \quad ([\text{差数}], \text{イクラカ}) \\
 \qquad \qquad \qquad \sim\text{トイウ状態ニ} \\
 \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \gamma 3
 \end{array}$$

ここで、(87')の意味を説明しよう。この文の「このクラスで田中さんほど親切な人はいない」という命題内容は論理式では「ホド」 [田中さん以外のクラスメンバー, 田中さん, アル' (田中さん以外のクラスメンバー, [親切 1]) &アル' (田中さん, [親切 2]) &アル' {引ク' ([親切 1], [親切 2]), [差数]} &~至ル' ([差数], イクラカ)] のように表示できる。次に、この論理式について詳しく説明する。「アル' (田中さん以外のクラスメンバー, [親切 1])」は「“田中さん以外のクラスメンバー” には[親切 1]がある」の意を、「アル' (田中さん, [親切 2])」は「“田中さん” には[親切 2]がある」の意を、「アル' {引ク' ([親切 1], [親切 2]), [差数]} &~至ル' ([差数], イクラカ)」は「[親切 1]から[親切 2]を引くと差がある(差が[親切]がイクラカに至るではないの程度になる)」の意を表す。「~」は“至ル' ([差数], イクラカ)”を否定している。

用例(87)の意味は前述のすべての命題内容を含んでいることになる。さらに、 $\gamma 1$ は「田中さん以外のクラスメンバー」と「田中さん」が「経験者格」を、「親切 1」と「親切 2」が「属格(対象格)」を表すので、「格役割」を表示する。 $\gamma 2$ は減法で差があること、つまり「数量化」を表している。 $\gamma 3$ は差がいくらかあること、言い換えれば「差がいくらかの量に達している」こと、つまり一種の「着点」を表している。

なぜ例(87)は「最上級比較」の意を表すのか。その理由は次の通りである。

方立(2000)は量化詞否定規則について、次のように論じている。

(88) 量化詞否定規則: $\forall x \neg \phi(x) \leftrightarrow \neg \exists x \phi(x)$

例: 大家都不喜欢王五。(皆は王五が好きではない。)

∴ 没有人喜欢王五。(王五が好きな人がいない。)(方立 2000: 197)

この“ \forall ”は“普遍量化詞”であり、“すべてのもの(x)”を表す。“ \exists ”は“存在量化詞”であり、“少なくとも一つのもの(x)がある”を表す。

例(88)を説明すると、“有人喜欢王五”の文は論理式で示すと、次のようになる。

「 $\exists x [人'(x) \& \text{喜欢}(x, \text{王五})]$ 」(“至少有一个人喜欢王五(少なくとも一人は王五のことが好きである”)の式になる。この式を否定すると、前に“没有”をつけて

「 $\neg \exists x [人'(x) \& \text{喜欢}(x, \text{王五})]$ 」(“没有人喜欢王五(王五のことを好きな人はいない”)の式になる。この式は、

「 $\forall x [人'(x) \& \neg \text{喜欢}(x, \text{王五})]$ 」(“大家都不喜欢王五(すべての人は王五のことが好きでない”)の式と等値である。

量化詞否定規則を例(87)に適用すると、

(89) $\neg \exists x \phi(x) \leftrightarrow \forall x \neg \phi(x)$

「このクラスで田中さんほど親切な人がいる。」という文の形式的な否定は「このクラスで田中さんほど親切な人はいない」となる。

「このクラスで田中さんほど親切な人はいない。」この文は言い換えると「このクラスにいる田中さん以外の全員が田中さんより親切でない。」ようになる。この二つの否定文をよく考えてみると、前者の“存在量化詞”を持つ文に対する否定と後者の“普遍量化詞”を持つ文の“着点”の部分に対する否定は同じである。つまり、“このクラスで田中さんほど親切な人はいない”の文は“このクラスにいる全員が田中さんより親切でない”と等値であり、つまり“田中さんが一番親切である”という「最上級比較」の意味を表している。

従って、筆者は例(87)の論理構造を(87')のように分析したのである。

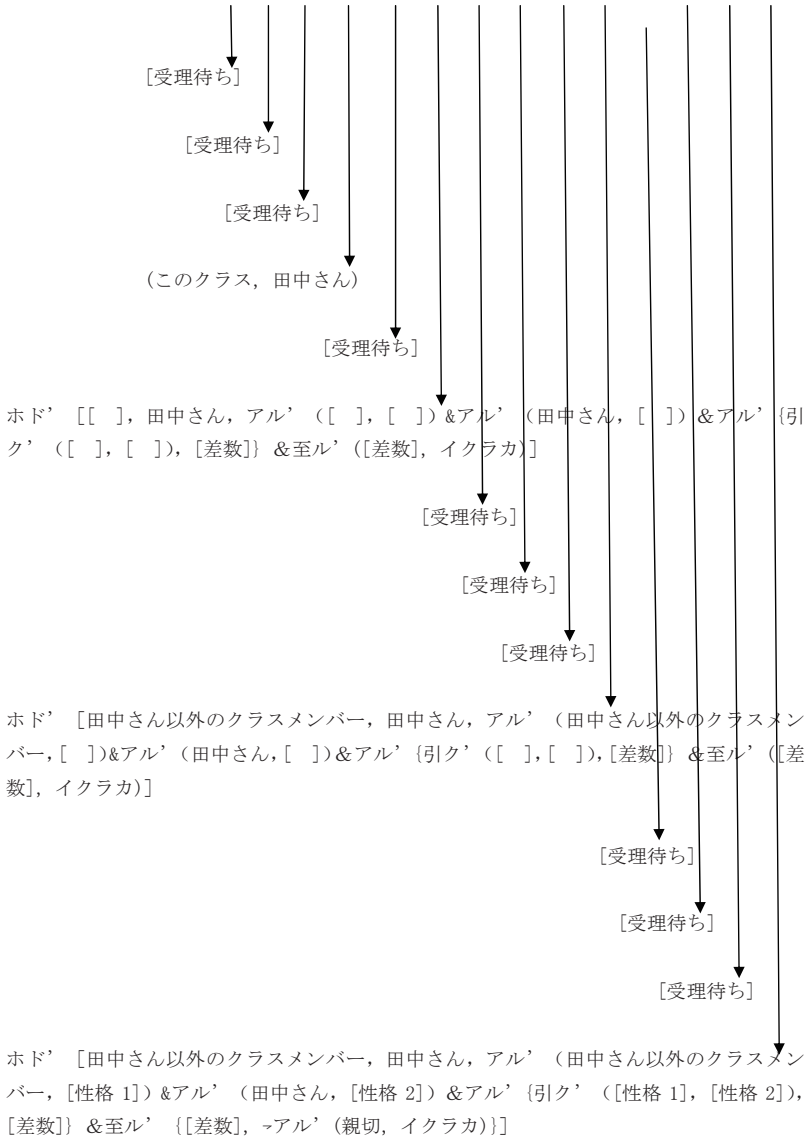


図 23 について説明しよう。まず“こ”を入力し、論理式は“(こ)になる。第二に“この”を入力し、論理式は“(この)”になる。第三に“このク”を入力し、論理式は“(このク”

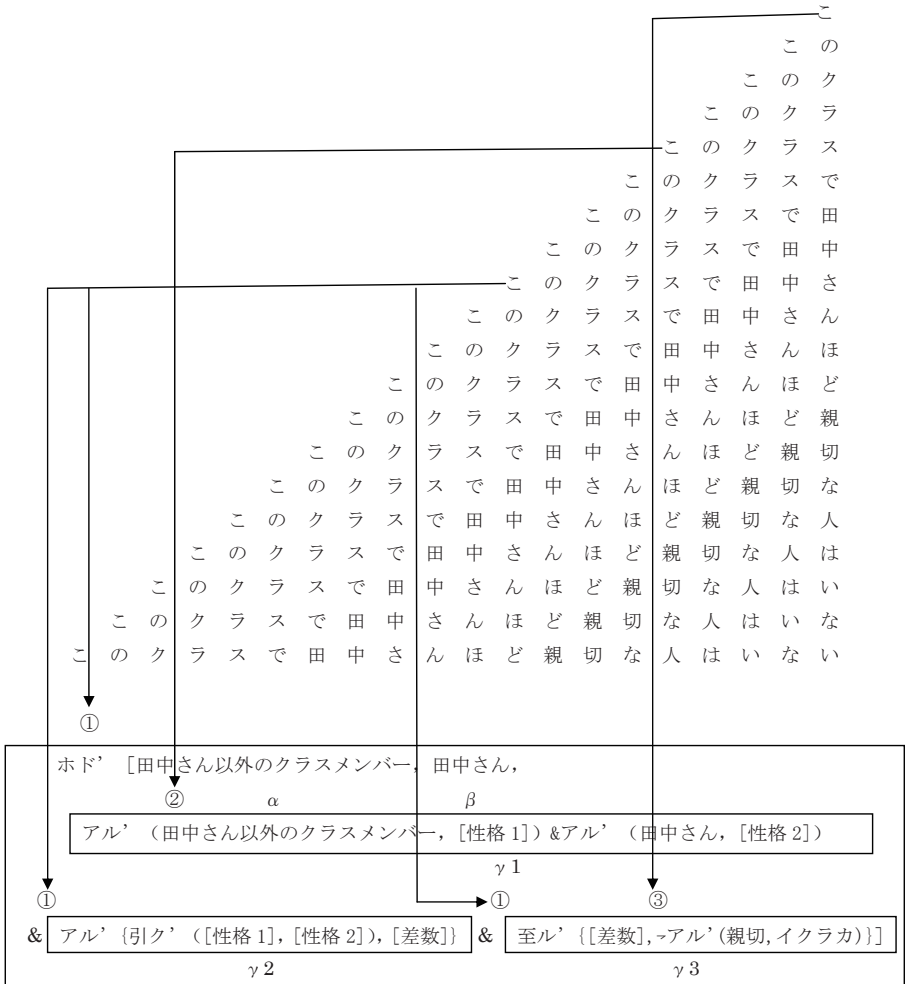
になる。第四に“このクラ”を入力し、論理式は“(このクラ)になる。第五に“このクラス”を入力し、論理式は“(このクラス)になる。第六に“このクラスで”を入力し、論理式は変わらないが、メタ言語を「～デ」とする。第七に“このクラスで田”を、第八に“このクラスで田中”を、第九に“このクラスで田中さ”を入力し、ずっと“受理待ち”の状態になる。第十に“このクラスで田中さん”を入力し、ここで論理式は“(このクラス, 田中さん)”になる。

第十一に“このクラスで田中さんほ”を入力し、ここで“受理待ち”になる。第十二に“このクラスで田中さんほど”を入力し、論理式は“ホド’ [[], 田中さん, アル’ ([], []) &アル’ (田中さん, []) &アル’ {引ク’ ([], []), [差数]} &至ル’ ([差数], イクラカ)]”になる。第十三に“このクラスで田中さんほど親”を、第十四に“このクラスで田中さんほど親切”を、第十五に“このクラスで田中さんほど親切な”を入力し、ずっと“受理待ち”になる。第十六に“このクラスで田中さんほど親切な人”を入力し、論理式は“ホド’ [田中さん以外のクラスメンバー, 田中さん, アル’ (田中さん以外のクラスメンバー, []) &アル’ (田中さん, []) &アル’ {引ク’ ([], []), [差数]} &至ル’ ([差数], イクラカ)]”になる。

第十七に“このクラスで田中さんほど親切な人は”を、第十八に“このクラスで田中さんほど親切な人はい”を、第十九に“このクラスで田中さんほど親切な人はいな”を入力し、ずっと“受理待ち”になる。最後に“このクラスで田中さんほど親切な人はいない”を入力し、文のすべての入力完了する。その論理式は“ホド’ [田中さん以外のクラスメンバー, 田中さん, アル’ (田中さん以外のクラスメンバー, [性格 1]) &アル’ (田中さん, [性格 2]) &アル’ {引ク’ ([性格 1], [性格 2]), [差数]} &至ル’ ([差数], アル’ (親切, イクラカ)))]”になる。この図からみると、“ほど”の入力とともに、文の全体の構造が決められている。

入力記憶によって文を構成するすべての成分を作りあげることができる。その生成過程は次の図 24 になる。

図 24



論理式は入力記憶によって作成される。まず①でホド' [α , β , $\gamma 1$ & $\gamma 2$ & $\gamma 3$]の三項関数、 $\gamma 2$ の「量化」と $\gamma 3$ の「着点」が、第二に②で $\gamma 1$ の「格役割」が、第三に③で否定「 \neg 」が決定される。

3. まとめ(五)

本章の先行研究により、現代日本語における比較構文の種類と文型をまとめて表で表示すると、次の図 25 になる。

図 25

研究者	比較する種類		比較する文型		
			肯定表現	否定表現	
友清睦子・ 鈴木雅実 (1992)	二者比較		～は～より～	*	
	三者以上の比較		～一番～	*	
	程度の比較		～の方が～	*	
	量の比較		～は～の方が～	*	
	状況の比較		～より～方が～	*	
庵功雄など (2000・2001)	二つの事物を比較する表現		AはBよりPだ	AはBほど ～ない	
			AはBと同じぐらい Pだ	*	
	三つ以上の事物を比較する表現		XはYで {最も/一番} Pだ	*	
			XほどYはいない	*	
	基準・標準と比較する表現		PにしてはQ	*	
Pわりに(は)Q			*		
野田時寛 (2001)	単文	二つのものの比較	一つを主題として	Aは～	BはAほど ～ない
			一つを焦点として	Aのほうが	×
		同程度比較		AはBと同じくらい	*
				AはBくらい	
	三者以上のものの比較		AとBとC(とD・・・)の中/うちで	*	
			AはBくらい		
	複文	～ほうが		AよりBのほうが～	Aは、Bほど ～ない
		主題として		AはBより	
どちら		～の/こと～どちら/ どっち			
同程度比較		～の/こと は ～ の/ことと同じくらい～			

安達太郎 (2001)	典型的な比較構文		XよりY(の方が)P	*	
	比較述語を持たない比較構文		VよりV	*	
			NよりV	*	
	名詞の役割による	名詞の意味関係による比較構文	原因理由	XはYよりP	*
			目的		
			方向		
		資格			
	名詞の値の比較	指定文	XよりPだ	*	
		制限的連体修飾節			
	非典型的な比較構文		YはX以上にP	*	
			XするくらいならYする方がP	*	
			XというよりY	*	
	副詞「より」による比較構文		より[述語]	*	
[より 副詞]述語			*		
[より 述語]主名詞			*		

森山卓郎 (2004)	両者間での有差比較	XはYより～	?
		Xの方がYより～	?
		(Xは～が、)Yは{もう少し/より/さらに/もっと/遥かに}～	×
		XとYでは、Xの方が～	XとYでは、Yの方が～ ない
		Xに比べ、Yは～	Xに比べ、Yは～ ない
	両者間での同程度比較	XはYほど～	×
		XはYと同じくらい～	XはYほど～ はない
		Xの～はYと同じくらいだ	XはYと同じくらい～ ない
	三者以上の最上級比較	XではYが{最も/一番}～	×
		X{ほど/より}～Yはない	×

(* : 論じていない、? : 疑問がある、× : 待たない)

本章で、現代日本語における「平等比較構文(同程度比較)」、「差異比較構文(二者間の有差比較)」と「最上級比較構文(三者以上の比較)」の三種類に分けてそれぞれの論理構造と意味を考察した。表で表示すると、次のようになる。

図 26

比較種類	論理構造	意味
平等比較構文 (同程度比較)	$\alpha, \beta, \text{アル'}(\alpha, [\text{論理形式 1}])$ $\&\text{アル'}(\beta, [\text{論理形式 2}]) \&\text{アル'}\{\gamma 1\}'([\text{論理形式 1}], [\text{論理形式 2}]), [\text{差数}] \&\text{至ル}'([\text{差数}], \text{ゼロ})]$	α と β は差がないこと
差異比較構文 (二者間の有差比較)	$\alpha, \beta, \text{アル'}(\alpha, [\text{論理形式 1}])$ $\&\text{アル'}(\beta, [\text{論理形式 2}]) \&\text{アル'}\{\gamma 1\}'([\text{論理形式 1}], [\text{論理形式 2}]), [\text{差数}] \&\text{至ル}'([\text{差数}], \text{イクラカ})]$	α と β は差があること
最上級比較構文 (三者以上の比較)	$\alpha, \alpha \text{ 以外のすべて}, \text{アル'}(\alpha, [\text{論理形式 1}]) \&\text{アル'}(\alpha \text{ 以外のすべて}, [\text{論理形式 2}]) \&\text{アル'}\{\gamma 1\}'([\text{論理形式 1}], [\text{論理形式 2}]), [\text{差数}] \&\text{至ル}'([\text{差数}], \text{イクラカ})]$	α と α 以外のすべては差があること

図 26 からみると、現代日本語の平等比較構文(同程度比較)の論理構造は「平等比較詞」 $[\alpha, \beta, \text{アル'}(\alpha, [\text{論理形式 1}]) \&\text{アル'}(\beta, [\text{論理形式 2}]) \&\text{アル'}\{\gamma 1\}'([\text{論理形式 1}], [\text{論理形式 2}]), [\text{差数}] \&\text{至ル}'([\text{差数}], \text{ゼロ})]$ であり、「 α と β は差がないこと」を表す。差異比較構文(二者間の有差比較)の論理構造は「差異比較詞」 $[\alpha, \beta, \text{アル'}(\alpha, [\text{論理形式 1}]) \&\text{アル'}(\beta, [\text{論理形式 2}]) \&\text{アル'}\{\gamma 1\}'([\text{論理形式 1}], [\text{論理形式 2}]), [\text{差数}] \&\text{至ル}'([\text{差数}], \text{イクラカ})]$ であり、「 α と β は差があること」の意を表す。最上級比較構文(三者以上の比較)の論理構造は「最上級比較詞」 $[\alpha, \alpha \text{ 以外のすべて}, \text{アル'}(\alpha, [\text{論理形式 1}]) \&\text{アル'}(\alpha \text{ 以外のすべて}, [\text{論理形式 2}]) \&\text{アル'}\{\gamma 1\}'([\text{論理形式 1}], [\text{論理形式 2}]), [\text{差数}] \&\text{至ル}'([\text{差数}], \text{イクラカ})]$ であり、「 α と α 以外のすべては差があること」の意を表す。現代日本語によるこの三種の比較構文は同構造(「比較詞」 $[\alpha, \beta, \gamma 1 \& \gamma 2 \& \gamma 3]$)によって分析できる。その区別は $\gamma 3$ と β の部分に決められる。平等比較構文(同程度比較)の $\gamma 3$ の部分は「 $[\text{差数}] \text{ガゼロニ至ル}'$ 」であり、差異比較構文(二者間の有差比較)の $\gamma 3$ の部分

は「[差数]ガイクラカニ至ル」であり、最上級比較構文(三者以上の比較)の β の部分は「 α 以外のすべて」の構造である。

ここで、「兄は母より背が高い(庵功雄 2000)」の文を例に、比較構文の統語構造と論理構造の関連を説明する。

[統語構造]: 兄は 母 より 背が 高。
 X Y P D W
 ↓ ↓ ↓ ↓ ↓
 「比較主体」「比較客体」「比較詞」「比較点」「比較値」

[論理構造]: ヨリ' [兄, 母, アル' (兄, [身長 1]) & アル' (母, [身長 2]) & アル' (引く' ([身長 1], [身長 2]), [差数]) & 至ル' ([差数], イクラカ)]

統語構造の各成分のアルファベット表示を論理構造に入れ替えると、次のようになる。
 P' [X, Y, アル' (X, [D1]) & アル' (Y, [D2]) & アル' {引く' ([D1], [D2]), [(W)差数]} & 至ル' ([(W)差数], イクラカ)]

ここから、比較構文の論理的意味は「“比較主体”が“比較客体”と“比較点”についての“比較値”の“差数”が「いくらか(多少)」になるという状態にある」という意味である(論理表記においては、“比較値”はよく省略される。)となる。

次に、比較構文を文つまり命題表現から直接論理表記をする翻訳過程について説明する。

[翻訳の対象]: 兄は母より背が高い

[翻訳の順序]: より、兄は、母、背が、高い

まず、最初に“ヨリ”の関数式を明らかにしておこう。次のようになる。この関数式を(a)とする。

(a) $\lambda P [P' [X, Y, \text{アル}' (X, [D1]) \& \text{アル}' (Y, [D2]) \& \text{アル}' \{\text{引く}' ([D1], [D2]), [(W)差数]\} \& \text{至ル}' ([(W)差数], \text{イクラカ})]$

これから翻訳してみよう。第一のプロセスとして、語彙の“ヨリ”が式(a)を呼び出す。これを次のように表記する。(b)の式は“ヨリ”が(a)の式を呼び出していることを示している。

(b) $\lambda P [P' [X, Y, \text{ヨリ}' (X, [D1]) \& \text{アル}' (Y, [D2]) \& \text{アル}' \{\text{引く}' ([D1], [D2]), [(W)差数]\} \& \text{至ル}' ([(W)差数], \text{イクラカ})] (\text{ヨリ}')$

第二プロセスとして、式(b)にラムダ演算を施すと、P' に“ヨリ”が代入され、 λP が消去されて次のような式が得られる。これを式(c)とする。

(c) ヨリ' [X, Y, アル' (X, [D1]) &アル' (Y, [D2]) &アル' {引ク' ([D1], [D2]), [(W)差数]} &至ル' ([(W)差数], イクラカ)]

今度はX、Yという変項を計算しなければならないので、式(c)をもとに、新しいラムダ関数を作り出す。それが次の(d)になる。

(d) $\lambda X \lambda Y$ [ヨリ' [X, Y, アル' (X, [D1]) &アル' (Y, [D2]) &アル' {引ク' ([D1], [D2]), [(W)差数]} &至ル' ([(W)差数], イクラカ)]]

ここで、“兄”が式(d)を呼び出す。その結果、次の式(e)が得られる。

(e) $\lambda X \lambda Y$ [ヨリ' [X, Y, アル' (X, [D1]) &アル' (Y, [D2]) &アル' {引ク' ([D1], [D2]), [(W)差数]} &至ル' ([(W)差数], イクラカ)]](兄)

(e)の式に λ 演算を施すと、実引数の“兄”がXに代入され、 λX が消去されて次の(f)になる。

(f) λY [ヨリ' [兄, Y, アル' (兄, [D1]) &アル' (Y, [D2]) &アル' {引ク' ([D1], [D2]), [(W)差数]} &至ル' ([(W)差数], イクラカ)]]

次に、“母”が式(f)を呼び出す。すると、関数適用の結果、次の(g)のような演算式が得られる。

(g) λY [ヨリ' [兄, Y, アル' (兄, [D1]) &アル' (Y, [D2]) &アル' {引ク' ([D1], [D2]), [(W)差数]} &至ル' ([(W)差数], イクラカ)]](母)

(g)の式にラムダ演算を施すと、次の(h)となる。

(h) ヨリ' [兄, 母, アル' (兄, [D1]) &アル' (母, [D2]) &アル' {引ク' ([D1], [D2]), [(W)差数]} &至ル' ([(W)差数], イクラカ)]

さらに、D、Wという変項を計算しなければならないので、式(h)をもとに、新しいラムダ関数を作り出す。それが次の(i)になる。

(i) $\lambda D \lambda W$ [ヨリ' [兄, 母, アル' (兄, [D1]) &アル' (母, [D2]) &アル' {引ク' ([D1], [D2]), [(W)差数]} &至ル' ([(W)差数], イクラカ)]]

ここで、“身長”が式(i)を呼び出す。その結果次の式(j)が得られる。

(j) $\lambda D \lambda W$ [ヨリ' [兄, 母, アル' (兄, [D1]) &アル' (母, [D2]) &アル' {引ク' ([D1], [D2]), [(W)差数]} &至ル' ([(W)差数], イクラカ)]](身長)

(j)の式に λ 演算を施すと、実引数の“身長”がDに代入され、 λD が消去されて次の(k)になる。

(k) λW [ヨリ' [兄, 母, アル' (兄, [身長 1]) &アル' (母, [身長 2]) &アル' {引ク' ([身長 1], [身長 2]), [(W)差数]} &至ル' ([(W)差数], イクラカ)]]

最後に、“高い”が式(k)を呼び出す。すると、関数適用の結果、次の(1)のような演算式が得られる。

(1) λW [ヨリ' [兄, 母, アル' (兄, [身長 1]) &アル' (母, [身長 2]) &アル' {引ク' ([身長 1], [身長 2]), [(W)差数]} &至ル' ([(W)差数], イクラカ)]](高い)

(1)の式にラムダ演算を施すと、次の(m)となって、“兄は母より背が高い”の論理式が得られる。

(m) ヨリ' [兄, 母, アル' (兄, [身長 1]) &アル' (母, [身長 2]) &アル' {引ク' ([身長 1], [身長 2]), [(高い)差数]} &至ル' ([(高い)差数], イクラカ)]]

第六章 総まとめ

1. 現代中国語と現代日本語における比較構文の比較対照

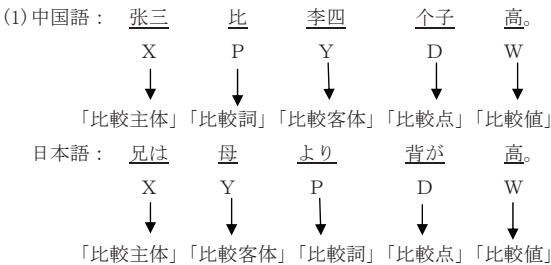
本章で、第一章から第五章の研究に基づき、現代中国語における比較構文と現代日本語における比較構文との共通点と相違点をとりあげたい。

まず、現代中国語における比較構文と現代日本語における比較構文の文型と構造をまとめると、後掲の図1になる。

1.1 共通点

1.1.1 構成成分について

文全体からみると、現代中国語と日本語の比較構文は「比較主体」、「比較客体」、「比較詞」、「比較点」と「比較値」の五つの基本成分を持たなければならない(文脈により省略される場合がある)。たとえば、



1.1.2 比較範疇について

比較範疇からみると、現代中国語と日本語の比較構文は両方とも「平等比較構文」、「差異比較構文」と「最上級比較構文」に分けられる。例をあげると、次のようになる。

図 2

言語 比較範疇 用例	中国語	日本語
平等比較構文	张三 <u>跟</u> 李四 <u>一样</u> 聪明	鈴木さんは林さん <u>と同じ</u> ぐらい頭がいい
差異比較構文	张三 <u>比</u> 李四聪明	田中さんは林さん <u>より</u> 頭がいい
最上級比較構文	班里张三 <u>最</u> 聪明	富士山は日本で <u>一番</u> 高い山です。

1.1.3 論理構造と意味について

前述の論理分析からみると、現代中国語と日本語における「平等比較構文」、「差異比較構文」と「最上級比較構文」の論理構造と意味は同じである。表でまとめると、次のよう

になる。

図 3

言語 比較範疇 論理構造	中国語	日本語	意味
平等比較構文	平等比較詞'[α , β , 有' (α , [論理形式 1]) & 有' (β , [論理形式 2]) & 有'減'([論理形式 1], [論理形式 2]), [差数]} & 到'([差数], 零)]	平等比較詞'[α , β , アル' (α , [論理形式 1]) & アル' (β , [論理形式 2]) & アル'引'ク'([論理形式 1], [論理形式 2]), [差数]} & 至ル'([差数], ゼロ)]	α と β は 差がない こと
差異比較構文	差異比較詞'[α , β , 有' (α , [論理形式 1]) & 有' (β , [論理形式 2]) & 有'減'([論理形式 1], [論理形式 2]), [差数]} & 到'([差数], 多少)]	差異比較詞'[α , β , アル' (α , [論理形式 1]) & アル' (β , [論理形式 2]) & アル'引'ク'([論理形式 1], [論理形式 2]), [差数]} & 至ル'([差数], イクラカ)]	α と β は 差がある こと
最上級比較構文	最上級比較詞'[α , α 以外の全部, 有' (α , [論理形式 1]) & 有' (β , [論理形式 2]) & 有'減'([論理形式 1], [論理形式 2]), [差数]} & 到'([差数], 多少)]	最上級比較詞'[α , α 以外のすべて, アル' (α , [論理形式 1]) & アル' (β , [論理形式 2]) & アル'引'ク'([論理形式 1], [論理形式 2]), [差数]} & 至ル'([差数], イクラカ)]	α と α 以 外のすべ ては差が あること

図 3 からみると、現代中国語と日本語における比較構文は両方とも「三項関数」に属する。具体的表示は「比較詞' (α , β , γ_1 & γ_2 & γ_3)」になる。この α は「比較主体(話題)」であり、 β は「比較客体(副話題)」であり、 γ_1 は「格役割」を表し、 γ_2 は「数量化」を表し、 γ_3 は「着点」を表す。 γ_1 、 γ_2 と γ_3 は γ からの拡張と考える。従って、比較構文の論理式は「拡張三項関数」と言ってもよい。

平等比較を表す構文について、中国語と日本語は両方とも「 α と β は差がないこと」を表す。たとえば、

この文は「張三」ガ「張三以外の同学」ト「聡明」の差ガアル」の意を表す。

(7) 日本語：富士山は日本で一番高い山です。

この文の論理式は：

$$\begin{array}{ccccccc}
 \sim\text{ト} & & & & \sim\text{ニ} & \sim\text{ガ} & \\
 \text{一番}' & \text{[富士山, 富士山以外の日本の山, アル}' & \text{(富士山, [高度 1])} & \& & & \\
 \text{アル} & \sim\text{ハ} & \sim\text{ト} & & & & \\
 & \alpha & \beta & & \gamma 1 & & \\
 & & \sim\text{ニ} & \sim\text{ガ} & \sim\text{カラ} & \sim\text{ヲ} & \\
 \text{アル}' & \text{(富士山以外の日本の山, [高度 2])} & \& \text{アル}' & \text{'引ク' ([高度 1], [高度 2]),} & & \\
 & & & & \sim\text{ガ} & & \\
 & & & & & & \gamma 2 \\
 & & \sim\text{ガ} & \sim\text{ニ} & & & \\
 & \text{[差数]} & \& \text{至ル}' & \text{([差数], イクラカ)} & & \\
 \sim\text{ニ} & & & & & & \\
 & & & \sim\text{トイウ状態ニ} & & & \\
 & & & \gamma 3 & & &
 \end{array}$$

この文は「富士山」ガ「富士山以外の日本の山」ト「高度」の差ガアル」の意を表す。

1.1.4 比較詞の役割について

タイプ理論を用いた分析および有限オートマトンと順序論理回路のモデルを用いる論理式の成立のプロセスの分析により、現代中国語と日本語における比較構文が用いる「比較詞（“比”、“より”など）」は品詞からみると「前置詞」、「後置詞」や「副詞」であるが、実際は「動詞」の役割を担っている。文の入力記憶からみると、「比較詞」は文の中心であり、「比較詞」の現れとともに、文全体の構造が決められる。

中国語における比較構文と日本語における比較構文は以上の共通性をもつ。これらの共通点は日本語と中国語だけの共通点ではなくて、世界のほとんどの言語の共通点である可能性もある。

1.2 相違点

現代中国語と日本語の両言語の比較標識は位置と語順が異なる。

中国語はシナ・チベット語族に属する言語で、「現存する世界最古の言語」である。中国語の特徴は声調を持ち、孤立語で、単音節言語であることが挙げられる。「孤立語」とは、言語の形態論上の、古典的類型論における分類のひとつである。孤立語に分類される言語は、単語に接頭辞や接尾辞のような形態素を付着（膠着）させたり、語頭や語尾などの形を変化（屈折）させたりすることがない。日本語の系統は明らかでなく、解明される目途も立っていない。いくつかの仮説があるが、いまだ総意を得るに至っていない。アルタイ諸語に属するとする説は、明治時代末から特に注目されてきた。その根拠として、古代の日本語（大和言葉）において語頭に r 音（流音）が立たないこと、一種の母音調和がみられることなどが挙げられる。ただし、アルタイ諸語に属するとされるそれぞれの言語自体、互いの姉妹関係が証明されているわけではなく、したがって、古代日本語に上記の特徴がみられることは、日本語が類型として「アルタイ型」の言語であるという以上の意味をもたない。日本語の特徴は膠着語で、ある単語に接頭辞や接尾辞のような形態素を付着させることで、その単語の文の中での文法関係を示すことである。

文法的関係は語順などによって示される特徴をもつ。中国語の語素の大部分は単音節で、多音節の語素は非常に少ない。一つの単音節の語素は、文字の上では漢字一字で書き表わされる。語素の一段上の単位が単語である。単語と単語が一定の規則に従って結合し、一定の意味を表すものが連語である。連語は独立した文ともなるし、また文の一部としても用いられる。例えば、「他来了（彼が来た）」は一つの文でもあり、また「我知道他来了（私は彼が来たことを知っている）」の中では、文の一部であって、「知道」の目的語である。文とは、相対的にまとまった意味があるし、一定の語調をもち、前後にやや大きなポーズをおく言語単位である。文は連語によって構成され、長いものも短いものもあり、最短の文は単語一つで成り立っている。例えば、「你去不去？（あなたは行くか）」「去。（行く）」の「去（行く）」は単語一つで文でもある。中国語の語順は「S（主語）+ V（述語）+ O（賓語-目的語）」である。例えば、「我去学校。（私は学校へ行く）」の文の主語は「我」で、述語は「去」で、賓語（目的語）は「学校」である。「你在干什么呢？（何しているの）」の文の主語は「你」で、述語は「干」で、賓語（目的語）は「什么」である。英語で「I read a book.」という語順を SVO 型（主語・動詞・目的語）と称する説明にならうといえ、日本語の文は SOV 型ということになる。もっとも、厳密にいえば、英語の文に動詞が必須であるのに対して、日本語文は動詞で終わることもあれば、形容詞や名詞+助動詞で終わることもある。そこで、日本語文の基本的な構造は、「S（主語 subject）- V（動詞 verb）」というよりは、「S（主語）- P（述語 predicate）」という「主述構造」と考えるほうが、より適当である。日中両言語の語順の特徴からみると、中国語の前置詞は体言の前、日本語の格助詞は体言の後ろに位置する理由も明らかに分かってくる。これも日中両言語の相違点である。

中国語は前置詞型言語であり、日本語は後置詞型言語である。その特徴は次のようである。

(8) SVO (中国語) : 前置詞(比較標識) + 基準名詞 + 形容詞

SOV (日本語) : 基準名詞 + 後置詞(比較標識) + 形容詞

従って、現代中国語における比較構文と日本語における比較構文の文型は形式上違があるが、その対応する関係は次の図4の通りになっている。

図4

比較範疇	中国語の主な文型		日本語の主な文型	
	肯定表現	否定表現	肯定表現	否定表現
平等比較	X + 跟/像/和/同 + Y + 一样 + 形容詞	X + 跟/像/和/同 + Y + 不一样 + 形容詞	XはYと同じくらい + 形容詞	XはYと同じくらい + 形容詞 + ない
	X + 有 + Y + 这么/那么 + 形容詞	X + 没有 + Y + 这么/那么 + 形容詞	XはYほど + 形容詞	XはYほど + 形容詞 + はない
差異比較	X + 比 + Y + (还/更) + 形容詞	X + 不 + 比 + Y + (还/更) + 形容詞	XはYより(もっと) + 形容詞	AはBほど + 形容詞 + ない
			Xの方がYより + 形容詞	
最上級比較	(在(…里/中) X + 最 + 形容詞		XはY(の中で) {最も/一番} + 形容詞	
	X + 比 + Y + 都 + 形容詞		XはどのY(疑問詞)よりも + 形容詞	
	(再也) 没有比 + Y + 更/还/再 + (的 + NP) + 了		Yほど～のものはない	

2. 本研究の意義

本研究は先人の研究を踏まえ、中国語と日本語における比較構文の文型意味を内包論理により考察した。用いた研究方法は次の三つである。

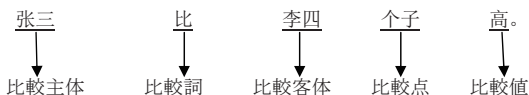
(一)形式意味論を用いた論理式の分析

(二)タイプ理論を用いたモデル分析

(三)論理式の成立のプロセスを有限オートマトンと順序論理回路のモデルを用いて分析

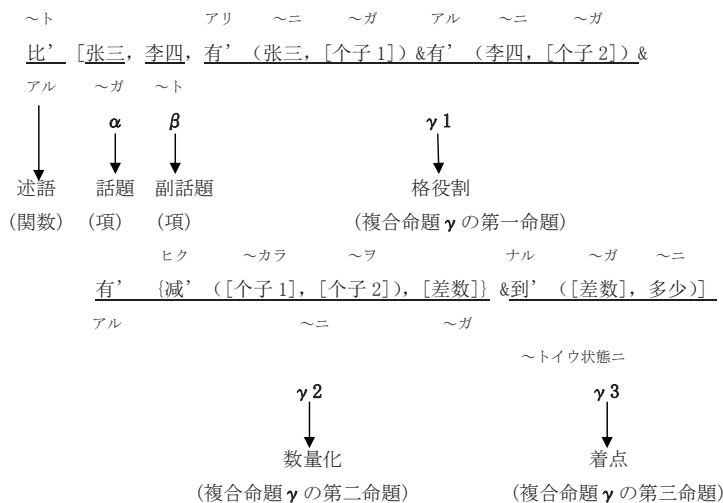
具体的用例の分析を通して、「平等比較構文」、「差異比較構文」と「最上級比較構文」は同じ論理構造によって分析できるという結論を得た。管見の及ぶ限り、類似の研究は現在までまだない。従来の研究はほぼ意味上から、比較構文の文法構造と字面上の意味について論じている。本研究は述語論理の方法を導入し、「三項関数」の論理構造から比較構文の内部構成を説明した。「张三比李四个子高」を例にして説明する。

従来の研究は、



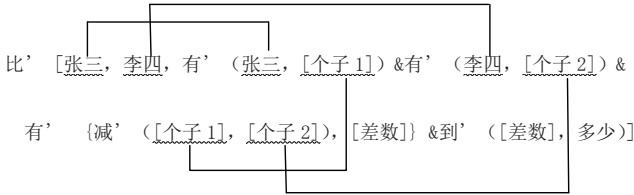
のように分析している。

本研究はその論理構造について、次のように分析した。



本論文で用いた分析方法のメリットは文の字面上だけではなく、より深く人間の頭の中で認識される意味の理解の過程を示している。字面上からみると、“个子”という項は文の上では一回だけ現れているが、実際は人間がこの文を読むときに“个子”という項が論理

式のように四回出ている。まず、「有’（张三，[个子1]）」は「話題“张三”には論理形式[个子1]がある」を読み込む。第二に「有’（李四，[个子2]）」には「副話題“李四”には論理形式[个子2]がある」を読み込む。第三と第四に「有’（減’（[个子1]，[个子2]），[差数]）」には「[个子1]から[个子2]を引くと“差”がある」を読み込む。また、話題の“张三”と副話題の“李四”も二回ずつ現れている。さらに、論理式の各項の結びつき関係は次のようになる。



論理式は、中国語とか日本語に特有の構造ではなく、世界中のすべての自然言語に共通する中間言語であると考えられる。論理式は世界中のすべての言語の文の内部的構造や文成分の結びつきの規則を示しているので、外国語を教えるときにも役立つと考えられる。

3. これからの展望

近年になって、言語学の研究がますます多元化し、新しい理論や新しい方法が次々と現れている。特に、新しい考えのもとで言語類型論という新たな領域が開かれ、一つの言語だけに注目するのではなく、言語の普遍的な性質に対する追及が増えている。本研究は主として中国語における比較構文の論理と意味について考察した。さらに、現代日本語における比較構文の論理と意味にも触れたが、この中にはまだたくさんの解決できなかった問題がある。本研究で解決できなかった問題について今後も研究を進めていきたいと思う。

本研究で解決できなかった問題とは次のようなものがある。

- (一) 中日両言語における比較構文の比較主体と比較客体の成分の省略
 - (二) 中日両言語における比較構文に使用される程度副詞の用法と制限
 - (三) 中国語における“没有”構文と“不比”構文のちがひ
 - (四) 近似する比較詞(“于”と“比”、“跟”と“像”と“和”と“同”など)の比較
 - (五) 現代日本語における「比較構文」と「比喻構文」の区別
- などがある。

あとがき

形式意味論や内包論理についての研究は、博士課程に入ってから、本格的に始めた。実際に始めてみると、たちまち中国語の文法の壁にぶつかった。中国語は母国語なので、話すことは問題ないが、論理構造や意味の研究となると、すぐさま自分の無知があきらかになった。そこで、先生方にお伺いしたり、本を読みあさったりして、何とか自信をつけ、二年半くらいで学位請求論文を出すことができた。

今思えば、先生方の熱心なご指導や、専門書を調べるための親切なお導きがなければ、これほどスムーズには来られなかったであろう。ここで、指導教授の松村文芳先生に厚く御礼申し上げたい。また、中国語学科の加藤宏紀先生、彭国耀先生、大里浩秋先生、山口建治先生、鈴木陽一先生、孫安石先生にも御礼を申し上げたい。日本語の研究現状などについて、いろいろご指導をくださった駒走昭二先生、名桜大学の内間直人先生にも御礼を申し上げたい。そして、3年あまり、お世話になった神奈川大学、神奈川大学大学院の諸先生方、神奈川大学大学院の教務と庶務の方、一緒に勉強してきた学友にも、心から感謝の意を表したい。

参考文献

(一)中国語関係の参考文献

- (1) 包华莉 1993 「“比”字句删除法的商榷」『语文研究』1993(1): 29—36
- (2) 车 竞 2005 「现代汉语比较句论略」『湖北师范学院学报』2005(3): 60—63
- (3) 储泽祥等 1999 「通比性的“很”字结构」『世界汉语教学』(1): 36—44
- (4) 丁声树 1961 『现代汉语语法讲话』北京商务印书馆
- (5) 方立 2000 『逻辑语义学』北京语言大学出版社
- (6) 房玉清 1992 『实用汉语语法』北京语言学院出版社
- (7) 冯春田 2000 『近代汉语语法研究』山东教育出版社
- (8) 高名凯 1985 『汉语语法论』商务印书馆
- (9) 贺又宁 2001 「现代汉语比较句的结构特色于语用制约试析」『贵州大学学报(社会科学版)』2001(5)No. 3: 70—74
- (10) 胡斌彬 2005 「现代汉语“比”字句变体的语用研究」『乐山师范学院学报』2005(2): 70—72
— — 2009 「“于”字比较句和“比”字句的差别」『湖南文理学院学报(社会科学版)』2009(34)No. 6: 115—118
- (11) 黄晓惠 1992 「现代汉语差比格式的来源及演变」『中国语文』1992(3): 213—224
- (12) 蒋绍愚·曹广顺 2005 『近代汉语语法史研究综述』商务印书馆
- (13) 来飞燕 2008 「“有”字比较句中的形容词」『绍兴文理学院学报』2008(3): 79—81
- (14) 李成才 1991 「“跟…一样”用法浅谈」『语言教学与研究』1991(2)
- (15) 李剑锋 2000 「“跟X一样”及相关句式考察」『汉语学习』2000(6): 71—76
- (16) 李 杰 2003 「“X比Y还W”格式的语义类型及结构特征」『徐州师范大学学报(哲学社会科学版)』2003(29)NO. 1: 72—74
- (17) 黎锦熙 1992 『新著国语语法』商务印书馆
- (18) 李向农 1999 「再说“跟…一样”及其相关句式」『语言教学与研究』1999(3): 85—96
- (19) 林 艳 2001 「句义结构中“最”的指向」『淮阴师范学院学报(哲学社会科学版)』2001(23): 823—826
- (20) 刘长征 2005 「递及比较句的语义理解及制约因素」『汉语学习』2005(2): 23—30
- (21) 刘大为 2004 「“凡喻必以非类”、“同类作比即比较”的质疑与比喻理论的建构」『修辞学习』2004(2): 13—17
- (22) 刘丹青·徐烈炯 1998 「焦点与背景、话题及汉语“连”字句」『中国语文』1998(4): 243—251
- (23) L. Stassen. 1985 Comparison and Universal Grammar. Basil Blackwell
- (24) 刘苏乔 2002 「表比较的“有”字句浅析」『语言教学与研究』2002(2): 50—55

- (25) 刘焱 2004 『现代汉语比较范畴的语义认知基础』 上海学林出版社
 — — 2004 「“比”字句对比项选择的语义认知基础」 『上海财经大学学报』2004
 (6) No. 5: 76—81
- (26) 刘月华·潘文娉·故鞅 2001 『实用现代汉语语法(增订本)』 商务印书馆
- (27) 刘颖 2000 「现代汉语中几种表示同比较的句式」 『安徽师范大学学报(人文
 社会科学版)』2000(3): 436—440
- (28) 刘振平 2007 「谈“X跟Y一样W”语式的语义预设」 『信阳师范学院学报(哲学社
 会科学版)』2007(27)No. 1: 93—95
- (29) 陆俭明 1980 「“还”和“更”」 北京大学汉语语言学研究中心『语言学论丛』编
 委会编『语言学论丛(第六辑)』 商务印书馆 1980:191-209
 — — 1982 「析“像……似的”」 『语文月刊』1982(1): 1-12
 — — 1981 「“更加”和“越发”」 『语文研究』1981(1): 22—29
- (30) 陆俭明·马真 1985 『现代汉语虚词散论』 北京大学出版社
- (31) 吕叔湘 1990[1942 初稿] 『吕叔湘文集(第一卷)——中国文法要略』 商务印书馆
 — — 1999[1980 初稿] 『现代汉语八百词(增订本)』 商务印书馆
- (32) 马建忠 2007[1898 初稿] 『马氏文通』 商务印书馆
- (33) 马真 1986 「“比”字句内比较项Y的替换规律试探」 『中国语文』1986(1): 97-105
 — — 1988 「程度副词在表示程度比较的句式中的分布情况考察」 『世界汉语教学』
 1988, (2): 81-88.
- (34) Peyraube Alain 1898 History of the Comparative Construction in Chinese from
 the 5th Century B. C. to the 14th Century A. D., Reprinted Proceeding on the Second
 International Conference on Sinology Academia Sinca.
- (35) 任海波 1987 「现代汉语“比”字句结论项的类型」 『语言教育与研究』1987(4):
 91—103
- (36) 邵敬敏 1990 「“比”字句替换规律刍议」 『中国语文』1990(6): 410-415
 — — 1992 「语义对“比”字句中助动词位置的制约」 『汉语学习』1992(3): 13
 —16
- (37) 邵敬敏·刘焱 2002 「比字句强制性语义要求的句法表现」 『汉语学习』2002(10)No. 5
- (38) 沈家煊 2001 「跟副词“还”有关的两个句式」 『中国语文』2001(6): 483—493
- (39) 史荣光 1997 「“X比Y还W”的结构与语义分析—兼与殷志平同志商榷」 『汉字文
 化』1997(1): 17—21
- (40) 史佩信 1993 「比字句溯源」 『中国语文』1993(6): 456—461
- (41) 史有为 1994 「说说“没有我水平低”」 『汉语学习』1994(4): 17—18
- (42) 石毓智·李讷 2001 『汉语语法化的历程—形态句法发展的动因和机制』 北京大学出
 版社
- (43) 宋玉柱 1995 『语法论稿』 北京言语大学出版社

- (44) 松村文芳 2011 「現代中国語の主要な統語構造の論理形式」 大東文化大学—国際シンポジウム
— — 2005 「「把構文」と「被構文」に用いられる「给」の意味と論理」 『語学教育研究論叢第22号』
- (45) 太田辰夫著(蒋绍愚·徐昌华译) 1987[1958 初稿] 『中国语历史文法』 北京大学出版社
- (46) 唐厚广 1997 「“不如”句研究」 『锦州师范学院学报』1997(2): 119—121
- (47) 王力 1985 『中国现代语法』 商务印书馆
- (48) 王珏 1992 「可受程度副词修饰的动词短语」 『解放军外语学院学报』1992(1)
- (49) 王霞 1992 「比N还N」 『逻辑与语言学习』1992(6): 42—44
- (50) 王业兵·吕靖·邓海波 2007 「“比”为何物—试论汉语“比字句”中“比”的磁性」 『湖北经济学院学报(人文社会科学版)』2007(4)No. 5: 143—144
- (51) 文全民 2008 「“更”和“还”在肯定与否定比较句中的差异」 『世界汉语教学』2008(1): 58—67
- (52) 吴福祥 2004 「试说“X不比Y·Z”的语用功能」 『中国语文』2004(3)
- (53) 武钦青 2011 「特殊比较句“一M比一M”构式义探微极其主观化分析」 『宿州学院学报』2011(26): 62—64
- (54) 武荣强·赵军 2006 「“最”的语法化和主观化」 『湖南科技学院学报』2006(27)No. 6: 156—160
- (55) 相原茂 1992 「汉语比较句的两种否定形式—“不比”型和“没有”型」 『语言教学与研究』1992(3): 73—87
- (56) 谢仁友 2004 「宋元差比句研究」 『语言学的理论与应用』北京语言学会编(上)
- (57) 邢福义 2000 「“最”义级层的多个体涵量」 『中国语文』2000(1): 16—26
- (58) 许国萍 1996 「“比”字句研究综述」 『汉语学习』1996(6): 28—31
— — 2007 「现代汉语差比范畴研究」 上海学林出版社, 2007 又见许国萍「现代汉语差比范畴研究」 复旦大学博士学位论文2005期
- (59) 伊井键一郎 1988 「“比~大三倍”について」 『日语学习于研究』1988(6): 1—7
- (60) 殷志平 1987 「“比”字句浅论」 『汉语学习』1987(4): 3—5
— — 1995 「“X比Y还W”的两种功能」 『中国语文』1995(2): 241—254
- (61) 张厚军 2010 「试论比较和比喻的区别」 『现代语文(语言研究)』2010(3): 30—32
- (62) 章新传 2002 「汉至清之“比字句”」 『江西师范大学学报(哲学社会科学版)』2002(1)
- (63) 张豫峰 1998 「表比较的“有“字句」 『语文研究』1998(4): 12—17
- (64) 赵金铭 2001 「论汉语的“比较”范畴」 『中国语言学报(第十期)』 商务印书馆 2001: 1—16
— — 2002 「差比句语义指向类型比较研究」 『中国语文』2002(5): 452—458

- (65) 赵元任 1982[1968 初稿] 『中国话的文法』丁邦新译 香港中文大学出版社
— — 1979 『A Grammar of Spoken Chinese』 The University of California Press
- (66) 赵军 2004 「论程度副词“最+X”与“顶+X”的差异」 『云南师范大学学报』
2004(2)No. 4 : 59-65
- (67) 郑巧斐 2006 「“一样”与“不一样”比较句的不对称」 『云南师范大学学报』
2006(4)No. 6 : 9-12
- (68) 朱德熙 1982 『语法讲义』 商务印书馆
— — 1982 「说“跟……一样”」 『汉语学习』1982(1)
— — 2003[1980 初稿] 『现代汉语语法研究』 商务印书馆
- (69) 邹绍华 1992 「“比”字句的积极性特征」 『语法研究与探索(六)』1992 : 217-22
语文出版社
- (70) 邹崇理 2000 『自然言语的逻辑分析』 北京大学出版社

(二)日本語関係の参考文献

- (1) 安達太郎 2001 「比較構文の全体像」 『広島女子大学学部紀要』2001(9) : 1-19
— — — 平成十七年 「「ほど」による程度構文と否定」 『広島女子大学学部紀要』第二十
一号:1-14
- (2) 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘著 2000 『初級を教える人のための日本語
文法ハンドブック』 スリーエーネットワーク
— — — 2001 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』 スリーエ
ーネットワーク
- (3) 渡辺 実 1986 「比較の副詞—「もっと」を中心に—」 『学習院大学言語共同研究
所紀要』1986(8)
— — — 1990 「程度副詞の体系」 『上智大学国文学論集』1990(23)
- (4) 渡辺史央 1995 「日本語の比較表現についての考察—比較の基準と程度性について
—」 『神戸外国語大学紀要』1995 : 65-75
- (5) Ludwig Wittgenstein 著・野矢茂樹訳 2010(2003 初稿) 『論理哲学論考』 岩波書
店
- (6) 聂中华 2010 「日语“AはBよりC”句式研究」 『解放军外国语学院学报』
2010(33)No. 4
- (7) 森山卓郎 2004 「日本語における比較の形式」 『言語』33-10 : 32-39 大修館書
店
- (8) 石神照雄 1980 「比較の構文構造—(程度性)の原理—」 『文芸研究』1980(93) : 41
—49
- (9) 益岡隆志・田窪行則 1992 『基礎日本語文法 改訂版』 くろしお出版
- (10) 友清睦子・鈴木雅美 平成3年 「日本語会話文における比較表現の分析」 情報処

理学会第42回(平成3年前期)全国大会

- (11)野矢茂樹 2011(2006 初稿) 『ワイトゲンシュタイン『論理哲学論考』を読む』 筑摩書房
- (12)野田時寛 2001 「複文研究メモ(5)―程度・比較構文―」 『中央大学論集』2001(22): 1-16
- (13)佐野由紀子 1998 「程度副詞と主体変化動詞との共起」 『日本語科学』1998a(3): 99-112
- — — 1998 「比較に関わる程度副詞について」 『国語学』1998b(195): 99-112

(三)中国語と日本語の対照研究に関する参考文献

- (1)奥津敬一郎・徐昌華 1982 「日本語と中国語の比較構文―「ホド」を中心として―」 『都大論究』第19号: 1-15
- (2)奥田 寛 1981 「日・中両国語の比較文―おもにその比較成分のあらわれかたをめぐって」 『日本語と中国語の対照研究第5号』: 117-136
- (3)李伟・楊政華 2009 「汉日语差比句对比解析」 『考试周刊』2009(6): 101-103
- (4)秦礼君 2006 『日汉比较语法』 中国科学技术大学出版社

(四)その他の参考文献

- (1)辞海編輯委員会編 1989 『現代漢語辭海』 上海辭典出版社
- (2)林大監修 1987 『国語大辭典言泉』 小学館
- (3)小川環樹・西田太郎訳 1972 『漢文入門』 岩波書店
- (4)新村出編 2006 『広辞苑(第六版)』 岩波書店
- (5)『新釈漢文大系・第50巻・墨子(上)』 山田琢訳 1987 明治書院
- (6)『新釈漢文大系・第51巻・墨子(下)』 山田琢訳 1987 明治書院
- (7)『中国の古典1・論語』 藤堂明保訳 昭和六十年 学習研究社
- (8)『中国の古典4・孟子』 大島晃訳 昭和五十八年 学習研究社
- (9)『中国の古典5・荘子上』 池田知久訳 昭和五十八年 学習研究社
- (10)『中国の古典6・荘子下』 池田知久訳 昭和五十八年 学習研究社
- (11)『中国の古典7・荀子上』 戸川芳郎・森秀樹・関口順訳 昭和六十一年 学習研究社
- (12)『中国の古典8・荀子下』 戸川芳郎・森秀樹・関口順訳 昭和六十一年 学習研究社
- (13)『中国の古典9・韓非子』 内山俊彦訳 昭和五十七年 学習研究社
- (14)『中国の古典21・世説新語上』 池田晃訳 昭和五十八年 学習研究社
- (15)『中国の古典22・世説新語下』 池田晃訳 昭和五十八年 学習研究社
- (16)中国社会科学院语言研究所词典编辑室編 1987 『現代漢語大辭典』 商务印书館

付 録

ここで、『雪国(中国語訳)』(川端康成著・叶渭渠訳 2010年 译林出版社)および『雪国』の原文(川端康成著 昭和22年 新潮文庫)の中の比較構文(比喩構文を含まない)の用例の中国語の表現と対応する日本語の表現をあげておく。比較構文は本文の分類に従って、「平等比較構文」、「差異比較構文」、「最上級比較構文」に区別し、中国語の比較構文に対応する日本語原文を抽出した。両言語の比較構文に内在する共通の規則や制約についての詳細な検討は今後の課題としたい。

(一)平等比較構文(33文)

1. 中：陪伴病人，无形中就容易忽略男女间的界限，侍候得越殷勤，看起来就越像夫妻。
日：病人相手ではつい男女の隔てがゆるみ、まめまめしく世話すればするほど、夫婦じみて見えるものだ。
2. 中：都差不多吧，在中年人里倒有一个长得挺标致的。
日：似たようなものでしょう。年増にはきれいな人がありますわ。
3. 中：除非找个与你不相上下的，要不日后见到你，是会遗憾的。
日：君とそう見劣りしない女でないと、後で君と会ったとき心外じゃないか。
4. 中：島村明白，自己从一开头就是想找这个女子，可自己和平常一样拐弯抹角…
日：はじめからただこの女がほしいだけだ、それを例によって遠回りしていたのだと、島村のはっきり知ると…
5. 中：发丝有男人头发粗…
日：毛筋が男みたいに太くて…
6. 中：听她的口气，像是在谈论遥远的外国文学，带着一种凄凉的调子，同毫无食欲的叫花子一样。
日：しかし彼女の口振りは、まるで外国文学の遠い話をしているようで、無欲な乞食に似た哀れな響きがあった。
7. 中：被炉支架上盖着同雪裤一样的条纹棉被。
日：置火燵には山袴とおなじ木綿縞の蒲団がかかっている。
8. 中：我认识三位客人，体形跟先生一模一样的。
日：ちょうど旦那さまと同じような姿形のお客さまを、三人知っております。
9. 中：是啊，或许就像自己当年所弹的那样。
日：はい、昔の自分のような気がするんでございましょうね。
10. 中：但是，这回不像昨儿白天，驹子淡淡地笑了。
日：しかし今度は昨日の昼間とちがって、駒子は清潔に微笑んでいた。
11. 中：…她就连在火车上也像年轻母亲那样忘我地照拂这个男人…
日：…汽車の中でまで幼い母のように、我を忘れてあんなにいたわりながらつれて帰

った男のなにかである駒子のところへ…

12. 中：她虽只是在宴席上弹弹，可弹得简直跟在舞台上的一样！
日：お座敷だのにまるで舞台のように弾いているじゃないか…
13. 中：那樱桃小口纵然随着歌唱而张大，可是很快又合上，可爱极了，就如同她的身体所具有的魅力一样。
日：…そのくせ唄につれて大きく開いても、また可憐に直ぐ縮まるという風に、彼女の体の魅力そっくりであった。
14. 中：她坐姿端正，与平常不同。
日：しゃんと坐り構えているのだが、いつになく娘じみて見えた。
15. 中：回到房间，驹子无精打采，把两只胳膊深深地伸向被炉，跟往常不同，连澡也不洗了。
日：部屋へ戻ると急に駒子はしょんぼりして、火爐に深く両腕を入れてうなだれながら、いつになく湯にも入らなかった。
16. 中：…驹子的脸在亮光中闪闪浮现，眼看又消失了，这张脸同早晨雪天映在镜子的那张脸一样，红扑扑的。
日：…駒子の顔はその光のなかにぼつと燃え浮ぶかとみる間に消えてしまったが、それはあの朝雪の鏡の時と同じに真赤な頬であった。
17. 中：但是，近处看芭茅，苍劲挺拔，与仰望远山的感伤的花迥然不同。
日：しかし近くに見る萱の猛々しさは、遠い山に仰ぐ感傷の花とはまるでちがっていた。
18. 中：星星的光，同东京完全不一样。
日：星の光が東京とまるでちがうね。
19. 中：大家都说我同十七岁来这儿的时候没有什么变化。
日：十七でここへ来た時とちっとも変わらないって、みんなそう言うわ。
20. 中：这么一来，两人分手以后难以捉摸的感情，很快地又像原来那么亲密了。
日：離れていてはとらえ難いものも、こうしてみると忽ちその親しみが還って来る。
21. 中：她是说，眼下专跟一人交往，不就同夫妻一样吗？
日：一人の人とつきあってれば、夫婦とおなじではないかと言うのだった。
22. 中：你平时卸下白粉，不也是像刚刮过脸一样吗！
日：君だって、いつでも白粉を落とすと、今剃刀をあてたばかりという顔だよ。
23. 中：从一株树干到另一株树干，拴上好几层竹子和木棒，像晒竿一样，把稻子挂在上面晾干…
日：樹木の幹から幹へ、竹や木の棒を物干竿のような工合に幾段も結びつけて、稲を懸けて干す…
24. 中：同去年大不相同啊！
日：去年とは大変なちがいだわ。
25. 中：伙计们跟新年装饰松枝一样，正在客栈门口装饰着枫枝。
日：紅葉を門松のように、宿の番頭達が、門口へ飾りつけていた。

26. 中：同你一样吗？
日：君と同じだね。
27. 中：这里就像农家的房子，二楼有四间房，铺着旧铺席。
日：百姓家らしい古畳の二階は四間で、…
28. 中：那别致的直木纹衣柜和名贵的朱漆针线盒，依然摆在这冷清清的二楼上，就如同住在师父家那间旧纸盒似的顶楼一样，显得格外凄怆。
日：柁目のみごとな箆笥や朱塗の贅沢な裁縫箱は、師匠の家の古い紙箱のような屋根裏にいた時と同じだけれども、この荒れた二階では無慚に見えた。
29. 中：但是，她却像家庭妇女似的，温顺地坐着，显得有点腼腆。
日：しかし家庭の女じみた風におとなしく坐って、なにか羞んでいた。
30. 中：这儿摆满了杂耍场杂货摊，就像镇上过节一样，热闹异常。
日：見世物や物売の店も並び、町の祭りのように賑わったという。
31. 中：然而，岛村听了叶子在浴池放声歌唱，忽然想到：这个姑娘若生在那个时代，恐怕也会守在纺纱车或织布机旁这样放声歌唱吧。叶子的歌声确实像那样一种声音。
日：ところが葉子が湯殿で歌っていたを聞いて、この娘も昔生まれていたら、糸車や機にかかって、あんな風に歌ったのかもしれないと、ふと思われた。葉子の歌はいかにもそういう声だった。
32. 中：笔直的长长的市街，很像当年旅馆区的街道。
日：宿場の街道筋らしく真直に長い町通だった。
33. 中：木板葺的屋顶上的横木条和铺石，同温泉乡也没有什么不同。
日：板葺きの屋根の算木や添石も温泉町と変わりがなかった。

(二)差異比較構文(17文)

1. 中：一个女人像慈母般地照拂比自己岁数大的男子，老远看去，免不了会被人看作是夫妇。
日：実際また自分より年上の男をいたわる女の幼い母ぶりは、遠目に夫婦とも思われよう。
2. 中：她比他更了解演员的艺术风格和轶事。
日：女は彼よりも俳優の芸風や消息に精通していた。
3. 中：蝶儿翩翩起舞，一忽儿飞得比县界的山还高，随着黄色渐渐变白，就越飞越远了。
日：蝶はもつれ合いながら、やがて国境の山より高く、黄色が白くなってゆくにつれて、遥かだった。
4. 中：她虽算不上是个美人，但她比谁都要显得洁净。
日：美人というよりもなによりも、清潔だった。
5. 中：她这种情感与其说带有城市败北者的那种傲慢的不满，不如说是一种单纯的徒劳。
日：…都の落人じみた高慢な不平よりも、単純な徒勞の感が強かった。
6. 中：原来是一个桐木造的三弦琴盒，看起来要比实际的三弦琴盒大而长。

- 日：…桐の三味線箱だった。実際よりも大きく長いものに感じられて…
7. 中：島村觉得盲女显得比实际年龄年轻些。
日：盲は年より若く見えるものであろうかと島村は思いながら、…
8. 中：与其说他是全然感到意外，不如说是完全被征服了。
日：全く彼は驚いてしめったと言うよりも叩きのめされてしまったのである。
9. 中：一个老太婆背着一捆草走过去，草捆足比她身量高两倍。
日：背負って行く婆さんの身の丈の二倍もある。
10. 中：转眼之间，一群比蚊子还小的飞虫，落在她那从空开的后领露出来的，抹了浓重白粉的脖颈上。
日：襟をすかした白粉の濃いその首へも、蚊より小さい虫がたちまち群がり落ちた。
11. 中：她脖根比去年胖了些，显得比较丰满。
日：首のつけ根が去年より太って脂肪が乗っていた。
12. 中：那么，姨太太比正室年纪还大啰？
日：それじゃ本妻よりお婆さんの方が年上になるところだったね。
13. 中：汽车也比往年晚一个月，到5月才通车哩。
日：自動車の通うのが、例年より一月も後れて、五月だったわ。
14. 中：若在夏天，红蜻蜓漫天飘舞，有时停落在人们的帽子上、手上，有时甚至停留在眼镜框上，那股自在劲儿回受尽虐待的城市蜻蜓，真有天渊之别。
日：夏ならば無心に赤蜻蛉が飛び、帽子や人の手や、また時には眼鏡の縁にさえとまるのどかさ、都会の蜻蛉とは雲泥の差であると書いてあった。
15. 中：比毛线还细的麻纱…
日：毛より細い麻糸は…
16. 中：驹子跑得很快。她穿着木屐，飞也似的擦过冰面跑着。两条胳膊与其说前后摆动，不如说是向两边伸展…
日：駒子はよく走った。凍りついた雪を下駄で飛ぶかと見え、腕も前後に振るというよりも両脇に張った形だった。…
17. 中：大概是星光比朦胧的月夜更加暗淡的缘故吧，可是银河比任何满月的夜空都要澄澈明亮…
日：薄月夜よりも淡い星明りなのだろうが、どんな満月の空よりも天の河は明るく、…

(三)最上級比較構文(17文)

1. 中：没有什么比凭借西方印刷品来写有关西方舞蹈的文章更轻松的了。
日：西洋の印刷物を頼りに西洋舞踊について書くほど安楽なことはなかった。
2. 中：再也没有比这个更“纸上谈兵”的了，可是那是天堂的诗。
日：これほど机上の空論はなく、天国の詩である。
3. 中：这里最凉快了。

- 日：ここが一等涼しいの。
4. 中：島村靠着这株树干，是其中最古老的。
日：島村が背を寄せている幹は、なかでも最も年古りたものだったが。
5. 中：…在下方搭配着的小巧的闭上的柔唇却宛如美极了的水蛭环节…
日：…その下に小さくつぼんだ唇はまことに美しい蛭の輪のように…
6. 中：十六岁记的和今年记的最有趣。
日：十六歳のと今年のとが、一番面白いわ。
7. 中：弹得最好的和弹得最差的，最容易听出来啦。
日：一番上手な子と一番下手な子は、一番よく分かりますね。
8. 中：我最早的一本日记开头就记着这件事。
日：一番古い日記の一番初めに、そのことが書いてあるわ。
9. 中：弹《都都逸》就更好分辨了，因为它最能表现出每个人的风格来。
日：都々逸がよく分かるわね、一番その人の癖が出るから。
10. 中：你最早的日记本开头不就是记他的吗？
日：一番古い日記の、一番初めに、君を書きに行くんだ。
11. 中：島村不由得深受感动，觉得确实这样，再没有人像自己这样老实的了。
日：島村はわけ分からぬ感動に打たれて、自分ほど素直な人間はないのだという気がして来ると…
12. 中：島村下了火车，最先映入眼帘的便是这山上的白花。
日：島村が汽車から降りて真先に目についたのは、この山の白い花だった。
13. 中：她最叫座，没少过六百枝的。她在我们这儿最受器重啦。
日：売れることも一番で六百本を欠かすことはないから、うちでも大事にされてたんだけれど。
14. 中：上个月赚得最少的人，是三百枝，合六十元。
日：先月一番少ない人で三百本の六十円だと言った。
15. 中：驹子赴宴九十多次，是最多的；…
日：駒子は座敷数が九十幾つで一番多く、…
16. 中：姐妹中我最辛苦了。
日：兄弟中で、一番苦労したわ。
17. 中：这时间正是客栈赏枫客人最多的时候。
日：宿は紅葉の客の盛りであった。

神奈川大学大学院
言語と文化論集 特別号

2013年8月 印刷
2013年8月 発行

編集発行 神奈川大学大学院
外国語学研究科
(横浜市神奈川区六角橋 3-27-1)

製 作 共立速記印刷株式会社

LANGUAGE AND CULTURE
BULLETIN
OF
THE GRADUATE SCHOOL OF FOREIGN LANGUAGES
KANAGAWA UNIVERSITY
Special number, August, 2013

Doctoral Course, Chinese Language and Culture
(Date of Degree Awarded : March 31, 2013)

Meaning and Logic of Comparative Constructions in Mandarin Chinese Semantics

YU Fei
